

戦後アイデア・コンペの実施動向と

新建築コンペ入選案における正方形プランの類型研究

Study on idea competition trends after World War II
and typology of square planning seen in the prize-winning works presented in
SHINKENCHIKU Residential Design Competitions

2016年2月

石垣 充

Takashi ISHIGAKI

**戦後アイデア・コンペの実施動向と
新建築コンペ入選案における正方形プランの類型研究**

Study on idea competition trends after World War II
and typology of square planning seen in the prize-winning works presented in
SHINKENCHIKU Residential Design Competitions

2016年2月

早稲田大学大学院創造理工学研究科
建築学専攻 建築意匠論研究

石垣 充

Takashi ISHIGAKI

-目次-

序論

| | |
|-----------------------|---|
| 第一節 研究の目的 | 2 |
| 第二節 既往の研究と問題の所在 | 3 |
| 第三節 本論文の構成と展望 | 5 |

第一章 提案型建築設計競技の変遷

| | |
|-----------------------------|----|
| 第一節 展望 | 10 |
| 第二節 懸賞競技の概要 | 11 |
| 1) 建築設計競技の形式 | 11 |
| 2) 懸賞競技の開催動向 | 12 |
| 3) 建築展覧会懸賞競技 | 13 |
| 第三節 戦後アイデア・コンペの概要 | 19 |
| 1) 新建築コンペ | 19 |
| 2) ワンマン・コンペの開催 | 20 |
| 3) 対象アイデア・コンペの開催状況 | 21 |
| 4) 対象アイデア・コンペの国際性について | 24 |
| 第四節 要約 | 25 |

第二章 提案型建築設計競技の要項-提案-講評に関する研究

| | |
|----------------------------|----|
| 第一節 展望 | 29 |
| 第二節 アイデア・コンペの要項に関する分析..... | 30 |
| 1) 課題の主題別分類..... | 30 |
| 2) 課題タイトルに関する分析 | 31 |
| 3) 課題文章に関する分析 | 32 |
| 4) 設計条件とビルディングタイプ | 35 |
| 5) 所要図面の変化 | 38 |
| 6) 質疑-課題設定者との対話応答..... | 39 |
| 第三節 アイデア・コンペの提案に関する分析..... | 40 |
| 1) 提案内容に対する分析 | 40 |
| 2) 応募数について | 43 |
| 3) 入選者の内訳（学生比）..... | 44 |
| 第四節 アイデア・コンペの講評に関する分析..... | 46 |
| 1) 審査員の人数構成..... | 46 |
| 2) 審査員による指摘内容 | 47 |
| 3) アイデア・コンペにおける特徴的事象 | 49 |
| 4) 審査員によるアイデア・コンペへの評価..... | 55 |
| 第五節 要約 | 57 |

第三章 新建築コンペにおける作品体裁と平面タイプの変化

| | |
|------------------------------------|----|
| 第一節 展望 | 64 |
| 第二節 作品体裁と提案表現の変化に伴うレイアウトの変様 | 65 |
| 1) 文章表現の変遷 | 66 |
| 2) 空間表現の変遷 | 68 |
| 3) 図面表現の変遷 | 69 |
| 4) レイアウトの変様 | 70 |
| 第三節 入選案における平面外形の変化 | 71 |
| 1) 分棟型の配置計画に関する分析 | 72 |
| 2) 一棟型の平面外形と図形要素に関する分析 | 73 |
| 第四節 入選案における正方形プランの分析 | 75 |
| 1) 入選案における平面図、方位記号の有無 | 75 |
| 2) 実験的回答モデルとしての「正方形プラン」の出現傾向 | 77 |
| 3) 正方形プランの分類 | 78 |
| 4) 正方形プランのデザイン変遷 | 80 |
| 第五節 要約 | 83 |

第四章 新建築掲載作品の変遷と新建築コンペ入選案との対応

| | |
|-----------------------------------|-----|
| 第一節 展望 | 87 |
| 第二節 正方形プランの出現傾向に関する分析..... | 88 |
| 1) 地上建築における正方形プランの出現傾向 | 88 |
| 2) 地上建築における正方形プランの出現分類 | 90 |
| 3) 地上建築と紙上建築における正方形プランの出現変遷 | 91 |
| 第三節 正方形プランの面積規模に関する分析..... | 93 |
| 1) 紙上建築における正方形プランのデザイン分析 | 94 |
| 2) 地上建築における正方形プランのデザイン分析 | 96 |
| 第四節 正方形プランの各類型におけるデザイン分析..... | 99 |
| 1) 間取り系正方形プランの比較分析..... | 99 |
| 2) 非間取り系正方形プランの比較分析..... | 101 |
| 第五節 要約 | 110 |

結論

結論..... 116

• 参考文献一覽..... 121

• 謝辭..... 126

• 著者經歷..... 127

序論

| | |
|-----------------------|---|
| 第一節 研究の目的 | 2 |
| 第二節 既往の研究と問題の所在 | 3 |
| 第三節 本論文の構成と展望 | 5 |

第一節 研究の目的

現在日本国内では様々な提案型建築設計競技が行われている。建築以外のデザイン分野においても公募型の懸賞競技、コンペ、コンクール、コンテスト等が多く存在し、優秀案の選定、公平な適者判定の方法として社会的な定着が見られる。提案型建築設計競技（以降アイデア・コンペ）は戦前から行われているが戦後の出発点は1947年に新建築社主催により行われた「十二坪木造住宅国民住宅懸賞募集」にまで遡ることができる^{注1)}。このように戦前戦中を含め古くから多くの若い設計者・学生によって取り組まれているアイデア・コンペではあるが、その提案は実際の建築行為を伴わず、実施を前提としていない^{注2)}。そのため応募者、設計者のデザイン力修練の機会やトレーニングチャンスとしての評価に留まり、主催者である企業側の安易な開催も見られる^{注3)}。しかし実施では無いがゆえの独自の論点や表現が可能であり^{注4)}、かつ課題内容も社会背景や世相を敏感に捉えたテーマが多く見られる。そして、それら課題の設定者・審査員も当代の代表的建築家や建築評論家が多く担当しており彼らの課題への言説と講評はその時代の建築に対する認識や展望を表現している。

またアイデア・コンペが応募者にとって後の建築家へと成長していく過程での通過儀礼的、登竜門的扱いとなっているのは入選者歴からも伺うことができる。そして、アイデア・コンペの提案者は課題及び課題設定者、審査員、あるいは自身が提案によって獲得した建築的仮説からなんらかの影響を受けていると推測される。

このようにアイデア・コンペの要項、提案におけるデザイン、講評における審査員の言説は、設計者や建築家による社会のイメージを知る重要な資料^{注5)}といえ時代的に大きな変化が見られるが、従前論点として扱われず、その研究は十分になされてはいない。このような背景に対し本論文では以下の二つを目的として研究を進める。

研究目的の一つは「アイデア・コンペ実施動向の把握と転換期の特定」である。新建築誌に掲載されるアイデア・コンペの実施動向や各競技における“要項-提案-講評”を分析し、アイデア・コンペの概略を論じ、それらの年次的変遷と対応関係や起点、転換・展開期等を考察、定義付けることを目的とする。二つ目の研究目的は「アイデア・コンペ入選案における意匠変遷と評価」である。新建築コンペ入選案の平面外形とプランタイプの分析を行い、新建築および住宅特集に掲載される住宅作品との比較分析によりアイデア・コンペ入選案に含意される先進性や実験性を考察することで、アイデア・コンペの機能、意義の一端を提示し客観的な評価を与えることを目的とする。

なお本論文では以降、新建築住宅懸賞募集（以降、新建築懸賞）と新建築住宅設計競技（以降、新建築競技）を合わせ「新建築コンペ」と総称するが、最初の目的に対しては新建築コンペを含む戦後アイデア・コンペの総論として展開し、続く目的の二に対してはアイデア・コンペの転換期を形成する新建築コンペという限定的な競技における意匠変遷を各論で分析する。これにより従前未着手であったアイデア・コンペ研究に対しての明確な通史と今後の研究展開を示すものとする。

第二節 既往の研究と問題の所在

代表的な建築設計競技に関する書籍として近江榮による『建築設計競技 コンペティションの系譜と展望』^{注6)}があげられるが、内容は実施前提の設計競技、いわゆるプロジェクト・コンペが主たる対象である^{注7)}。一部特定のアイデア・コンペとして日本建築学会設計競技や新建築懸賞に触れ、その意義を評価している^{注8)}。

アイデア・コンペ全体の実施状況に関する研究として『戦後におけるアイデア提案型設計競技の実施動向と評価』^{注9)}『同その2.住居系、建築系テーマの詳細について』^{注10)}、応募対象を学生に限定した研究として『学生参加型建築設計競技における1994～2008年の動向に関する研究』^{注11)}があげられる。また特定のアイデア・コンペを対象とした研究として『住宅設計競技入選案から見た住宅改良会の住宅像について』^{注12)}、新建築懸賞の平面タイプの分析研究として『わが国における戦後の住様式成立過程に関する研究 戦後復興期の新建築誌コンペ入選作の平面タイプの分析』^{注13)}がある。さらにアイデア・コンペの表現に関する研究として『建築プレゼンテーションの変遷と進歩に関する研究-1980年～2009年『新建築』に掲載されたアイデアコンペを通して-』^{注14)}、日新工業建築設計競技上位案に関する作品のレイアウト分析として『設計競技における図面表現』^{注15)}があげられるが、これらアイデア・コンペに関する研究論文としては少数にとどまっている。

また設計競技の要項と提出作品に関する既往研究として『1981～1996年に開催された国内の建築設計競技における設計要項から提出作品に至る設計者の計画概念』^{注16)}があげられる。しかし本研究において対象としないプロジェクト・コンペに関する提案内容や要項に関する研究となっている。

これらの既往研究に対し本研究では、アイデア・コンペの「課題文章」という課題設定者の「問い」と応募提案という「回答」、そして提案に対する応答としての「講評文」を読み解く。それにより課題設定者・審査委員である建築家・建築評論家がどのように都市・建築、建築業界ひいては社会を捉え、それが提案者や若い建築家へどのように影響を与えたかという一端を明らかにするものである。また入選案の各平面表現の外形やプランタイプを類型化するとともに、入選案と実作との対応関係を考察するという新規性を有する。

アイデア・コンペの意義の一つとして若手設計者の初出機会があげられるが、建築家吉村順三もまた 1925 年に「住宅」誌において開催された「小住宅設計懸賞」に二案応募し「入選」「選外佳作」として選出されている。吉村順三についての著作「建築家の詩」^{注17)}によると受賞時の年齢は弱冠 17 歳である。この他にも建築家によるアイデア・コンペの受賞歴は数多く見られ、その後活躍する建築家の登竜門としての意義も多くの著作によって語られている。

「こうした小住宅コンペを通し新人として名を知られるようになった安田与佐、高田秀三、栗原忠一郎、菊竹清訓、横山公男、大高正人、遠藤雄二、植田一豊、小林盛太、三橋信造、小林匠、高瀬隼彦、船越徹といった人びとのなかには、現在も一線で活躍している著名な建築家が数多くおり、そこに新人登竜門としてのコンペの意義を認めることができる。また敗戦直後の小住宅コンペが合理的・機能的な住宅の考え方をジャーナリズムを通して、広く一般社会に広めた効用を見逃すことはできない。」^{注18)}

さらに新建築競技 1965 の開催主旨文中の審査員清家清に関するプロフィールにおいて同様の記述が見られる。

「1948 年ごろの本誌の住宅についての一連のコンペにも審査員として、池辺・吉阪・清家の当時のいわゆる助教授トリオが当たった。その後このコンペが発掘した多くの新人は（菊竹・大高・みねぎし・植田…）いま第一線で活躍している。」^{注19)}

また新人発掘以外の評価点として新建築懸賞に関して以下のような言説もみられる。

「これら一連のコンペについては、ともすれば現実の空間から遊離したところで議論が展開される危険もなくはなかったが、とにかく狭小な面積とのたたかひのなかで、一種の平面の整理が行われたのはひとつの成果として評価されて良いことと思われる。」^{注20)}

そしてこれらアイデア・コンペは建築家としての初出の機会だけではなく、その後の自身の建築設計活動において影響を与えていることも言説から推測される。

「（前略）コンペの提案者は課題及び課題設定者、審査員、あるいは自身が提案によって獲得した建築的仮説からなんらかの影響を受けていると推測される。」^{注21)}

以上のように戦前、戦中、戦後復興期における建築機会の減少という状況においてアイデア・コンペは、応募者にとって紙上建築を対象とした建築設計の代替行為であり建築的仮説を実践する機会でもあった。そしてこれら入選者の中にはアイデア・コンペの後に活躍する者も多数見られるなど、建築家としての初出の機会となっている。このようにアイデア・コンペは若手建築家の発掘という意義を有しているが建築家の登竜門や人材発掘としての意義に留まらず、若手建築家を実作を作るまでの過程、その習作において条件整理や建築論を確立させる論理的下地となっていることが様々な言説から伺うことができる。

しかし前述のようにアイデア・コンペに関する研究分析は少数であり客観的評価はなされていない。

第三節 本論文の構成と展望

本論文においてアイデア・コンペの実施動向や各競技における“要項-提案-講評”を分析し、それらの年次的変遷と対応関係を探ることを目的の一つとし、第一章と第二章が対応する。また入選案と実作におけるプランタイプの分析から紙上建築の先進性を考察することでアイデア・コンペの機能、意義の一端を提示し、評価を与えることをもう一つの目的とし第三章と第四章が対応する。以下に本論文の構成を記す。

第一章では、戦前戦後に行われたアイデア・コンペとして建築展覧会懸賞競技と新建築懸賞の実施動向を分析する。また戦後復興が成された後の1965年から2010年迄を対象期間とし、新建築誌に掲載されたアイデア・コンペの開催状況を分析する。その後、建築関連誌等に掲載された言説からアイデア・コンペの意義とその変化を推察する。

第二章では、戦後継続的に行われたアイデア・コンペとして、新建築競技が行われるようになった1965年を起点とし同コンペが終了する2010年迄を対象期間として、新建築誌に掲載されたアイデア・コンペの“要項-提案-講評”を分析し年次的変化を把握する。要項における課題文章、一等案に見られるデザイン潮流、講評文に見られる審査員の指摘等の変遷を分析し、それらの変化がどの時期に顕著に見られ転換期を形成しているのか、また変化を引き起こした背景の一端を考察する。

第三章では、アイデア・コンペの要項に記される作品体裁の変遷とレイアウトの変様を分析するとともに、入選案における平面外形の変化から、特徴的プランタイプとして「正方形プラン」の分析を行い類型化する。これら「正方形プラン」のデザイン変遷から、作品体裁の変遷に伴う建築デザインとの対応関係の一端を確認する。

第四章では、前章で確認された「正方形プラン」という限定的なプランタイプにおいて、新建築コンペ入選案と新建築誌に掲載される住宅作品双方におけるデザイン分析として正方形プランの規模、公室位置、そして正方形プランの各類型における比較分析を行う。

以上各章の考察により以下の成果が期待される。

論文の成果としてアイデア・コンペの内容が時代性を帯びており、課題設定者と提案者がその時代とその先の時代を語る「対話・応答の場」となっていることが浮かび上がると考えられる。特に対話・応答が成立しやすいのは審査員が単数である「ワンマン・コンペ」であるが全体としてどのような対話・応答がなされたのかを把握することも可能である。また相当数のアイデア・コンペの分析を行うことで年次的、時代的傾向が把握できるとともに、アイデア・コンペの歴史の中でこれまであまり取り上げられなかった様々な特徴的事例が浮かび上がることも期待される。

本論文ではアイデア・コンペの提案として架空、空想上の建築物「紙上建築」を扱うが、この文言は1942年に開催された建築展覧会懸賞競技の「競技設計の審査書簡」において、競技の意義と重要性を語る審査員長の佐藤武夫により以下のように語られる。

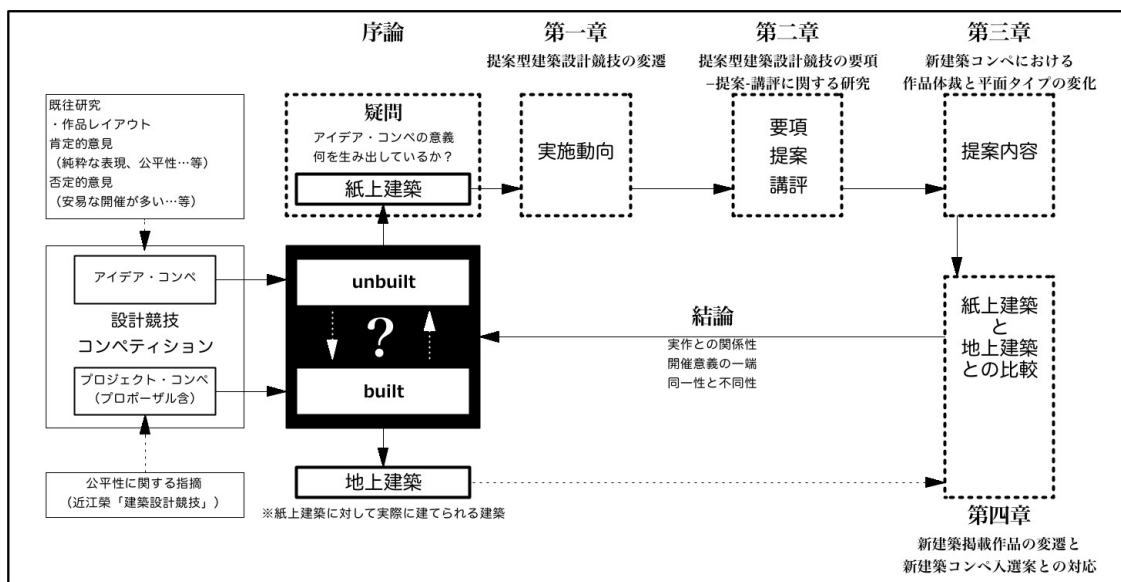
「(前略) 目下こうした造形的な建築物が却々実現を期待し難い状態にあり、この時にこそ『紙上建築』で切磋琢磨を積むべきである。」^{注22)}

この「紙上建築」という文言は上記より早い時期にも見られるが、建築以外の分野において耽美派の詩人・作家である佐藤春夫(1892-1964)が1919年に記した小説「美しき町」において確認される。

「(前略) どうかして一生に一度自分の気に入ったような家を一つは建てて見たいと、そればかりを夢想しつつながら、頼む人もなく、建てる土地もないのに、彼はさまざまな頼み手とさまざまなそれが建てるべき土地とを彼の心のなかに見出しては、それをいつも、こつこつと一軒一軒設計しては楽しんだ。それらの『紙上建築』がもう五十軒近くもあるほどである。」^{注23)}

このように「紙上建築」という言葉は1919年に建築以外の分野で発し、その20数年後の1942年に建築専門誌においても確認されることから、ある程度社会に流通し定着した文言であったと推測される。本研究では、第一～三章において分析対象としてこれら「紙上建築」を扱うものとする。その後、第四章において「紙上建築」の比較研究として「地上建築」を扱うものとする(表1)。なお「地上建築」とは実際に建てられる建築を示す筆者造語であり、実際に建てられない「紙上建築」に対する用語として定義している。これらの入選案と実作との比較分析から、紙上建築の先進性を示すプランタイプと先行例を確認することにより、アイデア・コンペの意義の一端を評価することができると期待される。

表1 論文の構成と期待される成果



注

- 注1) 十二坪木造住宅國民住宅懸賞募集は1947年新建築社主催により開催されたアイデア・コンペである。1958年までに新建築懸賞として計7回開催されており、戦後の住宅プランの重要な位置付けと評価されている。また「新建築1969年2月号」新建築社, 1969, pp. 203-212「建築家はコンペの中で何を求めるか」の中で服部岑生により「アイデア・コンペは昭和23年の國民住宅コンペを出発点としている。」と記述されている。
- 注2) 日本建築学会編「建築雑誌1992年3月号」日本建築学会, 1992, pp. 34の中でコンペ方式のタイポロジーについて、コンペを目的別に見た場合、実施を前提としないアイデア・コンペと実施を前提としたプロジェクト・コンペに分けられると記述されている。
- 注3) 「新建築1969年2月号」新建築社, 1969, pp. 203-212「建築家はコンペの中で何を求めるか」の中で服部岑生により「アイデア・コンペはトレーニング・チャンスとして適切である。」と述べられている。また山本理顕他「コンペに勝つ！」新建築社, 2006, pp. 34の中では「実施につながらないだけに、時として安易に行われることもあり、運営の厳正さが望まれる。」と記述されている。
- 注4) 山本理顕他「コンペに勝つ！」新建築社, 2006, pp. 96の中で複数の建築家がアイデア・コンペの重要性について述べている。
- 注5) 五十嵐太郎「現代建築に関する16章」講談社, 2006, pp. 229の中でケータイ空間デザインコンペについて「コンペに寄せられた数々の案と審査員の議論は、現在の建築家による情報化社会のイメージを知るうえで格好の資料となる。」と評されている。
- 注6) 近江榮：建築設計競技、鹿島出版会、1986
- 注7) 戦前戦後の大規模公共建築のプロジェクト・コンペを主とした内容となっている。
- 注8) 近江榮「建築設計競技」鹿島出版会, 1986, pp. 147の中で「新建築社のコンペは、今日に至るまで長年にわたり国際的なスケールでアイデア・コンペを展開している稀な例で、若い建築家を対象にコンペを通して夢を育てる役割をはたしている。」と記述されている。
- 注9) 小石川正男：戦後におけるアイデア提案型設計競技の実施動向と評価, 日本建築学会大会学術講演梗概集 建築・歴史意匠 pp. 651-652、1998. 9
- 注10) 小石川正男：同その2. 住居系、建築系テーマの詳細について, 日本建築学会大会学術講演梗概集 建築・歴史意匠 pp. 563-564、1999. 9
- 注11) デワンカー・パート他：学生参加型建築設計競技における1994～2008年の動向に関する研究, 日本建築学会九州支部研究報告第48号pp. 53-56、2009. 3
- 注12) 内田青蔵：住宅設計競技入選案から見た「住宅改良会」の住宅像について, 日本建築学会計画系論文報告集、第358号、pp. 114-124、昭和60年12月
- 注13) 北川圭子他：わが国における戦後の住様式成立過程に関する研究, 日本建築学会計画系論文集、第580号、pp. 153-159、2004. 6
- 注14) 二階堂将他：建築プレゼンテーションの変遷と進歩に関する研究、-1980年～2009年『新建築』に掲載されたアイデアコンペを通して-日本建築学会大会学術講演梗概集 建築・歴史意匠pp. 67-68、2011. 8
- 注15) 本間賢二他：設計競技における図面表現, 日本建築学会大会学術講演梗概集 建築・歴史意匠pp. 567-568、2006. 9

- 注16) 北川啓介他：1981～1996年に開催された国内の建築設計競技における設計要項から提出作品に至る設計者の計画概念、
日本建築学会計画系論文集第74巻 第637号, pp. 577-583, 2009. 3
- 注17) 吉村順三建築展実行委員会編「建築家の詩」彰国社
但し、文中には小住宅設計懸賞が1921年に行われたと記述されている。
- 注18) 近江榮「建築設計競技」鹿島出版会, 1986, pp. 147
- 注19) 「新建築1965年3月号 新建築競技1965開催主旨文」1965, pp. 109
- 注20) 「新建築1976年11月臨時増刊 昭和住宅史」1976, pp. 124
- 注21) 山本理顕他「コンペに勝つ！」新建築社, 2006, pp. 100
- 注22) 「建築雑誌1942年12月号」日本建築学会, 1942, pp. 959
- 注23) 佐藤春夫「美しき町」岩波文庫, 1992, pp. 43

第一章

提案型建築設計競技の変遷

| | | |
|-----|-------------------------|----|
| 第一節 | 展望..... | 10 |
| 第二節 | 懸賞競技の概要..... | 11 |
| 1) | 建築設計競技の形式..... | 11 |
| 2) | 懸賞競技の開催動向..... | 12 |
| 3) | 建築展覧会懸賞競技..... | 13 |
| 第三節 | 戦後アイデア・コンペの概要..... | 19 |
| 1) | 新建築コンペ..... | 19 |
| 2) | ワンマン・コンペの開催..... | 20 |
| 3) | 対象アイデア・コンペの開催状況..... | 21 |
| 4) | 対象アイデア・コンペの国際性について..... | 24 |
| 第四節 | 要約..... | 25 |

第一節 展望

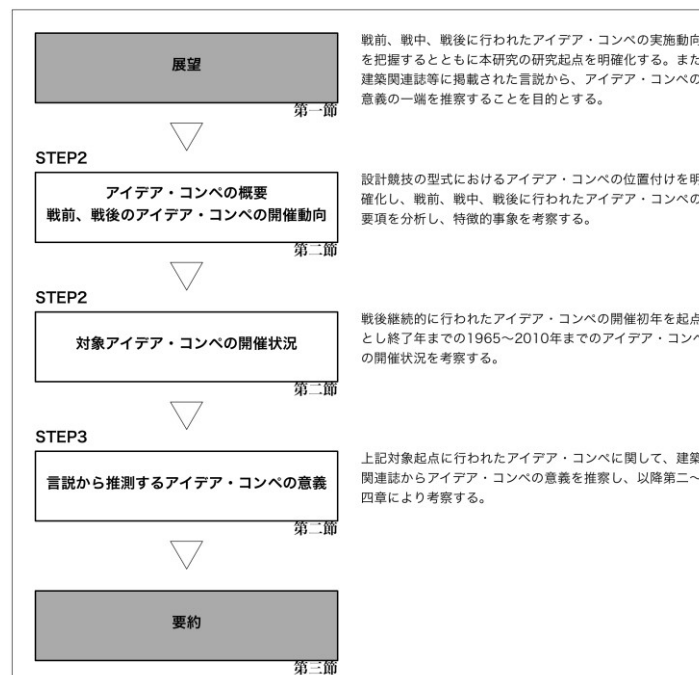
第一章では、戦前-戦中-戦後に行われたアイデア・コンペの実施動向を把握するとともに、特徴的競技を特定し本研究の起点を考察する。

最初に戦前戦中期、継続的に計15回行われたアイデア・コンペとして建築展覧会懸賞競技（1929～1943）、対して戦後継続的に行われたアイデア・コンペとして新建築懸賞（1947～1958）を扱い、これらの競技における課題の変遷や応募案等における特徴的事例を考察する。この考察により戦時下と戦後混乱期を挟んだ両者における意義の差異が明確化することが期待される。次に戦後復興が成された後に行われた新建築競技と新建築誌に要項-提案-講評が揃って掲載されたアイデア・コンペを対象にそれらの開催状況について論じる（表1）。

分析の視点として、それぞれのアイデア・コンペに対して要項を資料収集し、その開催時期と開催主旨を分析する。これら長期間にわたるアイデア・コンペの要項から、アイデア・コンペの開催数等の実施動向と開催主旨の変化が推察される。

尚分析対象期間は、この新建築競技が開始された1965年を起点とし同競技が終了する2010年までとする。

表1 第一章研究のながれ



第二節 懸賞競技の概要

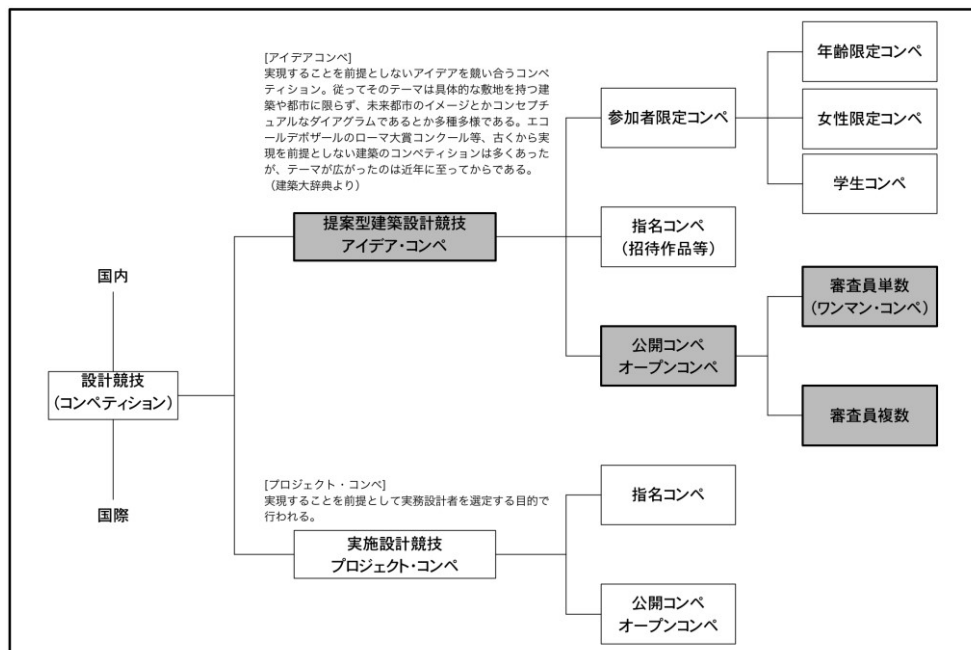
本節ではアイデア・コンペの概要として戦前における代表的競技の要項と作品における特徴的事象を分析する。

1) 建築設計競技の形式

建築設計競技を目的別に分類した場合、実施設計競技（以降、プロジェクト・コンペ）と提案型建築設計競技（以降、アイデア・コンペ）の二つに大別することができる（表2）。プロジェクト・コンペは実際に建築することを前提としており、その後の実務設計者を選定することを目的とし「実施コンペ」とも呼ばれる。プロジェクト・コンペへの参加形態として公募により行われる公開コンペ（オープンコンペ）と複数の建築家を指名しその中で設計案を競い合う指名コンペがある^{注1)}。一方のアイデア・コンペはプロジェクト・コンペと異なり実施を前提としていないコンペ^{注2)}である。本研究対象のアイデア・コンペにおいて「懸賞競技」「設計競技」「コンペ」「コンペティション」「コンクール」「コンテスト」などの様々な名称が用いられているが、それぞれの競技により独自の概念で使用されており明確な使い分けがなされていないため、本研究においてこれらを総じて「アイデア・コンペ」として扱うこととする。アイデア・コンペは基本的には参加者を限定しない公募形式の公開コンペであるケースが多いが、応募者の属性として国内応募者限定のコンペと国籍や在住地により応募者を限定しない国際コンペがある。また参加者を学生、年齢、性別等によって限定する場合と限定しないケースも見られる。審査の形態として審査員が単数の場合（以下、ワンマン・コンペ）と複数の場合がある。近年ではアイデア・コンペではあっても1次審査通過者にプレゼンテーションを求めるなど段階的審査を行う2段階コンペも見られるようになっており、これらの審査を公開で行う傾向も見られる。

本研究では参加者を限定しないオープンコンペの型式で行われるアイデア・コンペを分析の対象とする。

表 2 コンペ形式による分類



2) 懸賞競技の開催動向

アイデア・コンペは戦前戦中期においては一般的に「懸賞競技」と呼ばれていた。大正14年に「住宅」誌上において住宅改良会主催による小住宅設計懸賞が行われており、次代の建築家を育成する目的を持つアイデア・コンペが誌面による発表を伴いながら戦前から取り組まれていることがわかる。しかしその歴史を紐解くと、遡る大正4年に報知新聞社主催による日本最初の住宅コンペ「報知新聞懸賞住宅」が行われている(表3)。

また「新建築」は大正14年(1925)7月に創刊され、創刊2年後の昭和2年には同誌により「小住宅設計図懸賞募集」同3年には「懸賞住宅競技」、そして戦後には「十二坪木造住宅国民住宅懸賞」が行われた(図1)。同誌も「住宅」誌と並び、戦前より懸賞競技の推進役としての役割を果たしてきたといえる。

図1 十二坪木造住宅国民住宅懸賞

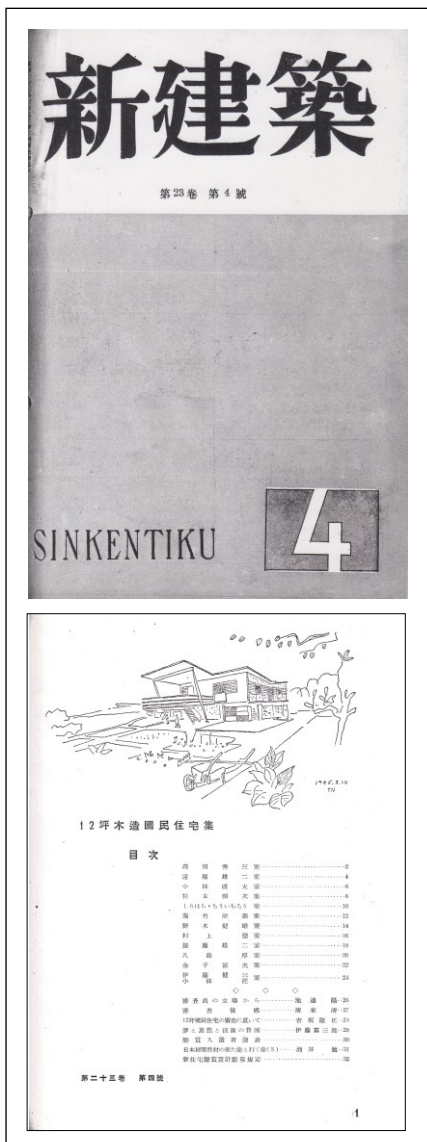


表3 戦前における独立専用住宅の設計競技

| 実施年 | 競技設計名 | 主催者 |
|---------|-----------------------|-------------|
| 明治42 | 紳士住宅 | 建築世界社 |
| 大正4 | 報知新聞懸賞住宅 | 報知新聞社 |
| 大正5 | 鉄網コンクリート中流住宅 | 川崎工場 |
| 大正5 | 鉄網耐火耐震中流住宅 | 川崎工場 |
| 大正5.8 | 改良住宅(改良中流住宅の設計) | 住宅改良会 |
| 大正8.6 | 改良住宅(改良住宅懸賞図案) | 住宅改良会 |
| 大正8.9 | 中流向住宅図案募集 | 神奈川県 |
| 大正10 | 改良住宅(第一回懸賞募集改良住宅設計図案) | 日本建築協会 |
| 大正10 | 第三回懸賞募集改良住宅設計図案 | 日本建築協会 |
| 大正10.4 | 第十二回懸賞図案募集 住宅 | 建築世界社 |
| 大正10.6 | 第二回懸賞募集 住宅間取図 | 洪洋社 |
| 大正11 | 大船田園都市会社懸賞 | 大船田園都市会社 |
| 大正13 | 阪神電鉄田園住宅 | 日本建築協会 |
| 大正14 | 日本趣味の折衷住宅(第十四回懸賞募集) | 洪洋社 |
| 大正14 | 十五・六坪の小住宅 | 洪洋社 |
| 大正14 | 新築日本住宅設計応募図案 | 東京帝国建築協会 |
| 大正14.1 | 「住宅」百一号記念中流住宅設計懸賞 | 住宅改良会 |
| 大正14.11 | 小住宅設計懸賞 | 住宅改良会 |
| 大正14.12 | 小住宅設計図案懸賞 | 建築書報社 |
| 昭和1 | 十五坪の小住宅 | 洪洋社 |
| 昭和2 | 小住宅設計図懸賞募集 | 新建築社 |
| 昭和3 | 住宅 | 大阪鉄道KK |
| 昭和3 | 懸賞住宅競技 | 新建築社 |
| 昭和3.11 | 御大典記念市街地住宅設計懸賞募集 | 住宅改良会 |
| 昭和4 | 朝日中小住宅 | 朝日新聞社 |
| 昭和4 | 健康住宅 | 大阪毎日新聞社 |
| 昭和5 | 中流住宅懸賞募集 | 建築世界社 |
| 昭和6 | 神戸鈴蘭台住宅 | 日本建築協会 |
| 昭和6 | 香里園改善住宅(展覧会懸賞募集) | 大阪時事新報社 他2社 |
| 昭和6 | 小住宅 | 信濃毎日新聞社 |
| 昭和6 | 五室以内の新住宅 | 同潤会 |
| 昭和6.10 | 生活改善健康住宅展覧会懸賞募集 | |
| 昭和7 | メートル法に依る実用安価住宅(小住宅懸賞) | 日本建築協会 |
| 昭和7 | 緑が丘保健住宅 | 日本建築協会 |
| 昭和7 | 大美野田園都市住宅 | 日本建築協会 |
| 昭和7 | 実際に建つる住宅(設計) | 日本建築協会 |
| 昭和7 | 東豊中住宅 | 阪神急行電鉄KK |
| 昭和7 | 職工向分譲住宅(職工分譲住宅設計図案募集) | 同潤会 |
| 昭和7 | 阪和上野芝住宅(設計図案懸賞募集) | 日本建築協会 |
| 昭和8 | 住宅(博覧会) | 建築資料協会 |
| 昭和8.3 | 「改良小住宅」設計図案懸賞 | 住宅改良会 |
| 昭和9 | 住宅(博覧会) | 日本建築学会 |
| 昭和9.1 | 「井村賞」中流住宅設計図案懸賞 | 住宅改良会 |
| 昭和10.4 | 小住宅設計図案懸賞募集 第一部・第二部 | 住宅改良会 |
| 昭和12.1 | 中流住宅設計図案懸賞募集 | 住宅改良会 |
| 昭和13.1 | 小住宅設計図案懸賞募集 | 住宅改良会 |
| 昭和13.8 | 防護室をもつ小住宅設計とその防空計画案 | 住宅改良会 |
| 昭和14 | 小住宅 | |
| 昭和14.1 | 小住宅設計図案懸賞募集 | 住宅改良会 |
| 昭和15.1 | 第八回小住宅設計図案懸賞募集 | 住宅改良会 |
| 昭和15.8 | 小住宅設計図案懸賞募集 | 住宅改良会 |
| 昭和16 | 国民住居 | 同潤会・東京日日新聞 |
| 昭和16 | 国民住居 | 日本建築学会 |
| 昭和16.1 | 小住宅設計図案懸賞募集 | 住宅改良会 |
| 昭和17.1 | 住宅設計図案懸賞募集 | 住宅改良会 |
| 昭和18.1 | 小住宅設計図案懸賞募集 | 住宅改良会 |

3) 建築展覧会懸賞競技

昭和元年以来、日本建築学会が例年開催した展覧会に付随して行った懸賞競技も具体的建設が設定されていない架空の課題でありアイデア・コンペと言える。この日本建築学会主催による「建築展覧会懸賞競技」の開催主旨は若い建築家の技能を発掘、設計界を刺激啓蒙する目的であった。この競技は建築展覧会における一部門として開催され、その入選作品が展示公開されている。建築学会五十周年略史によると第1回建築展覧会は1927年（昭和2年）11月8～12日まで東京朝日新聞社5階にて行われており、その開催主旨は当時の建築雑誌会告として建築学会会長塚本靖により以下の様に記述されている。

「本学会は事業計画に関する特別委員会の調査に基づき毎年一回建築展覧会を開催し建築専門家並に一般公衆の観覧に供し斯界の向上に資すると共に建築常識の普及を計ることに致しました。（中略）会員諸君は別記建築学会建築展覧会規程御承知の上、奮って御出品あらんことを切望します。」^{注3)}

展覧会の内容は出品品種として図面、写真、模型のほか建築的工芸品が展示され、併せて大学生による卒業計画も展示されているが、卒業計画以外は上記のように日本建築学会会員による出品という制限が設けられている。その後1929年に行われた第3回建築展覧会から、この展覧会の第二部として懸賞競技「主要街路ノ交叉點ニ建ツヘキ帝都復興記念建造物」が開催されているが（表4）、この競技もまた建築学会会員の参加を前提としていた。この点において戦後現在行われている所謂公開設計競技としてのアイデア・コンペとの差異が認められる。

本項では日本建築学会発行の「建築雑誌」に掲載された「建築展覧会懸賞競技」の要項文及び関連する作品発表や講評文等を読み、同競技における傾向の概略から戦前に行われたアイデア・コンペの特徴的事例の一端を明らかにする。

表4 建築展覧会懸賞競技の開催一覧

| 回 | 競技名 | 開催年 | 種別 | 審査員 |
|----|------------------------------|-------------------------------|------|---|
| 1 | 「主要街路ノ交叉點ニ建ツヘキ 帝都復興記念建造物」 | 1929年（昭和4年） 第3回建築展覧会第2部門 | 非住居系 | 伊東忠太、佐藤功一、大江新太郎 藤村朗、岸田日出刀 |
| 2 | 地方小都市二建ツ公會堂 | 1930年（昭和5年） 第4回建築展覧会第2部門 | 非住居系 | 伊部貞吉、岸田日出刀、佐藤功一 佐藤武夫、田邊平學 |
| 3 | 市街地二建ツ「アパートメントハウス」 | 1931年（昭和6年） 第5回建築展覧会第2部門 | 住居系 | 大江新太郎、下元連、中村博治 山下壽朗、吉田享二 |
| 4 | 名勝地二建ツ停車場 | 1932年（昭和7年） 第6回建築展覧会第2部門 | 非住居系 | 池田謙次、角南隆、高松政雄 西村好時、吉武東里 |
| 5 | 國立公園二建ツホテル | 1933年（昭和8年） 第7回建築展覧会第2部門 | 非住居系 | 今井兼次、大熊善邦、岸田日出刀 山下壽朗、渡邊仁 |
| 6 | 住宅 | 1934年（昭和9年） 第8回建築展覧会第2部門 | 住居系 | 市浦健、大熊善邦、川元良一 田邊泰、藤島玄治朗 |
| 7 | 住宅付商店 | 1935年（昭和10年） 第9回建築展覧会第2部門 | 住居系 | 大澤三之助（審査主任） 岡崎泰光、柳沢彰、今井兼次、岸田日出刀 |
| 8 | 市街地二建ツ美術展覧会場 | 1936年（昭和11年） 第10回建築展覧会第2部門 | 非住居系 | 大澤三之助、武田五一、藤村朗 堀口捨己、吉田鐵朗 |
| 9 | 集合住宅（1家族単位5連続住宅） | 1937年（昭和12年） 第11回建築展覧会第2部門 | 住居系 | 石原信之、大澤三之助 土浦龜城、村野藤吾、山田守 |
| 10 | 青年道場 | 1938年（昭和13年） 第12回建築展覧会第2部門 | 非住居系 | 小林政一、下元連、角南隆、中村博治、福田重義 藤島玄治朗、安井武雄、吉田享二、吉田鐵朗 |
| 11 | 労務者向集團住宅地 | 1939年（昭和14年） 第13回建築展覧会第3部門 | 住居系 | 伊部貞吉、市浦健、岸田日出刀、坂本綱雄 高山英華、吉田享二、吉村辰夫 |
| 12 | 家族向アパートメントハウス | 1940年（昭和15年） 第14回建築展覧会第3部門 | 住居系 | 市浦健、小野二郎、小林政一、佐藤武夫 谷口吉郎、土岐達人、堀口捨己、渡邊仁 |
| 13 | 國民住宅 | 1941年（昭和16年） 第15回建築展覧会第3部門 | 住居系 | 市浦健、今井兼次、大村巳代治、岸田日出刀、熊谷兼雄、小林政一、坂倉準三 高山英華、谷口吉郎、堀口捨己、前川國男、山田守、山脇巖 |
| 14 | 大東亞建設記念營造計畫 | 1942年（昭和17年） 第16回建築展覧会第3部門 | 非住居系 | 今井兼次、川面隆三、岸田日出刀、藏田周忠、佐藤武夫、谷口吉郎、土浦龜城、星野昌一、堀口捨己 前川國男、村野藤吾、山田守、山脇巖、吉田鐵朗※岸田日出刀、前川國男、藏田周忠は参考作品を提出している |
| 15 | 急速建設建築構造 | 1943年（昭和18年） 第17回建築展覧会第3部門 | 住居系 | （技術院）藤井幸祐、横山不學（陸軍）吉田末人、鎌田隆男（海軍）藤田敏一、野平忠（学会）市浦健、 木村巳代治、岸田日出刀、佐藤武夫、島田藤、清水一、十代田三郎、田邊平學、土岐達人、平山嵩、武藤清 |

募集要項における特徴的傾向

建築展覧会懸賞競技は1929～43年までの間に計15回行われており、そのビルディングタイプ（建築種別）を大別すると住居系建築物が8課題、非住居形建築物が7課題見られる（表4）。また同じ住居系建築物であっても当時の時局を反映し「市街地二建ツ アパートメントハウス（1931年）」「家族向アパートメントハウス（1940年）」「国民住宅（1941年）」「急速建設建築構造（1943年）」など、その求められる内容形態が大きく変化している。このように設計課題は建築雑誌1932年12月号中で審査員高松政雄が所感として述べているように、その時代の時流を踏まえた設定となっていることが伺える。

また各回の募集要項を通読すると、作品中への暗号記入の有無の変遷が伺える。第1,2回は暗号記入が設定されており（図2,3）、第3回で一度禁止されたが、その後第4回では暗号記入が再開されている（表5）。以降1934年の第5回競技から1943年の第15回競技までは暗号記入の禁止が明記されている。近江榮著「建築設計競技」（鹿島出版会）によると戦前における公共建築の実設計競技では応募案に対して応募者が工夫を凝らした暗号を記入する習慣がまかり通っていたという。その習慣は戦後も引き続き、国立国会図書館コンペ（1954年）においても暗号記入が行われており、後の国立劇場コンペ（1963年）で客観的な登録番号制が導入された。これら実設計競技に先んじ、戦前の懸賞競技において暗号記入が禁止されたことは意義深く、設計競技における公平性と適者選択の方法論を模索する意味からも建築展覧会懸賞競技の役割が重要であったことを示している。

また各懸賞競技の入選者一覧（表5）を見ると同一提案者が複数年に渡り懸賞競技に入選する場合も見られ、いわゆる”コンペキラー”が当時から存在していたことが伺える。1935～38年には四回連続で永山昇次が金牌若しくは佳作に入選しており、同様に1938～41年の四回連続で内田祥文が1等若しくは佳作に入選している。

また複数回入選者ではないが1940年の「家族向アパートメントハウス」に女性建築家の草分けとして知られる濱田美穂（浜口ミホ）が佳作に入っており建築展覧会懸賞競技における最初の女性入選者となっている。

表5 建築展覧会懸賞競技の応募状況

| 回 | 競技名 | 総評 | 応募 | 暗号 | 入選者 | 賞金 |
|----|------------------------------|--------------------|-----|----|---|-----------------------------|
| 1 | 「主要街路/交差点二建ツヘキ」 帝都復興記念建造物 | × | 31 | ○ | 池田博作（金牌） 龜井幸次郎、惠美保造（銀牌） | 無 |
| 2 | 地方小都市二建ツ公會堂 | ○ | 50 | ○ | 土橋長俊（金賞）、杉浦光一（金賞） 前川勲（銀賞）、龜井幸次郎（銀賞）、外佳作11名 | 無 |
| 3 | 市街地二建ツ「アパートメントハウス」 | ○ | 37 | × | 岩間昭（金賞）、堀内金一（銀賞） 矢追又三郎（銀賞）、林廣藏（銀賞）、外佳作13名 | 無 |
| 4 | 名勝地二建ツ停車場 | ○ 過去3回への コメント有 | 50 | ○ | 加藤孝（金牌） 密間一夫（銀杯）、鈴木好助（銀杯）、石澤二郎（銀杯）、外佳作16名 | 有 |
| 5 | 国立公園二建ツホテル | ○ | 72 | × | 辻岡通（金賞） 福田欣二（銀賞）、服部博（銀賞）、江澤隆三（銀賞）、外15名 | 有 |
| 6 | 住宅 | ○ | 97 | × | 伊地知重通（銀杯）、石澤二郎（銀杯）、龜井幸次郎（銀杯） 平野一男、枝吉徳藏（銀杯）、外佳作7名 | 有 |
| 7 | 住宅付商店 | ○ | 66 | × | 永山昇次（金牌）、中尊寺登喜次（銀牌第1席）、藤原恒造（銀牌第2席） 外佳作15名 | 金牌…100圓 銀杯…50圓 |
| 8 | 市街地二建ツ美術展覧会場 | ○ | 114 | × | 永山昇次（金牌）、田中誠（銀牌）、井上一向（銀牌）、選外佳作…東澤祐雄、宮川省三、佐藤謙夫、加藤政雄、中橋博、 飯室に合格したる藤家・飯吉俊二、石田清三、平井七三、米澤謙二、今尾謙、岩間昭+藤田恒次、眞藤八十利、鈴木好助、荻原良重、 佐々木千代吉、小川正、刀根利一、相澤珠堂、藤原恒造、伊藤武雄 | 金牌…200圓 銀杯…100圓 |
| 9 | 集合住宅（1家族単位5連続住宅） | ○ | 86 | × | 浅野孝憲（金賞）、藤岡重吾（銀杯1席）、伊藤克三（銀杯2席） 佳作…河野通祐、後藤金之助、高田秀三、佐倉大吾、三浦良男、中村隆慶、永山昇次、岡本隆三、浅野孝憲 （初めて上記に懸賞先等所属が明記される） | 金牌…100圓 銀杯…50圓 |
| 10 | 青年道場 | ○ | 65 | × | 田中誠（銀賞）、福田良一（銀賞）、永山昇次（銀賞） 内田祥文、伊藤隆三郎（佳作）入江龍太郎（佳作）岩間昭（佳作）建築学会賞技藝賞には賞金300圓 （上記に動機先等所属が明記される） | 技藝賞…300圓 佳作…賞金有 |
| 11 | 労務者向集居住宅地 | ○ | 39 | × | 内田祥文（1等）、佐川正（2等）早川文夫、長壽連（2等） 福田良一（3等）瀧村勉（3等）岩野甫（3等）金井静二、南雲義治（3等） | 1等…300圓 2等…150圓、3等…50圓 |
| 12 | 家族向アパートメントハウス | ○ | 40 | × | 入江龍太郎（入賞）、岩波博（入賞）、福田良一（入賞）、本城和彦（入賞） 伊藤隆三郎、内田祥文（佳作）、岡本隆三（佳作）、瀧村勉（佳作）、富岡茂（佳作）、中橋重三（佳作） 瀧田重雄（入賞）岩間昭（佳作）入江龍太郎（佳作）岩間昭（佳作）建築学会賞技藝賞には賞金300圓 （上記に動機先等所属が明記される） | 入賞…200圓 |
| 13 | 国民住宅 | ○ 1941年12月号 別評有 | 81 | × | 内田祥文（1等）、谷内田二郎（入賞）本城和彦、山中侯（入賞）福田正憲（入賞）谷内田二郎（入賞） 田中誠（佳作）伊藤隆三郎（佳作）河野通祐（佳作）吉川清（佳作）瀧村勉（佳作） | 入賞…200圓 佳作…賞金有 |
| 14 | 大東亞建設記念営造計画 | ○ 1942年12月号 別評有 | 63 | × | 丹下健三（1等） 田中誠、遠州栄次、佐世治正（2等）中尊寺登喜次（3等）寛井隆三（佳作）吉川清（佳作） 伊藤隆三郎、泉山武雄（佳作）本城和彦、中田亮吾、薬師寺尊、小坂秀雄、佐藤謙、佐藤保利（佳作） 瀧田重雄（入賞）、伊藤隆三郎（入賞）高木良二+高木隆三（入賞）、石井次郎（入賞）、岩波博（入賞） 佳作…平井七三、石井清+鈴木秀雄、大林新、原谷美一 作品発表無し | 1等…1000圓 2等…500圓、3等…300圓 |
| 15 | 急速建設建築構造 | × | 101 | × | 伊藤隆三郎（入賞）、岩波博（入賞）、福田良一（入賞）、本城和彦（入賞） 伊藤隆三郎、泉山武雄（佳作）本城和彦、中田亮吾、薬師寺尊、小坂秀雄、佐藤謙、佐藤保利（佳作） 瀧田重雄（入賞）、伊藤隆三郎（入賞）高木良二+高木隆三（入賞）、石井次郎（入賞）、岩波博（入賞） 佳作…平井七三、石井清+鈴木秀雄、大林新、原谷美一 作品発表無し | 入賞…300圓 佳作…100圓 |

第五條 第二部懸賞競技ニツキ定ムル所次ノ如シ

一、課題 「地方小都市ニ建ツ公會堂」
延面積1800平方米以下トシ、主ナル所要室ハ聽觀堂(座席500個程度)、圖書閱覽室、書庫、物産陳列室及青年會用諸室トス

二、審査員

| | |
|---------------|---------------|
| 工学博士 伊部貞吉 | 工学博士 岸田日出刀 |
| 建築展覽會委員長 佐藤功一 | 建築展覽會委員長 佐藤武夫 |
| 工学博士 田邊平學 | (五十音順) |

三、賞牌 應募圖案ニシテ鑑査ニ合格シタルモノノ内特ニ優秀ナルモノニ對シテ金牌及銀牌ヲ贈與ス
ソノ數ハ審査ノ結果之ヲ定ム

四、所要圖面

| | | | |
|-----|-------|-----------|-------|
| 配置圖 | 1/300 | 平面圖 | 1/100 |
| 斷面圖 | 1/100 | 立面圖(二面以上) | 1/100 |
| 透視圖 | | | |

但シ用紙ハ製圖原紙半切四葉以內、圖面ノ仕上ケハ隨意トシ、寸法ハ總テメートル法ニヨル

五、暗號 應募圖案ニハ署名ニ代フルニ暗號ヲ以テシ別ニ暗號ノミヲ表記セル封筒内ニ應募者ノ暗號、住所氏名ヲ明記セル紙片ヲ封入シ之ヲ添附セラルヘシ
暗號ハ簡單ナル日本文字ニ限ル

第六條 締切期日 昭和五年九月二十日

第七條 第一部、第三部、第四部ニツキ定ムル所次ノ如シ

第八條 一、出品ハ陳列ニ適當ナル裝置ヲナスコトヲ要ス
二、出品セントスルモノハ別記書式ノ出品申込書ニヨリ 昭和五年八月三十日迄ニ 本會事務所ニ申込マルヘシ
三、出品ハ總テ昭和五年九月二十日迄ニ會場ニ到達スル様搬入セラルヘシ
本會ニ於テ出品ヲ受理シタルトキハ直チニ預リ證ヲ交付ス

第九條 出品ノ保管ハ最善ノ注意ヲ拂フト雖モ火災其他ノ場合ニ於ケル出品ノ紛失又ハ損害ニ對シテハ一切其ノ責ニ任セス
出品ノ荷造及運搬ノ費用ハ出品者ノ負擔トス
但シ在京會員以外ノ出品者ノ圖面及寫眞ニ限リ本會ノ費用ヲ以テ返送ス

第十條 出品ノ陳列法及場所ノ區劃等ハ本會ニ於テ之ヲ定ムルモノトス

第十一條 陳列シタル出品ハ閉會後ニ非ザレハ之ヲ搬出スルコトヲ得ス

第十二條 出品ハ閉會翌日午後五時迄ニ會場ニ於テ第七條ノ預リ證引換ニ受領セラルヘシ

図2 第四回建築展覽會懸賞競技要項における暗号説明文 (第五條五)

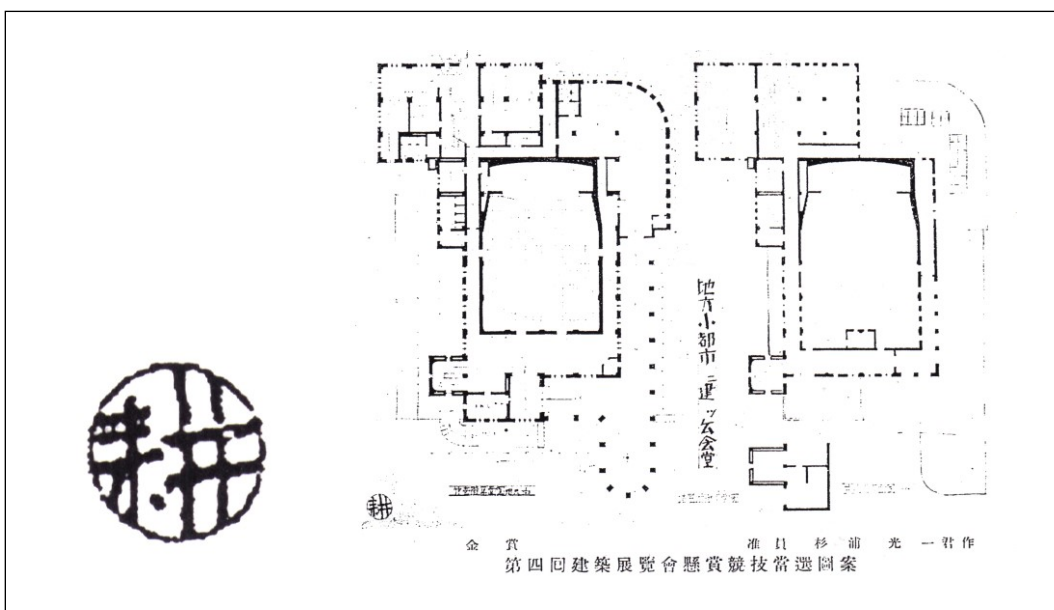


図3 暗号事例 (第四回建築展覽會懸賞競技 杉浦光一案)

懸賞競技における特徴的事例

戦前に行われた計15回の建築展覧会懸賞競技を見ると、その要項文や作品、講評文等から幾つかの特徴的な事例が挙げられる。以下にその事例を記す。

① 実施設計競技と懸賞競技との関係性

1929年に行われた第1回建築展覧会懸賞競技の課題は『「主要街路ノ交叉點ニ建ツヘキ」帝都復興記念建造物』であるが主要交差点という記述はあるものの具体的な敷地が要項中に特定されていない。この課題における「帝都復興」とは、明示されていないものの1923年に起こった関東大震災に対する復興を指すと思われる。この震災を契機として1925年（昭和元年）に「東京大震災記念建造物設計競技」が実施設計競技として行われており、前田健二郎案（図4）が一等となっている。しかし一等案は実施されず、審査員伊東忠太が一等案とは全く異なる東洋趣味の建築（図6）を自ら設計し1930年（昭和5年）8月31日に竣工したという経緯がある。この竣工の1年前に先んじて行われた前述の第1回建築展覧会懸賞競技は場所を明示しないまでも「帝都復興」と「記念的建築」をテーマとしており、しかもその審査員に伊東忠太本人が含まれており「東京大震災建造物設計競技」との関係性を有すると推測される。さらに課題タイトル中に「主要街路ノ交叉點」という表現があるが、実際の震災記念建造物も同様に主要道路である「蔵前通り」と「清澄通り」の交差点南西に位置する横網町公園内に建築されている。この『「主要街路ノ交叉點ニ建ツヘキ」帝都復興記念建造物』に対する審査員の講評文は発表されておらず推測の域を脱しないが、実施設計競技に佳作入選している岸田日出刀も同懸賞競技においては審査員を担当しており、この点からも紙上建築と地上建築双方の競技における関係性を裏付けるものである。伊東忠太が設計した東京大震災記念建造物とこの懸賞競技案（図7）との間に意匠的な対応関係を伺うことはできないが、伊東自身あるいは岸田も含め何らかの意図を持ち、懸賞競技としてこの課題を設定したと考えられる。この第1回建築展覧会懸賞競技の入選案には一等案（図7）とは異なる東洋趣味的な案も見られ、前田健二郎案への対案提示としての役割が含まれていたのではないかと推測される。また前田案と建築展覧会懸賞競技一等案はいずれも塔状のデザインとなっており両者における類似性も見られる。

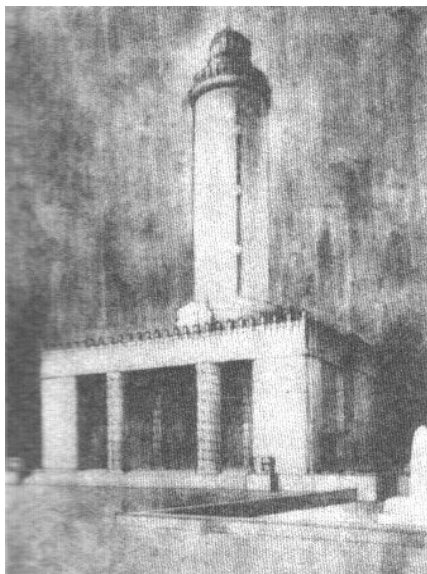


図4 東京大震災記念建造物設計競技一等案

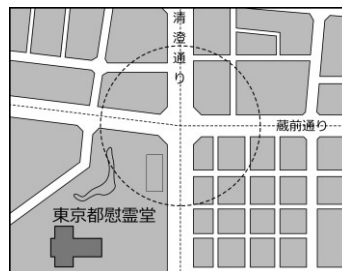


図5 想定敷地図



図6 東京大震災記念建造物

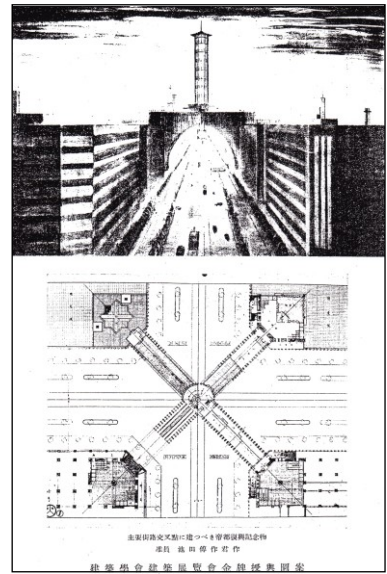


図7 建築展覧会懸賞競技一等案

② 社会状況に対応した課題変遷

社会背景等の時流と建築展覧会懸賞競技における課題との対応を示すものとして1932, 33年に行われた第4回及び第5回の懸賞競技があげられる。それぞれ「名勝地ニ建ツ停車場（1932年）」と「国立公園ニ建ツホテル（1933年）」が課題となっているが、競技に先んじた1931年に国立公園法が制定され、1934年には瀬戸内海、雲仙、霧島、その後1937年には台湾において3箇所が日本の国立公園として指定されている。また別競技ではあるが、国立公園協会と日本建築学会の共同による「国立公園ニ建ツ山小屋建築設計圖案（1933年）」など、公園を敷地設定とした懸賞競技が複数回行われており時流との対応が伺える。

同様に1942年に行われた第14回建築展覧会懸賞競技「大東亞建設記念営造計画」も時流を色濃く反映した競技となっている。この懸賞競技は戦後日本建築界の代表的建築家となる丹下健三の事実上のデビュー作であるが、応募作品の公募だけではなく審査員自らが参考作品を発表しているのが特徴である。審査員長佐藤武夫は審査所感として以下のように述べている。

「今一つ特記すべきは、審査員會の申合せにより審査員も亦、事情のゆるす限り自分の對案を提出すると云ふことで、岸田、藏田、前川の三審査員が多端の間に率先この舉に出でられ、多大の刺戟を呼んだことは、今回の競技設計に新生面を拓いたものと言ふべく、今後のこの種の競技の機構の上の一つの問題を投じたものと言へる。」^{注4)}

実際に懸賞競技および戦後のアイデア・コンペの歴史においてもこのような開催事例は見られない。特に同競技の場合、丹下健三の師にあたる前川國男と更にその師といえる岸田日出刀が参考作品を提示しており、当時の東京帝国大学建築学科出身三者が揃って紙上建築（図8～10）を提示している希有な例といえる。

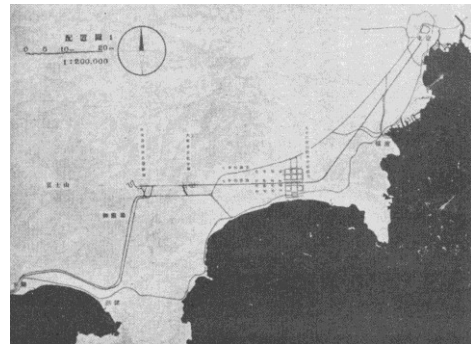
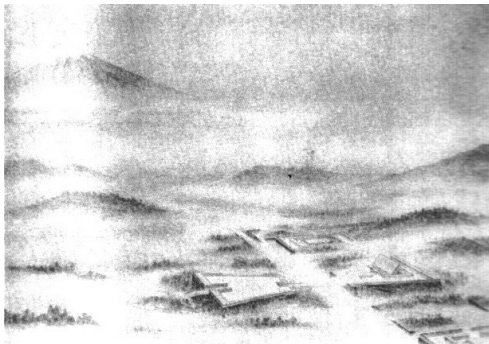


図8 丹下健三案（建築雑誌1942年12月号）

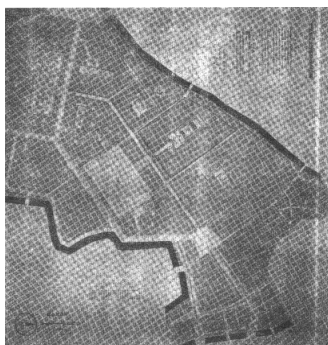


図9 岸田日出刀案（建築雑誌1942年12月号）

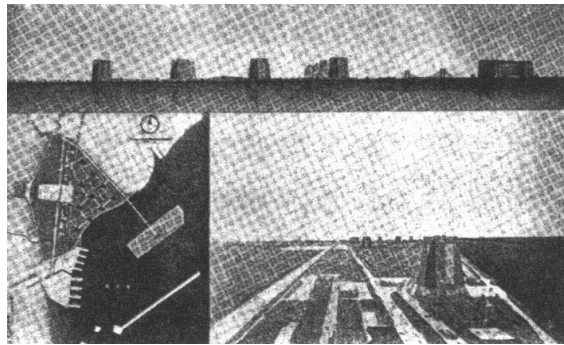


図10 前川國男案（建築雑誌1942年12月号）

丹下案は「大東亜道路を主軸とした記念営造計画 主として大東亜建設忠霊神域計画」（図 8）という名称であるが東京と富士山を道路と鉄道でつなぎ、その間に大東亜共栄圏の中枢機能都市、大東亜共栄圏建設に殉じた忠霊を祀る神域を建設するという都市計画案である。一方前川國男案「七洋の首都」（図 10）も東京改造計画案であり、東京湾を埋め立てた人工土地に新都市を建設するという内容であるが、昭和 20 年頃の東京湾状況図に重ね合わせると湾内に配置された新都市は現在の晴海埠頭とみられ提案中の「東亜道路」は日比谷濠、皇居を起点とした現在の晴海通りであり丹下案の「大東亜道路」の起点と一致する。さらにこの「東亜道路」は丹下により新建築 1961 年 2 月号に発表された「東京計画 1960」の東京湾を横断する都市軸とも一致し、紙上建築や紙上都市における相互の関連性が伺える（図 11）。

以降時局のさらなる悪化に伴い同懸賞競技の課題として、1943 年開催第 15 回懸賞競技において「急速建設建築構造」が行われた。この競技は建築技術を以て戦力増強に寄与することを目的としていた。審査員には初めて陸軍と海軍からそれぞれ 2 名づつが加わっており、併せて構造設計者である武藤清も審査に参加している。この審査結果は建築雑誌 1944 年 1 月号において受賞者名のみを発表するにとどまり、設計図案等は発表されていない。また第 17 回建築展覧会も時局の緊迫に鑑み開催が見合わされており以降戦後まで日本建築学会主催による懸賞競技が行われることは無かった。このように建築展覧会懸賞競技は戦前のアイデア・コンペとして活発に開催されるが、建築評論家である長谷川堯氏の著書^{注5)}によると大正期から紙上建築の発表が活発であったと記述されている。しかし建築家のイメージスケッチによる想像力の発露が、関東大震災以降の構造派建築家の台頭により絵空事として軽んじられる風潮が生み出されたとされている。そしてその後の昭和建築において建築家の想像力が欠如していると警告されている。その指摘の一方で、大正建築の竣工が一段落した昭和初期から建築展覧会における紙上建築のための懸賞競技が盛んになり、審査員による様々な言説が行われている。課題設定は時流を速やかに反映したものが多く戦時下という状況もあり、建築機会が少ない建築家達の積極的な参加がこの懸賞競技を活発なものにしたと想像される。

以上から建築展覧会懸賞競技は時流に沿った内容により実施され、暗号記入の禁止などその後の設計競技やアイデア・コンペの公平性につながる要項中の改善を伴い、建築機会の代替行為の意味合いを持ちながら継続実施されていたことが明らかになった。

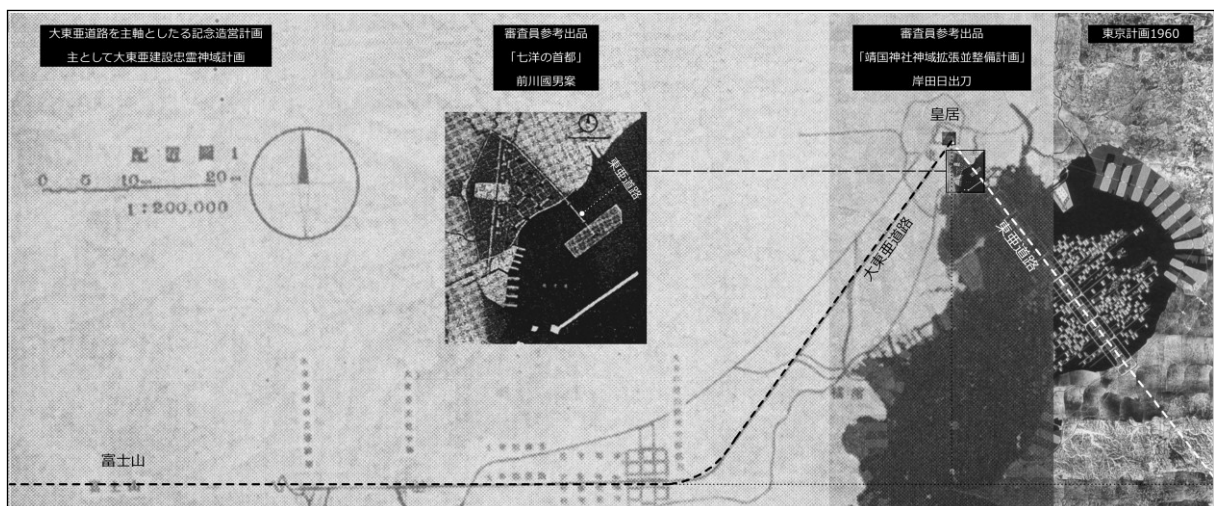


図 11 岸田、前川、丹下案の合成

第三節 戦後アイデア・コンペの概要

1) 新建築コンペ

前節のように1929年の日本建築学会展覧会に付随して行われた建築展覧会懸賞競技^{注6)}は具体的建設が予定されていない架空の課題であり、若い建築家の技能を発掘し設計界を刺激啓蒙する意味合いのアイデア・コンペであった^{注7)}。一方、新建築は1925年7月に創刊され、2年後の1927年には同誌により「小住宅設計図懸賞募集」1928年には「懸賞住宅競技」が行われており、これらの競技も戦前より住宅コンペの推進役としての役割を果たしてきたといえる。

戦後のアイデア・コンペは敗戦からの復興提案を主たる目的として行われた。新建築は戦中の1944年に休刊したが1946年に復刊し、翌1947年には新建築懸賞が行われ1958年まで計7回の競技が開催されている(表6, 図13)。1959年1月号の編集後記において新建築懸賞の開催により発行部数が伸びたことが記されている。また1956年に新建築社の海外向け雑誌「ja」が創刊されており(図12)、1959年5月号の編集後記によると海外からの新建築懸賞への注目が高かったことも伺える。同競技の特徴は前述した「ja」により周知され、海外からの応募者にも開いていたことなどが挙げられる^{注8)}。ただし一連の新建築懸賞における国外入選者と国外審査員は存在せず実質的な国際的アイデア・コンペではなかった。その後東京五輪が開かれた1964年、戦後の復興が果たされ経済的成長を達成した機会に新建築懸賞の意義を継承・発展させた設計競技の毎年開催が決定され「新建築住宅設計競技」として長期にわたり開催される。

表 6 新建築社主催による小住宅コンペ

| 要項発表 | 設計競技名 | 審査員 |
|-------|---------------------------------|-------------------------|
| 1947年 | 12坪木造国民住宅(一戸建)懸賞 | 池邊陽、清家清、吉阪隆正、吉村順三、伊藤喜三郎 |
| 1947年 | 副都心に建つ復興商店建築計画懸賞 | 伊藤喜三郎、中村登一、吉阪隆正、清家清 |
| 1948年 | 新住宅懸賞 | 池邊陽、伊藤喜三郎、吉阪隆正、中村登一、清家清 |
| 1948年 | 15坪木造国民住宅(一戸建)懸賞 | 池邊陽、伊藤喜三郎、吉阪隆正、中村登一、清家清 |
| 1948年 | 一戸建木造標準住宅懸賞—整理整頓の合理化— | 池邊陽、伊藤喜三郎、吉阪隆正、中村登一、清家清 |
| 1949年 | 第5回懸賞住宅設計競技—不燃構造による集合住宅をテーマとして— | 池邊陽、伊藤喜三郎、中村登一、清家清、吉阪隆正 |
| 1952年 | 懸賞競技設計「現代の住宅」 | 明石信道、山口文象、池邊陽、清家清 |
| 1958年 | 小住宅懸賞競技設計 | 清水一、谷口吉郎、西山卯三 |



図 12 新建築誌広告(1959年1月号)

2. 計畫要旨

イ)「新建築」第22巻第6號 23~28頁掲載の「木造住宅規準」の範囲内にて極力資材及び勞力の節約を図り、現行の「建築指令」に準據せる12坪木造獨立國民住宅の設計圖を求む。

ロ)家族構成は夫婦と子供2人を基準とし、5人まで住み得ることを必要とす。

ハ)居住形式は坐式立式は自由なるも現在を基準とし、採暖・炊事の燃料關係は、電力瓦斯等の不足の折柄として、適宜の考慮を拂うこと。

ニ)構造及び材料(特に壓根材料)に新しき考慮があることを希望する。

ホ)敷地の状態は自由なるも、平坦地たること。

図 13 十二坪木造國民住宅設計要旨および佳作1席案

2) ワンマン・コンペの開催

前述した新建築懸賞は複数の審査員で構成される競技形式であったが、引き続き1965年以降行われる新建築競技は単数の審査員が課題設定から質疑応答・審査・講評・座談会まで行う「ワンマン・コンペ」^{注9)}であり、アイデア・コンペの通史において他の設計競技の中においても特異な存在といえる。この「ワンマン・コンペ」という文言は新建築1965年6月号に掲載された「新建築競技1965開催主旨文」において初出しており（図14）、その後新建築1965年11月号に掲載された「新建築競技1965審査評」にもこの語が再度登場している。一名の審査員によるアイデア・コンペの形式がワンマン・コンペであると定義されており、複数年の審査を担当せず毎年別の建築家が審査員を担っている。この新建築競技は住宅における広汎な問題を明確に絞って追求することをねらいとし、当時の住宅建築のマンネリズムの状態から次の時代へと移行することを期待してワンマン・コンペの型式により開催されている。また競技後には入選者と審査員が直接会する座談会が設けられ新建築誌に掲載されるなど対話・応答形式が形成されていた。新建築競技1978の審査講評で審査員チャールズ・ムーアが述べるように一人の審査員の責任により課題設定を行い入選作品を選出する形式がアイデア・コンペとして稀少な形式であり、新建築競技1978入選発表号において磯崎新も以下のようにワンマン・コンペの意義を述べる。

「新建築コンペがユニークなのは意図的か偶然か審査がたったひとりの出題者によってなされるということだ。複数で審査されるものが今日ではほとんど効果をあげなくなっている時に、このコンペだけが世界的に注目を浴び始めた原因は、そこにひとりの審査者の一貫した評価基準が確立されているためである。」^{注10)}

このようなワンマン・コンペは新建築競技とタキロン・国際デザインコンペティションにおいて行われているがアイデア・コンペの形式としてこの2競技しか確認されない。2001年にタキロン・国際デザインコンペティション、2010年に新建築競技が終了するなど、現在は存在しない競技形式となっている。



図 14 新建築住宅設計競技開催主旨文と座談会のようす

3) 対象アイデア・コンペの開催状況

次にアイデア・コンペの開催状況を分析するが、本章においてアイデア・コンペを審査員と応募者による対話と捉えていることから新建築誌上に“要項-提案-講評”が揃って掲載されているアイデア・コンペを分析の対象とする。よって要項のみの掲載、入選案や講評文が掲載されない競技等を分析対象から除外している。

前述のとおり新建築競技は長期に渡り開催されている国内における代表的なアイデア・コンペであり長期間継続したサンプルデータが取得可能であることから第1回の新建築競技が開催された1965年を起点として、同競技が終了する2010年までの対象期間におけるアイデア・コンペの様々な推移を分析しアイデア・コンペ全体を俯瞰する。尚1965年以前に単発的に行われた新建築懸賞を本章および第二章の分析対象から除外するが、第三章、第四章では新建築コンペに限定した分析を行うため新建築懸賞を含めて扱うものとする。

またアイデア・コンペにおける参加属性の推移・応募数の変化などを考察するため「三井住空間デザインコンペ」「建築学生・設計大賞」「TEPCOインターカレッジデザイン選手権」「長谷工住まいのデザインコンペティション」などの学生対象競技、「女性の夢づくり住まいづくり設計競技」などの女性対象コンペに代表される応募者を極端に限定したアイデア・コンペ^{註11)}、会員を除き参加不可能な「日本建築学会設計競技」を研究対象から除外している。また新建築誌上に第11, 13回の要項が確認できず要項-提案-講評が揃っていないことから「エス・バイ・エル住宅設計コンペ」を研究対象から除外する。さらに「東京国際照明デザインコンペ」「ヤマギワ国際照明器具コンペ」など建築以外の家具・器具等のプロダクト提案を求めるアイデア・コンペを研究対象から除外している。以上を踏まえた対象アイデア・コンペ数25、総課題数244を対象として分析を進める(表7)。

競技開催の主体として、瓦やガラス、防水などの建材メーカーや住宅メーカーが主催し、かつ新建築社後援による競技が多数を占めているが、読売住宅コンクールおよび新建築競技は後援の無い単独開催となっている。また具体的建材を扱うメーカー以外として東京ガス株式会社、日本たばこ産業株式会社、NTTドコモモバイル社会研究所などによる抽象的な環境や空間、社会状況を扱った競技も見られる。

表7 対象アイデア・コンペ一覧

| 記号 | 競技名 | 主催 | 後援 | 開催数 |
|----|-----------------------------|-----------------|------------|-----|
| A | C.H.C.マーベルデザインコンペティション | C.H.C.システム株式会社 | 株式会社 新建築社 | 3 |
| B | NOYASU建築設計競技 | 野安製瓦株式会社 | 株式会社 新建築社 | 1 |
| C | アドヴァン建築設計競技 | 株式会社アドヴァン | 株式会社 新建築社 | 1 |
| D | キャンパスを使用したテンション構造 | 太陽工業株式会社 | 株式会社 新建築社 | 2 |
| E | ケータイ空間デザインコンペ | NTTドコモモバイル社会研究所 | 株式会社 新建築社 | 2 |
| F | セントラル硝子国際建築設計競技 | セントラル硝子株式会社 | 株式会社 新建築社 | 45 |
| G | ダイワハウス住宅設計コンペ | 大和ハウス工業株式会社 | 株式会社 新建築社 | 4 |
| H | タキロン国際デザインコンペティション | タキロン工業株式会社 | 株式会社 新建築社他 | 13 |
| I | ナショナル住宅設計競技 | ナショナル住宅建材株式会社 | 株式会社 新建築社 | 1 |
| J | プレキャスト・パラダイス建築設計競技 | 構法研究会 | 株式会社 新建築社 | 1 |
| K | ホクストン建築装飾デザインコンクール | 株式会社ホクストン | 株式会社 新建築社 | 13 |
| L | ミサワホームプレハブ住宅国際設計競技 | ミサワホーム株式会社 | 株式会社 新建築社 | 5 |
| M | メンブレインデザインコンペティション | 太陽工業株式会社 | 株式会社 新建築社 | 9 |
| N | 横浜アーバンデザイン国際コンペ | 横浜市他 | 日本建築学会他 | 3 |
| O | 久保田鉄工住宅設計競技 | 久保田鉄工株式会社 | 株式会社 新建築社 | 1 |
| P | 橋のイメージ国際設計競技 | 世界都市研究会他 | 株式会社 新建築社 | 1 |
| Q | 空間デザイン・コンペティション | 日本電気硝子株式会社 | 株式会社 新建築社 | 17 |
| R | 建築環境デザインコンペティション | 東京ガス株式会社 | 日本建築学会他 | 24 |
| S | 三井ホーム住宅設計競技 | 三井ホーム株式会社他 | 在日アメリカ大使館他 | 3 |
| T | 三州丸栄建築設計競技 | 丸栄陶業株式会社 | 株式会社 新建築社 | 6 |
| U | 新建築住宅設計競技 | 株式会社 新建築社他 | | 43 |
| V | 長谷工イメージデザインコンペティション | 株式会社長谷川コーポレーション | 株式会社 新建築社 | 4 |
| W | 読売住宅コンクール | 読売新聞社 | | 1 |
| X | 日新工業建築設計競技 | 日新工業株式会社 | 株式会社 新建築社 | 37 |
| Y | SMOKERS'S STYLE COMPETITION | 日本たばこ産業株式会社 | 株式会社 新建築社 | 4 |
| 合計 | | | | 244 |

新建築競技が終了する2010年の時点において開催回数10回以上の設計競技は7競技あり、うち3競技は30回以上の回数を重ねている。全体のアイデア・コンペの開催状況、開催数の増減やコンペの国際性など応募対象者の種別等によって1965年～2010年までの45年間で以下の5期に分ける（表8）。

① 初動期（1965～1969年）

セントラル硝子建築設計競技(F)、新建築競技(U)、ミサワホームプレハブ住宅設計競技(L)が主たる開催であった時期。

② 展開期（1970～1979年）

1970年開催分からミサワホームプレハブ住宅設計競技(L)が国際コンペとなる。同競技(L)が終了するのに合わせる形でセントラル硝子建築設計競技(F)も国際コンペになるなどの国際的展開が見られる。現在も継続的に行われ30回以上の回数を重ねるセントラル硝子国際建築設計競技(F)、新建築競技(U)、日新工業建築設計競技(X)が確立した時期。

③ 乱立期（1980～1995年）

好景気（バブル経済期^{注12} 1986～1991年）に合わせて企業主体のアイデア・コンペが乱立する時期。1990年初頭にピークを迎え年間9回のコンペが継続的に掲載され多くの国際コンペが開催される一方、海外からの過剰な応募に対し国内限定コンペも行われる。

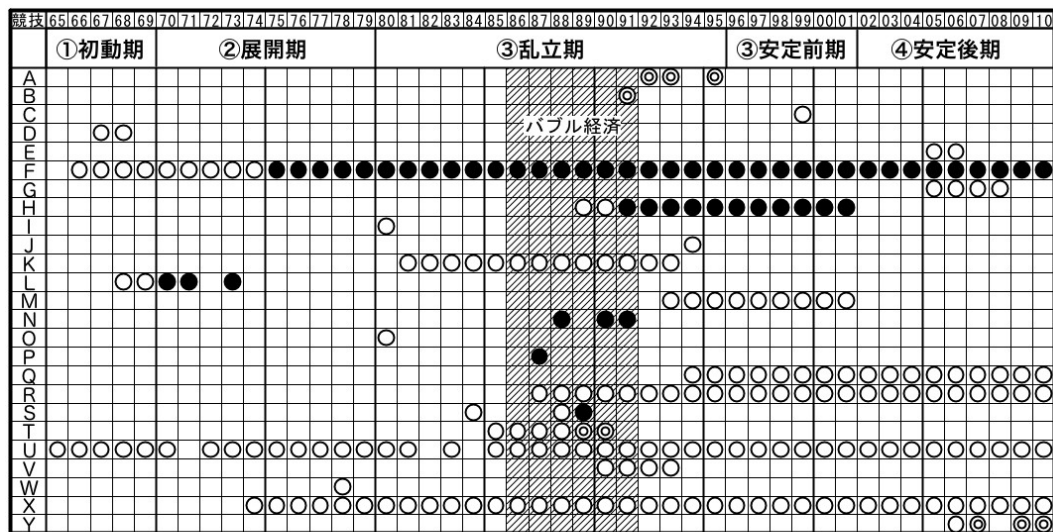
④ 安定前期（1996～2001年）

バブル経済期後に複数の競技が終了する一方セントラル硝子国際建築設計競技(F)、新建築競技(U)、日新工業建築設計競技(X)、タキロン国際デザインコンペ(H)、メンブレインデザインコンペ(M)、空間デザインコンペ(Q)、建築環境デザインコンペ(R)の7競技が安定的に行われる。

⑤ 安定後期（2002～2010年）

2001年にタキロン国際デザインコンペ(H)、メンブレインデザインコンペ(M)が終了し継続的に5競技が行われる。2005年以降再びコンペが増加し、2010年に新建築競技(U)が終了する。

表8 対象アイデア・コンペの開催状況と国際性



○国内限定コンペ ○限定の無いコンペ ●国際コンペ
 競技欄縦軸は競技名（第一章 表7参照）、横軸は開催年（65～99は1900年代、00～10は2000年代）を示す。

新建築競技の開催が始まった1965年を起点とし、同競技が終了する2010年までのアイデア・コンペの開催状況を以下にまとめる。

戦後混乱期の住宅坪数制限下における小住宅提案として新建築懸賞から始まったアイデア・コンペは、新建築競技1965年などが開催された初期期を経て、万国博覧会などの開催を社会的背景として次第に開催が活発になる展開期を迎え、かつ応募者を海外に求める国際コンペの形式が見られるようになる。その後の好景気に合わせアイデア・コンペの開催数も増加し、1990年前後のバブル経済期に最も多くのコンペが開催される乱立期を向かえる。その後景気の後退とともにバブル経済期に乱立したアイデア・コンペが短期間で終了し安定前期を向かえ、その後2000年代半ばより再び新規のコンペが見られるようになる安定後期を向かえる。そして2010年にワンマン・コンペとしてアイデア・コンペにおける特徴的開催事例である新建築競技が終了する(表9)。

表9 対象アイデア・コンペ一覧

| No. | 設計競技タイトル(右欄英字は競技記号) | 開催時期 | 作品種類 | No. | 設計競技タイトル(右欄英字は競技記号) | 開催時期 | 作品種類 | No. | 設計競技タイトル(右欄英字は競技記号) | 開催時期 | 作品種類 | No. | 設計競技タイトル(右欄英字は競技記号) | 開催時期 | 作品種類 |
|--|------------------------|------|------|-----|-----------------------------|------|------|----------------|---------------------|-----------------|-----------------|-----|---------------------|------|------|
| <p>1965</p> <ul style="list-style-type: none"> -01 新建築住宅設計競技が開始された1965年を起点 -02 山手線沿線の住宅設計競技 <p>1966</p> <ul style="list-style-type: none"> -01 東京大動脈沿線を活用した建築 <p>1967</p> <ul style="list-style-type: none"> -01 アートハウス -02 東京都大動脈沿線を活用した高層建築 <p>1968</p> <ul style="list-style-type: none"> -01 住宅設計競技 -02 住宅設計競技 -03 住宅設計競技 <p>1969</p> <ul style="list-style-type: none"> -01 トライアンフ・レジデンション -02 プラハ住宅街の改修住宅 <p>1970</p> <ul style="list-style-type: none"> -01 ガラスに覆われた人工環境 -02 住宅設計競技 <p>1971</p> <ul style="list-style-type: none"> -01 住宅設計競技 -02 住宅設計競技 <p>1972</p> <ul style="list-style-type: none"> -01 住宅設計競技 -02 住宅設計競技 <p>1973</p> <ul style="list-style-type: none"> -01 住宅設計競技 -02 住宅設計競技 <p>1974</p> <ul style="list-style-type: none"> -01 住宅設計競技 -02 住宅設計競技 -03 住宅設計競技 <p>1975</p> <ul style="list-style-type: none"> -01 住宅設計競技 -02 住宅設計競技 <p>1976</p> <ul style="list-style-type: none"> -01 住宅設計競技 -02 住宅設計競技 <p>1977</p> <ul style="list-style-type: none"> -01 住宅設計競技 -02 住宅設計競技 <p>1978</p> <ul style="list-style-type: none"> -01 住宅設計競技 -02 住宅設計競技 -03 住宅設計競技 <p>1979</p> <ul style="list-style-type: none"> -01 住宅設計競技 -02 住宅設計競技 -03 住宅設計競技 | | | | | | | | | | | | | | | |
| A | C.H.C.マーベルデザインコンペティション | | | N | 横浜アーバンデザイン国際コンペ | | | 1999 | -01 新しい形の建築 | C | 1999.07.2000.06 | | | | |
| B | NOYASU建築設計競技 | | | O | 久保田篤住宅設計競技 | | | -02 住居にやさしい環境 | F | 1999.01.1999.11 | | | | | |
| C | アドヴァン建築設計競技 | | | P | 橋のイメージ国際設計競技 | | | -03 都市の発展 | H | 1999.06.2000.03 | | | | | |
| D | キャンパスを使用したデザイン構造 | | | Q | 空間デザイン・コンペティション | | | -04 水のインテリジェン | M | 1999.03.1999.11 | | | | | |
| E | ゲート空間デザインコンペ | | | R | 建築環境デザインコンペティション | | | -05 ガラスを主とした建築 | R | 1999.05.1999.12 | | | | | |
| F | セントラル都市国際建築設計競技 | | | S | 三井ホーム住宅設計競技 | | | -06 緑豊かなこと | J | 1999.06.1999.12 | | | | | |
| G | ダイワホーム住宅設計コンペ | | | T | 三州丸栄建築設計競技 | | | -07 都市の発展 | I | 1999.05.1999.11 | | | | | |
| H | タキロン国際デザインコンペティション | | | V | 新建築住宅設計競技 | | | -08 都市の発展 | X | 1999.04.1999.07 | | | | | |
| I | ナショナル住宅設計競技 | | | W | 長谷工イメージデザインコンペティション | | | -09 アーバンランドの発展 | Y | 1999.02.1999.12 | | | | | |
| J | プレキャスト・パルダイス建築設計競技 | | | X | 読売住宅コンクール | | | -10 アーバンランドの発展 | X | 1999.04.2000.01 | | | | | |
| K | ホクストン建築設計コンペ | | | Y | 新工業建築設計競技 | | | | | | | | | | |
| L | ミサワホームプレハブ住宅国際設計競技 | | | | SMOKERS'S STYLE COMPETITION | | | | | | | | | | |
| M | メンブレインドesignコンペティション | | | | | | | | | | | | | | |

4) 対象アイデア・コンペの国際性について

新建築誌に掲載された競技で最初に「国際」の銘が付されたアイデア・コンペは1968年に開催された「ヤマギワ国際照明器具コンペ」である。この競技は建築以外のプロダクトコンペであり本研究対象から除外している。分析対象の設計競技中で最初に「国際」の銘を打ったアイデア・コンペはコンペ初動期である1970年に開催された「ミサワホームプレハブ住宅国際設計競技」である。同競技は1968年から開催されているが1970年開催時から「国際」が謳われるようになり、海外からの審査員としてポール・ルドルフをむかえ応募者数が40数点から206点の約5倍（表10上）に増加しており海外作品も50点にのぼっている。1970, 1971年のミサワホームプレハブ住宅国際設計競技では応募数、入選者数とも国内応募者が優位であるが最終開催である1973年開催回では国内外の応募数が逆転している。また入選者も全13組のうち10組が海外からの応募となっている。ミサワホームプレハブ住宅国際設計競技は1973年に終了し「国際」を銘打ったアイデア・コンペが無くなるが、「セントラル硝子建築設計競技」が第10回を記念して1975年から「セントラル硝子国際建築設計競技」となり以降現在に渡り多くの海外からの応募入選を得ている。その他「タキロン・国際デザインコンペティション」も第4回開催である1992年から最終13回目まで「国際」を銘打っている。一方応募者を国内在住者に限定しているアイデア・コンペ（学生コンペは対象外）として「C. H. C. マーベルデザインコンペティション」「NOYASU建築設計競技」などが見られる。また「三州丸栄建築設計競技」は第1～4回までは国内在住者に限定した競技型式となっていないが、第4回競技において海外特に中国からの応募数の増加が過剰となり1988年開催時には応募数617点のうち428点、入選者の10点中4点が中国からの応募者となっている。このような現象のなか1985年の第1回から4回を経た1989年以降の第5, 6回開催分が国内限定となり同競技は国内在住者限定となっている（表10下）。このような例外を除いて、アイデア・コンペにおいて要項に特記されない限り応募者の国内外を問わない競技となっており実質的には国際設計競技的に扱われているものが多い。特に世界約130カ国で読まれている和英併記の日本建築の海外向け季刊誌「ja」（1956～）では冬季号である建築年鑑によって「新建築競技」と「セントラル硝子国際建築設計競技」の結果発表が行われ世界に広く周知されることもあり、両競技において海外応募者が入選者が多く見られる。

以上本節において、戦前の小住宅懸賞や建築展覧会懸賞競技として始まったアイデア・コンペは暗号の禁止などの変化を経ながら継続され戦後の復興提案を目的とした新建築懸賞、そして新しい時代の住宅建築を模索する新建築競技へと発展していくが、特に1980年代後半に多くの競技が行われていたことが明らかになった。

表 10 ミサワホームプレハブ住宅国際設計競技、三州丸栄建築設計競技の応募変遷

| ミサワホーム プレハブ住宅 国際設計競技 | 応募数 | | 入選 | | 審査員 |
|----------------------------|------|------|-----|-----|--|
| | 総数 | 海外作品 | 国内 | 国外 | |
| 1968年 | 公表なし | 公表なし | 10点 | 0点 | 内田祥哉, 井口洋佑, 岡本敦, 佐藤稔夫, 杉山英男, 武基雄 |
| 1969年 | 40数点 | 公表なし | 10点 | 0点 | 武基雄, 井口洋佑, 柴久庵憲司, 菊竹清訓, 佐藤稔夫, 杉山英男 |
| 1970年 国際化 | 206点 | 50点 | 7点 | 7点 | 池辺陽, 芦原義信, 井口洋佑, 黒川紀章, 杉山英男, 清家清, ポール・ルドルフ |
| 1971年 国際化 | 148点 | 24点 | 10点 | 2点 | 丹下健三, 井口洋佑, 黒川紀章, 杉山英男, 進来廉, 三浦忠夫, ジャン・ブルーベ |
| 1973年 国際化 | 217点 | 121点 | 3点 | 10点 | アルフレッド・ロート, 清家清, 飯塚五郎蔵, 井口洋佑, 加藤邦男, 菊竹清訓, 杉山英男, 三浦忠夫 |

| 三州丸栄 建築設計競技 | 応募数 | | 入選 | | 審査員 | |
|----------------|------|------|------------|-----|-----|------------------------------|
| | 総数 | 海外作品 | 国内 | 国外 | | |
| 1985年 | 243点 | 11点 | | 14点 | 0点 | 内井昭蔵, 宮脇檀, 山下和正, 武者英二, 椋山善久 |
| 1986年 | 294点 | 56点 | 中国55点、韓国1点 | 12点 | 2点 | 内井昭蔵, 宮脇檀, 山下和正, 武者英二, 椋山善久 |
| 1987年 | 398点 | 155点 | 中国155点 | 11点 | 3点 | 内井昭蔵, 高山壽夫, 野村加根夫, 宮脇檀, 椋山善久 |
| 1988年 | 617点 | 428点 | 中国428点 | 10点 | 4点 | 内井昭蔵, 宮脇檀, 野村加根夫, 高山壽夫, 椋山善久 |
| 1989年 国内限定 | 133点 | 0点 | | 14点 | 0点 | 内井昭蔵, 宮脇檀, 野村加根夫, 高山壽夫, 椋山善久 |
| 1990年 国内限定 | 131点 | 0点 | | 13点 | 0点 | 内井昭蔵, 宮脇檀, 野村加根夫, 高山壽夫, 椋山善久 |

第四節 要約

以下に本研究で得られた基礎的知見を記す。

知見の一つは「1965年というアイデア・コンペの起点」の定義である。戦前、戦中、戦後復興期に行われた社会背景に即したアイデア・コンペとは異なり、新たな建築像を探る意味合いを持ち、ワンマン・コンペという特異な型式として新建築競技1965が開始される。以降長期に渡り継続開催される競技が複数見られ、1965年をアイデア・コンペにおける起点と捉えることができる。二つ目の知見は「1980年代後半というアイデア・コンペ開催数ピーク」の存在である。戦後混乱期の住宅坪数制限下における最小限住宅提案募集として新建築懸賞から始まったアイデア・コンペは戦後復興後、高度経済成長そして東京五輪や万国博覧会などの開催を社会的背景として次第に開催が活発になる。その後の好景気に合わせアイデア・コンペの開催数も増加し、1990年前後の好景気、バブル経済期に合わせ企業主体の競技が多くなりアイデア・コンペの開催数が増加する。また海外からの審査員を迎えるなどアイデア・コンペの国際性が高まり、応募属性も国外者が増加する。

以上本章により、戦前-戦中-戦後におけるアイデア・コンペはそれぞれの社会的背景により開催され、戦前の住様式の啓蒙的役割、戦中の国威発揚、戦後の最小限住宅提案へと、その目的、機能を変化させていくが、高度経済成長期の1965年に単数の審査員による特異な型式として行われた新建築競技が起点となり、継続的かつ多様にアイデア・コンペが行われバブル経済期に多くのアイデア・コンペが開催されたことが明らかになった。

注

- 注1) 「建築雑誌1992年3月号」日本建築学会, 1992, pp34
- 注2) 「建築大辞典」彰国社
- 注3) 「建築雑誌1927会告」日本建築学会, 1927
- 注4) 「建築雑誌1942年12月号 競技設計の審査所感」日本建築学会, 1942, pp959
- 注5) 長谷川堯「神殿か獄舎か」鹿島出版会, 2007, pp. 100において、大正期においてさかんであった、紙の上での建築家のイメージ・スケッチによる想像力の発露が、震災後の耐震構造至上により全くの絵空事として排される風潮をうみ、昭和建築における建築家の想像力の欠如への重要な原因を提供したと書かれている。
- 注6) 近江榮「建築設計競技」鹿島出版会, 1986, pp. 136の中で具体的建築、自由な構想を拘束しないアイデア・コンペであると定義されている。
- 注7) 近江榮「建築設計競技」鹿島出版会, pp. 120の中で「学会が適当な課題を与え、若い建築家の技能を発掘、設計界を刺激啓蒙する目的のもの」と評されている。
- 注8) 「新建築創刊65周年記念 建築20世紀PART2」新建築社, 1991, pp. 191において新建築住宅設計競技について「海外向け雑誌『ja』を兄弟誌として持つことから、海外の建築家にも開かれていて、自然と国際的な環境の中で育ってきた」と評している。
- 注9) 「新建築1965年6月号」新建築社, 1965, pp. 109開催主旨文の中で単一の審査員によるアイデア・コンペの形式をワンマン・コンペと定義している。「新建築1965年11月号」新建築社, 1965, pp. 182において審査評注にこの語が再度登場している。
- 注10) 磯崎新「新建築1978年12月号 それは鏡であった-ここ数年の<新建築コンペ>を総括して」新建築社, 1978, pp. 268
- 注11) 「女性の夢づくり住まいづくり設計競技」や「三井住空間デザインコンペ」など女性や学生に参加者を制限しているアイデア・コンペを対象外としている。
- 注12) 経済成長率：1980年度以前は「平成12年版国民経済計算年報」、1981～94年度は年報（平成21年度確報）による。以降、2013年1-3期1次速報値。

図版出典

- 図 1 『新建築 第 23 卷 第 4 號』新建築社、1947. 4、pp. 1
- 図 2 『建築雑誌』日本建築学会、1930. 10、pp. 6
- 図 3 『建築雑誌』日本建築学会、1930. 10
- 図 4 『建築設計競技』近江榮、鹿島出版会、1986、pp. 72
- 図 5 著者作成
- 図 6 著者撮影
- 図 7 『建築雑誌』日本建築学会、1929. 11
- 図 8 『建築雑誌』日本建築学会、1942. 12
- 図 9 『建築雑誌』日本建築学会、1942. 12
- 図 10 『建築雑誌』日本建築学会、1942. 12
- 図 11 著者作成
第 14 回建築展覧会、丹下、岸田、前川案と丹下による東京計画 1960（『新建築』新建築社、1960. 3、PP79）を合成
- 図 12 『新建築』新建築社、1959. 1
- 図 13 『新建築 第 23 卷 第 4 號』新建築社、1947. 4、pp. 3
- 図 14 『新建築』新建築社、1965. 3、pp. 109

第二章

提案型建築設計競技の要項－提案－講評に関する研究

| | |
|----------------------------|----|
| 第一節 展望..... | 29 |
| 第二節 アイデア・コンペの要項に関する分析..... | 30 |
| 1) 課題の主題別分類..... | 30 |
| 2) 課題タイトルに関する分析..... | 31 |
| 3) 課題文章に関する分析..... | 32 |
| 4) 設計条件とビルディングタイプ..... | 35 |
| 5) 所要図面の変化..... | 38 |
| 6) 質疑－課題設定者との対話応答..... | 39 |
| 第三節 アイデア・コンペの提案に関する分析..... | 40 |
| 1) 提案内容に対する分析..... | 40 |
| 2) 応募数について..... | 43 |
| 3) 入選者の内訳（学生比）..... | 44 |
| 第四節 アイデア・コンペの講評に関する分析..... | 46 |
| 1) 審査員の人数構成..... | 46 |
| 2) 審査員による指摘内容..... | 47 |
| 3) アイデア・コンペにおける特徴的事象..... | 49 |
| 4) 審査員によるアイデア・コンペへの評価..... | 55 |
| 第五節 要約..... | 57 |

第二節 アイデア・コンペの要項に関する分析

本節ではアイデア・コンペの要項文中に記載されるテーマ、主題、課題文章、設計条件、提案表現として求められる所要図面等を分析し、要項における特徴的事象や変化の時期を明らかにする。

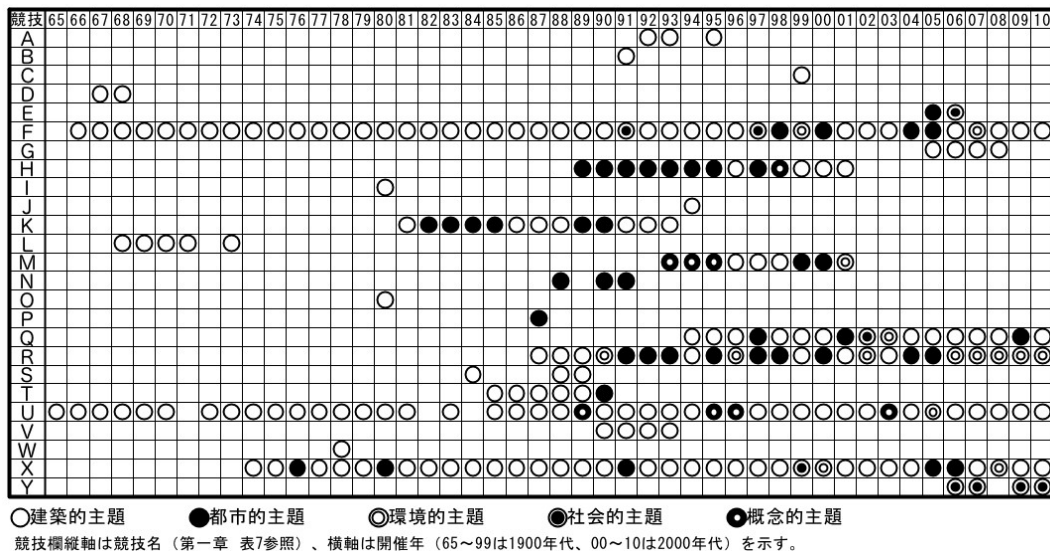
1) 課題の主題別分類

最初に対象アイデア・コンペが何を主題として提案を求めているのかを課題タイトルや課題文章から読み解き、以下の5つの主題に分類する。

- ① **建築的主題**…建築物を提案することを主としたテーマ設定。
- ② **都市的主題**…都市問題に対応し、街の活性化、公園やポケットパークなどの提案を求めるテーマ設定。
- ③ **環境的主題**…環境問題とその解決を主としたテーマ設定。例として第4回建築環境デザインコンペティション「エコロジカル・パーク」のように地球規模のスケールを含めた課題内容が見られる。
- ④ **社会的主题**…社会的なシステム等の提案を主としたテーマ設定。例として第26回セントラル硝子国際建築設計競技(1991)「EAST MEETS WEST」では当時の東西社会の変化、時代の流れに対応したアイデアを求める内容となっている。
- ⑤ **概念的テーマ**…設計方法等の提案を主としたテーマ設定。例として新建築競技1989「DISPROGRAMMING」では一元的で等質的なプログラムから建築の機能が混成され変化が起きるといふ審査員の仮説をもとに提案が求められている。

アイデア・コンペの主題において1970年代半ばに建築的主題から都市的主題への変化の端緒が見られ始める。その後1980年代に入り都市的主題が増加し1990年代に環境的主題、社会的主题、概念的テーマが増えるなど、主題が複雑・多様化していることがわかる(表2)。求められる回答も建築物という具体的回答から抽象的回答へと広がりを持ち、アイデア・コンペの主題自体が1970年代半ばから変様、抽象化していることが伺える。

表2 アイデア・コンペの主題の変遷



2) 課題タイトルに関する分析

次にアイデア・コンペの課題タイトルにおける傾向を読み解く。アイデア・コンペのタイトルは短文で形成されている場合もあるため、課題タイトルを品詞分解、助詞を除外しキーワード化を行っている。その際「家」「住居」「住まい」「住宅」などの類義語、同様に「公園」「パーク」など和英の違いのみの表現等をまとめて整理し、それらの出現数が2回以上出現するキーワードについてそれぞれの出現頻度を調べた。ただし個別の建築物名や建築家名について、次項において分析対象とするため課題タイトルの分析対象外としている。

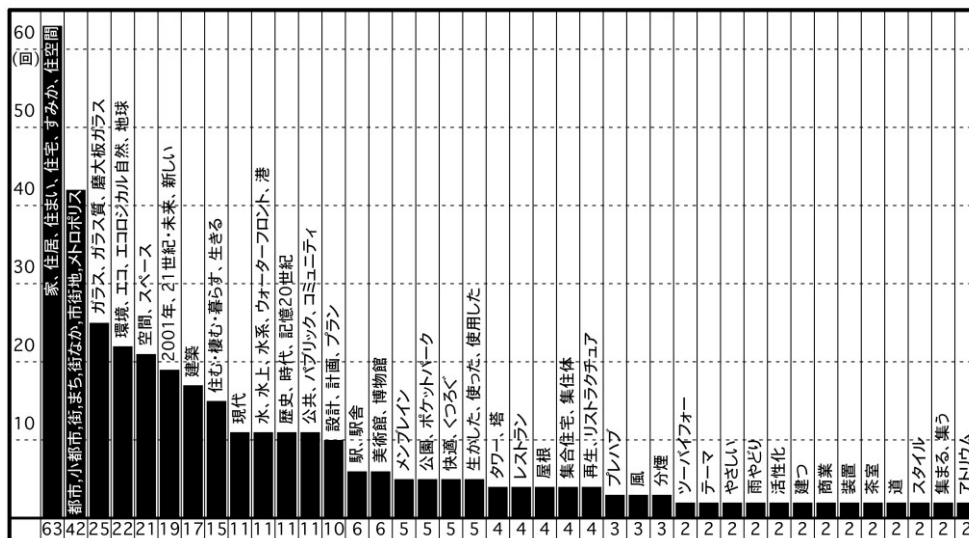
これらのキーワードの出現頻度を分析すると「家」「住居」「住まい」「住宅」「すみか」「住空間」といった住居系のキーワードが63回と突出して最も多くなっている。住宅以外では「美術館」「博物館」「駅舎」「レストラン」の出現頻度が高い。そして「都市」「小都市」「街」「まちなか」「市街地」「メトロポリス」といった語が42回と多数出現しており、課題設定場所として市街地が想定されていることがわかる(表3)。

「ガラス」「ガラス質」「磨大板ガラス」というキーワードが要項課題タイトルに25回出現しているが、同一材料の出現頻度の多さは企業主催設計競技の場合に多く見られ、自社製品の宣伝的意味合いの中で同一コンペにおいて同一キーワードを毎年繰り返し使用していることによる。同様の傾向は太陽工業株式会社主催による競技名に含まれる「メンブレイン」などの語にも見られる。一方「ガラスを使用しなくても良い」等の注釈がつく場合も後に見られることから、要項や課題における直接的な販促目的が次第に減じていることも伺える。

時節を表現するキーワードも多く見られるが「20世紀」「歴史」「時代」「記憶」などの過去あるいは「現代」に関する語の他に、「新しい」という形容詞の出現頻度も高く、アイデア・コンペの提案に従来とは違う新規性や斬新なアイデアを求めていることが確認される。特に1990年代に見られる「21世紀」「2001年」「未来」などの語の出現頻度の高さは20世紀から新しい世紀をむかえるにあたっての新たな建築テーマを探るという時代の趨勢を表している。

また「環境」「エコ」「エコロジカル」「自然」「地球」などの出現頻度の多さから、地球環境の変化に対する建築や都市提案を求める時代性も伺うことができる。

表3 キーワードの出現頻度



3) 課題文章に関する分析

アイデア・コンペの課題文章中には様々な建築物が引用されるが、傾向として日本国内の建築物に比べて国外建築物の引用が多く、特に「クリスタルパレス」「落水荘」「ファーンズワース邸」「サヴォア邸」など近代建築からの引用が多くなっている(表4左)。引用が最も多く見られる建築作品はフィリップ・ジョンソン設計の「ガラスの家」であるが引用数6のうち5つは「セントラル硝子国際建築設計競技」において引用されている。また文章の意味内容(表4右上)からも「ガラスの家」が近代住宅建築の象徴やアイコンとして用いられていることが解る。課題文中に登場する建築家としては前述のフィリップ・ジョンソンが7回引用されているが、ミース・ファン・デル・ローエの引用が8回と最も多くなっており「ガラスの摩天楼計画案」「ファーンズワース邸」「レークショアドライブ・アパートメント」などの建築物を伴いながらの引用が見られる。その他フランク・ロイド・ライト、ル・コルビュジェなど様々な設計競技課題文章に海外の近代建築家が引用されている(表4右下)。対して日本国内からの建築家の引用は見られず、建築物としての引用も近代建築ではなく寺社仏閣など歴史的建造物が多い。

以上のようにアイデア・コンペの課題文章において海外の近代建築物とその設計者特に海外建築家と彼らの言説からの引用が多く、それらをベースとして課題が設定されていることが解る。

表4 課題文章で引用される建築物一覧

| 建築物名 | 設計者 | 回数 |
|--------------------|-------------------|----|
| ガラスの家 | フィリップ・ジョンソン | 6 |
| クリスタルパレス | ジョセフ・バクストン | 3 |
| 落水荘 | フランク・ロイド・ライト | 3 |
| ガラスの摩天楼計画案 | ミース・ファン・デル・ローエ | 3 |
| ファーンズワース邸 | ミース・ファン・デル・ローエ | 2 |
| レークショアドライブ・アパートメント | ミース・ファン・デル・ローエ | 2 |
| サヴォア邸 | ル・コルビュジェ | 2 |
| ジョンソンワックスビル | フランク・ロイド・ライト | 2 |
| バリ地下鉄出入口 | エクトル・ギマール | 2 |
| ピラミッド | - | 2 |
| EXPO67アメリカ館 | バックミンスター・フラー | 1 |
| シーグラムビル | ミース・ファン・デル・ローエ | 1 |
| バリ救世軍本部 | ル・コルビュジェ | 1 |
| ガラスバンク | S.O.M | 1 |
| フォード財団ビル | K・ローチ | 1 |
| エンパイアーステートビル | ジュリアン・ラム・アンド・ハーモン | 1 |
| レティ製菓店 | ハンス・ホライン | 1 |
| シュリン宝石店 | ハンス・ホライン | 1 |
| チャリングクロス駅 | テリー・ファレル | 1 |
| ヴィンジャーハウス | ブルース・ガフ | 1 |
| トランスコタワー | フィリップ・ジョンソン | 1 |
| 香港上海銀行 | ノーマン・フォスター | 1 |
| フリードリヒ街の高層ビル | HansSoeder | 1 |
| セントルイス・ジェファソン記念碑 | エーロ・サーリネン | 1 |
| バリ・ラヴィレット公園 | バーナード・チュミ | 1 |
| 第3インターナショナル塔 | ウラディミール・タトリン | 1 |
| ヴィラ・ロトンダ | アンドレア・パラディオ | 1 |
| レーニン廟 | - | 1 |
| バベルの塔 | - | 1 |
| 三愛ビル(ドリームセンター) | 林昌二(日建設計) | 1 |
| 千葉県立中央図書館 | 大高正人 | 1 |
| 大阪万博お祭り広場 | 丹下健三 | 1 |
| 旧横浜正金銀行 | - | 1 |
| 横浜税関 | - | 1 |
| 横浜赤レンガ倉庫 | - | 1 |
| 伊勢神宮 | - | 1 |
| 厳島神社 | - | 1 |
| 法隆寺東院夢殿 | - | 1 |
| 日光廟 | - | 1 |
| 錦帯橋 | - | 1 |
| 孔子廟 | - | 1 |

| 「ガラスの家」に関する課題要項文章の抜粋 | |
|----------------------|---|
| 分析シート番号 1967-02 | …ジョンソンのガラスの家…など、ガラスは建築家のすぐれたイマジネーションを引き出す素材となっています。 |
| 分析シート番号 1975-01 | …建築の分野においても、鉄、コンクリートとともに、近代建築を構成する3大要素のひとつとなり、ガラスをテーマとした優れた建築は…ガラスの家(P.ジョンソン)…など数多く挙げることができます。 |
| 分析シート番号 1981-03 | …優れた建築家による優れた独立住居は、近代建築のガイド・ラインそのものであり、貴重なリファレンスであり続けた…ジョンソンのガラスの家はミニマルアートの先駆であった。 |
| 分析シート番号 1990-01 | 20世紀、フィリップ・ジョンソンによって提示されたガラスの家は、そのコンセプトとデザインによって時代に大きな衝撃を与えた。 |
| 分析シート番号 1991-07 | …テクノロジーの勝利の証拠品としての鉄とガラスを素材として、市民のための生活の場である住宅を建設してみようとするアイデアは、近代建築思想のひとつの極北である。…ジョンソンはガラスの家を完成させた。 |
| 分析シート番号 2001-01 | ジョンソンによってつくられた「ガラスハウス」が現代建築を拓いたことを思い起こし、構造、設備技術のその後の展開を踏まえ、またようやく高まってきた環境問題などを統合して、新しい世紀にふさわしいガラスハウスのあり方を求めた。 |

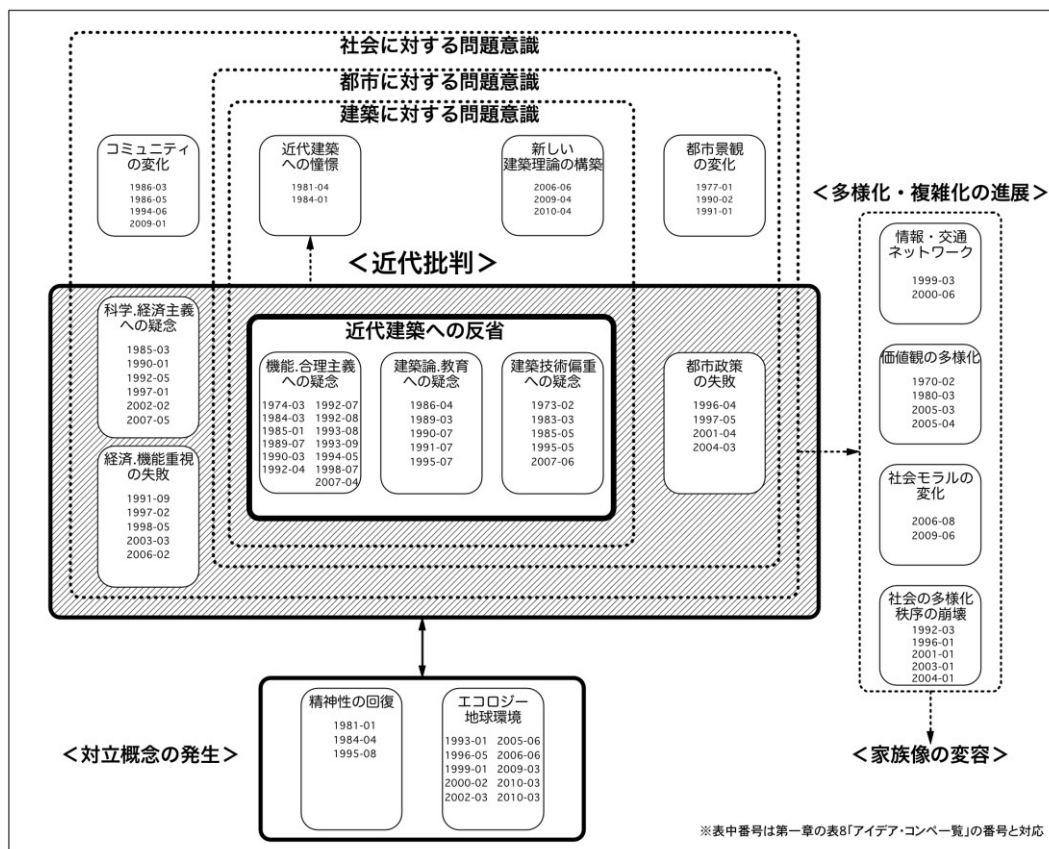
| 設計者 | 回数 |
|----------------|----|
| ミース・ファン・デル・ローエ | 8 |
| フィリップ・ジョンソン | 7 |
| フランク・ロイド・ライト | 5 |
| ル・コルビュジェ | 3 |
| ジョセフ・バクストン | 3 |
| エクトル・ギマール | 2 |
| ハンス・ホライン | 2 |

表5 審査員による問題意識一覧

| 番号 | 問題意識抜粋 |
|---------|---|
| 1970-02 | 家族構成や生活形態が大きく変化し、家族とは何かという問題を考え直す必要がある。 |
| 1973-02 | 工業化住宅であっても人間中心の思想を根元に据えて住宅を考えなければならない。 |
| 1974-03 | 屋根を消去する近代建築は、機能のみが重視され、外部環境の重要な構成要素としての意義を忘れてしまった。 |
| 1977-01 | 近年は港や波止場が臨海工業地帯となり情緒が失われている。 |
| 1980-03 | 建設費、生活様式、核家族、エネルギー浪費という住宅が抱える問題を解決しなければならない。 |
| 1981-01 | 現代の都市社会は物質文明中心の生活で、精神生活がなおざりにされている。 |
| 1981-04 | 屋上庭園は近代建築の重要なポキャプラリーであり、近代建築技術の発達の喜びの表現として見ることもできるのではないか。 |
| 1983-03 | 科学技術の発展によって居住環境は改良されたが、歴史性や地域性を無視し、生態系のバランスを崩し混乱している。 |
| 1984-01 | ガラスの摩天楼案は近代建築におけるガラスの大きい可能性を見つけた。 |
| 1984-03 | 機能や合理性を重視した住生活の近代化が、見直しの時期にさしかかっている。 |
| 1984-04 | かつての家には生と死があり、精神的な生活が物質的な生活と同等に重んじられていた。現在の物質的充足は精神性を置き忘れている。 |
| 1985-01 | 近代建築で枠付けられた、機能と空間の対応という概念を乗り越えなければならない。 |
| 1985-03 | 科学技術の発達により生活は便利になったが、その合理性故に大切なものが失われたのではないか。 |
| 1985-05 | 科学技術の恩恵により屋内環境の快適さはえられたが、季節感や生活の充実感を見失ったのではないか。 |
| 1986-03 | コミュニティと切り離された生活環境が次第に増えている。 |
| 1986-04 | モダニストたちの、改善された生活条件により生活と社会が向上するという夢は失敗に終わった。 |
| 1986-05 | 本当に人と人が純粋に人間同士として話し合える場が現代に存在しているのだろうか。 |
| 1989-03 | 建築教育において和風がなおざりにされているのではないか。 |
| 1989-07 | 一元的で物質的なプログラムはもはや存在停止のやむなきにたっている。 |
| 1990-01 | 科学技術の展開が主題であった20世紀を終え、合理性・経済性の意味を見直す。 |
| 1990-02 | 今日の都市空間には記号が充満し、われわれは記号の海に溺れかかっている。 |
| 1990-03 | 機能主義全盛の中で機能のないフォーリーが見過されてきた。 |
| 1990-07 | 「機械」という言葉は、過ぎ去った近代を象徴するものへと変化した。 |
| 1991-01 | 近代化の進展とともにまち独自の表情は薄れてきてしまった。 |
| 1991-07 | 空間をデカルト的思考の延長へと解体し、均質化した近代建築はすでに陳腐化している。 |
| 1991-09 | 都市空間は登記され、消費される経済行為の対象としてのみ存在するようになったのではないか。 |
| 1992-03 | あまりに錯綜し、多重化しすぎる情報やシステム。都市の絶望状況。 |
| 1992-04 | 近代から脱却するための機能のない「塔」 |
| 1992-05 | 経済優先社会の破綻が見え始めているのではないか。 |
| 1992-07 | 近代建築その合理理想のもとに迫られた装飾や形式美、象徴性、記念性などの復権を迫られることになるのではないか。 |
| 1992-08 | 近代化された手法によって設計された家に、人びとの記憶は住み得るであろうか。 |
| 1993-01 | 科学技術は人類に物質的豊かさをもたらしたが、地球資源を浪費し、環境破壊、多くの歴史的遺産を消失した。 |
| 1993-08 | 近代建築では、機能と構造、デザインが一体でなくてはならないとされたため、現在かえって矛盾を生じているのではないか。 |
| 1993-09 | 近代建築以前に建築家の重要な仕事であった記念碑の設計は、機能主義の思想において否定された。 |
| 1994-05 | 機能に応じた建築空間の構成という近代建築の目的を越え、新しい展開が求められている。 |
| 1995-05 | 戦後の科学技術により天然素材の材質感を真似た模造品があらわれた。 |
| 1994-06 | 近代化のもとに持ち家、浴室の家族化が進みコミュニティの中心である銭湯が衰退した。 |
| 1995-07 | 20世紀にわれわれは形態や空間についての幻想的な探求に没頭したが、もはや本質的な問題ではなくなっている。 |
| 1995-08 | 都市に空がなくなってきたが、人びとの心にも空がなくなっているのではないか。 |
| 1996-01 | 冷戦構造の崩壊、世界秩序が崩壊し世界各地で民族紛争が相次ぐ。 |
| 1996-04 | 建築が集合し、都市が形成され高密度化し様々な問題が起こってきた。 |
| 1996-05 | 高度経済成長期以降、臨海工業地帯拡張のため自然環境のエコロジカルな視点を持たなかった。 |
| 1997-01 | 近代になると合理性や機能性に理念を置いたが誤謬であった。 |
| 1997-02 | 技術力を背景とした都市の成長神話に大きなゆらぎが来ている。 |
| 1997-05 | 既存の都市公園は本当に魅力のあるものとして機能しているのだろうか。 |
| 1998-05 | 機能分化が進んできた近代都市は、制度疲労の危機に瀕している。 |
| 1998-07 | 近代住宅を改めて問い直し、そのオルタナティブを見いだす。 |
| 1999-01 | 文明と技術の発達にしたがい様々な資源を使い、現代になってエネルギーを膨大に消費している。 |
| 1999-03 | 情報化時代にあつて、つくられている家が、現代を的確にとらえていない。 |
| 2000-02 | 20世紀では自然の中に住むことを目指して「郊外」を生み出し、自然を破壊していた。 |
| 2000-06 | 地球を覆う通信や交通ネットワークの異常な発達により、家族の存在形式も住生活の形式も大きくかわりつつある。 |
| 2001-01 | 社会環境が変化し多様化の度を深め、プロトタイプが無意味になってきている。 |
| 2001-04 | わが国の公園は現代社会において十分に機能していないのではないか。 |
| 2002-02 | 現代社会の日常では、合理性、機能性、経済性などに基づいた物質的欲求が先行し、精神性がなおざりにされている。 |
| 2002-03 | 地球資源の有効活用が今日の課題であるが、目先だけの対処でかえって資源を浪費している例もあるのではないか。 |
| 2003-01 | 情報化の波が社会の様々な仕組みを変え、施設の更新を迫っている。 |
| 2003-03 | 高度経済成長期の駅ビルなど、まち全体のビジョンが欠落した短絡的な開発計画だったのではないか。 |
| 2004-01 | 文化・文明のグローバル化が著しかった20世紀を越え、多元化が課題となる。 |
| 2004-03 | アーケード商店街ステロタイプ化は人間性に根ざした横丁の精神が欠如してしまったことに原因があるのではないか。 |
| 2005-03 | 20世紀に生み出された家族像「核家族」をじっくりと見つめる必要がある。 |
| 2005-04 | 住まうことの意味が多様化し、住まいが家庭生活の場であるという普遍性が揺らいでしまった。 |
| 2005-06 | 20世紀の大量生産、大量消費文明の下で人類は繁栄したが、地球のエコシステムの崩壊という代償に直面している。 |
| 2006-02 | 都市の中で、建築の寿命としてはまだ使用に耐える建築が増えつつある。 |
| 2006-05 | 地球温暖化のもたらす危機を、今こそ現実のものとして認識しなくてはならない。 |
| 2006-06 | 生活を記述する手段としての「壁」への懐疑。 |
| 2006-08 | 喫煙できる場所を少なくし、喫煙者を疎外することだけが解なのであるか。 |
| 2007-04 | 近代社会の理念、家族形態や住居形態が変化を続けた現代社会では機能しなかった。 |
| 2007-05 | アジア、とりわけ日本では、建築は「築年数の増大＝価値が減る」ということになってしまっている。 |
| 2007-06 | 今日、人びとが働き生活する空間は、ますます外部から遮断され人工的にコントロールされるようになっている。 |
| 2009-01 | 近代社会における定住前提の地域コミュニティのあり方が、流動化する社会の中で機能しなかった。 |
| 2009-03 | 自然エネルギーの使用を抑えようとする現在、建築は風に対して過剰防御になっているのではないか。 |
| 2009-04 | 映画というものの認識が、まだ十分に建築のあり方を変えてしまっていない。依然、静的なイメージつまり写真が主役である。 |
| 2009-06 | たばこを吸える場所が急激に少なくなっていることで、限られた喫煙場所に多くの喫煙者が集まり、街の景観を損なっている。 |
| 2010-03 | 建築の無限の価値、その可能性にチャレンジすることが、人間の地球に対する役割であり恩返しではないか。 |
| 2010-03 | CO2削減が世界的課題ではあるが、地球のためという本題を見失うと不毛な努力になってしまう。 |
| 2010-04 | 時代、社会のかたちは変わって行く。現代の私達の時代の素晴らしさを示す住宅像を考えることができるのでは。 |

つぎに課題文章を精読すると課題設定者である建築家や建築評論家の問題意識が表現されている記述が多く見られる。現在に対する言及、現状認識、過去に対しての反省から、そして未来への問題意識を浮かび上げさせ応募者に回答を求める文体が多く、特に近代化や科学技術に対する疑念等の傾向が見られる。また近代化への反省、近代建築の失敗とその再考、建築論や建築教育への疑念に関する記述も多い。これら問題意識の傾向を課題文章から抽出し(表5)、その後KJ法^{注2)}により類型に従って配置し図示した(表6)。この表により課題設定者である建築家、建築評論家は「建築」のみならず「都市」さらには「社会」に対して問題提起を行っていることが解る。その問題提起の中心にあるものは「近代批判」であり、近代化に伴い発生した経済主義、社会の複雑性や行き過ぎた多様化、家族像の変容に対しても再考を促し、更には人間の精神性の回復にまで遡り回答を求める文章も見られる。そして近代化の対立概念あるいは反省として地球環境、エコロジーをテーマとする傾向も伺え、特に1990年代後半から2000年代にかけて多く見られる。一方近代への肯定的姿勢として前述のように建築家フィリップ・ジョンソン設計によるガラスハウス(1949年)が課題文章に複数回出現するなど、近代建築への憧憬的記述も見られる(表4右)。

表 6 問題意識の関係図



※表中番号は第一章の表8「アイデア・コンペ一覧」の番号と対応

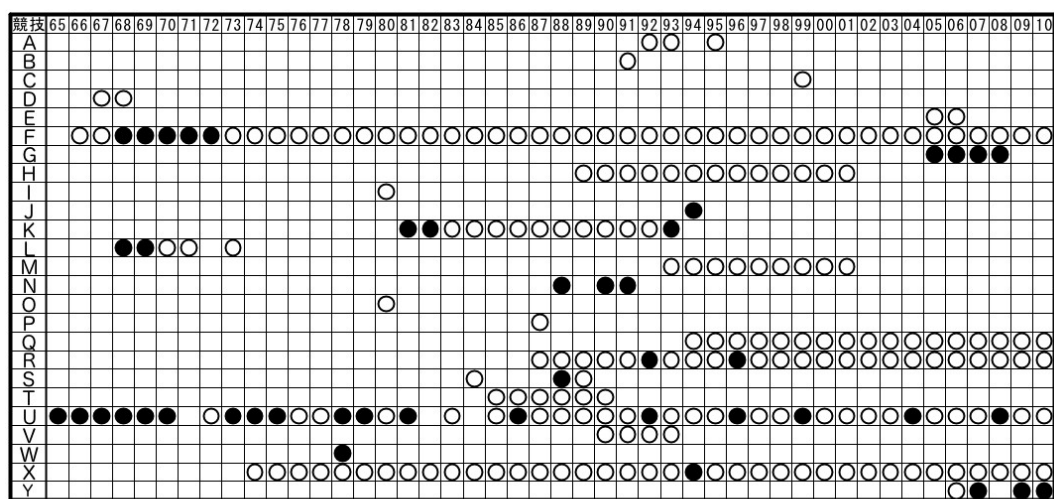
4) 設計条件とビルディングタイプ

対象アイデア・コンペの要項を読み、設計条件の有無を分析する(表7)。ここでいう設計条件とは課題文中に記された設計対象物の面積構造規模・敷地条件等のことを示す(図2)。特に具体的な数値や特定の場所・敷地形状を示す記述が記されている場合に設計条件「有り」とみなす。開催されたアイデア・コンペを見ると要項に設計条件が付与されるケースが対象期間を通じて確認される。しかしアイデア・コンペの初動期である1965年から展開期の1970年代半ばまでは同一競技において連続して設計条件が設定されているのに対し、1980年以降は設計条件が継続的に付与されるケースが少なくなっている。

以下に特定のアイデア・コンペとして新建築競技における設計条件を分析する(表8)。第1回競技が行われた1965年以降1970年までは要項に設計条件が継続して付与されている。しかし1972年に設計条件が無い競技が現れ、1970年代半ばから設計条件が減少し提案者による自由設定が増加している。詳細を後述するが新建築競技において設計条件が付される場合、審査員が海外建築家あるいは海外建築家と国内建築家の組み合わせである場合が多くみられ、日本人建築家の審査員が設計条件を付した競技は楨文彦審査による新建築競技1981以降見られない。このようにアイデア・コンペにおいて自由設定のもとで提案の優劣が審査されるケースが年次的に多くなり、特に敷地条件などの初期設定自体を提案者に求めるケースが増えており、建築単体というより敷地と状況の特殊性による提案を評価対象とする傾向が見られる。

以上によりアイデア・コンペの初動期及び展開期には設計条件が付与されるなど条件下における提案により問題解決、回答を求めることがアイデア・コンペの主旨であったことが解る。

表7 設計条件の有無



○設計条件「無し」 ●設計条件「有り」
 競技縦軸は競技名(第一章 表7参照)、横軸は開催年(65~99は1900年代、00~10は2000年代)を示す。

表 8 新建築競技における設計条件の有無

| 開催年 | コンペタイトル | 設計条件 |
|------|----------------------------------|--|
| 1965 | サラリーマンのための住宅 | 有 家族構成(夫40歳、妻35歳、子供:中学1年女児、小学4年男児、小学1年女児、夫の母65歳)、月収(約5万円)、社会的地位(中の上) |
| 1966 | 大都市に住む市民のための住宅 | 有 家族構成(夫婦と娘、息子1人程度) |
| 1967 | 高密度社会の都市住居 | 有 人工密度3000人/ha(2000~5000)程度、人工10~25万人、国土幹線・都市間交通線等の交通装置を内包 |
| 1968 | 6世帯のための住居 | 有 延床面積500㎡(±10%、ガレージ別)、6軒ひと組、都市郊外(職場まで1時間程度)、敷地面積1000㎡、一面接道、合計人数24人、自動車各戸1台 |
| 1969 | 大学の教授の住宅 | 有 市の郊外(某国立大学から30分程度)、丘陵地(平均勾配1/5)、広い土地(約100ha)、住戸5~8戸をグループ化し10程度のグループを斜面に敷在。 |
| 1970 | <生の生産>の器としてのくいえ>はどうあるべきか | 有 人工密度800~1000人/ha |
| 1971 | | |
| 1972 | 住宅 | 無 |
| 1973 | 人間が自然と共存して住まいを得る集住体を設計せよ | 有 階数地上5階以上、主要各室が外気と接する。 |
| 1974 | 都市の低層集合住宅を設計せよ | 有 東京・大阪のような大都会の郊外住宅地、低層(原則として2階以内)、10~50単位程度の居住空間が一体的に配置、自動車は戸数の半分は確保 |
| 1975 | わがスーパースターたちのいえ | 有 居住者の設定(別表から選択)、海・湖につきてた台地(海辺まで約15m)、陸側から自動車でアプローチ |
| 1976 | 交差点にたつ住宅 | 無 |
| 1977 | メトロポリスにおける快適でくつろいだ住まい | 無 |
| 1978 | 向こう三軒両隣の町屋 | 有 幅13.5m奥行43mの敷地、中央に7mの私道を挟み3軒づつ計6軒、北緯34度(東京、アトランタ)、各家族が1~2台の自動車を駐車 |
| 1979 | K.F.シングルのための家 | 有 寝室、図書室、ギャラリー、温室、食堂、その他の居住空間、スタッフ用の設備、馬小屋、ガレージ、離れ家数棟、水泳プール |
| 1980 | 歴史と現代の接点にたつ家 | 無 |
| 1981 | 20世紀博物館の敷地にたつエキシビジョン・ハウス | 有 敷地は審査員設計の20世紀博物館の東南隅50m×50m、総延床面積300㎡まで |
| 1982 | | |
| 1983 | 歴史性と地域性を持つ住居 | 無 |
| 1984 | | |
| 1985 | 抵抗の暮 | 無 |
| 1986 | 300/300/300 | 有 4つの通りに囲まれた高密度なアーバン・コンテキスト、一辺300フィートの想像上の立方体住宅プロジェクト |
| 1987 | 日本の住宅・今 | 無 |
| 1988 | メトロポリスにおける快適でくつろいだ住まい | 無 |
| 1989 | ディスプレイグラフィック | 有 |
| 1990 | 住宅は住むためのエレクトロニクス装置である | 無 |
| 1991 | もうひとつのガラスの家 | 無 |
| 1992 | スタイルのない住宅 | 無 |
| 1993 | 住まいのための基本シェルターと場の記憶 | 無 |
| 1994 | 都市住居 | 無 |
| 1995 | 単一性/複合性 | 無 |
| 1996 | 動かないこと | 無 |
| 1997 | コラボレーションの家 | 無 |
| 1998 | 詩的空間としての家 | 無 |
| 1999 | アーバンセンターの広場に建つ200人ための劇場 | 有 ブラジル国内の100,000人の居住者がいる町、平坦な四角い広場(100m×40m)、200人ための劇場、2000㎡で2階建ての小さなブロック |
| 2000 | ファイナル・ハウス | 無 |
| 2001 | サウンド/データホーム ふつうを越えて | 無 |
| 2002 | ミュージアの神々が空虚さから解き放たれる家 | 無 |
| 2003 | 建築ウィルス | 無 |
| 2004 | 多次元住宅 | 有 250㎡の小住宅 |
| 2005 | ACTION for SUSTAINABILITY | 無 |
| 2006 | The Plan-Less House | 無 |
| 2007 | リセール・バリューのある家 | 無 |
| 2008 | Four Square House Design Problem | 有 36m×36mのグリッドを持つ架空の田園都市、自由な形状の住宅を4つデザインする。個々の住宅面積が162㎡を超過しないこと。 |
| 2009 | 住宅、映画の世紀を経験して | 無 |
| 2010 | 新しい住宅 | 無 |

1. 幅13.5m、奥行き43mの敷地に、中央に幅7mの私道を挟んでそれぞれ3軒ずつ、計6軒の住宅を設計する。
2. 6軒分の敷地の外形と中央の私道は規定されたものとするが、それぞれ3軒ずつの敷地の境界はある程度自由に考えてよい。(次ページの図参照)
3. 気候は北緯34°前後の東京やアトランタなどを想定する。
4. 各家族が1~2台の車を便利に駐車できるものとする。
5. ある程度の日光と戸外空間を享受できるものとする。
6. 孤独になれる場所の確保が望ましい。
7. それぞれの家はアイデンティファイされなければならない。
8. エネルギーの節約的共同利用装置が望まれる。

The diagram shows a rectangular plot with a total width of 13.5m and a total depth of 43m. A central driveway of 7m width runs the full length of the plot. On either side of the driveway, there are three house units, each with a width of 18m. The units are arranged symmetrically around the central driveway.

図 2 設計条件の例 (新建築競技 1978)

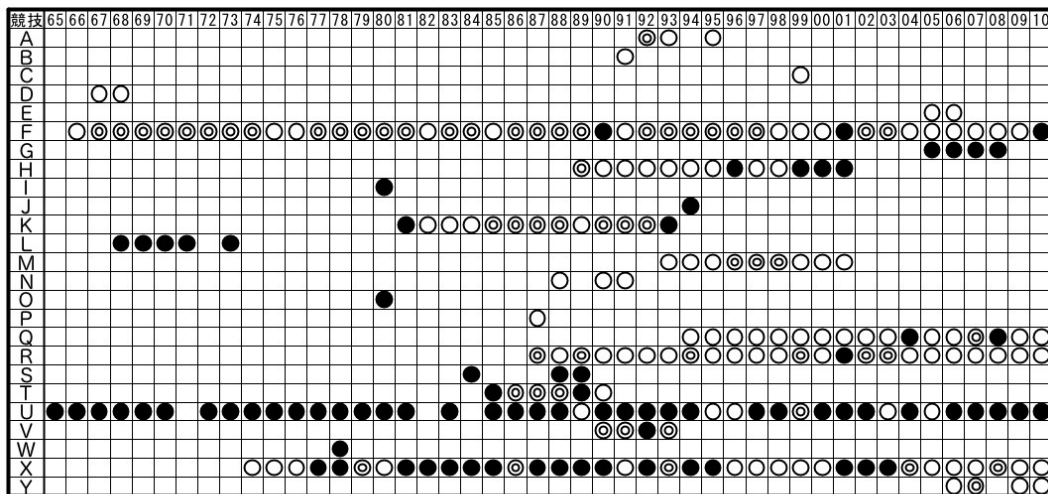
次にアイデア・コンペに求められるビルディングタイプと設計条件の有無との関係性を読み解くが(表9, 10)、指定されるビルディングタイプとして、最初に建築種別を住居系と非住居系に大別し中項目としてより具体的なタイプを抽出する。

非住居系としては美術館、博物館、駅舎、モニュメントといったタイプが異なる主催社のアイデア・コンペにおいて多数見られる。また非住居系における設計条件「有り」の課題は全体の18.0%に留まっている。

住居系のビルディングタイプにおいて設計条件が付与されるケースが多く、その半数は1965～79年に集中している。また設計条件「無し」の課題は全体の82.0%であるがビルディングタイプも設定されないケースが多く、特に1990年代以降に増加している。

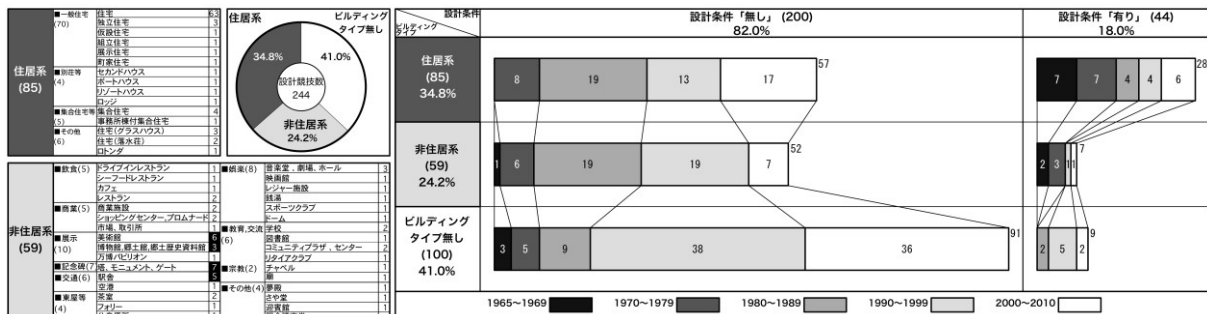
以上によりアイデア・コンペの課題は、設計条件が付与される住居系の具体的な課題から、設計条件、ビルディングタイプとも提案者の自由設定に委ねられる抽象的課題に移行したことが確認された。

表9 ビルディングタイプ指定の有無



○ビルディングタイプ「無し」 ●ビルディングタイプ「住居系」 ⊙ビルディングタイプ「非住居系」
 競技欄縦軸は競技名(第一章 表7参照)、横軸は開催年(65～99は1900年代、00～10は2000年代)を示す。

表10 ビルディングタイプと設計条件



5) 所要図面の変化

本節により設計条件を設定せず提案者の自由設定に委ねる型式が増加していることが述べられてきたが、ここからは特定のアイデア・コンペとして新建築コンペにおける所要図面を調べる。

アイデア・コンペの要項には所要図面が明記され、応募者は所定用紙に過不足無く図面をレイアウトし提出する。要項の所要図面を分析すると新建築競技1970において大きな変化が確認される(表11下)。この変化を顕在化するため新建築競技の前身である新建築懸賞の所要図面(表11上)と比較すると、1947～58年にかけて開催された新建築懸賞では所要図面として縮尺率が定められた平面図の提示が必ず求められており、引き続き1965～69年までの新建築競技において新建築懸賞の作品体裁が継承され平面図が求められている。この要因として新建築懸賞の審査員であった建築家がその後の新建築競技においても審査を担い、同様の作品体裁を応募者に求めたことが推察される。その後の新建築競技1970では所要図面として平面図が要求されておらず、この変化以降新建築競技における所要図面は次第に内容が定形化し、1973年から図面表現の指定として「配置図、平面図、立面図、断面図、その他設計意図を説明するのに必要と思われる図面を各自選択して描くこと。縮尺は自由。」というように所要図面を提案者に委ねる自由形式となり文言の変化を加えながら現在に至っている。

以上、要項の分析により所要図面に平面図が求められない等の大きな変化が1970年に見られ、1973年以降、所要図面が提案者の自由設定となることが確認された。アイデア・コンペの主題も建築的テーマから都市的、環境的テーマへと広がりを持ち、課題文章においても従来の具体的な建築による回答だけではなく設計条件やビルディングタイプが設定されない抽象的回答を求める傾向を強める。

表 11 新建築懸賞と新建築競技における所要図面の変化

| 競技名 | 開催年 | 所要図面 | | | | | | | | | |
|-------|-----------|--|-----------------|----------------------|--------------------|--------------|---------------------|--------------|---------------|--------------------------|--|
| | | 位置図 (案内図) | 配置図 (全体図) | 計画図 | 平面図 | 立面図 | 断面図 | 展開図 | 家具図 | 詳細図、その他 | |
| 新建築懸賞 | 1947 | | | | 1/100 | | | | | 詳細図又は構造図 適宜の大きさに描く | |
| | 1948 A | | | | 1/100 | | | | | 特に考案せる部分 適宜の大きさに描く | |
| | 1948 B | | | | 1/100 1/200増築 | | | | | 特に考案せる部分 適宜の大きさに描く | |
| | 1949 A | | | | 1/100 | | | | | 特に格納方法等にて 考慮せる所は適宜に図示 | |
| | 1949 B | | 1/500 | | 1/200各階 1/100標準 | | 1/200 | | | | |
| | 1952 | | 1/200 (屋根伏) | | 1/50 | 1/100 4面 | 1/100 2面 1/20 矩計 | | | | |
| | 1958 | | 兼1階平面 | | 1/50 | 1/50 4面 | 1/20 矩計 | | | | |
| 新建築競技 | 1965 | | 平面と 兼ねる | | 1/50 | 1/100 | 1/100 寸法記入 | | | | |
| | 1966 | | | | 1/50 | 1/100 | 1/100 寸法記入 | | | | |
| | 1967 | 1/50,000 | 縮尺随意 | 基本部分の計画図 住戸部分の計画図 | 縮尺随意 縮尺随意 | | | | | | |
| | 1968 | | 平面と 兼ねる | | 要 | 要 | 要 | | | | |
| | 1969 | | 1/500 | | 1/100 | 1/100 | 1/100斜面 との関係 | | | その他必要と思われる図面 | |
| | 1970 | | 1/500周辺 との関係 | | 要求無し | | | | | | |
| | 1972 | | | | 1/50 家具を示す | 1/50 2面以上 | 1/20 矩計、2面 | 1/50 主要室内 | 自身で設計 家具選定 | 架構法の説明図あるいは 詳細部図面1/10 | |
| | 1973 | 配置図、平面図、立面図、断面図、その他設計意図を説明するのに必要と思われる図面を各自選択して描くこと。縮尺は自由 | | | | | | | | | |
| | 1974 | 配置図、平面図、立面図、断面図、その他設計意図を説明するのに必要と思われる図面を各自選択して描くこと。縮尺は自由 | | | | | | | | | |
| | 1975 | 配置図、平面図、立面図、断面図、その他設計意図を説明するのに必要と思われる図面を各自選択して描くこと。縮尺は自由 | | | | | | | | | |

6) 質疑-課題設定者との対話応答

新建築競技は開催当初「課題-質疑-提案-講評-座談会」という一人の審査員と入選者との対話・応答型式が成立していたアイデア・コンペであった(表12)。1965～1972年までは継続的に座談会が設けられ、対話形式の文体で誌面に掲載されていた。しかし1973年に開催された新建築競技「人間が自然と共存して住まいを得る集住体を設計せよ」(審査員西澤文隆)以降、座談会は行われておらず、1975年以降質疑応答もなされていない。1976年の新建築競技「交差点の家」の審査員はアメリカの建築家リチャード・マイヤーであり、質疑応答機会と座談会の設定が困難であったことも原因と推測される。その後外国人審査員が増加するとともに同コンペにおいて質疑応答は行われていないが、例外的に1991年に開催された新建築競技「もうひとつのガラスの家」(審査員P. ジョンソン)では入選者がジョンソン自邸に招かれ授賞式と討論会が行われている。しかし誌面での対話掲載は見られない。設計条件が付されることが少なくなり提案者の自由設定に任せられていることも質疑応答の必要性が無くなったことと関係があると考えられる。

またその他のアイデア・コンペにおいても横浜アーバン国際デザインコンペなどでは実在する敷地設定が付されているため質疑応答が設けられているが、全体的に見てその機会は極めて少ない。

このように質疑応答の減少は、アイデア・コンペにおいて課題タイトル及び課題文章から、いかに提案者自身が設定を組み立てるかが問われていることを表していると考えられる。

表 12 新建築競技における設計条件、質疑応答の有無

| 開催年 | 設計競技名 | 審査員 | 設計条件 | 質疑 | 応答 | 座談会 |
|------|----------------------------------|-----------------------------|------|----|----|------------|
| 1965 | サラリーマンのための住宅 | 清家清 | 有 | 有 | 有 | 有 |
| 1966 | 大都市に住む市民のための住宅 | 丹下健三 | 有 | 有 | 有 | 有 |
| 1967 | 高密度社会の都市住居 | 西山卯三 | 有 | 有 | 有 | 有 |
| 1968 | 6世帯のための住居 | 吉村順三 | 有 | 有 | 有 | 有(入選者代表のみ) |
| 1969 | 大学村の教授の住宅 | 吉阪隆正 | 有 | 有 | 有 | 有 |
| 1970 | <生の生産>の器としてのくいえ>はどうあるべきか | 川添登、菊竹清訓、横文彦 | 有 | 有 | 有 | 有 |
| 1971 | | | | | | |
| 1972 | 住宅 | 篠原一男 | 無 | 有 | 有 | 有 |
| 1973 | 人間が自然と共存して住まいを得る集住体を設計せよ | 西澤文隆 | 有 | 有 | 有 | |
| 1974 | 都市の低層集合住宅を設計せよ | 芦原義信 | 有 | 有 | 有 | |
| 1975 | わがスーパースターたちのいえ | 磯崎新 | 有 | 有 | 無 | |
| 1976 | 交差点にたつ住宅 | R.マイヤー | 無 | 無 | 無 | |
| 1977 | メトロポリスにおける快適でくつろいだ住まい | P.クック | 無 | 無 | 無 | |
| 1978 | 向こう三軒両隣の町屋 | C.ムア | 有 | 有 | 無 | |
| 1979 | K.F.シングルのための家 | J.スターリング | 有 | 無 | 無 | |
| 1980 | 歴史と現代の接点にたつ家 | 黒川紀章 | 無 | 無 | 無 | |
| 1981 | 20世紀博物館の敷地にたつエキシビジョン・ハウス | 横文彦 | 有 | 無 | 無 | |
| 1982 | | | | | | |
| 1983 | 歴史性と地域性を持つ住居 | 芦原義信、大高正人M.グレイブス、C.コレア、下川辺淳 | 無 | 無 | 無 | |
| 1984 | | | | | | |
| 1985 | 抵抗の砦 | 安藤忠雄 | 無 | 無 | 無 | |
| 1986 | 300/300/300 | H.ヤーン | 有 | 無 | 無 | |
| 1987 | 日本の住宅・今 | 宮脇檀 | 無 | 無 | 無 | |
| 1988 | メトロポリスにおける快適でくつろいだ住まい | 伊東豊雄 | 無 | 無 | 無 | |
| 1989 | ディスプレイグラフィック | B.チュミ | 有 | 有 | 無 | |
| 1990 | 住宅は住むためのエレクトロニクス装置である | 原広司 | 無 | 無 | 無 | |
| 1991 | もうひとつのガラスの家 | P.ジョンソン+安藤忠雄 | 無 | 無 | 無 | 有(討論会) |
| 1992 | スタイルのない住宅 | R.コルハース | 無 | 無 | 無 | |
| 1993 | 住まいのための基本シエラと場の記憶 | R.ピアノ | 無 | 無 | 無 | |
| 1994 | 都市住居 | 横文彦 | 無 | 無 | 無 | |
| 1995 | 単一性/複合性 | J.ヌーヴェル | 無 | 無 | 無 | |
| 1996 | 動かないこと | 妹島和世 | 無 | 無 | 無 | |
| 1997 | コラボレーションの家 | J.ヘルツォーグ | 無 | 無 | 無 | |
| 1998 | 詩的空間としての家 | 高松伸 | 無 | 無 | 無 | |
| 1999 | アーバンセンターの広場に建つ200人のための劇場 | O.ニーマイヤー | 有 | 無 | 無 | |
| 2000 | ファイナル・ハウス | 伊東豊雄 | 無 | 無 | 無 | |
| 2001 | サウンド/データホーム ふうを越えて | ヴィニー・マース/MVRDV | 無 | 無 | 無 | |
| 2002 | ミュージズの神々が空虚さから解放される家 | D.リベスキンド | 無 | 無 | 無 | |
| 2003 | 建築ウイルス | 坂村健 | 無 | 無 | 無 | |
| 2004 | 多次元住宅 | S.ホル | 有 | 無 | 無 | |
| 2005 | ACTION for SUSTAINABILITY | 安藤忠雄、R.ロジャース | 無 | 無 | 無 | |
| 2006 | The Plan-Less House | 隈研吾 | 無 | 無 | 無 | |
| 2007 | リセール・パリュウのある家 | 小嶋一浩 | 無 | 無 | 無 | |
| 2008 | Four Square House Design Problem | ラファエル・モネオ | 有 | 無 | 無 | |
| 2009 | 住宅、映画の世紀を経験して | 青木淳 | 無 | 無 | 無 | |
| 2010 | 新しい住宅 | 西沢立衛 | 無 | 無 | 無 | |

第三節 アイデア・コンペの提案に関する分析

1) 提案内容に対する分析

つぎに各アイデア・コンペの提案を分析する。ここでは1965～2010年という長期間に渡るアイデア・コンペの潮流の概略を捉えるため各競技において最も時代的傾向を表出していると考えられる最上位案・一等案のみを扱うものとする。また競技によっては一等案が複数存在する場合も見られるが、この場合において誌面上の掲載が最上位のものを対象とした。以上による最上位案計244案の傾向を読み解くが、提案内容を「建築的回答」と「非建築的回答」の二つに大別し、更にそれぞれを2つに分類する。

①-1 建築的回答(集中)

課題に対して建築物本体で回答する提案。建築の機能を一つの敷地に建造物としてまとめる、あるいは敷地が設定されないが限定されたエリアに集中的に群棟配置を行う回答などが見られ、提案数において多数を占めている。(図3: 磨石板ガラスを使用した建築設計競技(1966)一等 出江寛案)

①-2 建築的回答(分散)

建築の機能を細分化し都市に分散させ、全体として機能を充足した系を形成する提案。街路化した建築物の提案なども見られる。1980年に行われた第15回セントラル硝子国際建築設計競技「新しい時代の郷土館」一等案は京都の連続した複数の町家を保存するとともに郷土館としての機能を与え、路地を含め町そのものが郷土館でありえることを示している(図4)。

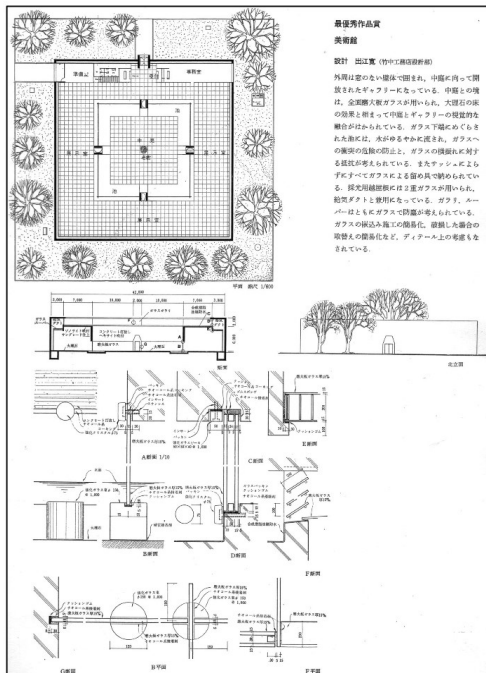


図3 ①-1 建築的回答 (集中)

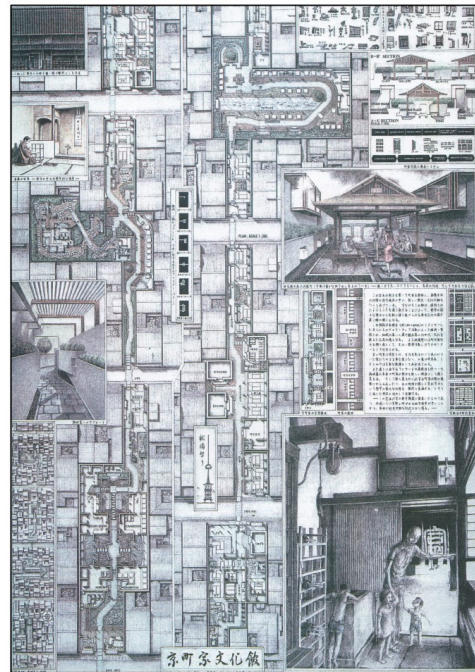


図4 ①-2 建築的回答 (分散)

②-1 非建築的回答(有形)

課題に対して建築物以外の物体を通して回答するもの。小さな装置、道具、器具等を用いるプロダクティブな提案、建築物を主体としないランドスケープ、外構などの外部空間のみの提案などが見られる。2001年に行われた第8回空間デザインコンペティションはガラス質を使った公園のデザインを求める課題設定となっているが、一等案(図5)のように建築本体で回答せずに球状の液晶ディスプレイが内包された受信ユニットにより他者同士に偶発的な関係性を与える装置の提案が見られる。

②-2 非建築的回答(無形)

器具などを伴わないシステム・仕組み、現象等の非物質的的回答。1992年に行われた第4回タキロン・国際デザインコンペティションにおいて「風の道・水の道」という抽象的な課題内容に対応し、一等案(図6)は建築ではなく現象として霧や大気の流れのような空中幕を作成し、それをスクリーンとしてプロジェクターにより情報や状況を投影発信する提案となっている。

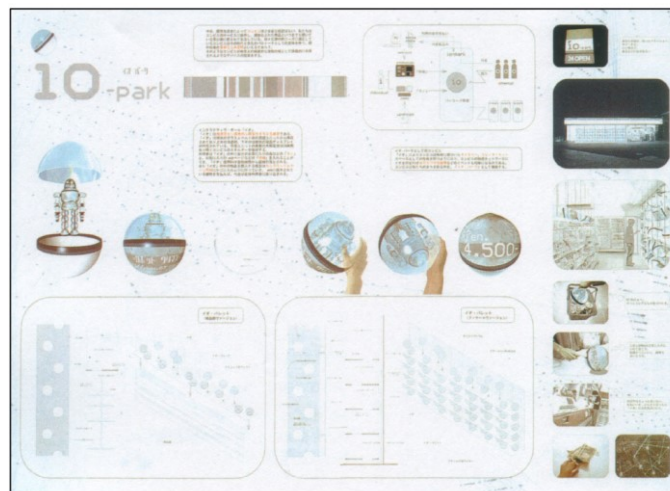


図5 ②-1 非建築的回答(有形)

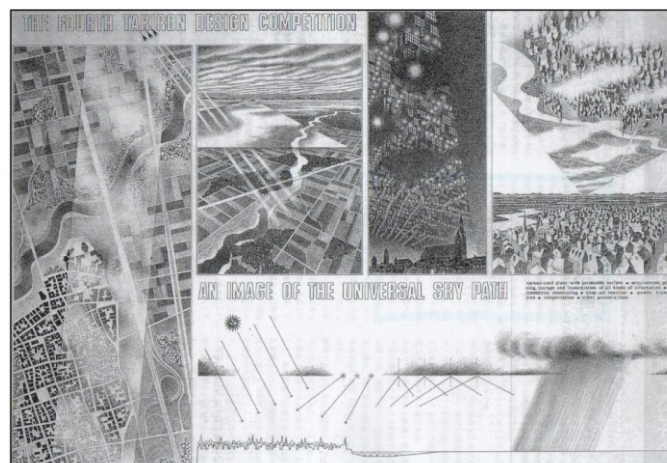


図6 ②-2 非建築的回答(分散)

アイデア・コンペにおける提案内容を分析すると、総数244案に対して215案という大多数が建築的回答となっているが、非建築的回答の例として新建築競技1975における複数の入選案（図7）があげられ、平面図や立面図が見られず建築的通念でいう図面表現が全く無い抽象的な回答となっている。この背景として本章第二節で確認された新建築競技1970における「平面図要求無し」、そして新建築競技1973における「必要と思われる図面を各自選択して描く」という所要図面の変化が遠因となり図面のないポスター的表現が出現したことが伺える。特に新建築競技1975の一等案は前述した非建築的回答における最初期の提案であり、図面技術ではなくイデオロギーとしての建築を展開している点が審査員磯崎新により評価されている^{注3,4)}。これらの提案の中には図面表現を有しながら競技結果として主催者、評価者、出版社等により図面が掲載されなかったという場合も考えられるが、平面図の無い提案として扱うこととする。

その後1990年代に入り都市的テーマの課題増加に伴い、都市空間に建築物を分散配置する、建築的回答(分散)の提案も1990年代半ばに増加している。また2000年以降は非建築的回答が増加しているが、特に器具を用いた非建築的回答(有形)は2000年代後半、仕組み、現象等による非建築的回答(無形)が2000年代半ばに増加していることがわかる(表13)。

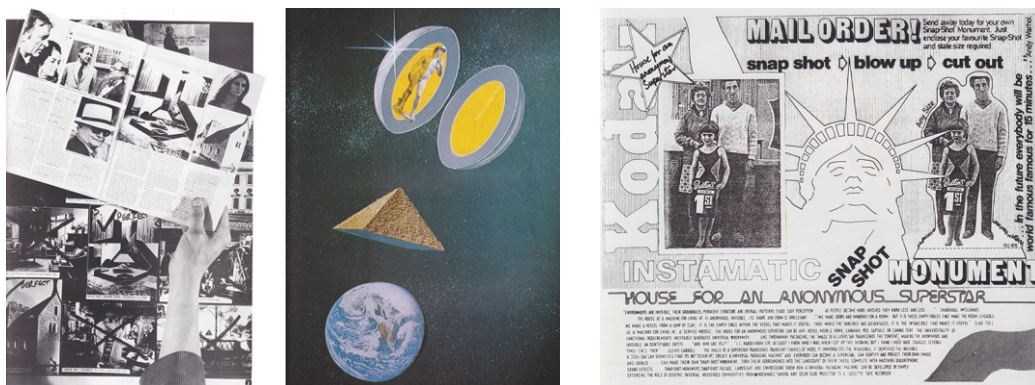
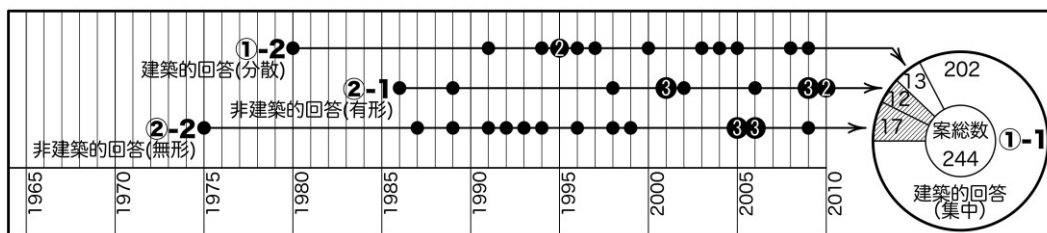


図7 非建築的回答の事例（新建築競技1975）

表13 回答の変遷



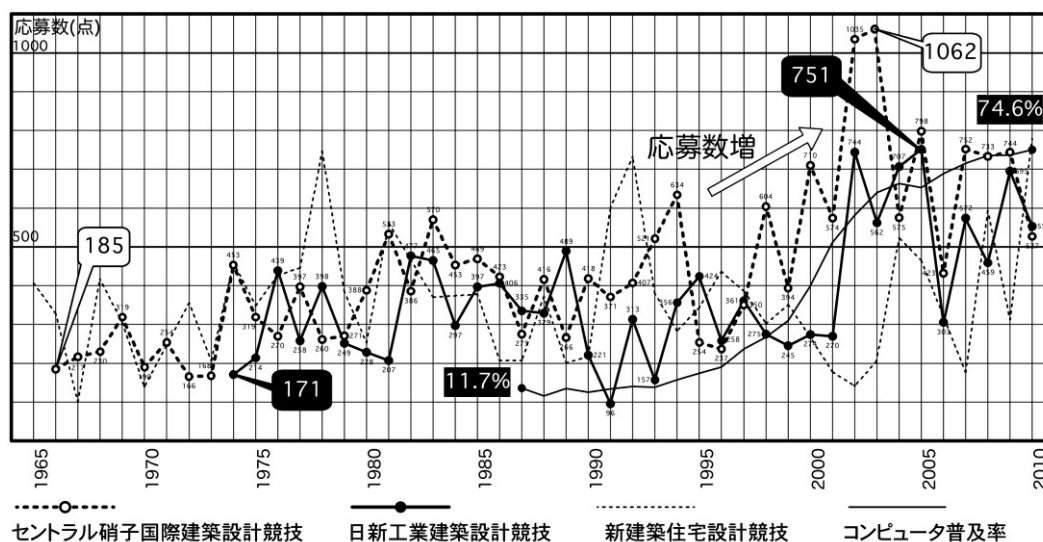
2) 応募数について

30回以上継続して行われているセントラル硝子国際建築設計競技、日新工業建築設計競技、新建築競技における応募数の変遷を調べアイデア・コンペにおける応募数の増減とその背景を論じる。

セントラル硝子国際建築設計競技において競技開始時の1966年に185点であった応募数が1990年代後半より増加し2002年には1000点を超え2003年には6倍弱の1062点に達している。また同様に日新工業建築設計競技においても競技開始時の171点に対し2005年は5倍弱の751点に増加している（表14）。また新建築競技も1965年には407案であった応募数が2010年には779案に増加しているが、新建築競技1967のように応募数が100案に留まるなど応募数が減少する回も存在し、応募者が審査員を選んで応募を判断するワンマン・コンペ特有の現象といえる。第一章、第三節において既述したようにアイデア・コンペにおいて外国人建築家を審査員に迎える、あるいは応募を海外参加者に広く求めるという「国際化」は応募数の増加にも強く影響しており、新建築の海外版として「Ja」が発行され、同誌により新建築競技とセントラル硝子国際建築設計競技入選案が発表されていることも応募数の増加の要因となっていると考えられる。

また応募者の作業環境の変化も応募数の変化と相関があると考えられるが、1987年から2010年までのコンピュータ普及率^{注5)}によると、1993年まで12%前後で推移していたコンピュータ普及率は1994年から増加傾向を示し始め2000年には50%に達し、その後2005年では8割弱の普及率となって現在に至る。コンピュータの普及とCAD利用の浸透が提案者にとって応募しやすい環境となり、応募数が増加したと考えられる。

表14 応募総数の変化とコンピュータ普及率



3) 入選者の内訳 -学生比-

同様に入選者における学生の割合を調べる(表15)。高校、高等専門学校、専門学校、短期大学、大学、大学院、研究生を「学生」と扱い、それ以外を「非学生」、明記されないものを「不明」とする。また複数の構成員による入選において一名でも学生を含むものを「学生」扱いとしている。

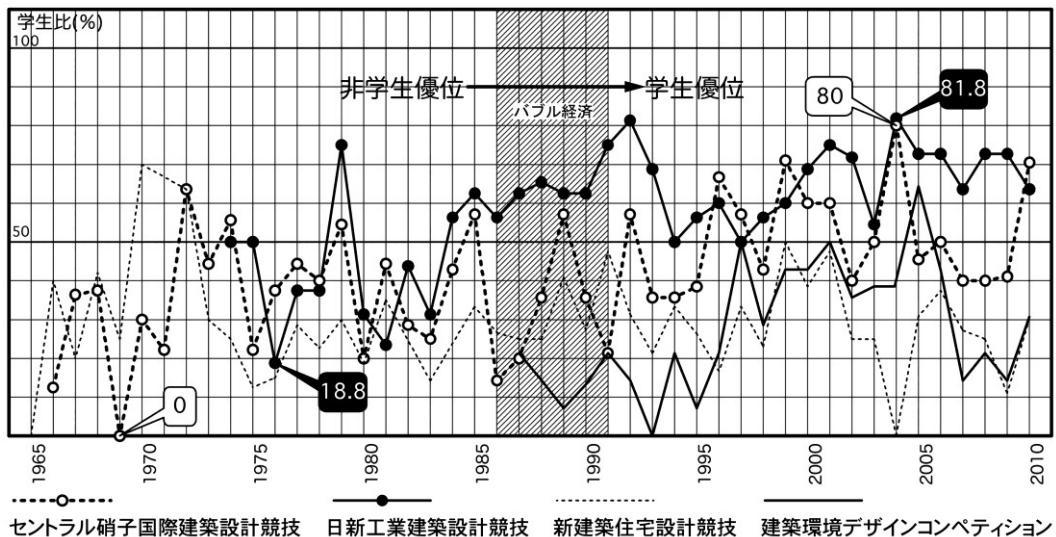
1960年代から1980年代半ばまでは非学生の入選率が優位であり、特に1969年のセントラル硝子建築設計競技においては入選者全てが非学生である。しかし次第に学生比が漸増し2000年代半ばに約8割となっている。以降同様の傾向が見られ長期的にみると学生比が増加傾向にあったと言える。背景として前述したコンピュータの普及により設計ツールとしてのコンピュータに慣れている若年層にとって優位な環境となったことが考えられる。また多数の審査員が講評で推測するように非学生、特に実務設計者のアイデア・コンペへの参加減少が考えられ、新建築競技1987の審査員宮脇檀は住宅特集1988年1月号審査員評で以下のように述べる。

「傾向として学生諸君と施工会社の若手の奮闘ぶりが目立つ。学生さんはそんなことでもやらなくては何でしょうがないのだから当然として、設計事務所の若手諸君はいったいどうしたのか」^{注6)}

このようにバブル経済による好景気を背景に実務設計者が実施設計への時間を優先したと考えられ、景気とアイデア・コンペとの関係性も伺えるが、一方で環境設備等の実務設計者を主な応募対象とした建築環境デザインコンペティションでは学生比が他のアイデア・コンペに比べて低い。しかし1997年以降学生比が増加しており、実務経験者有利な状況下においても学生の優位性が増していることがわかる。

以上本節による提案の分析により 1975 年における非建築的回答という提案表現の大きな変化が確認された。ポスター的なイメージ表現やアイデアが重要な評価対象となり、コンピュータ利用などの応募環境が変化するなかで若年層の応募が増加、非学生や実務設計者の応募が減少し入選者の属性として学生が優位になっていったと考えられる。

表15 入選者における学生比

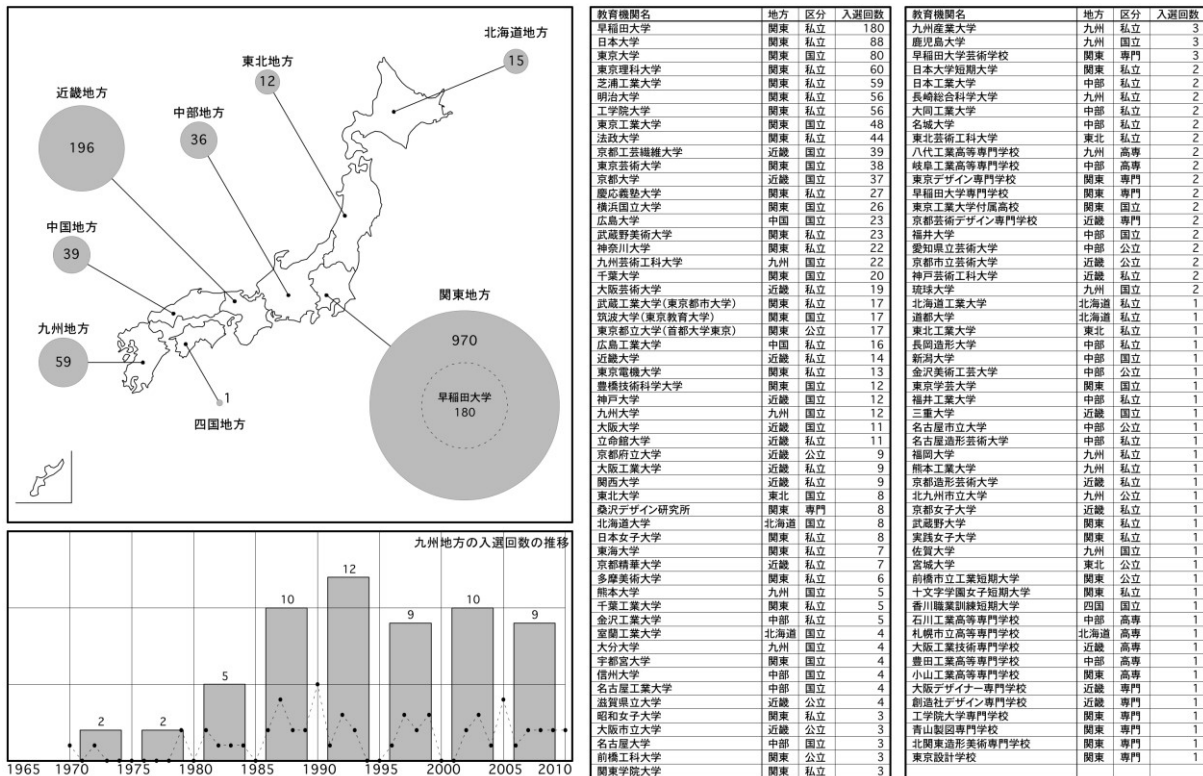


つぎに国内の学生入選者の所属（大学・短期大学・高等専門学校・専門学校）を集計する。入選1案に対し複数応募者が居る場合、同一大学で複数人数でも1回とみなす。応募主体が複数の教育機関で構成される場合にはそれぞれ入選回数に参入する。以上により入選回数を集計すると教育機関別入選数として早稲田大学が多数を占めているが年次的変化も見られる。例えば北海道の国立室蘭工業大学所属学生が一等案となった「第17回日新工業建築設計競技」の審査員講評で審査員大高正人が以下のように述べている。

「今回、一等には北海道、二等には九州と中華人民共和国からであった。全体として新しい世代が登場して、例年のベテランはほかにまわったようである。しかも地方からの入選が多く、地方も東京も情報がひとつになって、発想の地方性は若い世代ではなくなってしまったようである。」^{注7)}

このように関東地方や在京大学の入選者が多数であり地方大学での入選者が少なかった状況に対し、1990年代以降変化が起こっていることが伺える（表16）。在京大学以外では京都大学、京都工芸繊維大学、九州芸術工科大学（現九州大学芸術工学部）の入選が多くなっており、特に九州地方における入選回数の推移（表16）から、1980年代後半から入選回数が増加していることがわかるが、このような入選者の地域分散化は他地域においても見られる。九州地域における増加傾向の背景として熊本県が1988年から進めている建築文化事業である「くまもとアートポリス」があげられ、同時期における入選回数の増加傾向からこの事業による啓蒙的な側面も推察される。

表16 教育機関別入選数



第四節 アイデア・コンペの講評に関する分析

1) 審査員の人数構成

審査員の人数は各アイデア・コンペによって異なるが、開催初回の審査員数が基本となり年次の人数変動はそれほど見られない。ワンマン・コンペは新建築競技（複数審査員の場合もある）、タキロン・国際デザインコンペティションにおいて開催されている。最初の外国人建築家による審査はミサワホームプレハブ住宅国際設計競技である。同競技は1968年から開催されているが1970年開催から「国際」が謳われるようになり、海外からの審査員としてポール・ルドルフをむかえ応募数が約5倍に増加している。最終開催である1973年では国内外の応募数が逆転しており入選者も全13者のうち10者が海外組となっている。特にバブル期に外国人建築家による審査が増えており（表17）、日本国内における外国人建築家の仕事の増加と歩調を合わせたかたちとなっている。新建築競技などワンマン・コンペにおいて外国人建築家が審査員となる傾向がみられるが、新建築競技以外では1993年開催のホクストン建築装飾デザインコンクールを最後に外国人建築家による審査が見られない（表18）。

表 17 審査員の人数と外国人建築家による審査

| 設計競技名 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 00 | 01 | 02 | 03 | 04 | 05 | 06 | 07 | 08 | 09 | 10 |
|----------------------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| C.H.C. マーベルデザインコンペティション | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 4 | 4 | 3 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| NOYASU建築設計競技 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| アドヴァン建築設計競技 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| キャンパスを使用したテンション構造 | | | | | | 7 | 9 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ケータイ空間デザインコンペ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| セントラル橋子国際建築設計競技 | | | | | | 6 | 7 | 7 | 7 | 8 | 8 | 7 | 7 | 7 | 8 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | | | | |
| タイロハウス住宅設計コンペ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 4 | 2 | | | | |
| タキロン国際デザインコンペティション | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 4 | 4 | 4 | | | |
| ナショナル住宅設計競技 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| プレキャスト・パラダイス建築設計競技 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ホクストン建築装飾デザインコンクール | | | | | | | | | | | | | | | | 3 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ミサワホームプレハブ住宅国際設計競技 | | | | | | 6 | 6 | 7 | 8 | 8 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| メンブレンデザインコンペティション | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 横浜アーバンデザイン国際コンペ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 久保田鉄工住宅設計競技 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 橋のイメージ国際設計競技 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 空間デザイン・コンペティション | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 建築環境デザインコンペティション | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 三井ホーム住宅設計競技 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 三州丸栄建築設計競技 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 新建築住宅設計競技 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 3 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 5 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | | | | | | |
| 長谷エイメージデザインコンペティション | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 読売住宅コンクール | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 日新工業建築設計競技 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| SMOKERS' STYLE COMPETITION | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

設計競技横軸は開催年（65～99は1900年代、00～10は2000年代）を示す。表中、濃色は外国人建築家による審査を示す。

表 18 外国人建築家による審査一覧

| 開催年 | 設計競技名 | 審査員 | |
|------|--------------------|----------------------|----------------|
| 1970 | ミサワホームプレハブ住宅国際設計競技 | ポール・ルドルフ | アメリカ 他6名 |
| 1971 | ミサワホームプレハブ住宅国際設計競技 | ジャン・ブルーベ | フランス 他7名 |
| 1973 | ミサワホームプレハブ住宅国際設計競技 | アルフレッド・ロート | スイス 他7名 |
| 1976 | 新建築住宅設計競技 | リチャード・マイヤー | アメリカ ワンマン・コンペ |
| 1977 | 新建築住宅設計競技 | ピーター・クック | イギリス ワンマン・コンペ |
| 1978 | 新建築住宅設計競技 | チャールズ・ムーア | アメリカ ワンマン・コンペ |
| 1979 | 新建築住宅設計競技 | ジェームズ・スターリング | イギリス ワンマン・コンペ |
| 1983 | 新建築住宅設計競技 | チャールズ・コレア、マイケル・グレイブス | インド、アメリカ 他3名 |
| 1986 | 新建築住宅設計競技 | ヘルムート・ヤーン | アメリカ ワンマン・コンペ |
| 1989 | タキロン国際デザインコンペティション | フランク・ゲーリー | アメリカ ワンマン・コンペ |
| 1989 | 新建築住宅設計競技 | バーナード・チュミ | スイス ワンマン・コンペ |
| 1990 | 横浜アーバンデザイン国際コンペ | シー・ユー・チェン、リチャード・ペンダー | 中国、アメリカ 他3名 |
| 1990 | 三井ホーム住宅設計競技 | ロバート・ベンチュリ | アメリカ 他6名 |
| 1991 | 横浜アーバンデザイン国際コンペ | シー・ユー・チェン、バーナード・チュミ | 中国、スイス 他4名 |
| 1991 | 新建築住宅設計競技 | フィリップ・ジョンソン | アメリカ 他1名 |
| 1992 | 新建築住宅設計競技 | レム・コールハース | オランダ ワンマン・コンペ |
| 1993 | ホクストン建築装飾デザインコンクール | トム・ヘネガン | イギリス 他3名 |
| 1993 | 新建築住宅設計競技 | レンゾ・ピアノ | イタリア ワンマン・コンペ |
| 1995 | 新建築住宅設計競技 | ジャン・ヌーヴェル | フランス ワンマン・コンペ |
| 1997 | 新建築住宅設計競技 | ジャック・ヘルツォーグ | スイス ワンマン・コンペ |
| 1999 | 新建築住宅設計競技 | オスカ・ニーマイヤー | ブラジル ワンマン・コンペ |
| 2001 | 新建築住宅設計競技 | ヴィニー・マース | オランダ ワンマン・コンペ |
| 2002 | 新建築住宅設計競技 | ダニエル・リベスキンド | ポーランド ワンマン・コンペ |
| 2004 | 新建築住宅設計競技 | ステイブン・ホール | アメリカ ワンマン・コンペ |
| 2005 | 新建築住宅設計競技 | リチャード・ロジャース | イタリア 他1名 |
| 2008 | 新建築住宅設計競技 | ラファエル・モネオ | スペイン ワンマン・コンペ |

2) 審査員による指摘内容

審査員の講評文には入選案に対する評価や言説とアイデア・コンペ自体に対する開催意義などを述べたものがある。それらの中には選出した案に対する肯定的評価が多く見られる一方、提案あるいは提案者全体に対する否定的評価や指摘事項が散見される。これらの指摘内容には審査員である建築家、建築評論家が抱いた当時の建築教育、建築界さらには社会状況に対する危機感やメッセージの意味も含まれている（表19）。

さらに審査員により指摘される意味内容が近いものをKJ法によりグルーピングすると「表現」「提案内容」など作品に関する指摘、「取組姿勢」として応募者に対する指摘など、以下3つにまとめることができる（表20）。

表 19 指摘内容一覧

| 番号 | 指摘内容 |
|---------|--|
| 1966-01 | はじめてのテーマであり、ガラスの使用方法が臆病になりすぎる、あるいは勇敢になりすぎて当選圏外から逸脱するものも多かった。 |
| 1966-02 | プレゼンテーションがもっと上手になる必要がある。デザインのうまい人はプレゼンテーションもうまい。 |
| 1967-01 | 既存の形式を安易に借用したのや、科学空想的な実現性や経済性をまったく無視したのも見られた。 |
| 1967-02 | デザイン、アイデアは面白いが、磨大板ガラスを上手に生かしているかどうかという点になると疑問である。 |
| 1967-02 | リアリティを欠いたものは落とす。独創性が必要条件ではない。 |
| 1968-01 | 審査員を驚かさずような提案がなかった。 |
| 1971-01 | 頭が先行して技量が追いついていない。アイデアとしては注目すべきだが作品としては未熟なものが多い。 |
| 1973-03 | 発想を求めていたので仕上より発想に時間をかけるべき。図面は間違いだらけでも何処かにひらめきの芽があればと念願していた。 |
| 1975-02 | 与えられた条件を批判することもなく図面化していくのは、日本の建築教育と関わる。建築の知的レベルでは最下位あたりを低迷している。 |
| 1976-01 | 新しいデザインコンセプトをつくりだす格調高いデザインやたくましい発想はみられない。 |
| 1978-01 | 外国勢は課題に対し真正面から取り組んでいるが、日本勢は巧妙であるか身をかかわしている。 |
| 1980-02 | 大部分は、古典的なものの再認識であるか、高度工業化時代のものの繰り返しに見えた。 |
| 1980-03 | 日本の現実をふまえてのリアリティという点では未だしの案が多い。 |
| 1982-01 | 短絡的、技巧に頼りすぎている。 |
| 1982-02 | 図面の仕上の点でも結構素晴らしいものが多かったが、心がそれに伴わない。 |
| 1985-02 | 発想を求める段階のあとの表現、造形への構築力が少ない。 |
| 1985-03 | 屋根の持つ建築的意味、あるいは屋根の将来像、可能性について鋭くついた作品が見当たらなかった。 |
| 1985-04 | 日本人の案と海外からの案の差は、単に図面の密度やテクニックの問題ではなく、ものを見る眼の差であると思われる。 |
| 1986-04 | それ自体がアートといえるような美しいドローイングが数多くあったが、それらは建築ではない。 |
| 1987-04 | あまりに現実的なものは、アイデアコンペとしての夢がなく、かえって評価しにくい。 |
| 1987-05 | 日本側の案は、どこか弱力で力強さが無い。ガムシヤラな表現、一途に書き込むという粘り強さが無い。手抜きをしてはいけない。 |
| 1987-06 | 学生諸君と施工会社の若手の奮闘ぶりが目立つが設計事務所の若手諸君はいったいどうしたのか。 |
| 1988-04 | 現実の技術に固執するだけではなく、また夢のみを追うのでもない。 |
| 1988-05 | イマジネーションの不足。存在する制限なんてどうでもいいや、と思わせるほどの構成力の中にこそ、新しい芽は実を結ぶ。 |
| 1988-07 | 我が国の都市居住者たちの状況認識の甘さには落胆した。旧態然とした建築の牙城に閉じ籠っている大学の建築教育によるものであろうか。 |
| 1989-02 | イメージを明確に表現し得ていない。素晴らしい夢のようなアイデアでありながら実現不可能。 |
| 1989-05 | 日本人の受賞者が見られなかった。日本の建築教育や建築雑誌や珍し物好きなクライアントたちのあまりにも速いレスポンスが原因。 |
| 1989-06 | 抽象的なとらえかたに止まってしまった。建築のコンペであるので形にまで概念を昇華させる。 |
| 1989-08 | デコンストラクションの表現が多かった。しかしその意味するところを十分に把握していない。 |
| 1990-07 | 多くの案に長い文章や数式、プログラムが添えられていた。建築の設計競技なんぞで図による表現が主体であるべき。 |
| 1991-08 | 多様な案を期待したが類型化されていた。内容の突っ込みが欠けたものが目立った。 |
| 1991-09 | 建築的な器用さや、小才が賑やかに走り回っているようなものが多く、もはや都市には要らないというようなものが多かった。 |
| 1992-07 | 具体的な都市や建築についての提案はなかった。 |
| 1993-04 | グラフィカルな図像の勝負に片寄りすぎて、建築ならではのコクのある提案を競うという側面が薄れてきた。 |
| 1993-07 | 大切なのはまずアイデアをもつこと。そして次にそれを建築家の行動に置き換えること。 |
| 1994-04 | 現実の仕事に追われビジョンを描く力を失った。パブルがはじけ、夢を描く気力を失ってしまったのか。 |
| 1994-05 | どんなに優れたデザインとしてまとめられていても、考えられたものにはかなわない。 |
| 1997-03 | CAD技術の進歩で「もっともらしい」絵が簡単になる。コンセプトも、リアリティに対する検討もないままに応募ができ上がってしまう。 |
| 1998-07 | 具体的に取り組みやすい課題に対し、観念的で「耕す」という言葉遊びのような作品が多かった。 |
| 1999-04 | 文章での説明が多い。文章に主力を抱かせるのではなく、明確に意図を伝えるイラストに主役の場を与えてもらいたい。 |
| 1999-07 | 建築の基本を無視したものばかり。ドローイングを軽視し、コンピュータに頼りすぎた作品が多い。 |
| 2000-01 | アイデアに終始しないこと。固定概念への怒りや嘆きからの新しい建築を生み出すエネルギー。 |
| 2000-04 | アイデアも重要だが、表現がわかりやすい点も大切である。 |
| 2001-02 | フィジカルな表現力の低下は大学や教師側に問題がある。コンピュータによる表現に頼るためフリーハンド・ドローイングで表現できない。 |
| 2001-05 | コンピュータの活用が一般化すると、スポーツやゲームのように若いほど強いという傾向が起こるのであろうか。 |
| 2002-01 | 美しいドローイングだがエネルギーを感じられない。物足りない。アイデアだけでは建築は実現不可能。 |
| 2003-01 | 電車自体を図書館とする。都市に拡散吸収される図書館。アイデアのアイデア。 |
| 2004-01 | 他者との軋轢を我が身に受け止めて、その重圧をリアリティとしながら建築的問題に置き換えるような提案は皆無であった。 |
| 2004-04 | あえてオーブエントな課題にしたが、課題をかなり字義どおりに捉えすぎた応募案が多かった。 |
| 2006-02 | たしかにアイデアは重要だが建築をつくるのはそれだけではない。（公開審査で）人を見たいと思った。 |
| 2006-07 | デザインより現象に着目して面白い解釈をするという手法がこの種のコンペに定着した。デザインすることを避ける傾向にあるように思う。 |
| 2007-05 | 日本からの提案は面白くても希薄。一見概念的で洗練されているが総じてパワーは感じない。 |
| 2008-02 | もっと新しい提案があっても良かった。もっと勇気を出して提案して欲しいと思う。 |
| 2008-04 | ほとんど全ての応募案はアイデアのためのアイデアであり、コンペティションのためだけの提案であった。 |
| 2008-05 | 建築を表現するはずなのに、描かれているのはふわふわした空気と人物、そして文字がスローガンとなっている。多くの案が文字に頼りすぎ。 |
| 2010-01 | 日本からの応募案は借り物の都市批判である。切実な思いが無いので抽象的にならざるを得ない。このような抽象性は思考の退廃でしかない。 |

① 表現に対する指摘

応募案、提出物に対して作品としての表現の重要性が説かれているが、一方で表現偏重への傾倒や、本章第三節において確認されたように図面表現の無いポスター的イメージ表現の増加傾向が指摘されている。多くの審査員がアイデア・コンペの主たる応募者である若手設計者、学生に対して当時の流行的表現手法に傾倒する傾向に苦言を呈している。1970年代にはアーキグラムの影響によるコラージュ表現、1990年代半ばにはCADをはじめとしたコンピュータ表現、2000年代には過剰な文章表現に対するの指摘が見られ、建築設計者の行動として図面を描くことが重要であると強調されている。特に新建築競技1973要項では、審査員西澤文隆により文章表現が「不要」であると明記されており、図面を中心として建築表現することが求められている。

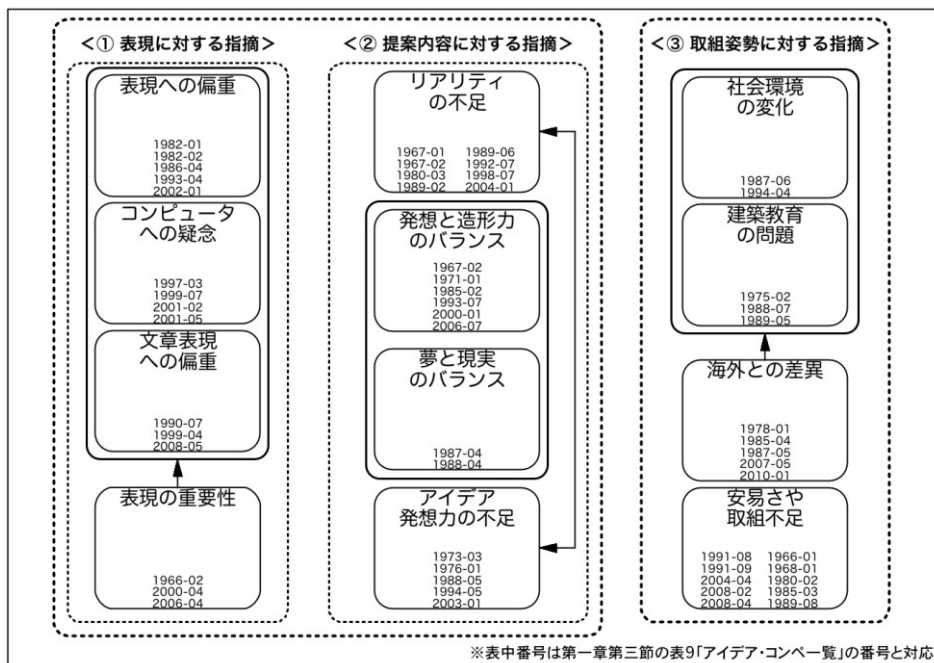
② 提案内容に対する指摘

提案を作成する際のアイデア、イメージーション、考えることの重要性が説かれ、提案者の発想力不足が指摘されている。その一方で発想のみで建築的リアリティの乏しい案が多いことも懸念され、アイデアのためのアイデアやコンペのためだけの提案に留まっていることが指摘されている。提案に対して夢と現実、造形力と具体性のバランスが求められている。

③ 取組姿勢に対する指摘

国内応募者の安易な取組み、借り物の思想、低調な内容に関して警鐘が鳴らされ、対照的に旧ソ連など海外応募者の熱意が賞されている。国内応募者の低調さの原因として、バブル経済期において実務設計者が実務に忙殺され建築創造に対する夢と熱意を失っていること、あるいは大学における建築教育の問題が指摘されている。特に新建築競技 1975 における国内入選者は「0」であり、審査評において与えられた与条件の枠でしか問題解決できない国内応募者に対し批判が展開され、その批判の矛先が日本の建築教育に向けられている^{注8)}。

表 20 指摘内容の分類



3) アイデア・コンペにおける特徴的事象

① 課題をとおした審査員相互の応答

アイデア・コンペの様々な事例の中には審査員と提案者、審査員同士、審査員と読者等様々な主体間で直接間接で対話・応答が行われる事例が見られる。以下に審査員相互により対話・応答が発生する事例として過去に開催された課題内容を異なる審査員が再び採用し同様のアイデア・コンペが開催される事例をあげる。

伊東豊雄は自身が審査した新建築競技1988「メトロポリスにおける快適でくつろいだ住まい」において新建築競技1977（審査員ピーター・クック）と同内容のアイデア・コンペを行っており、その要項で以下のように述べ複数開催の意義を示している。

「このテーマはピーター・クックが新建築住宅設計競技1977の審査員を務めた際に呈示したテーマとまったく同じである。11年の歳月をおいて再び同じ問いかけをすることは極めて興味深く思われる。なぜならば、この間にメトロポリスの住環境は大きく変化したからである。」^{注9)}

またワンマン・コンペを複数回担当する建築家も見られ（表22）、時代相互の比較として同一審査員の言説が見られる。例えば篠原一男は第8回タキロン・国際デザインコンペティション（1996）の講評において

「（前略）それにしても若い世代の技巧のレベルの高さに驚く。私のもうひとつの単独審査、1972年新建築住宅設計競技と隔世の感がある。」^{注10)}

と評しておりアイデア・コンペの表現技術における時代的比較が確認される。

また競技タイトルは異なるが、新建築競技1978「向こう三軒両隣の町屋」も新建築競技1968「6世帯のための住居」と同主旨によって行われている。新建築競技以外のアイデア・コンペでは第32回日新工業建築設計競技（2005年）においても40年前の課題「雨やどりの空間」を採用している（表21）。

表 21 同一課題タイトルのアイデア・コンペ

| 要項発表 | 設計競技名 | 課題タイトル | 審査員 |
|-------|-----------------|------------------------|------------------------------------|
| 1976年 | 日新工業建築設計競技 | ●雨やどりの空間 | 芦原義信、西沢文隆、池原義郎、林昌二、宮脇隆、土橋隆 |
| 1977年 | 新建築住宅設計競技 | ●メトロポリスにおける快適でくつろいだ住まい | ピーター・クック |
| 1988年 | 新建築住宅設計競技 | ●メトロポリスにおける快適でくつろいだ住まい | 伊東豊雄 |
| 1990年 | セントラル硝子国際建築設計競技 | ●ガラスハウス2001 | 伊藤喜三郎、池田武邦、林昌二、黒川紀章、相田武文、石井和祐、鈴木和夫 |
| 1998年 | 空間デザイン・コンペティション | ●ガラス質を使った建築 | 高松伸、赤坂喜頼、平倉直子、西沢健、三浦紀之、戸谷文隆 |
| 1999年 | 空間デザイン・コンペティション | ●ガラス質を使った建築 | 内井昭蔵、淺石優、大江匡、戸谷文隆 |
| 2001年 | セントラル硝子国際建築設計競技 | ●ガラスハウス2001 | 伊東豊雄、内藤徹男、岡村賢、長谷川逸子、山本理顕、隈研吾、山本紀久 |
| 2005年 | 日新工業建築設計競技 | ●雨やどりの空間 | 北川原温、三橋邦博、吉松秀樹、西沢立衛、相澤公豊 |

表 22 ワンマン・コンペ審査員一覧

| 審査員 | 課題タイトル | 競技名 | 開催年 |
|------|---|---|----------------|
| 高松伸 | 都市のつぼ 詩的空間としての建築 | 第7回 タキロン・国際デザインコンペティション | 1995年 |
| | | 新建築住宅設計競技1998 | 1998年 |
| 篠原一男 | 住宅 建築を集中表現する住宅 | 新建築住宅設計競技1972 | 1972年 |
| | | 第8回 タキロン・国際デザインコンペティション | 1996年 |
| 伊東豊雄 | メトロポリスにおける快適でくつろいだ住まい 都市の発光体 ファイナルハウス | 新建築住宅設計競技1988 | 1988年 |
| | | 第2回 タキロン・国際デザインコンペティション 新建築住宅設計競技2000 | 1990年 2000年 |
| 原広司 | 住宅は住むためのエレクトロニクス装置である 都市におけるアトラクターと記号場 | 新建築住宅設計競技1990 第10回 タキロン・国際デザインコンペティション | 1990年 1998年 |
| 妹島和世 | 動かないこと リンクのない家 | 新建築住宅設計競技1996 | 1996年 |
| | | 第11回 タキロン・国際デザインコンペティション | 1999年 |
| 横文彦 | 20世紀博物館の敷地にたつエキシビション・ハウス（展示用住宅） 都市住居 | 新建築住宅設計競技1981 | 1981年 |
| | | 新建築住宅設計競技1994 | 1994年 |

② 獲得した設計論の実践

新建築競技1977で最優秀賞に選ばれた高崎正治案のドローイング中に見られる正方形の対角線とその中心円、それらで構成されるフレームという形式（図8左）は彼の後の実作「ゼロ・コスモロジー」（図8中）においても同一モチーフとして用いられている。自身のホームページに記されているとおり、このアイデア・コンペと審査員ピーター・クックの講評、出会いがその後の建築的思考の基礎となっており以下の様に語られる。

「建築を志した学生時代は（中略）…人間の生き方の問題として独自の理論と形態を構築し、独創性のある作品をつくることに情熱を燃やしてきた。その当時の作品の中でも、特に思い出深いものが2点ある。1点は、学内審査で第1席となり、日本建築学会の卒業制作全国巡回展に出品した「CONFUSION-マニフェスト ブランク」。もう1点は、さらに、その理論を発展的に展開させた「CONFUSION-混線」。この作品は「新建築国際住宅設計競技」において、世界35カ国、応募者446人の中からグランプリ受賞となり、「これは最高の建築であり、私を恐怖させる」と評され世界に紹介された。この受賞を契機として、その時の審査員であったピーター・クック教授との出会いによって私の建築的思考の基礎が作られた。」^{注11)}

また丹下健三自邸である成城の家（図8右）はアイデア・コンペ案をもとに実施されている。設計事務所勤務から大学院に戻りアイデア・コンペに打ち込みはじめた丹下健三が最初に注力したのが住宅の懸賞競技であり、1941年（4月締切）の同潤会、東京日日新聞社、大阪毎日新聞の共催による「国民住居設計図案懸賞」や同1941年（9月締切）の建築学会主催による「国民住宅懸賞設計競技」などに参加している。丹下自邸はその「国民住居」佳作もしくは「国民住宅懸賞設計競技」落選案のいずれかが下敷きとなっており丹下自身が以下のように述べている。

「私はあのとき、二案出したのか、二案つくったんだけど、そのうちどっちか一案出したのか、ちょっといまはわからないんですが、その二案のうち一つは、私が戦後に自分の家として建てた『成城の家』ほとんどそのままじゃないかと思うんです。」^{注12)}

このように自らの紙上建築案が直接的に地上建築案に反映される事例も見られるが、相田武文「題名のない家」（1968SK-1-225）のように紙上建築によって得られた設計論（新建築競技1966 2等案）をもとに実施案が作成される事例も見られ、これらは紙上建築と地上建築の同一性を示す好例といえる^{注13)}。

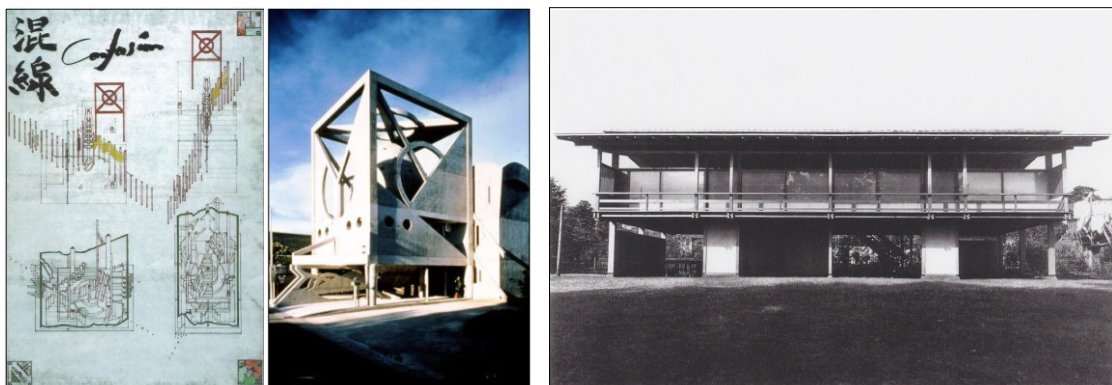


図8 同一設計者によるアイデア・コンペと実作との類似例

③ 作品と課題内容の同時性

新建築競技1976「交差点にたつ住宅」の3等（図9）入選者スティーブン・ホールは、その後の新建築競技2004「多次元住宅」の審査員となる。彼が選出した1等案（図10）は一本の地平線が見える茫洋とした空間に伸びるハイウェイとその上部に架かる橋のような住宅の提案であり、同様に車道の上部に架かる自身の3等入選案に構成上の類似点が見られる。スティーブン・ホールは新建築競技2004審査講評において、オープンエンドな課題設定に対する考えとアイデア・コンペに対しての思考実験の場としての意義を述べている。このように課題設定から審査まで一貫して行われるワンマン・コンペには審査員の趣向が明確に表れる結果も見られる。

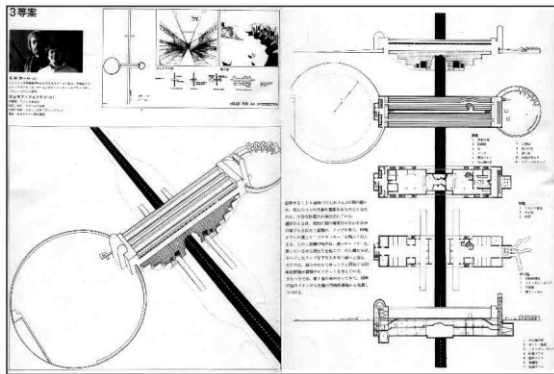


図9 新建築競技 1976 入選案 スティーブン・ホール案

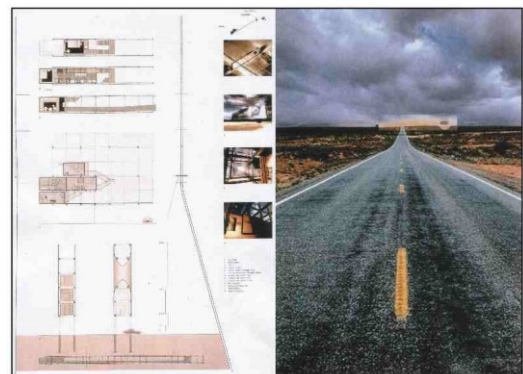


図10 新建築競技 2004 入選案 ジョンソン・リンデ他

また建築デザインの潮流との同時性としてポストモダン期に開催されたホクストン建築装飾デザインコンクールにおいて、入選案の多くに装飾的表現が見られる。これらは提案者とそれらを選出した審査員が当時の建築思潮からの影響を受けている証左とも言える。また2003年に行われた新建築競技2003のタイトルは「建築ウィルス」（図11右）であるが、この競技に先行するかたちで、1997年に行われた第9回タキロン・国際デザインコンペティション1等案に「ウィルスのような建築」という提案がなされている（図11左）。これらは前述のポストモダン期の潮流と同様に審査員・提案者が互いに社会的状況から影響を受ける同時性の事例といえる。

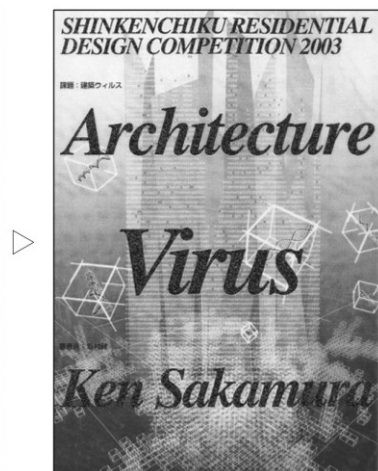
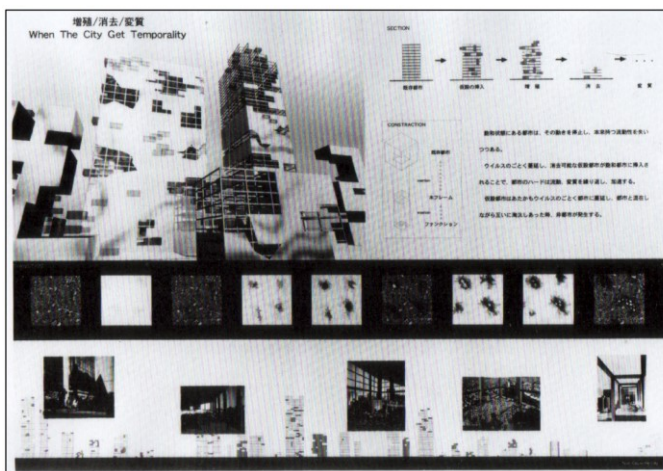


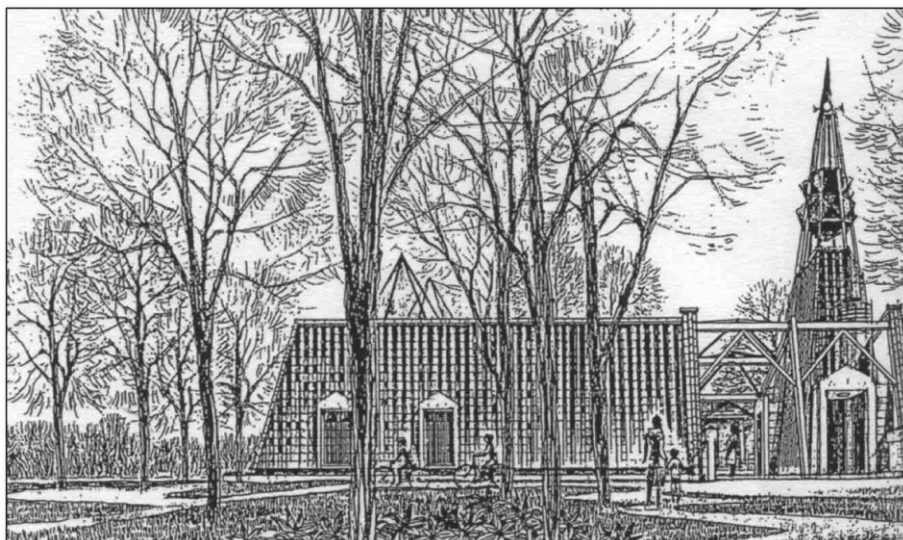
図11 提案と要項の同時代性

④ 建築家によるアイデア・コンペへの取り組み

第2回三州丸栄建築設計競技において1等（図12）となった笹原貞彦は武蔵工業大学（現東京都市大学）教授であったが退官後からアイデア・コンペに積極的に取り組み当該コンペ受賞時の年齢が72歳であった。後年同氏はCOMPE&CONTEST誌においてアイデア・コンペの意義と取り組み姿勢を語っている。

「なりふりかまわずやっていますからね。というか阿修羅の如くにやっていますので、そう感じられるのかもしれない。殴り込みのつもりなんです。批評なく論争なく闘争のない建築界へのね。みんな個性の強い人間同士なんですから、その個性がぶつかりあったら、本当は激しい火花を散らせ、それが心をまた燃え立たせるのではないのでしょうか。（中略）設計競技も登竜門といいますが、ステイタスと仕事の保証の代償として、何か毒気を抜かれて良い子にされてしまいそうな、私は老後が設計競技で楽しめればそれで十分ですけど、若い人たちはもっと真剣だろうと思うのです。彼らの明日と建築の明日のために、建築界に緊張感が漲っている必要があります。微温湯ではなく、熱湯を建築界に噴出する。そんな源泉に設計競技がならないものと期待するのですが。応募するほうでも、審査員の傾向と対策に汲々とするのではなく、あるいは、あの審査員に評価されたから満足だ、なんていったりしないで、その審査員をノックアウトするくらいの闘争心で挑むべきではないでしょうか。ついでながら、そのためにも応募作品は全て作品集で公開され、記録されるべきですね。」^{注14)}

これは晩年期における建築家の取組姿勢を伝える重要なメッセージといえるが、海外の建築家においてもジェイムズ・ワインズやニール・ディナリのように積極的にアイデア・コンペに参加している建築家達も見られる。一方国内建築家では建築史家、建築評論家の伊藤ていじが65才時に第13回日新工業建築設計競技（1987）に佳作入選しているが、継続的に複数案をアイデア・コンペに出し続けたのは笹原貞彦のみである。



笹原貞彦

1914年高知県に生まれ。
1938年武蔵高等工業建築科卒業
土浦亀城建築事務所
堀口捨己建築事務所を経て、
1946年武蔵工業大学の前身、
武蔵工業専門学校助教授となり、
1968年教授、1984年に退任し、
同大学名誉教授となる。
(COMPE&CONTEST 8807)

図 12 第2回三州丸栄建築設計競技一等案

⑤ 非建築的回答をめぐる応答

既述のとおり磯崎新の審査による新建築競技1975の最優秀案であるトム・ヘネガン案は平面図も立面図もなく建築的通念でいう図面表現が全く無い抽象的回答であった(図13)。磯崎新としては図面技術ではなくイデオロギーとしての建築を展開することを評価したのである

「平面図または詳細図を示すようにという規約に違反しているという疑義がでることも予想してみた。(中略) わたし自身の評価基準を示すだけでなく、ひとつの態度決定を明確にしめすことも含めて、これを1等にひきだしたのである。」^{注15)}

上記のように課題に対して「建築図面により表現しない」という回答を行ったこの提案を磯崎新はあえて評価している。このトム・ヘネガンの一等案には雑誌の校正のような写真への書き込みが表現されており、1970年に先行して行われた「都市住宅展」8頁に見られる、展覧会の様子を示す写真をベタ焼きから選択している校正的表現(図14)と類似しており、両者の関連性が伺える。都市住宅展には磯崎新が審査員として参加しており両コンペ間の連続性も伺える。



図13 新建築競技1975 一等案



図14 都市住宅展掲載号と入選作品 (7005. pp8)

また新建築競技1975における国内入選者は「0」であり、審査員磯崎新は与えられた与条件の枠でしか問題解決できない国内提案者に対し批判を展開した。「日本の建築教育の惨状を想う」という講評文とともに批判の矛先は日本の建築教育とそのシステムにまで向けられている。この磯崎新の審査評に対する異論が提案者側から起き、新建築誌読者投稿欄に掲載されたことはアイデア・コンペの歴史のなかで特徴的な出来事である(図15)。しかし以降のアイデア・コンペにおいてこのような異議申し立てが行われるケースは見られない。近年では「第16回メンブレイン・デザイン・コンペ」(2001年)において公開審査中に応募者が反論する機会が設けられるケースも見られるが誌面上での論争は極めて少ない。ピーター・クックは「新建築住宅設計競技1977」の講評のなかで、磯崎新(1975年)、リチャード・マイヤー(1976年)そして自身が審査員となった3回のコンペを以下のように言及している。

「(前略) インターナショナルな”対話”であり抽象的なタイトルのコンペは具体的提案に馴れすぎた提案者へのメッセージであった。(中略) 新建築住宅設計競技の始まりが1975年である。」^{注16)}

このような評価とは逆に新建築競技1975以降の外国人建築家による審査と課題内容に対して否定的評価も見られるなか、磯崎新は新建築競技について以下のように述べる。

「(前略) 新建築コンペがこのところ、何やら逸脱現象を起こし、日本の現況から浮き上がってしまったのは、私が審査をつとめたときから起こり始めた、しかも次々に悪のりした審査員が外国から呼ばれ、彼らが拍車をかけてしまった、(中略) この現象を迷惑千万と見る立場もあろう。しかしパラダイム・シフトは完了しつつあるのだ。あとはこのコンペという鏡に映されたものが、具体的なプログラムによって実現することだが、そんな状況が現れるという予感、注意深く眺め渡して見る人ならば誰もが持っているのである。」^{注17)}

前述のとおり、その後のアイデア・コンペでは敷地条件、状況等を各自が設定する形式のコンペが増え始め、主題も多様化している。また回答に関しても建築的回答のみならず多様化し現在に至る。この意味において1975年がアイデア・コンペにとって転換期の一つとなっているといえる。



図15 審査員と応募者の対話

4) 審査員によるアイデア・コンペへの評価

講評文の中には提案に対する評価ではなくアイデア・コンペ自体への意義や役割などの評価が行われるケースも見られる。新建築競技1989の講評において審査員バーナード・チュミは以下のように語る。

「建築のコンペティションはふたつのカテゴリーに分けることができる。そのひとつは所与の問題を解くことに重きを置くもので、条件や制約は、前もって明確に定められている。解かれるべき問題は、時として機能であることもあるし、技術であることもあるし、経済であることもあるし、敷地の文脈であることもあるし、象徴性的問題であることすらある。しかし、いずれにせよ、建築家は定められた枠の中で問題を解くこと、与えられた諸条件を洗練された総合へまとめあげることが求められる。もうひとつのカテゴリーはこれとちょうど反対で、建築家は、所与の問題を解くことではなく、それを基礎にして問題を拡張し、再構成し、その「解」がまったく新しい思想、究極的に既成の建築の知の限界に挑戦するものとなることを求められる。

『新建築』誌において今回私が提示した「ディスプログラミング」というコンペティションの課題は、明らかに後者に属する。それは最も一般的な意味で”アイデア”コンペティションとして構想されたもので、その意味するところは、今日受け入れられている”プログラム”に疑問を投げかけることにあった。コンペ参加者は、この問題の探求を求められていたのである。」^{注18)}

このようにアイデア・コンペは以下の2つに大別される^{注19)}。

問題解決型の課題

問題解決型は所与の問題を解くことに重きをおく課題形式である。この課題形式は初動期に顕著に見られ設計条件が設定され具体的な住宅による回答が求められている。新建築競技1977審査員のピーター・クックが講評で述べているように^{注20)}1974年までの新建築競技は具体的な問題とその解決による回答を求める内容が多い。

問題拡張型の課題

問題拡張型は所与の問題を解くだけでなく、それを基礎にして応募者が問題を作成、拡張、再構築し新しい思想に挑戦する課題形式である。前述同様ピーター・クックは講評のなかで、抽象的課題へと変更する新建築競技の転換期が1975年であると言及している。このような課題設定に対し新建築競技1979審査員のジェームズ・スターリングが過剰な抽象的課題への批判を展開するが、前掲の本章第二節における要項の分析で確認されたように1980年以降のアイデア・コンペでは敷地条件、状況等を各自が設定する形式の課題が増え始め、主題も多様化していく。また本章第三節において確認されたように提案も多様化し現在に至っている。

以上講評における審査員の言説から、提案表現、提案内容に対する様々な指摘が確認された。特に1970年代半ばから日本の建築教育に対する批判が展開されており、この時期にアイデア・コンペにおける課題形式が具体的な問題解決型から抽象的な問題拡張型へと移行したことが確認された。

問題解決型から問題提起型への転換

これまで述べてきたように、アイデア・コンペの初動期では課題に設計条件が付され、かつ具体的な提案を求める「問題解決型」の内容が多かった。新建築競技においてもその傾向は顕著に見られ1965年から1969年までの課題では規模等の設計条件を有する具体的な住宅による回答が求められている。担当する審査員も同競技の前身である新建築懸賞の審査員である清家清(1965)、西山卯三(1967)、吉村順三(1968)、吉阪隆正(1969)が継続して行い、設計条件を有しており所要図面等の作品体裁を含めて新建築懸賞の延長上にあつたといえる(表23)。

後に新建築競技1977の審査員であるP・クックが講評中で新建築懸賞に関して以下のように述べている。

「(前略)…過去2回のコンペにおいて、磯崎新とリチャード・マイヤーによって確立されたとは私は思う。磯崎は、自分のプログラムにおいて、一連の初期のコンペに顕われたプラグマティズムとソリディティから訣別し、授賞に際し、建築教育に対し、強烈(非常にタイムリーであつた)な一撃を与えた。」^{注21)}

このように1974年までの新建築競技はプラグマティズム、実用主義的であり具体的な建築物を求める問題とその回答としての内容が多く、「課題-質疑-提案-講評-座談会」という審査員と提案者の対話・応答型式により具体性が担保されるアイデア・コンペであり、かつワンマン・コンペであつたが、新建築競技1975「わがスーパースターたちのいえ」(審査員磯崎新)を最後に、質疑応答と座談会は行われていない。

テーマも1947年から1974年までは「12坪…」「不燃…」(新建築懸賞)「サラリーマン…」「大都市に住む…」(新建築競技)など社会的要求としての住宅供給が主たる目的であり、住み手として「国民」が強く意識されていた。それに対し磯崎新による課題テーマは社会的多数とは別の主体である「スーパースター」のための住宅である。各自が与えられたスーパースターのリストに従って住み手を選択するという、応募者の自由度が高くハーフメイド的な課題となっている。その後1970年代半ば以降、次第にアイデア・コンペに設計条件が設けられないようになり、かつ主題としても建築物単体の設計ではなく抽象的な回答を求める傾向が見られ始める。

表 23 新建築懸賞と新建築競技の審査員

| 要項発表 | 設計競技名 | 設計条件 | 審査員 |
|-------|--------------------------|---------|-------------------------|
| 1947年 | 12坪木造国民住宅(一戸建)懸賞 | 新建築懸賞 有 | 清家清 吉村順三 吉阪隆正 池邊陽 伊藤喜三郎 |
| 1948年 | 新住宅懸賞 | 有 | 清家清 吉阪隆正 池邊陽 伊藤喜三郎 中村登一 |
| 1948年 | 15坪木造国民住宅(一戸建)懸賞 | 有 | 清家清 吉阪隆正 池邊陽 伊藤喜三郎 中村登一 |
| 1948年 | 一戸建木造標準住宅懸賞-整理整頓の合理化- | 有 | 清家清 吉阪隆正 池邊陽 伊藤喜三郎 中村登一 |
| 1949年 | 第5回懸賞住宅設計競技 | 有 | 清家清 吉阪隆正 池邊陽 伊藤喜三郎 中村登一 |
| 1952年 | 懸賞競技設計「現代の住宅」 | 有 | 清家清 池邊陽 山口文象 明石信道 |
| 1958年 | 小住宅懸賞競技設計 | 有 | 西山卯三 清水一 谷口吉郎 |
| 1965年 | サラリーマンのための住宅 | 新建築競技 有 | 清家清 |
| 1966年 | 大都市に住む市民のための住宅 | 有 | 丹下健三 |
| 1967年 | 高密度社会の都市住居 | 有 | 西山卯三 |
| 1968年 | 6世帯のための住居 | 有 | 吉村順三 |
| 1969年 | 大学村の教授の住宅 | 有 | 吉阪隆正 |
| 1970年 | <生の生産>の器としての<いえ>はどうあるべきか | 有 | 川添登 菊竹清訓 横文彦 |
| 1972年 | 住宅 | 無 | 篠原一男 |
| 1973年 | 人間が自然と共存して住まいを得る集住体を設計せよ | 有 | 西澤文隆 |
| 1974年 | 都市の低層集合住宅を設計せよ | 有 | 芦原義信 |
| 1975年 | わがスーパースターたちのいえ | 有 | 磯崎新 |
| 1975年 | 交差点にたつ家 | 無 | R・マイヤー |
| 1975年 | メトロポリスにおける快適でくつろいだ住まい | 無 | P・クック |

第五節 要約

本研究ではアイデア・コンペの“要項-提案-講評”に着目し、要項における課題文章の変化(第二節)、提案内容の変遷(第三節)、講評における指摘点等(第四節)を分析した。以下に本研究で得られた基礎的知見を記す。

知見の一つは1970～1973年に見られる「所要図面の変化と主題の変様」である。要項の所要図面に“平面図が要求されない”という大きな変化が1970年に見られる。その後1973年には所要図面が提案者の自由設定となり現在に至る。このような所要図面における自由度の高まりとともに、次第に建築的テーマが中心であった課題内容が変化し、1970年代半ばに都市的テーマが見られ始め、1980年代に増加する。その後1990年代に入り環境的テーマ、社会的テーマ、概念的テーマが増えるなど、テーマが多様化していく。

二つ目の知見は1975年に見られる「非建築的回答の出現と提案の多様化」である。要項における所要図面の自由設定と主題の変様は、提案内容と作品のレイアウトに自由度を与える契機になったと考えられる。これらの変化に即応した新建築競技1975の最上位案は図面によらないポスター的なイメージ表現でありアイデア・コンペの提案における大きな変化といえる。以降、具体的な建築物によらない非建築的回答が増加し、2000年代には建築物以外の装置、道具、器具等を用いるプロダクティブな提案が見られるなど提案内容が複雑多様化していく。提案表現の自由度が高まる一方で審査員により図面表現の重要性が問われている。

三つ目の知見は1975～1979年に見られる「問題解決型から問題拡張型への課題形式の変化」である。設計条件が設定され具体的な所与の問題を解く問題解決型の課題形式は、審査員による建築教育批判とともに1970年代半ばから課題の意味的内容を具体的な課題ではなく抽象的課題へと変化させていく。以降1980年代に入り、課題文章においても設計条件やビルディングタイプを設定しない抽象的回答を求める傾向が強まり、敷地条件、状況等を各自が設定し、提案者が問題を作成、拡張、再構築する問題拡張型へと移行していく。

これらの要項における変化、提案における変化、課題形式の変化は独存する事象ではなく相互に関連しながら起こる変化であり、それぞれ1970年代に起こった変化という同時性が確認される。上記の知見をもとに1970年代をアイデア・コンペの転換期と定義する。初動期のアイデア・コンペは所与の問題を解く問題解決型の課題が主であったが、1970, 73年に起こった要項の変化は提案表現の自由度を拡大した。この変化に即応した新建築競技1975の最上位案は図面表現によらないイメージ表現であり、以降の非建築的提案の増加を誘導していく。その後、設計条件やビルディングタイプ等を各自設定し、提案者が問題を作成、拡張する問題拡張型へと変化していく。以上のように1965年から2010年までのアイデア・コンペの流れを俯瞰すると初期段階である1970年代がアイデア・コンペの意味的内容が大きく変化する転換期となっていると推察される。

参考資料として以上の知見や結論、その他考察された内容を踏まえアイデア・コンペを以下の4期に分け表にまとめる(表24)。

□1965～1969年 アイデア・コンペの初動期

セントラル硝子建築設計競技、新建築競技、ミサワホームプレハブ住宅設計競技が主たる開催であった時期。設計条件とビルディングタイプが付与された問題解決型の課題とその回答が多く見られる。

□1970～1979年 アイデア・コンペの転換期

1970年に入り要項中における所要図面の変化が見られ始める。新建築競技1975の最上位案は図面による提案を行わない最初期の非建築的回答でもあった。それまでの技術偏重の建築教育への批判が展開され、課題内容も具体的な問題解決型から抽象的な問題拡張型に移行するなど、アイデア・コンペにおける転換期でもあった。

□1980～1995年 アイデア・コンペの乱立期

1980年代からコンペ数が増加傾向となるが、バブル経済期を背景として企業主体のアイデア・コンペなど開催数が増加する。

□1996～2010年 主題と提案の多様化

バブル経済期後、建築行為に対する反省を踏まえた環境的主題が見られ始め、主題も提案もさらに多様化する。1995年の阪神淡路大震災、オウム真理教事件、引き続き2001年の世界同時多発テロにより、災害時の仮設的な空間、プロダクト的提案、ケータイ利用のデバイス提案など非建築的回答も多くなる。

表 24 アイデア・コンペ年表



注

- 注1) 北川らの研究により新建築誌に掲載された住宅コンペ（新建築懸賞）のプランタイプ分析がある。
- 注2) 川喜田二郎によるデータ整理の手法。本研究で要項文や講評文を短文抽出の後カード化し、複数人によるグルーピング作業を複数回行った。
- 注3) 「新建築1975年12月号」新建築社, 1975, pp. 171-174の中で「平面図または詳細図を示すようにという規約に違反しているという疑義がでることも予想してみた。…わたし自身の評価基準を示すだけでなく、ひとつの態度決定を明確にしめすことも含めて、これを1等にひきだしたのである。」と記述されている。
- 注4) この背景には先立って1970年に行われた「都市住宅展」が関係していると考えられる。審査側の思惑としての両コンペの課題の連続性も見られる。提案に関しても雑誌の校正として写真の選択を表現しているトム・ヘネガン案と「都市住宅展」の展覧会の様子を示す写真をベタ焼きから選択している校正的表現のように両者の類似性、関連が伺える。
- 注5) コンピュータ普及率：総務省情報通信政策局「通信利用動向調査報告書世帯編」
- 注6) 「新建築住宅特集1988年1月号」新建築社, 1988, pp. 43-45の中で審査員の宮脇檀が国内実務設計者の入選数が低調であることに対し「設計事務所の若手諸君はいったいどうしたのか」と記述している。
- 注7) 「新建築1991年1月号 第17回日新工業建築設計競技入選発表」新建築社, 1991, pp389
- 注8) 「新建築1975年12月号」新建築社, 1975, pp. 171-176審査評において審査員磯崎新と相田武文が、与えられた条件を図面化するだけの日本の建築教育を批判している。この評を受けて翌年同誌、2月号と3月号の読者投稿欄において複数の国内応募者から異議申立てがなされている。また文献18)、pp. 187の中で審査員安藤忠雄は「磯崎新氏が審査にあたったコンペから丁度10年、当時磯崎氏が嘆いた日本の建築状況はずいぶん変化したように見えて、実のところ、さほど変わっていないのかもしれない。」と記述している。
- 注9) 「新建築1988年3月号」新建築社, 1988, pp143、新建築住宅設計競技1988応募規定
- 注10) 「新建築1997年3月号」新建築社, 1997, pp283、タキロン・国際デザインコンペティション結果発表
- 注11) 高崎正治氏ホームページより
- 注12) 藤森照信「丹下健三」新建築社, 2002, pp76
- 注13) 「新建築1968年1月号」新建築社, 1968, pp125において自身の新建築2等案と実施案における設計の系譜が記されている。
- 注14) 「COMPE&CONTEST 8807・06」GALLERY・MA, 1988, pp35、COMPETITORにおいて「阿修羅の如く…笹原貞彦氏74歳の頑張り」として第3回三州丸栄建築設計競技応募作品とともに紹介されている。
- 注15) 「新建築1975年12月号」新建築社, 1975, pp171「審査評 日本の建築教育の惨状を想う」
- 注16) 「新建築1977年12月号」新建築社, 1977, pp130「審査講評」
- 注17) 「新建築1978年12月号」新建築社, 1978, pp268「それは鏡であった ここ数年の<新建築コンペ>を総括して」
- 注18) 「新建築1990年1月号」新建築社, 1990, pp224「審査講評」
- 注19) 「新建築1990年1月号」新建築社, 1990, pp. 224-226の中で二つのカテゴリーについて述べられている。
- 注20) 新建築競技1965の清家清、同1967の西山卯三、同1968の吉村順三、同1969の吉阪隆正はいずれも新建築懸賞の審査を行っている。1947年から1974年までは「12坪…」「不燃…」（新建築懸賞）「サラリーマン…」「大都市に住む…」（新建築競技）などがテーマとなっている。
- 注21) 「新建築1997年12月号」新建築社, 1997, pp. 130の中でP・クックは「磯崎（新建築競技1975審査）は自分のプログラムに

において、一連のコンペに顕われたプラグマティズムとソリディティから訣別し、授賞に際し、建築教育に対し、強烈な一撃を与えた」と記述している。また「新建築1997年12月号」新建築社, 1977, pp. 130の中でP・クックは新建築競技について「過去2回のコンペにおいて、磯崎新（1975）とR・マイヤー（1976）によって確立された」と記述している

図版出典

- 図 1 『新建築 1965 年 11 月号』新建築社、1965. 11、pp. 180
- 図 2 『新建築 1978 年 1 月号』新建築社、1978. 1、pp. 130
- 図 3 『新建築 1966 年 5 月号』新建築社、1966. 5、pp. 235
- 図 4 『新建築 1980 年 11 月号』新建築社、1980. 11、pp. 272
- 図 5 『新建築 2001 年 12 月号』新建築社、2001. 12、pp. 216
- 図 6 『新建築 1992 年 3 月号』新建築社、1992. 3、pp. 304
- 図 7 左 『新建築 1975 年 12 月号』新建築社、1975. 12、pp. 144
- 図 7 中 『新建築 1975 年 12 月号』新建築社、1975. 12、pp. 159
- 図 7 右 『新建築 1975 年 12 月号』新建築社、1975. 12、pp. 160
- 図 8 左 『新建築 1977 年 12 月号』新建築社、1977. 12、pp. 136
- 図 8 中 『新建築住宅特集 1989 年 2 月号』新建築社、1989. 3、pp. 122
- 図 8 右 『丹下健三』藤森照信、新建築社、pp. 194
- 図 9 『新建築 1976 年 11 月号』新建築社、1976. 11、pp. 164
- 図 10 『新建築 2004 年 12 月号』新建築社、2004. 12、pp. 56
- 図 11 左 『新建築 1997 年 3 月号』新建築社、1997. 3、pp. 256
- 図 11 右 『新建築 2003 年 3 月号』新建築社、2003. 3、pp. 28
- 図 12 『絵本・建築浪人』笹原貞彦、武蔵工業大学建築学科同窓会、1994. 3、pp. 44
- 図 13 『新建築 1975 年 12 月号』新建築社、1975. 12、pp. 144
- 図 14 『都市住宅 7005』鹿島研究所出版会、1970. 5、pp. 8
- 図 15 左 『新建築 1975 年 12 月号』新建築社、1975. 12、pp. 171
- 図 15 中 『新建築 1975 年 12 月号』新建築社、1975. 12、pp. 175
- 図 15 右 『新建築 1976 年 2 月号』新建築社、1976. 2、pp. 280
- 表 24-図① 『新建築 1975 年 12 月号』新建築社、1975. 12、pp. 143
- 表 24-図② 『新建築 1999 年 12 月号』新建築社、1999. 12、pp. 236
- 表 24-図③ 『新建築 2001 年 12 月号』新建築社、2001. 12、pp. 216
- 表 24-図④ 『新建築 1947 年 4 月号』新建築社、1947. 4、pp. 3
- 表 24-図⑤ 『新建築 1988 年 2 月号』新建築社、1988. 2、pp. 306
- 表 24-図⑥ 『都市住宅 7005』鹿島研究所出版会、1970. 5、pp. 7
- 表 24-図⑦ 『新建築 1957 年 3 月号』新建築社、1957. 3、pp. 1

第三章

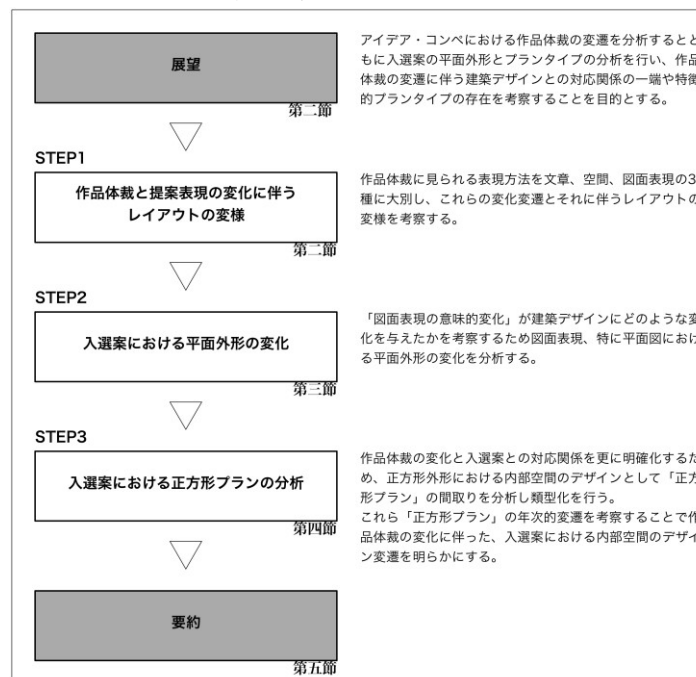
新建築コンペにおける作品体裁と平面タイプの変化

| | |
|-----------------------------------|----|
| 第一節 展望..... | 64 |
| 第二節 作品体裁と提案表現の変化に伴うレイアウトの変様..... | 65 |
| 1) 文章表現の変遷..... | 66 |
| 2) 空間表現の変遷..... | 68 |
| 3) 図面表現の変遷..... | 69 |
| 4) レイアウトの変様..... | 70 |
| 第三節 入選案における平面外形の変化..... | 71 |
| 1) 分棟型の配置計画に関する分析..... | 72 |
| 2) 一棟型の平面外形と図形要素に関する分析..... | 73 |
| 第四節 入選案における正方形プランの分析..... | 75 |
| 1) 入選案における平面図、方位記号の有無..... | 75 |
| 2) 実験的回答モデルとしての「正方形プラン」の出現傾向..... | 77 |
| 3) 正方形プランの分類..... | 78 |
| 4) 正方形プランのデザイン変遷..... | 80 |
| 第五節 要約..... | 83 |

第一節 展望

第一章、第二章ではアイデア・コンペの実実施動向、提案内容の潮流を探るため対象期間を1965～2010年までとし、その間において新建築に掲載されたアイデア・コンペを対象に分析を進め1970年代、特に新建築コンペという特徴的競技においてアイデア・コンペの転換期が確認された。本章ではこの新建築コンペにおける事象を詳細に分析するために要項における作品体裁の変遷を分析するとともに入選案の平面外形とプランタイプの分析を行い、作品体裁の変遷に伴う建築デザインとの対応関係の一端や特徴的プランタイプの存在を考察する。アイデア・コンペにおける意匠論的分析を行うため特定の競技を対象とし要項に記載される作品体裁に着目し、それらの変遷を把握するとともに入選作品における変化を分析する。対象競技として1947～2010年までの長期間に渡り開催され、住宅に絞って提案を求めた「新建築コンペ」を扱う。新建築コンペとは新建築懸賞(1947～58)と新建築競技(1965～2010)の総称であり競技数50,入選案707を対象とする。最初に対象期間における新建築コンペの作品体裁を分析し、課題設定者がどのような表現を要求し応募者がどのような表現を媒介として課題に対する応答を行っていたかを明らかにする(表1)。分析の視点として、新建築コンペにおける作品体裁の変化を把握するとともに、それらの変化が入選案における建築デザインにどのような影響を与えたかという一端を図面表現、特に継続的に要求されている平面図を分析し、平面外形とプランタイプの変化・兆候・特徴的事例により提示するという客観性を一義とする。特に年次的デザインの変遷を比較するために類似形状と認められる平面外形である「正方形外形」及び「正方形プラン」に着目し、これらの図面を入選案から抽出し内部空間のモデル化を行い、間仕切り壁の位置や空間の捉え方によりプランタイプを分析した。研究の成果として作品体裁の年次的変化と提案表現における変遷との対応関係を把握できるとともに、アイデア・コンペにおける特徴的な平面タイプやそれらのデザイン面における変化を明確化することが期待される。

表1 第三章研究のながれ



第二節 作品体裁と提案表現の変化に伴うレイアウトの変様

アイデア・コンペの要項には課題文章とは別に、どのような諸元で作品を提出すべきかを周知するために「作品体裁」が明記される。これらには提出用紙の紙質や大きさに関する規定以外に表現方法が記載されており、これにより応募者は所定の用紙に過不足なく図面等を配置し作品を応募することになる。ここでは作品体裁に見られる表現方法を以下の3種に大別している(図1)。本節では新建築コンペにおける作品体裁の変遷と下記3種の各表現の特徴的事象やレイアウトに見られる関係性を探る。

① 文章表現

設計意図を説明する設計主旨などの文字による情報。作品タイトルや設計意図を表す短文もこれに含める。また設計意図を伝えるための文字情報や短文を伴い表現されるイメージ図、グラフ等の図版、構成図、概念図、ダイアグラム、動線図、漫画のコマのような表現等も文章表現とみなす。

② 空間表現

内観透視図、外観透視図、パース、投影図、アクソメトリック、アイソメトリック、コンピュータグラフィックスなどの擬似的な立体表現。あるいは模型など立体物を対象とした写真表現もこれに含める。

③ 図面表現

配置図(位置図)、平面図、立面図、断面図など建築を表現する基本的な図面のほか、提案部分を限定して表現する計画図、室内のみに限定表現する展開図、建築の細部を表現する詳細図や矩計図、建築以外のエレメント等を表現する家具図、木造軸組における構造図など様々な建築の「図面」による表現。

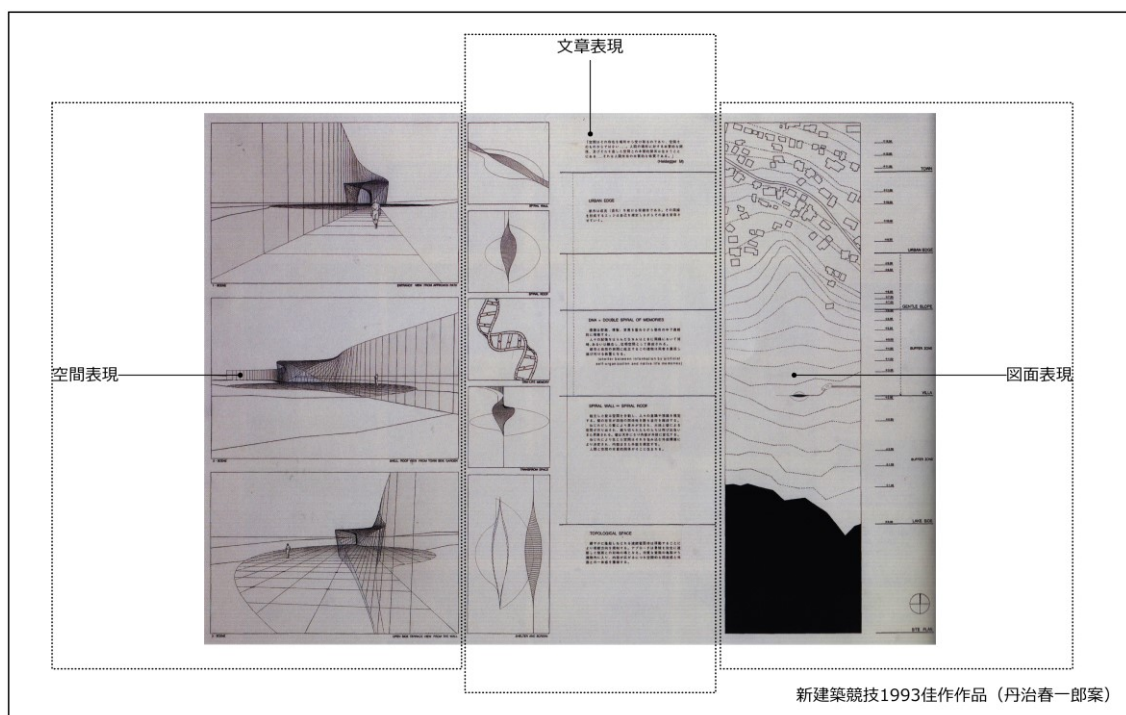


図1 提案表現事例

1) 文章表現の変遷

主な「文章表現」として設計主旨を示す説明文があるが、1947～58 年開催の新建築懸賞において継続的に要求されている(表 3)。

各回とも別紙原稿用紙に所定の文字数により提出を求める形式が見られる。つまり「図面表現」と「空間表現」が提出用紙に一体としてレイアウトされる一方で「文章表現」は別要素であり、あくまで別紙の補足的役割として扱われていたといえる。その後の新建築競技 2007 ではこの 3 種の表現は同一の提出用紙内にレイアウトされる規定となり不可分な表現要素として扱われている。また用いられる言語として新建築競技 2008 からは英語表記を基本としている。この背景として外国人審査員による競技の実施と海外からの応募数の増加などが考えられる。

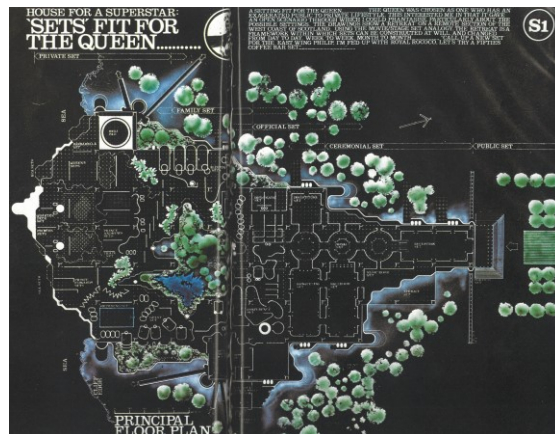
設計主旨以外の文章表現として、新建築競技において作品タイトルが提出用紙中に表現される形式も見られる^{注1)}。作品タイトルとは応募者が自身の作品を象徴する単語や広告のボディコピーのような短文を掲げ、提出用紙中にレタリングなどにより表現されたものを指す(図 2)。ただし提案者独自の意図が含まれず、設計競技の課題名をそのまま掲げたものを作品タイトルから除外する。新建築懸賞では作品タイトルが見られず、続く新建築競技 1965 までは応募者が独自に付した作品タイトルは見られない。審査員が設定した課題タイトルをそのまま用紙に転記する形式は 1970 年代までの作品に散見されるが、新建築競技 1972 において初めて作品タイトルが付される提案が 1 案のみ確認される。この新建築懸賞と初期の新建築競技は図面表現が作品体裁の主たる表現要素であった。特に新建築競技 1973 においては文章表現自体が“禁止”されており^{注2)}、図面表現が審査員にとっての中心的評価要素であったことを裏付ける。その後、新建築競技 1975 において文章表現として多くの作品タイトルが確認される。この競技の課題は提案者が、あらかじめ提示されたリストから居住者を選ぶという特殊な形式である。多くの入選作品中に「どの人物のための住宅であるか」を記すためにタイトルが用いられており、図面表現を用いないポスター的な提案表現が見られる。入選作品の中に審査員に宛てた手紙形式の文章が長文で掲載されている案が幾つか見られることから文章表現への傾倒が伺える。

以降、新建築コンペにおいて作品タイトルが次第に定着していき、新建築競技 2004 入選 12 案中の 9 案に作品タイトルが付され、新建築競技 2008 の入選案全数から作品タイトルが確認される(表 2)。

表 2 新建築コンペにおける作品タイトル(戸建住宅課題)

| | | | | | | | | | | | | | | |
|---------|----------|----------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 1947-01 | 1948A-01 | 1948B-01 | 1949-01 | 1952-01 | 1958-01 | 1965-01 | 1972-01 | 1975-01 | 1979-01 | 1980-01 | 1981-01 | 1983-01 | 2004-01 | 2008-01 |
| 1947-02 | 1948A-02 | 1948B-02 | 1949-02 | 1952-02 | 1958-02 | 1965-02 | 1972-02 | 1975-02 | 1979-02 | 1980-02 | 1981-02 | 1983-02 | 2004-02 | 2008-02 |
| 1947-03 | 1948A-03 | 1948B-03 | 1949-03 | 1952-03 | 1958-03 | 1965-03 | 1972-03 | 1975-03 | 1979-03 | 1980-03 | 1981-03 | 1983-03 | 2004-03 | 2008-03 |
| 1947-04 | 1948A-04 | 1948B-04 | 1949-04 | 1952-04 | 1958-04 | 1965-04 | 1972-04 | 1975-04 | 1979-04 | 1980-04 | 1981-04 | 1983-04 | 2004-04 | 2008-04 |
| 1947-05 | 1948A-05 | 1948B-05 | 1949-05 | 1952-05 | 1958-05 | 1965-05 | 1972-05 | 1975-05 | 1979-05 | 1980-05 | 1981-05 | 1983-05 | 2004-05 | 2008-05 |
| 1947-06 | 1948A-06 | 1948B-06 | 1949-06 | 1952-06 | 1958-06 | 1965-06 | 1972-06 | 1975-06 | 1979-06 | 1980-06 | 1981-06 | 1983-06 | 2004-06 | 2008-06 |
| 1947-07 | 1948A-07 | 1948B-07 | 1949-07 | 1952-07 | 1958-07 | 1965-07 | 1972-07 | 1975-07 | 1979-07 | 1980-07 | 1981-07 | 1983-07 | 2004-07 | 2008-07 |
| 1947-08 | 1948A-08 | 1948B-08 | 1949-08 | 1952-08 | 1958-08 | 1965-08 | 1972-08 | 1975-08 | 1979-08 | 1980-08 | 1981-08 | 1983-08 | 2004-08 | 2008-08 |
| 1947-09 | 1948A-09 | 1948B-09 | 1949-09 | 1952-09 | | 1965-09 | 1972-09 | 1979-09 | 1980-09 | 1981-09 | 1983-09 | 2004-09 | | |
| 1947-10 | 1948A-10 | 1948B-10 | 1949-10 | 1952-10 | | | 1972-10 | 1979-10 | 1980-10 | 1981-10 | 1983-10 | 2004-10 | | |
| 1947-11 | 1948A-11 | 1948B-11 | 1949-11 | | | | 1972-11 | 1979-11 | 1980-11 | 1981-11 | 1983-11 | 2004-11 | | |
| 1947-12 | 1948A-12 | 1948B-12 | 1949-12 | | | | | 1979-12 | 1980-12 | 1981-12 | 1983-12 | 2004-12 | | |
| | 1948A-13 | 1948B-13 | 1949-13 | | | | | 1979-13 | 1980-13 | 1981-13 | | | | |
| | 1948A-14 | 1948B-14 | 1949-14 | | | | | 1979-14 | 1980-14 | 1981-14 | | | | |
| | 1948A-15 | 1948B-15 | 1949-15 | | | | | 1979-15 | 1980-15 | 1981-15 | | | | |
| | 1948A-16 | 1948B-16 | | | | | | 1979-16 | 1980-16 | 1981-16 | | | | |
| | 1948A-17 | 1948B-17 | | | | | | 1979-17 | | 1981-17 | | | | |
| | 1948A-18 | 1948B-18 | | | | | | 1979-18 | | 1981-18 | | | | |
| | | 1948B-19 | | | | | | 1979-19 | | 1981-19 | | | | |
| | | 1948B-20 | | | | | | 1979-20 | | 1981-20 | | | | |
| | | 1948B-21 | | | | | | | | | | | | |
| | | 1948B-22 | | | | | | | | | | | | |
| | | 1948B-23 | | | | | | | | | | | | |
| | | 1948B-24 | | | | | | | | | | | | |

図 2 タイトル事例(新建築競技 1975)



第二章で明らかになったように、アイデア・コンペの開催初期は、面積規模や敷地形状などの設計条件が付された競技が多く、設計課題を解くという「問題解決型」の課題内容が中心であった。つまり提案者が自らの作品にタイトルを用意する必要はなく、あらかじめ課題設定者によって決定されており「設計課題＝作品タイトル」であったと捉えることができる。その後、アイデア・コンペの転換期を経て設計条件が減少し、応募者の解釈により課題を拡張し、自身で問題を作成する意味合いが強い「問題拡張型」に移行した。これらのアイデア・コンペの作品タイトルは自身の設定した問題の「見出し」として付されていると考えられる。また作品タイトルは近年の提出作品数の増加を背景として瞬時に理解され、審査員の印象に残るための「キャッチ」としても機能していると推測される。こういった近年の傾向を受けてアイデア・コンペの審査員による講評文中には、図面表現より文章表現が多くなっていることが指摘されている。例えば新建築競技2008の審査員ラファエル・モネオは審査講評において以下のように述べる。

「建築を表現するはずなのに、描かれているのは辺りに漂うふわふわとした空気、そして唯一視線を捉える人物像であり、しかもその人物がいるはずの建築に関しては説明も説得力ある描写も皆無である。これらのレンダリングには、似合いのパートナーである文字が趣旨伝達手段として添えられ、スローガンとなって完結する。そして多くの応募案が、図面や模型にはいっさい示されない趣旨をこれらのスローガンに託している。」^{注3)}

作品タイトルの有無の変遷からも提案者が文章表現、文字情報を重視している傾向が伺える。特に図面では表現不可能な「状況」を説明するために図式化した概念図やそれらへの説明文、物語のような文章を掲載する例が散見される。この概念図は新建築懸賞1948Bの提案中に既に見られる(図3)。要項の所要図面から、この入選案には図面表現が存在すると推測されるが主催側の編集により図表のみの掲載となっていると思われる。このように機能図や説明文が重視される傾向は新建築コンペ初期段階でも確認されるが、新建築競技1987の要項で初めて「概念図」という文言で要求されており、近年作品中で多く見られる「ダイアグラム」と「文章表現」という組み合わせが一般化する契機となっていたと考えられる。

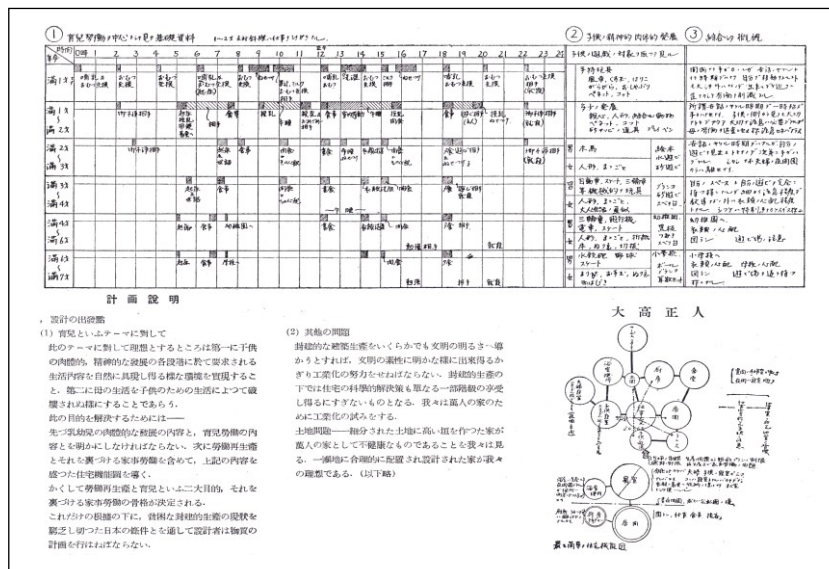


図3 初期のダイアグラム (1948B 佳作C席)

2) 空間表現の変遷

一方「空間表現」では新建築懸賞の作品体裁において透視図が求められているが、内観外観それぞれに描画サイズが指定されている場合が見られ(表3)、各競技とも概略として横30cm×縦10~15cm程度であった。

また透視図以外の空間表現に関して新建築競技1968において透視図にかわるものとして「模型写真」という文言が初めて要項文中に見られるが、模型表現自体は新建築懸賞1952の佳作案(1952-11)において先行して見られ白黒写真で掲載されている(図4)。透視図や模型以外の空間表現として特殊な形式ではあるが新建築競技1970において「アイソメトリック」の提示が「ISOME(30度,60度)」として義務づけられており、質疑応答によりその描画方法も新建築誌中において提示されており新建築コンペにおける空間表現の多様化の端緒となっていると考えられる。この後、新建築競技1977の作品体裁以降、空間表現の事例として「アクソメトリック」が継続して表記されている。

また新建築競技1965では透視図への着彩が認められるが新建築懸賞の作品体裁では着彩の文言は見られない。これらは新建築誌のカラー化を背景として提案表現の幅が広がったものと推測される。新建築誌では1958年の建築作品発表において初めて単色オフセット印刷がなされているが、新建築コンペにおけるカラー表現は新建築競技1965において初めて確認される。また透視図、模型、アクソメ、アイソメ以外の空間表現としてコンピュータグラフィックスが1987年開催の第1回建築環境デザインコンペ1等案において初見される(図5)。

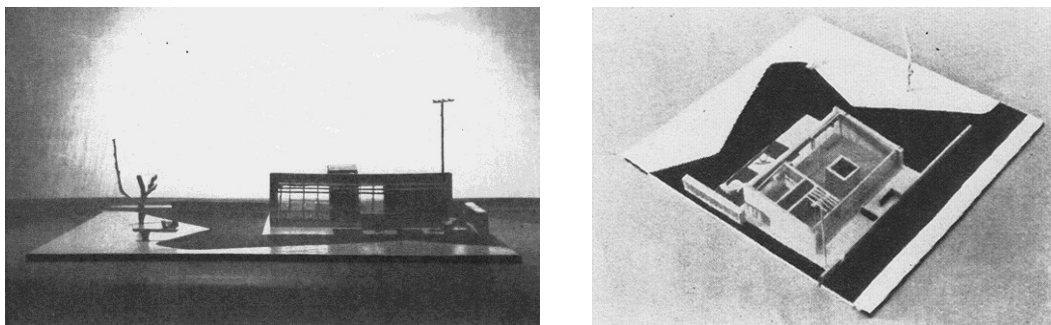


図4 新建築懸賞1952佳作案における模型表現



図5 初期のコンピュータグラフィックス(第1回建築環境デザインコンペ1等案)

3) 図面表現の変遷

次に「図面表現」の変遷を読み解く(表3)。1947~58年にかけて開催された新建築懸賞では必ず平面図が求められているが、その縮尺率は提案者の任意設定ではなく明確に縮尺率が指定されている。また1947~48年までに開催された4回の新建築懸賞では立面図および断面図が要求されておらず、詳細図又は構造図などを適宜描くように指定されている。このことから新建築懸賞においてはいわゆる「間取り」が重要な情報であり、その図面表現として平面図が一貫して指定されていたことがわかる。さらに設計対象が小規模な個人住宅であり、かつ平屋建てであったことも立面図や断面図より平面図を重視する背景となっていたと推測される。また新建築懸賞では詳細図が求められる競技が見られるが、新建築競技において1972年開催競技で縮尺率1/10の詳細図と家具図が要求されている。入選案にはこれら要求図面に対する回答図面が見られないものも多く、以降の新建築競技では詳細図が求められることが無かった。

「図面表現」において、作品体裁に対する大きな変化が認められる最初の競技は新建築競技1970であり、現在に至るまで唯一平面図が要求されていない競技である^{註4)}。この競技において作品体裁として記載されているのは図面表現として「配置図1/500」、そして前述のとおり空間表現として「ISOME(30度, 60度)」の2種のみである。これは縮尺率が設定された新建築懸賞に引き続く従来の間取り重視あるいは図面表現中心の提案表現から配置計画や場所性の重視、空間表現への広がりを持つ端緒と捉えることが可能である。この新建築競技1970を唯一の例外として他の競技では平面図が求められているが、それらの縮尺率は1972年(1/50)と1987年(1/50または1/48)に開催された競技を除いて提案者の任意による設定である。以降作品体裁は次第に内容を固定化し、1973年から所要図面を指定せず提案者の選択に委ねる「配置図、平面図、立面図、断面図、その他設計意図を説明するのに必要と思われる図面を各自選択して描くこと。縮尺は自由」という作品体裁となった。

表3 作品体裁

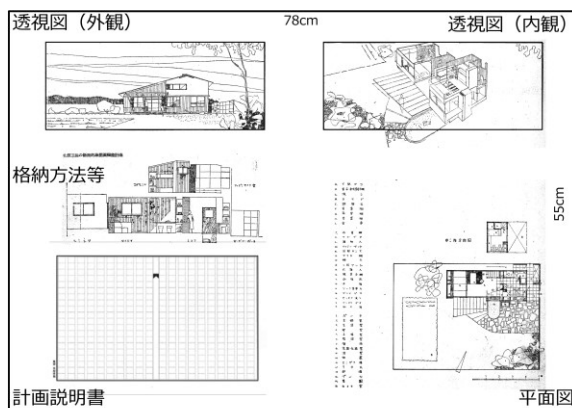
| 開催年 | 図面表現 | | | | | | | | 空間表現 | | 文章表現(説明図含) | | 指定用紙 |
|-------|---------|-----|-----|----------------|----------------|---------------|-------------------|-----|---------------------|-------------------------|-------------------|---------------|--------------|
| | 位置図 | 配置図 | 計画図 | 平面図 | 立面図 | 断面図 | 展開図 | 家具図 | 詳細図、その他 | 透視図 | 説明文 | 概念図、図版 | |
| 1947 | | | | 1/100 | | | | | 詳細図又は構造図 透視図の大きさに描く | 外観 9.6×4.0寸 室内 9.6×4.0寸 | 400字程度 | 概念図、図版 | 適宜大きさの白紙 |
| 1948A | | | | 1/100 | | | | | 特に考慮する部分 透視図の大きさに描く | 外観 9.6×4.0寸 室内 9.6×4.0寸 | 1000字程度 | 透視図を透視図の方法で表示 | 適宜大きさの白紙 |
| 1948B | | | | 1/100(1/100程度) | | | | | 特に考慮する部分 透視図の大きさに描く | 外観 30×12cm 室内 30×12cm | 1000字程度 透視図用紙を用いて | | 適宜大きさの白紙 |
| 1949A | | | | 1/100 | | | | | 透視図を透視図の方法で表示 | 室内+外観及び中心の透視 | 1000字程度 透視図用紙を用いて | | 西大工字の白紙 |
| 1949B | | | | 1/500 | 1/200(半紙)1/100 | 1/100 4面 | 1/100 2面 1/200 透視 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 外観 横30cm縦10~15cm 室内 透視 | 1000字程度 透視図用紙を用いて | | 78×55cm(中紙) |
| 1952 | | | | 1/200(半紙) | 1/50 | 1/100 4面 | 1/200 透視 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 外観 縦横を外した室内透視 | 400字程度用紙1枚 | | B2 1.77×2.4尺 |
| 1958 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 400字程度用紙1枚 | | 55×80cm(青写真) |
| 1965 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 400字程度用紙1枚 | | |
| 1966 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 400字程度用紙1枚 | | |
| 1967 | 1/50000 | | | 縮尺随意 | 基本部分の計画図 縮尺随意 | 住戸部分の計画図 縮尺随意 | | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 1968 | | | | 平面と兼ねる | 縮尺随意 | | | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 1969 | | | | 1/500 | 1/100 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 1970 | | | | 1/500(半紙)半紙 | 1/500 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 1972 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 1973 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 1974 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 1975 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 1976 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 1977 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 1978 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 1979 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 1980 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 1981 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 1982 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 1983 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 1984 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 1985 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 1986 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 1987 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 1988 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 1989 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 1990 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 1991 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 1992 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 1993 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 1994 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 1995 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 1996 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 1997 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 1998 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 1999 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 2000 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 2001 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 2002 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 2003 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 2004 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 2005 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 2006 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 2007 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 2008 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 2009 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |
| 2010 | | | | 1/500 | 1/50 | 1/100 | 1/100 4面 | | 透視図を透視図の方法で表示 | 透視図 | 4000字以内 B5版原稿用紙使用 | 機能構成模式図 縮尺随意 | A1用紙2枚以内 |

4) レイアウトの変様

前述のように新建築競技1965～69までは戦後復興期に行われた新建築懸賞の作品体裁が継承され、文章・空間・図面表現を各々個別に設定し、それらにより提出用紙の大きさが指定されていた(表3右)。提出用紙サイズについて1948Bまでは「適宜大きさの白紙」となっているがその後は中版サイズ、A1用紙1～4枚と変更が繰り返され、1970年にA1用紙2枚という形式がほぼ固定化されている。以降新建築競技の最終回である2010年にA2用紙横位置1枚という大きな変更が見られる。このように要項における提出用紙サイズと各表現には関連性が伺えるが、レイアウトの実証として新建築懸賞1949Aの要項に従い入選案(1949A-05)の掲載図面、透視図などを再レイアウトを試みる(図6)。その結果、縮尺率を持つ平面図とサイズ規定のある透視図や計画説明書によって提出用紙の全面が占められ、レイアウトの自由度が制限されていることがわかる。

一方、新建築競技1970におけるアイソメ要求とA1用紙2枚という用紙指定はその後の提案表現の多様化への契機となっており、前述した新建築競技1973における作品体裁の自由度の高まりが文章・空間・図面表現を自由に選択し総合的にレイアウトする作品の出現を誘導している。事例として新建築競技1988入選案(図7)において、図面、アクソメ、文章が用紙一枚に総合的にレイアウトされている。このように各表現を任意に組み合わせる総合的な作品体裁がポスター的提案表現を促したものと推測される。そして最初期の兆候が新建築競技1975に見られ、これら提案表現におけるレイアウトの変様は筆者前研究^{註5)}における「アイデア・コンペの転換期」と一致する。

本節のまとめとして、作品体裁の変化に伴い、応募者の表現行動が図面だけではなくイメージを表出した図やイラストあるいは模型写真等の空間表現や文章表現へと広がりを持ち、自由に選択しレイアウトされたことが推測される。また継続的に平面図が求められており図面表現の重要性が持続される一方で、文章・空間・図面表現が提案表現として総合的に扱われるというレイアウトにおける年次的変様から「図面表現の意味的变化」の存在も推察される。



一戸建 建築延面積50㎡ 敷地300㎡以内
 平面図(庭園を含む) 1/100
 透視図(室内と外観及び、その他適宜説明所のもの)を適宜の大きさに描く事
 計画説明書は、必ず原稿用紙を用い、1000字以内のこと
 説明書は、後日割がせるよう図面の一部に軽く貼付けまたは、縫い付けること。
 図面は、78cm×55cm(中版)の大きさの白紙一枚に仕上げる事
 仕上げは全て墨一色仕上げとする。彩色及び薄墨を使用しないこと(全て凸版印刷できること)

1949-A入選案 小平隆雄

図6 新建築懸賞 1949A 入選案再レイアウト

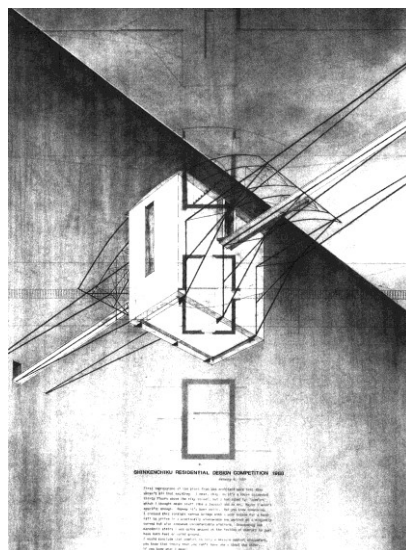


図7 新建築競技 1988 入選案レイアウト

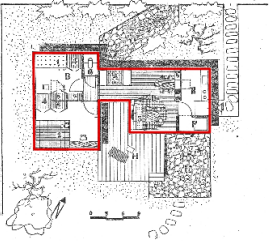
第三節 入選案における平面外形の変化

前節の分析により作品体裁の変遷とレイアウトにおける自由度の高まりから「図面表現の意味的变化」が推察された。本節ではこれら「図面表現の意味的变化」が具体的な建築デザインにどのような影響を与えたかを考察するため図面表現、特に平面図における平面外形の変化を分析する。入選案の発表号から平面図等、外形が確認される情報を抽出し各々の入選作品分析シート（図8）を作成した後、平面外形を読み解き以下分類により分析を行う。

- 計画棟数による分類 「分棟型」 ……複数の建築物で構成される提案。
「一棟型」 ……単数の建築物で構成される提案。
- 配置計画による分類 「直交座標配置」 ……複数の建築物が直交グリッドに従って配置される提案
「非直交座標配置」 ……複数の建築物が直交グリッドに従わず配置される提案
- 平面外形による分類 「単一図形」 ……建築物が単一の図形要素で形成される提案
「集合図形」 ……建築物が複数の図形要素の集合として形成される提案
- 図形要素 「矩形」「歪形」「円形」「その他」

ここで扱う平面図は、2階以上の上階を有する場合には地上最下階である1階平面図を分析の対象とするが、最下階がピロティ等もしくは駐車スペースや倉庫のみの非居室で構成され、居室を有さない場合にはその上階を扱う。また図面表現が確認されないもののパース等の空間表現により外形を読み取ることが可能な場合には、目視により上記分類を行っている（図8右）。

| | |
|-----|------------------|
| 発表号 | 1547-01 |
| 発表名 | 12階外通風換気導（一戸建）提案 |
| 発表者 | 藤原 隆 |
| 発表年 | 2009 |
| 発表号 | 1547-01 |
| 発表名 | 12階外通風換気導（一戸建）提案 |
| 発表者 | 藤原 隆 |
| 発表年 | 2009 |



| 大衆的 | スタイル | 単 | 複 | 「集合図形」 | 「単一図形」 | 「矩形」 | 「歪形」 | 「円形」 | 「その他」 |
|-----|--------|--------------------------|-------------------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|
| 計画 | 分棟型 | <input type="checkbox"/> | <input checked="" type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| 配置 | 直交座標配置 | <input type="checkbox"/> | <input checked="" type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| 外形 | 単一図形 | <input type="checkbox"/> | <input checked="" type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| 要素 | 矩形 | <input type="checkbox"/> | <input checked="" type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |

| | |
|-----|-----------|
| 発表号 | 2000-04 |
| 発表名 | ファミリア・ハウス |
| 発表者 | 伊藤 隆 |
| 発表年 | 2000 |
| 発表号 | 2000-04 |
| 発表名 | ファミリア・ハウス |
| 発表者 | 伊藤 隆 |
| 発表年 | 2000 |



| 大衆的 | スタイル | 単 | 複 | 「集合図形」 | 「単一図形」 | 「矩形」 | 「歪形」 | 「円形」 | 「その他」 |
|-----|--------|--------------------------|-------------------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|
| 計画 | 分棟型 | <input type="checkbox"/> | <input checked="" type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| 配置 | 直交座標配置 | <input type="checkbox"/> | <input checked="" type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| 外形 | 単一図形 | <input type="checkbox"/> | <input checked="" type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| 要素 | 矩形 | <input type="checkbox"/> | <input checked="" type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |

図8 入選作品分析シート（左：利建築器具、右：利建築院）

1) 分棟型の配置計画に関する分析

最初に平面外形が複数の建築物で構成される分棟型であるか、単数による一棟型であるかを分類する。ただし複数の平面外形が渡り廊下や屋根などで軽微に接続している提案や集合住宅など同一形状が分散配置される計画も分棟型に含めるものとする。また平面図など外形を特定する情報が無い提案や掲載される作品の判読が困難である提案を除いた 642 案を分析対象とする。これらを分析すると一棟型が 380 案見られるのに対して分棟型は 262 案であり一棟型の優位性が確認される。一棟型と分棟型の出現変遷について新建築懸賞から新建築競技 1965 までは一棟型が入選作品の多数を占めている。

新建築競技 1966～70 では一棟型の提案が見られず分棟型優位であるが、住宅供給を背景とした都市提案や集落、集合住宅をテーマとした課題設定が原因であると考えられる。引き続き 1980 年代半ばまで分棟型の入選作品が複数確認されるが、これらは筆者前研究^{注6)}において明らかになったアイデア・コンペにおける「建築的主題」から「都市的テーマ」への変化の時期と対応している。このような分棟型優位の時代的傾向は日本建築学会設計競技入選案にも見られ、別競技の提案における建築デザインの同時性も認められる^{注7)}。

さらに分棟型の配置計画として「直交座標配置」「非直交座標配置」に分類を行う。「直交座標配置」は直交するグリッド状の座標系において建築物が配置されており、一方「非直交座標配置」は直交しない複数の軸線に従って配置されるか、あるいは基準線によらない自由な配置による提案である(図9)。1960年代後半に見られる分棟型の提案は様々な形態の建築単位が軸線等の基準線や規則性、ルールを下敷きとして配置された群を形成している提案であり、新建築競技 1969 を除いて優位性を示している。新建築競技 1978 では入選案の全数 22 案が直交座標配置となっているが、この競技では提案を含めた周囲の計画棟数と形状が設計条件として決められた例外的内容である。

対して新建築競技 1989 の入選案に見られる分棟型の提案の多くは直交しない複数の軸線に従う形で分散配置される多軸型提案のピークとなっている。設計条件が無くデザインの自由度が高まるなかで、任意設定による複数の軸線を手がかりとして配置計画した提案が増加したと推測される。これらの建蔽率は極めて低く「低密度な分棟型」となっているが、一方で 2000 年代には限定された空間内に、ユニット的な平面形を持つ単一形態をグリッドや軸線等のルールに従わず集合配置する「高密度な分棟型」の提案も見られる。

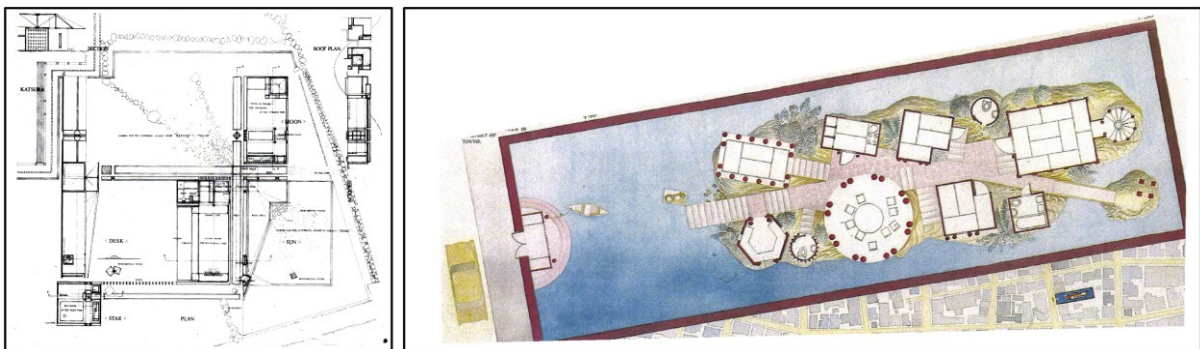


図9 分棟型における差異(左:新建築 1980 二等案,赤坂喜頭他案 右:新建築 1987 二等案,セルゲイ・バルキン他案)

2) 一棟型の平面外形と図形要素に関する分析

次に一棟型の平面形状を以下の二つに分類する。

① 単一図形

建築物を包含する単一の図形で表現される平面外形。一部分が余白として欠けているタイプや、出窓など部分的に余剰として張り出しているタイプをこれに含める。

② 集合図形

建築物の平面外形が矩形、歪形、円形など複数の図形の集合により形成されているタイプ。

対象期間における一棟型 380 案の平面外形を分析すると単一図形が 188 案、集合図形が 192 案とほぼ同数見られるが、新建築懸賞と初期の新建築競技においては矩形による集合図形が多く見られる。一方で単一図形の矩形外形は対象期間を通して継続的に見られるが、これらの矩形外形の扁平の度合いとしてアスペクト比^{注 8)}を分析すると南側に居間などの公室を配する「東西方向長手外形」が新建築懸賞において優位であり、アスペクト比の平均値は 2.03、最大値は 3.13 である。しかし 1970 年代から次第に東西方向長手外形が減少し、1998 年以降確認されないことがわかる(表 4 右)。さらに方向性を有する矩形外形でありながら方位記号を確認できない提案も多く見られ、新建築懸賞入選案に見られた「方位」という設計方針の優位性が年次的に後退していることがわかる。1980 年代以降、高い扁平率の矩形外形も幾つか見られるが、これら高アスペクト比の矩形外形は強い方向性を有していながらも方位についての記号記述を確認することができない。これらの提案は図形として「線」であること自体を志向しており日照条件などを考慮した諸室配置の意図を有していない。これら方位記号の無い図面表現には、方位の優位性を減じ方向性を有しないという点において「図面表現の意味的变化」を含んでいる。この変化に対応する特徴的平面外形としてアスペクト比が「1.0」である「正方形外形」があげられ、1970 年代以降複数出現していく。また、矩形以外の図形要素として台形や三角形などの「歪形」や提案の一部あるいは全体に曲線形状を持つ非矩形単一の提案が新建築競技 1972 において見られるが、数的に多数を占めてはいない。以下、前述の分棟型を含め入選案の平面外形を 6 種に類型化する。

I 一棟型(矩形単一)

II 一棟型(非矩形単一)

III 一棟型(矩形集合)

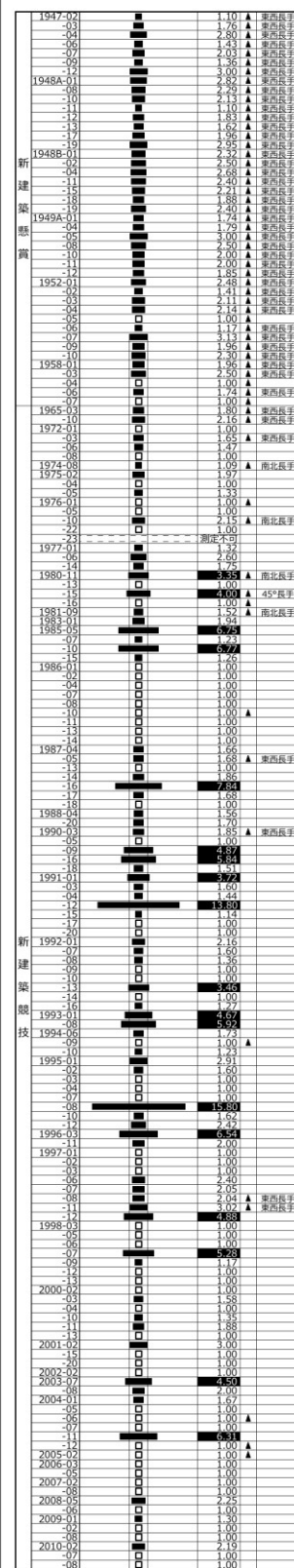
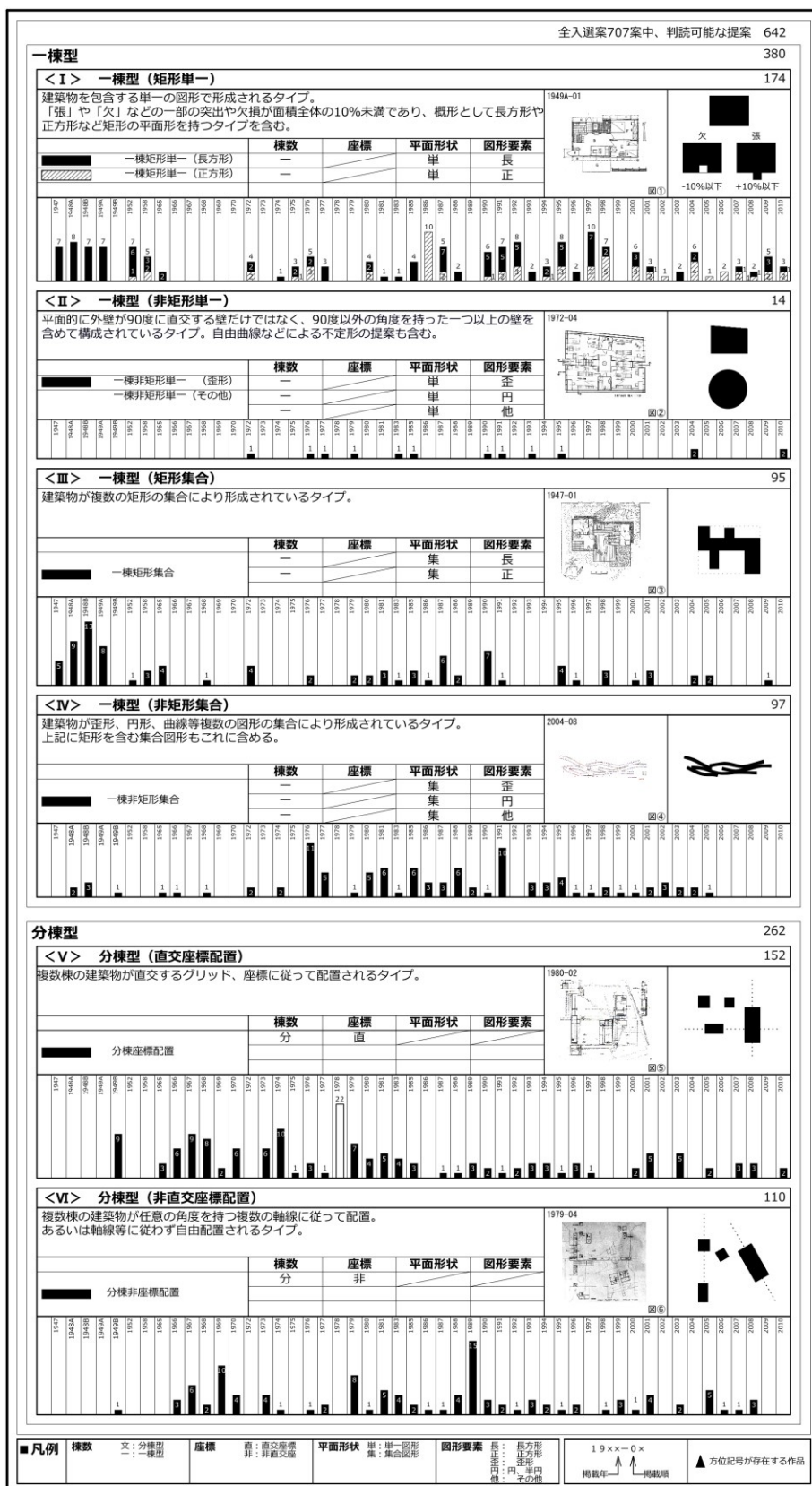
IV 一棟型(非矩形集合)

V 分棟型(直交座標配置)

VI 分棟型(非直交座標配置)

本節のまとめとして入選案における平面外形の類型を分析すると一棟型(I~IV)と分棟型(V, VI)は同数程度見られるが、一棟型において矩形単一が多数を占めている(表 4 左)。入選案の平面外形に多数の矩形外形が確認されるが、1970 年代以降、東西方向長手外形が減少し方向性を持たない図形化した「正方形外形」が増加している。このように入選案における平面外形を分析することで、方位の優位性が減じるという「図面表現の意味的变化」の一端が明らかになった。

表4 入選案における平面外形の種類



第四節 入選案における正方形プランの分析

前節において「図面表現の意味的变化」の応答として入選案における特徴的外形である「正方形外形」が相当数見られることが確認された。入選案には正方形以外の平面外形も多く含まれているが本節では作品体裁の変化と入選案との対応関係を明確化するため、正方形という限定的な外形および内部空間のデザインとして平面図を分析し類型化を行うこととする。これらにより「正方形プラン」の年次的変遷を考察することで作品体裁の変化に伴った入選案における内部空間のデザイン変遷の一端を明らかにする。またこれらの「正方形」が入選案に出現する原因として、新建築競技1976審査員のリチャード・マイヤーが所属する建築家グループ、ニューヨーク・ファイブなどからの影響。同じくニューヨーク・ファイブのジョン・ヘイダックによる「ナイン・スクエア・グリッド・デザイン・プロブレム」をベースとして設定された新建築競技2008「Four Square House Design Problem」(審査員ラファエル・モネオ)のような正方形誘導課題が挙げられる。さらに立方体誘導課題として新建築競技1986「300/300/300」(審査員ヘルムート・ヤーン)により誘導的に正方形外形による提案が出現していることも伺える。このように正方形出現の原因は当時の建築デザイン潮流、現代美術による影響などアイデア・コンペ以外の多方面による遠因も考えられる。しかし序論の研究目的に既述したとおり本論文では、あくまで新建築コンペという限定的競技と正方形プランという限定的平面外形における意匠変遷を分析することにより従前未着手であったアイデア・コンペ研究に対して、今後の研究展開を示す特徴的デザインを正方形の中に見出すものとする。

1) 入選案における平面図、方位記号の有無

前節により平面図において、東西方向長手外形の減少と矩形外形におけるアスペクト比の低下、そして正方形外形の増加など、アイデア・コンペ入選案における方位の優位性が減じていることが推察されたが、本節ではアイデア・コンペの入選案全数における平面図の有無、そして方位記号の有無を詳細に分析する(表5)。

新建築懸賞と初期(1965~69)の新建築競技の作品体裁では、図面表現として平面図が継続的に要求されており入選案のほぼ全数に平面図が掲載されている。例外として新建築懸賞1948 A, Bの各々1案において平面図が確認できないが、作品体裁における所要図面の記述から平面図が要求され入選案として表現されていることが推測される。その後の新建築競技1970において平面図が確認できない作品が2案見られるが、所要図面として平面図ではなくアイソメが要求されており要項の作品体裁に従った応答の結果ともいえる。以降新建築競技1972では再び作品体裁に平面図が要求され入選案全数に平面図を確認することができる。本章第二節で明らかになったように新建築競技1973において作品体裁における所要図面の記載が大きく変化している。そしてこの変化に即応して平面図を確認できない作品が新建築競技1973入選案に見られるが下位入選案となっている。以降の新建築競技1975では平面図が確認されない上位入選案が複数案見られるようになり、最上位案は図面表現自体が確認できない非建築的回答である。以降新建築競技1987まで平面図が確認できない入選案が散見されるが、各々の競技において少数である。その後1980年代後半から新建築誌面上において判読困難な図面表現が多くなり、更に2000年代に入り平面図を確認できない作品が増加傾向にある。特に新建築競技2001では22案中20案において平面図が判読困難である。また入選案の全数分析によって平面図の方位表記が1980年代半ばから減少傾向にあるが、以降2000年代には多くの入選案に方位表記が存在しないことが明らかになった(表5)。

2) 実験的回答モデルとしての「正方形プラン」の出現傾向

新建築コンペにおける入選作品707案の内78案が「正方形プラン」となっているが、最初に確認される正方形プランは新建築懸賞1952の入選案であり同1958においても2案（1958-4, 1958-7）確認される（表6）。これらの案は敷地境界線が平面図に明記されており正方形プランを採用しながらも方位記号が存在し、南側若しくは東側に庭を配し、リビングルームなどの公室を南東面、水回りを北側に配置しており日照に配慮した東西方向長手外形による間取りの同類といえる。一方、新建築競技における正方形プランは1970年に初見されるがこの提案は集合住宅の1ユニットが正方形である。戸建住宅において正方形プランが確認される最初期は新建築競技1972に見られる最優秀（1972-1）と佳作（1972-8）の2案である。これらの平面表現にはいずれも敷地境界線が存在せず方位記号も確認できない。つまり配置計画や外構計画など庭との関係性が示されておらず日照条件という設計方針の重要性が減じていることが伺える。また佳作案は正方形の内部に複数の入れ子空間を配する新規性の高い提案となっており、従来の間取り型とは異なる提案内容が見られるようになる。また新建築懸賞1958では設計条件が付されているが、新建築競技1972は新建築コンペにおいて初めて設計条件が見られない競技であり、自由度の高さに応じて建築面積が新建築懸賞の約30㎡（1958-4）、約35㎡（1958-7）から新建築競技の約80㎡（1972-1）、約120㎡（1972-8）へと大幅に増加している（表6）。

以上により新建築コンペにおける入選案において1965年というアイデア・コンペの起点を前後とした新建築懸賞と新建築競技の正方形プランを比較すると正方形に対する意味内容の違いが推測される。新建築懸賞の正方形プランに見られる日照を重視した「間取り」という主題が後退し、方位への配慮を一義とせず「空間の新規性を模索する」という実験に移行しており、その「実験的回答モデル」として正方形外形という形態を採用し、平面図に意図が提示されていると考えられる。以降新建築競技1986のように正方形、更には立方体を誘導する課題設定も見られるなど正方形プランの出現が増加、多種出現傾向にあるが、1990年代後半から正方形プランの入選案に対する占有率も上昇傾向にあり、かつ上位入選案となっている。更に2000年以降、正方形かつ透視図等の空間表現により立方体が表現される「立方体ヴォリューム」も増加し、多様な種類の出現も見られる。

表 6 正方形プラン（1958, 1972）

| 1958-4 約30㎡ 境界線 方位記号 図① | 1972-1 約80㎡ 図③ |
|-------------------------------------|-----------------------|
| 1958-7 約35㎡ 境界線 方位記号 図② | 1972-8 約120㎡ 図④ |

3) 正方形プランの分類

つぎに正方形プランの類型を考察するとともに、それらの年次的傾向を探る。対象とする正方形プランは前章により確認された78案とし正方形プランの内部空間をモデル化することにより以下の10種類に分けることができる(表7)。ただしこれらの10種の類型には複合した組み合わせの場合も見られるが、ここでは正方形外形が単数か複数かといった大項目を優先し、以下単数の正方形外形に対する入れ子や中庭等の包含要素の有無に従って分類することとする。

① 間取り型

住宅における各諸室、各機能が正方形外形の外周壁に達する間仕切り壁によって仕切られるタイプ。新建築懸賞における間取り型では、各諸室が集合し結果的に正方形が形成されており、南側にリビングルームが配されているなど方位を意識した計画となっている。

② 入れ子型(空間独立)

壁で囲まれた正方形外形の内側に、さらに壁で囲まれた空間が外周壁に接することなく入れ子状に包含されているタイプ。設備空間を集約したコア的空間を有していても間仕切り壁などが接しているものを除外する。入れ子の形状は正方形や矩形に限定されず、多角形や円形、自由曲線、単数複数など様々に見られる。

③ 入れ子型(空間接続)

壁で囲まれた正方形外形の内側に入れ子空間が包含されており、かつ入れ子空間がチューブ状の連続空間により外周部と接続しているタイプ。接続の仕方により入れ子が外部空間、内部空間の場合がある。平屋の提案が見られず入れ子空間が立体的に挿入されており、立方体ヴォリュームの提案が多く見られる。

④ 入れ子型(中庭)

壁で囲まれた正方形外形から入れ子空間を減算し独立した外部空間を設けるタイプ。中庭と同類の語としてコートハウス、光庭、外部室など様々な表現がみられるが、分類に際する中庭の定義として正方形外周ラインの内側に存在する外部空間全般を中庭と総称する。中庭空間の数によって単数型と複数型が見られる。

⑤ 外周諸室型

壁で囲まれた正方形外形の外周部に接するように諸室を配置し、中央部に吹き抜け空間やガラスの屋根や床で構成されたアトリウム等の大空間を持つタイプ。

⑥ 一室型

間仕切り壁が無く什器や家具または水回りなどの設備が独立して配置されているタイプ。家具や最小限の住宅設備のみを配置することで空間をゾーニングしているものが一般的で、その他には床を掘り下げることで空間をゾーニングするプランや、収納のみが壁面に配置された提案も見られる。

新建築競技1986入選案を除き「一室一層」の平屋となっているが、正方形が複数の階層で構成されており、公室、リビングダイニング、キッチンなどの限定的な機能を一層にまとめ、そのほかの諸室を別フロアにまとめたプランを一室型と定義せず間取り型とみなす。

住宅の機能を設けず自然光の取り込み方を習作するなどの実験装置的な提案も見られる。平面図が存在せずコンピュータグラフィックスや透視図などにより正方形が認められる提案も見られる。

⑦ 独立壁型

各機能を限定した室空間に間仕切る「間取り型」や「入れ子型」などと異なり、閉鎖した室空間を形成しない
 独立した壁体が内部空間に複数存在しているタイプ。直交座標に従った壁で迷路状の空間を形成する提案、
 自由曲線や三次曲面による独立壁による提案が見られる。

⑧ 格子型

正方形外形を直交座標にプロットさせたグリッド壁や格子状のフレーム等で複数の内部空間に分割するタイプ。
 格子により分割された空間を組み合わせ連結するなど分割が変則したタイプをこの類型から除外する。
 面積規模の大きな提案に多く見られる傾向がある。また平面図などの図面表現が見られず、コンピュータグラフィックスや透視図、模型などの空間表現によりフレームやヴォリュームのみが表現され、格子を持つ正方形外形と認められる提案もこの類型に含める。

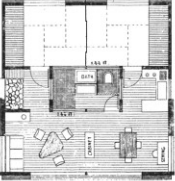

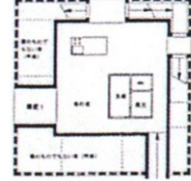
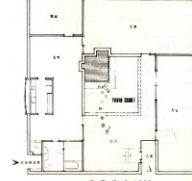
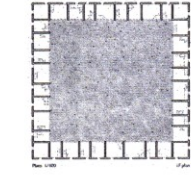
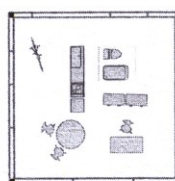
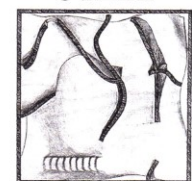
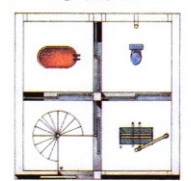
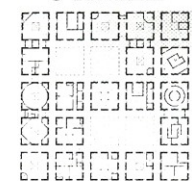

⑨ 複数配置型

複数の正方形外形が計画敷地内に固定的に配置されている分棟型の正方形プラン。直交座標に整列配置される
 場合と座標によらず自由に分散配置される場合がある。正方形外形以外の建築物が配置される提案であっても
 正方形外形が複数確認される場合この類型に含める。

⑩ 複数選択型

複数配置型とは異なり計画敷地内に固定的に配置されておらず、同規模の正方形プランがメニューとして多数
 提示され、居住者がそれらの中から任意に選択するタイプ。家具や住宅設備の配置、エントランスや建具
 の位置等、同一形状における若干の差異によって、一室型の正方形プランを多種多様な選択肢として表現する
 カタログのような形式も見られる。提案者によって固定的な空間が提示されない類型となっている。

表 7 正方形プランの類型

| | | | | |
|---|---|---|--|--|
| <p>① 間取り型</p>  <p>新建築懸賞1952 佳作案 1952-05 (図①)</p> | <p>② 入れ子型(空間独立)</p>  <p>新建築競技1972 佳作案 1972-08 (図②)</p> | <p>③ 入れ子型(空間接続)</p>  <p>新建築競技1994 佳作案 1994-09 (図③)</p> | <p>④ 入れ子型(中庭)</p>  <p>新建築競技1980 佳作案 1980-16 (図④)</p> | <p>⑤ 外周諸室型</p>  <p>新建築競技2009 佳作案 2009-08 (図⑤)</p> |
| <p>⑥ 一室型</p>  <p>新建築競技2010 4等案 2010-07 (図⑥)</p> | <p>⑦ 独立壁型</p>  <p>新建築競技2007 1等案 2007-02 (図⑦)</p> | <p>⑧ 格子型</p>  <p>新建築競技1991 佳作案 1991-17 (図⑧)</p> | <p>⑨ 複数配置型</p>  <p>新建築競技1981 優秀案 1981-04 (図⑨)</p> | <p>⑩ 複数選択型</p>  <p>新建築競技1997 1等案 1997-01 (図⑩)</p> |

4) 正方形プランのデザイン変遷

つぎに紙上建築における正方形プランの年次的出現変遷を分析する。紙上建築における正方形プランは新建築懸賞1952入選案に初見され、続く新建築懸賞1958入選案とともに「①間取り型」となっている。これらは図面中に方位記号が確認され南側公室のプランタイプであり、正方形を一義の目的としておらず室の集合の結果として正方形外形となったことが推測される。その後新建築競技1972において正方形プランが2案確認されるが「①間取り型」とともに「②入れ子型(空間独立)」という新しい形式の正方形プランが見られる。この入選案はその後に出現する「③入れ子型(空間接続)」「④入れ子型(中庭)」へと発展していく端緒となっている(表8)。新建築競技1975におけるポスター的提案表現は以降の図形的な平面表現を誘導したと推察され新建築競技1976において正方形プランが多数確認される。その後1980年代に入り都市的テーマの課題設定を背景として正方形プランの群造形による「⑨複数配置型」が多数見られる。新建築競技1986では都市空間を内包する立方体が要求され、その回答として「⑤外周諸室型」が多く見られるが、この競技以降立方体ヴォリュームが見られ始める(表9)。

表8 正方形プランの類型と変遷 (1947~1990)

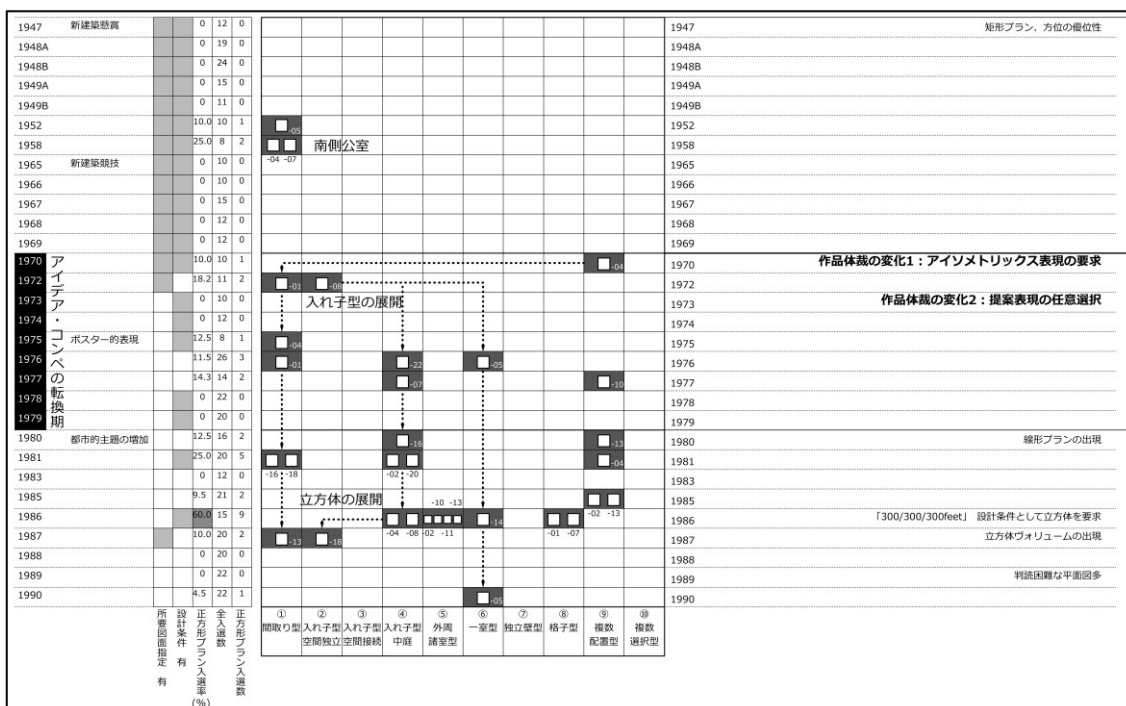
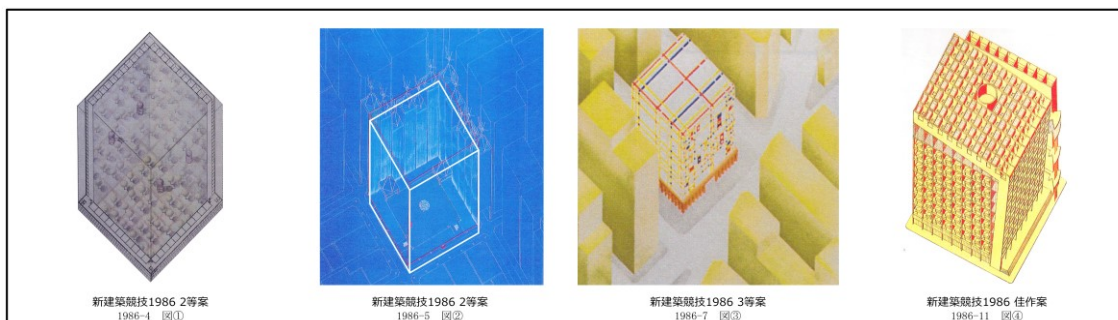
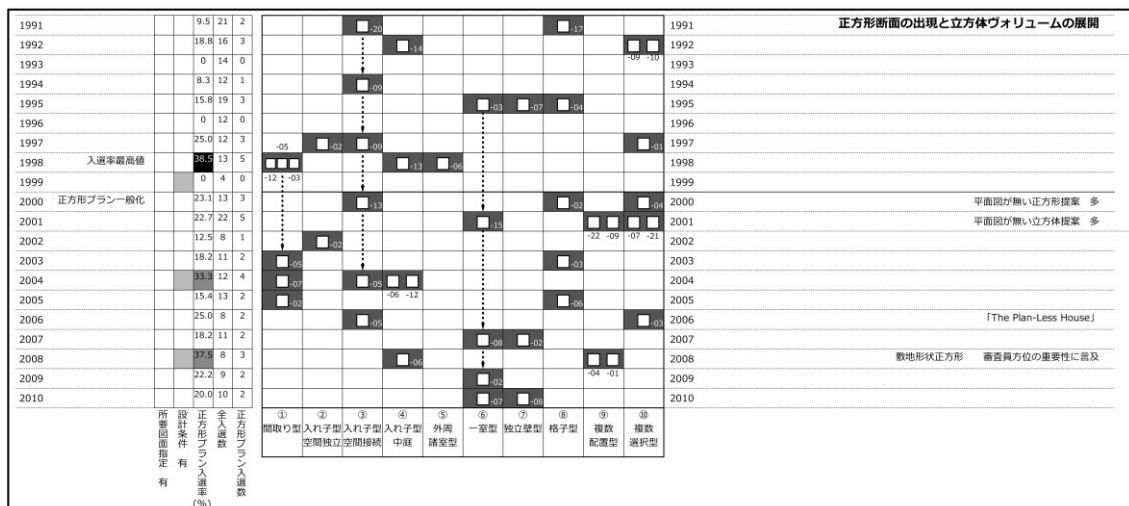


表9 立方体ヴォリューム事例



1990年代に入ると正方形プランを立方体ヴォリュームとして展開しながらチューブ状の連続空間で外部と接続する「③入れ子型(空間接続)」が見られる。この類型に代表されるように平面表現を有せず断面図などの立体的表現が優位性を持つ新しい提案表現が出現する。また新建築競技1992では正方形プランの内部仕様を利用者が自由に選択するという「⑩複数選択型」が登場しており、2000年以降には「⑥一室型」とその同種である「⑦独立壁型」が多数確認されるが、これらは立体的提案ではなく一層となる傾向が見られる。以降、正方形プランが高い入選率で継続的に入選し図形的な正方形プランが一般化、定着したことがわかる(表10)。また設計条件が設定されている新建築競技1973, 74, 78, 79において正方形プランが確認されず、面積規模や敷地形状などの設計条件が設定される「自由度の低い競技」において正方形プランの出現が少ないという相関性も推測される。

表 10 正方形プランの類型と変遷 (1991~2010)



本節のまとめとして、アイデア・コンペにおける実験的回答モデルとして「正方形プラン」が相当数存在し、従来の「間取り型」から「入れ子型」等への多様な正方形プランへの展開、立体的展開など、作品体裁の変化との応答関係の一端が確認された。以上、正方形プランのデザイン変遷を以下の5期に区分し出現傾向などにより表としてまとめる(表11)。

□1947~70年 間取り型優位

方位の重要性が保持され正方形外形を間仕切壁によって機能分割する正方形プランが優位性を持つ時期。

□1972~79年 入れ子、中庭型への展開

機能を持つ独立入れ子空間または外部空間としての中庭を正方形外形で包含した型式が優位性を持つ時期。

□1980~90年 複数配置型の増加

都市的テーマの増加とともに複数の正方形プランが集合し都市的様相を形成する複数配置型が見られる時期。

□1991~99年 正方形の立体的展開

断面表現が多く見られ正方形プランでありながら正方形断面をもつ立方体ヴォリュームへと展開する時期。

□2000~10年 一室型の展開、正方形プランの多様化

一室に設備等が配置された正方形プランが多く見られ、その他の正方形プランが多様に展開する時期。

第五節 要約

本章では特定のアイデア・コンペとして、住宅に主題を限定し長期間継続的に開催された「新建築コンペ」の要項と提案に着目し、作品体裁と提案表現の変化に伴うレイアウトの変様（第二節）、入選案における平面外形の変化（第三節）、特徴的プランである正方形プランのデザイン変遷（第四節）を論じた。以下に本研究で得られた二つの基礎的知見と要約を記す。

知見の一つは「作品体裁の変化に伴う図面表現の意味的变化」である。作品体裁において、縮尺率を定めた平面図を所要図面とする形式が変化し、新建築競技1970におけるアイソメの要求により表現方法が多様化していく。更に新建築競技1973以降、文章・空間・図面表現を適宜選択できる任意設定へと作品体裁が大きく変化する。これらの変化を受け、図面表現において方位の優位性が減少する。また、レイアウト面においても所要図面を提案用紙に個別配置する従来の形式が変化し、文章・空間・図面表現を総合的に扱うポスター的なレイアウトへと変様する傾向が見られる。

二つ目の知見は「正方形外形の出現と正方形プランの定着および多様化」である。方位の優位性の減少という図面表現の意味的变化とレイアウトの変様を受けて、新建築競技1972において「正方形プラン」が見られ、以降増加していく。1990年代には正方形プランが立体的に展開する「立方体ヴォリューム」が増加するなど立体的表現が優位性を持つ新しい正方形プランも出現する。2000年代には正方形プランの入選率が高まり、以降継続して多数の入選案が見られるようになり正方形プランが定着、それらの類型も多様に展開していく。

以上によりアイデア・コンペの転換期、作品体裁と図面表現の変化に対応し出現する特徴的プラン、正方形プランの存在が明らかになった。1970年代における作品体裁の大きな変化は提案表現の任意設定という自由度を付与し、レイアウトにおける図面表現の意味的变化をもたらすとともに単純形態である正方形外形の提案が増加していく。住宅における方位の優位性が減じていく中、空間の新規性を正方形外形に投影する実験的回答モデルとして「正方形プラン」が多数見られる様になり定着、多様に展開していく。またこれらの現象の端緒は1970年代に見られ、筆者前研究による「アイデア・コンペの転換期」と同時性を持つことも確認された。

注

- 注1) 石垣充「提案型設計競技の要項-提案-講評に関する研究」西日本工業大学紀要第 43 巻, pp. 845-854, 2014. 3 において、戸建住宅を対象とした新建築コンペ入選案における文章表現、特に作品タイトルの有無の分析が行われている。
- 注2) 新建築コンペ1973審査員の西沢文隆により「説明書は不要 説明文もなくともよい 思うところは図面で表出せよ」と書かれている。
- 注3) 「新建築2009年3月号 審査評」新建築社, 2009, pp38
- 注4) 入選案を見ると平面図が多く見られ「平面図による表現を超えた作品を求めろ」という課題の意図が応募者に理解されていないことも伺える。
- 注5) 石垣充、入江正之「提案型建築設計競技の要項-提案-講評に関する研究」日本建築学会計画系論文集, 2014. 3
- 注6) 石垣充、入江正之「提案型建築設計競技の要項-提案-講評に関する研究2」日本建築学会計画系論文集, 2015. 6
- 注7) 平井祐一、石垣充、入江正之「日本建築学会設計競技の研究」日本建築学会大会学術講演梗概集, 2012
- 注8) 本研究におけるアスペクト比とは矩形プランの長辺と短辺の比率を指し短辺を1.0として数値を求めろ。

图版出典

- 図 1 『JA1994-1 ANNUAL』新建築社, 1994. 1, pp. 34
- 図 2 『新建築 1975 年 12 月号』新建築社, 1975. 12, pp. 150
- 図 3 『新建築第 23 卷 第 11・12 號』新建築社, 1948. 11, pp. 34
- 図 4 『新建築 1952 年 11 月号』新建築社, 1952. 11, pp. 517
- 図 5 『新建築 1988 年 2 月号』新建築社, 1988. 2, pp. 306
- 図 6 『新建築 1949 年 4 月号』新建築社, 1949. 4, pp. 130
- 図 7 『住宅特集 1989 年 1 月号』新建築社, 1989. 1, pp. 43
- 図 8 左『新建築第 23 卷 第 4 號』新建築社, 1948. 11, pp. 2、右『新建築 2000 年 12 月号』新建築社, 2000. 12, pp. 69
- 図 9 左『新建築 1980 年 12 月号』新建築社, 1980. 12, pp. 148、右『新建築 1988 年 1 月号』新建築社, 1988. 1, pp. 28
- 表 4-図① 『新建築 1949 年 4 月号』新建築社, 1949. 4, pp. 124
- 表 4-図② 『新建築 1972 年 7 月号』新建築社, 1972. 7, pp. 157
- 表 4-図③ 『新建築 1947 年 4 月号』新建築社, 1947. 4, pp. 2
- 表 4-図④ 『新建築 2004 年 12 月号』新建築社, 2004. 12, pp. 61
- 表 4-図⑤ 『新建築 1980 年 12 月号』新建築社, 1980. 12, pp. 148
- 表 4-図⑥ 『新建築 1979 年 12 月号』新建築社, 1979. 12, pp. 238
- 表 6-図① 『新建築 1958 年 11 月号』新建築社, 1958. 11, pp. 44
- 表 6-図② 『新建築 1958 年 11 月号』新建築社, 1958. 11, pp. 48
- 表 6-図③ 『新建築 1972 年 7 月号』新建築社, 1972. 7, pp. 149
- 表 6-図④ 『新建築 1972 年 7 月号』新建築社, 1972. 7, pp. 166
- 表 7-図① 『新建築 1952 年 11 月号』新建築社, 1952. 11, pp. 514
- 表 7-図② 『新建築 1972 年 11 月号』新建築社, 1972. 11, pp. 166
- 表 7-図③ 『JA1995-1 ANNUAL』新建築社, 1995. 1, pp. 226
- 表 7-図④ 『新建築 1980 年 12 月号』新建築社, 1980. 12, pp. 176
- 表 7-図⑤ 『新建築 2009 年 12 月号』新建築社, 2009. 12, pp. 58
- 表 7-図⑥ 『新建築 2010 年 12 月号』新建築社, 2010. 12, pp. 48
- 表 7-図⑦ 『新建築 2007 年 12 月号』新建築社, 2007. 12, pp. 71
- 表 7-図⑧ 『JA1992-1 ANNUAL』新建築社, 1992. 1, pp. 58
- 表 7-図⑨ 『新建築 1981 年 12 月号』新建築社, 1981. 12, pp. 138
- 表 7-図⑩ 『JA YEARBOOK 1997』新建築社, 1997, pp. 166
- 表 9-図① 『新建築 1987 年 1 月号』新建築社, 1987. 1, pp. 268
- 表 9-図② 『新建築 1987 年 1 月号』新建築社, 1987. 1, pp. 270
- 表 9-図③ 『新建築 1987 年 1 月号』新建築社, 1987. 1, pp. 274
- 表 9-図④ 『新建築 1987 年 1 月号』新建築社, 1987. 1, pp. 282

第四章

新建築誌掲載作品の変遷と新建築コンペ入選案との対応

| | |
|----------------------------------|-----|
| 第一節 展望..... | 87 |
| 第二節 正方形プランの出現傾向に関する分析..... | 88 |
| 1) 地上建築における正方形プランの出現傾向..... | 88 |
| 2) 地上建築における正方形プランの出現分類..... | 90 |
| 3) 地上建築と紙上建築における正方形プランの出現変遷..... | 91 |
| 第三節 正方形プランの面積規模に関する分析..... | 93 |
| 1) 紙上建築における正方形プランのデザイン分析..... | 94 |
| 2) 地上建築における正方形プランのデザイン分析..... | 96 |
| 第四節 正方形プランの各類型におけるデザイン比較..... | 99 |
| 1) 間取り系正方形プランの比較分析..... | 99 |
| 2) 非間取り系正方形プランの比較分析..... | 101 |
| 第五節 要約..... | 110 |

第一節 展望

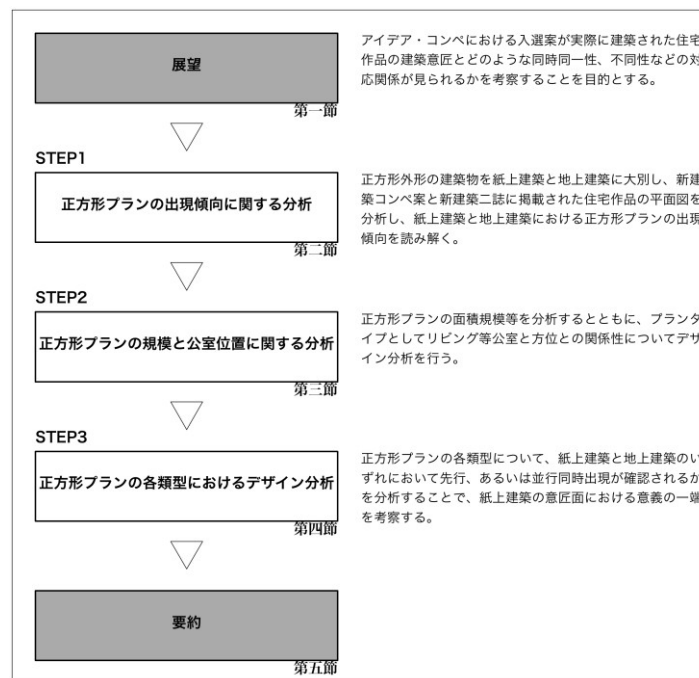
本章では、新建築コンペの入選案「紙上建築」と、新建築誌掲載住宅作品「地上建築」^{注1)}における正方形という限定的な平面形状を比較対象として、相互に見られる多様な類型の出現動向、その同時性や相関性などの対応関係を考察する。対象として1946年から2010年まで新建築誌において開催された新建築コンペにおける紙上建築707案、同様に新建築二誌（新建築と新建築住宅特集）に掲載された地上建築5891作品を扱い、合計6598作品を分析する。

分析の視点として、紙上建築、地上建築両者の年次的デザイン変遷を限定的に比較するために、類似形状と認められる平面外形である「正方形外形」及び「正方形プラン」に着目する。全数分析によって得られた紙上建築における正方形プラン78案、地上建築における正方形プランとして新建築掲載分76作品、住宅特集掲載分149作品、計225作品(表3)を対象とし、紙上建築と地上建築の建築デザインにおける相関性の一端を図面表現、特に正方形外形におけるプランタイプ、正方形プランの変化・兆候・特徴的事例により提示するという客観性を一義とする。

研究の成果として紙上建築と地上建築との出現傾向、規模、公室位置など両者における対応関係を把握できるとともに、同一性と不同性、相互関係や紙上建築の先行事例、先進、実験性を明確化することが期待される(表1)。

ただしここでいう「先進性」とは先行して発表されたアイデア・コンペ入選案を実務設計者が参照し、後発的に実作を計画したことを示すのではなく、あくまで次代の建築空間を示唆する予兆・変化が地上建築に先行した紙上建築の類型に見られることを意味する。

表1 第四章研究のながれ



第二節 正方形プランの出現傾向に関する分析

本節では正方形外形を持つ地上建築として新建築二誌に掲載された住宅作品の平面図を分析する。正方形の辺の定義として過半を占める辺を正方形外形の一辺と捉える。次にこれらの正方形外形の内部空間をモデル化するが、間仕切り壁の位置や空間の捉え方により類型化を行いプランタイプを分析する。対象とする平面図は地上最下階とするが一階部分がピロティなど吹きさらしであり居室を有しない場合はその上階を対象とする。また壁面や屋根により閉鎖された駐車スペースや坪庭等も内部と同様の空間として扱う。複数の階層に渡る正方形外形であり、かつ複数のプランタイプを有する場合は「間取り型」以外の非間取り系のプランタイプを該当類型とするが、一層がワンルームの正方形プランであっても複数層の正方形により住宅の機能が形成されているものを一室型から除外する。また正方形プランの大別として「間取り型」を採用している類型を「間取り系」、それ以外を「非間取り系」とする。

以上のような情報整理の後、それらの正方形プラン出現年や紙上建築、地上建築における優位性、年次的変遷を分析する。

1) 地上建築における正方形プランの出現傾向

最初に新建築二誌に掲載された、集合住宅を除外した戸建住宅作品の平面図を分析する。戦後1946～48年における新建築では住宅の間取り図が見られるものの、それらの竣工写真が掲載されず、文章からもそれらが計画案か実作であるかが判然としないものが多数含まれる。1949年以降竣工写真を伴い住宅が紹介される構成が見られるようになり、1952年に新建築における最初の正方形プランが確認される。以降掲載作品中の正方形プラン占有率は10%未満で推移するが、1970年代に正方形プラン占有率の最初のピークが見られ1972, 74, 75年に10%超の占有率を示す。1985～99年に新建築において正方形プランの出現数が減少しているが、1985年に新刊された新建築住宅特集が住宅作品発表を担い、新建築においては特殊建築物の紹介が主であったことによる。しかし量的に少数ではあるが特殊建築物とともに住宅作品が再び発表されるようになり、かつ正方形プランの形式を採用した住宅が見られるようになる。特に2000年代には正方形プランの占有率が再び上昇し2010年には掲載住宅12作品中4作品、33.3%が正方形プランとなっている。一方1985年に新刊された住宅特集では掲載数の増減があるものの正方形プランは継続的に複数見られる。それらの出現率は1.4～7.7%であり新建築における占有率に比して低いが、新建築二誌ともに2000年代において正方形プラン占有率の増加が確認され、これら二誌における同時性が確認される。このように占有率における同傾向が見られるものの前述のとおり2010年の新建築における正方形プランの占有率は33.3%と極端に高く、かつ多種多様な正方形プランの類型が見られる。このことから新建築における住宅作品には、より先進性を含んだ実験的なプランタイプとして正方形プランが掲載されていたことが類推される(表3)。

このように紙上建築と同様に地上建築においても多くの正方形プランが確認されるが、同一建築家の設計により、単数回ではなく複数回にわたって正方形プランが新建築二誌に掲載されるケースも見られる（表 2）。中でも建築家篠原一男による正方形プランは 1960～70 年代初頭にかけて最多となる計 5 作品^{注2)}が掲載されている（図 1）。これらの同一建築家による正方形プランは、短期間かつ集中的に新建築誌に掲載される傾向を持つが、同月号に複数の正方形プランが掲載される事例も見られる。また当該建築家による設計論などの言説の発表を伴いながら正方形プランが掲載される事例も見られるが、例として新建築 1954 年 11 月号では建築家池辺陽による「住居デザインにおけるコアの意義」という言説とともに正方形プランの住宅が発表されている。さらに 1970 年代に 3 つの正方形プランを発表する建築家宮脇檀もまた新建築 1970 年 8 月号において「プライマリィ・アーキテクチャ論」^{注3)}を記し幾何図形的建築物の論理背景を提示しており、この言説を表出する明解なプランとして正方形プランが採用されていたと推測される。このように正方形プランは特定の建築家により複数回提示される傾向を持つが、アトリエ・ワンのように紙上建築（1991 年）と地上建築（1998, 2002 年）の双方において正方形プランを発表している設計者も存在するが、デザイン面における相互の関連性は見られない。

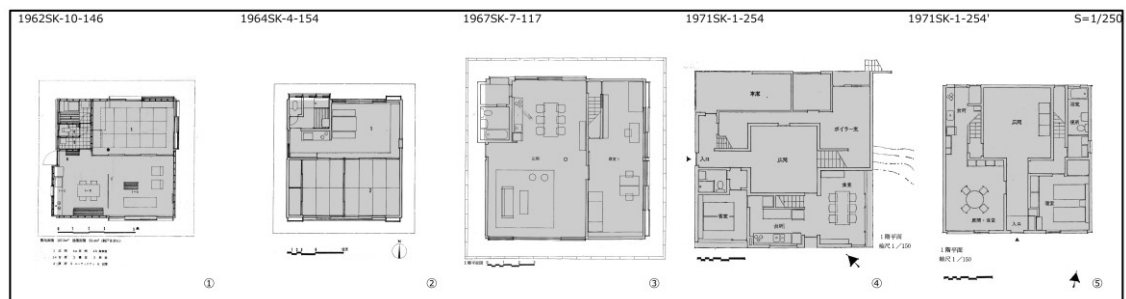


図 1 建築家篠原一男による正方形プランの事例

表 2 新建築誌における同一設計者による正方形プランの掲載

| 設計者 | 掲載回数 | 掲載年 (SK:新建築) | 掲載年 (JT:住宅特集) |
|----------------|------|------------------------------------|------------------------------------|
| 篠原一男 | 5回 | SK1962、SK1964、SK1967、SK1971、SK1971 | |
| 坂茂建築設計 | 5回 | | JT1991、JT1992、JT1995、JT1998、JT1998 |
| ワークショップ | 5回 | | JT1993、JT1998、JT2002、JT2004、JT2005 |
| 武井誠 + 鍋島千恵/TNA | 5回 | SK2008、SK2009、SK2010 | JT2005、JT2006 |
| 難波和彦 | 4回 | | JT1987、JT1997、JT1997、JT2000 |
| R.I.A | 3回 | SK1955、SK1963、SK1969 | |
| 宮脇檀 | 3回 | SK1972、SK1973、SK1977 | |
| 相田武文 | 3回 | SK1972、SK1972、SK1974 | |
| 池田昌弘 | 3回 | | JT2001、JT2007、JT2007 |
| 吉村順三 | 2回 | SK1976、SK1977 | |
| 藤本壮介 | 2回 | SK2008、SK2010 | |
| 山崎雅雄 | 2回 | | JT1997、JT2001 |
| アトリエ・ワン | 2回 | | JT1998、JT2002 |
| みかんぐみ | 2回 | | JT2005、JT2010 |
| 伊礼智設計室 | 2回 | | JT2005、JT2007 |
| コムデザイン | 2回 | | JT2006、JT2006 |
| アーキテクトカフェ | 2回 | | JT2002、JT2003 |
| 山中デザイン研究所 | 2回 | | JT1988、JT1991 |
| 大杉喜彦建築総合研究所 | 2回 | | JT1989、JT1989 |

2) 地上建築における正方形プランの出現分類

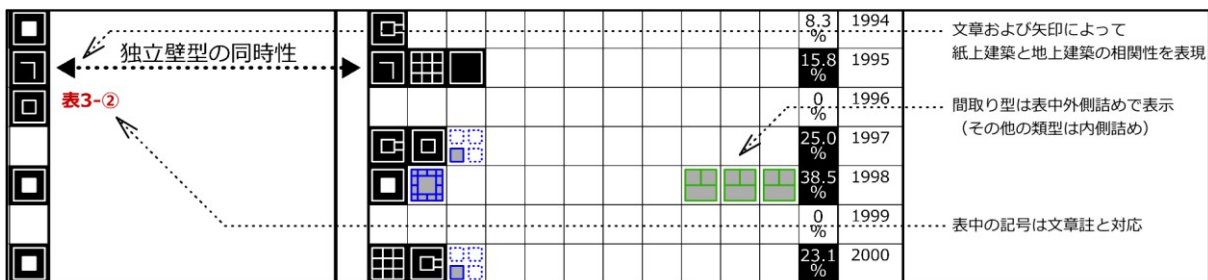
前述のように地上建築において 1952 年に正方形プランが「間取り型」として初出し^{注4)} 8 種の類型が下記のような年代順に出現している。また地上建築において「外周諸室型」「一室型」「複数選択型」は確認されない。

- ① 間取り型……………出現初年1952年（新建築）
- ② 入れ子型（空間独立）……………出現初年1954年（新建築）
- ③ 回廊型……………出現初年1959年（新建築）
- ④ 格子型……………出現初年1968年（新建築）
- ⑤ 入れ子型（中庭）……………出現初年1969年（新建築）
- ⑥ 複数配置型……………出現初年1988年（住宅特集）
- ⑦ 独立壁型……………出現初年1995年（住宅特集）
- ⑧ 入れ子型（空間接続）……………出現初年2005年（新建築, 住宅特集）

以降(表 3)に基づいて分析結果を記述するが表解釈については下図(表 3 部分拡大) 参考によるものとする。

「間取り型」は対象期間を通じて継続して出現し新建築掲載作品の全正方形プラン 76 作品のうち 84.2%にあたる 64 作品、住宅特集に掲載された全正方形プラン 149 作品のうち 77.9%にあたる 116 作品がこの類型となっており他の類型に比して高い優位性を有する(表 3-①)。新建築掲載作品における非間取り系正方形プランの類型として 1954 年に初めて「入れ子型(空間独立)」が見られるが、以降 1959 年には「回廊型」、1968 年には「格子型」、1969 年には「入れ子型(中庭)」、1988 年には「複数配置型」、1995 年には「独立壁型」、2005 年には「入れ子型(空間接続)」といった類型が見られる(表 3-②)。これら新建築掲載作品における非間取り系正方形プラン 12 作品中 6 作品が 2000 年代に集中し「入れ子型(空間独立)」を除く 5 種が高い占有率で掲載、多様に展開している(表 3-③)。このように住宅特集が新刊された 1985 年以降、住宅作品の発表は主に住宅特集が担っているが(表 3-④) 2000 年代に入り再び新建築誌において住宅作品が散見されるようになる。これらの類型は非間取り系が大部分を占め、新建築における住宅作品掲載が正方形プランにおける特殊例の発表機会となっていることがわかる。新建築と同様に住宅特集においても 1990 年代後半から 2000 年代に複数の非間取り系プランが見られるなど多様な展開が見られ、量的質的にも地上建築における「正方形プランの展開期」といえる。非間取り系正方形プランの内訳として「入れ子型」の出現が多くみられるが、それぞれ「入れ子型(中庭)」が 9.5%、「入れ子型(空間独立)」が 1.3%、「入れ子型(空間接続)」が 2.7%となっている(表 3-⑤)。

以上のように新建築二誌において正方形プランが多数確認され 1952 年以降継続的に見られるが、これらの出現頻度として 1970 年代と 2000 年代にピークが存在することが明らかになった。1970 年代には数的には 26 作品という多数の正方形プランが見られるが「間取り型」以外の出現類型は 1 種のみである(表 3-⑥)。



(参考) 表解釈について

3) 地上建築と紙上建築における正方形プランの出現変遷

次に建築デザインに対する比較分析として、新建築コンペ入選案における正方形プランとの相関性を探る。扱う紙上建築の正方形プランは前章³⁾により抽出された78案とし、前節により明らかとなった地上建築の出現傾向や変遷とを比較し、それらの現象における同一性や不同性を探る。

地上建築における正方形プランの類型は8種類であり前述のとおり「間取り型」の優位性が認められる。しかし紙上建築において「間取り型」の強い優位性が見られず正方形プラン78作品中19.2%にあたる15作品が「間取り型」であり「回廊型」を除く10種の類型が多様に展開している(表3-⑦)。また地上建築において「外周諸室型」「一室型」「複数選択型」の3種の出現が確認されないが、これらは筆者前研究³⁾による紙上建築における実験的プランタイプとしての正方形プランの存在を裏付けるものといえ、紙上建築において実現困難性を含みながらも先進性を提示する正方形プランの類型が存在すると捉えることができる。

また方位に関して、紙上建築においては年次的に図面表現中に方位記号が見られなくなり間取りにおける方位の重要性が減じていく傾向が認められるが、地上建築においては継続的に多くの正方形プランに方位記号が見られる(表4~6)。この点において紙上建築の正方形プランは間取りを志向するより空間の新規性を志向するという筆者研究³⁾の知見が裏付けられる。

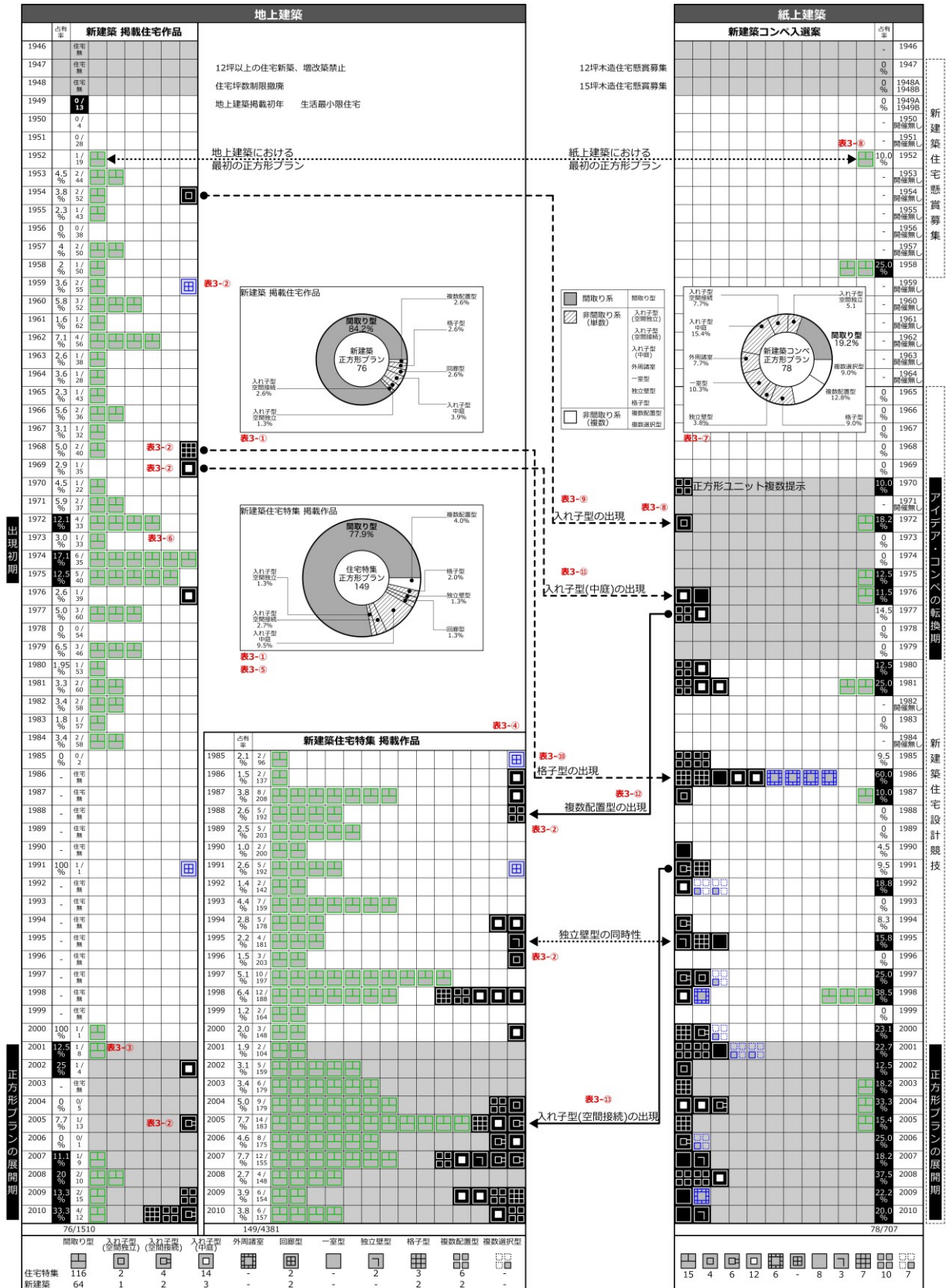
出現変遷に関して紙上建築と地上建築における正方形プランの出現は双方1952年の「間取り型」をその初年としている(表3-⑧)。相互の参照により正方形プランが出現したという論拠は見られないが年代的同時性を有している。以降地上建築における正方形プランの出現も増加し、そのピークが1970、2000年代に見られ全作品数における正方形プランの占有率が高まる時期である。このような傾向は紙上建築にも見られ出現傾向と占有率の増加における同一性が推測される。

つぎに紙上建築と地上建築における類型の出現初年を比較する。「入れ子型(空間独立)」は1954年に地上建築において見られるが紙上建築では1972年に初めて確認される(表3-⑨)。同様に「格子型」は1968年に地上建築において確認されるが紙上建築では1986年に初めて確認される(表3-⑩)。さらに「入れ子型(中庭)」は1969年に地上建築において確認され紙上建築において1976年に初めて確認される(表3-⑪)。これら3種の類型は地上建築優位と言える。

一方「複数配置型」は1977年に紙上建築において初めて確認されるが、地上建築としては1988年に確認される(表3-⑫)。同様に「入れ子型(空間接続)」は紙上建築において1991年に確認され以降複数案が見られるが、地上建築において2005年に初めて確認される(表3-⑬)。これら2種の類型は紙上建築優位であると言える。以上のように地上建築優位の類型は1960年代までに出現し、紙上建築優位の類型は以降1970~1990年代に出現している。

本節のまとめとして、2000年代に量的質的に正方形プランが多数出現するという地上建築における「正方形プランの展開期」の存在が確認された。また紙上建築において正方形プランが1970年代から実験的回答モデルとして多様に展開したのに対し、地上建築では1980年代半ばまで間取り型が優位性を持続し、その後地上建築の正方形プランは2000年代に入り多様な類型の展開を見せるようになる。また双方の類型出現初年を比較することにより紙上建築において先進性を有するプランタイプが存在することが明らかになった。

表3 地上建築と紙上建築の正方形プランにおける相関性



第三節 正方形プランの面積規模に関する分析

次に紙上建築と地上建築における正方形プランのデザイン分析を行うが正方形プランを「間取り系」と「非間取り系」の2系に大別する。そして正方形の規模として床面積、プランタイプとしてリビングダイニング等の公室と方位との関係性等を分析する。ただしここでいう面積とは床面積のことではなく中庭等も含めた正方形外形の大きさを示すものとし、図面中に縮尺率やスケールバーが見られないなど規模が不明な正方形プランを分析の対象外とする。また縮尺率が不明な平面図においても図面中のグリッド表示、記載されたベッド、畳、ピアノ、便器、人物、自動車など住宅設備、什器、点景等、設計主旨等の文中に見られる寸法表記によりその縮尺の概略を推定する。方位に関しても平面図や配置図中の方位記号表記を根拠とするが、それらの表記が無い場合も立面図等による方位表記、平面図中に見られる「南側テラス」などの名称、設計主旨等の文中に見られる方位に関する言及により方位を推定する。以上によりそれぞれの提案に対し正方形プラン分析シートを作成する(図2)。

また本節では個々の正方形プランの面積規模を比較分析するため、規模が過大な都市提案(新建築競技 1986)、集合住宅、複数の正方形を持つ「複数配置型」「複数選択型」をデザイン分析対象外とする。

定義、根拠について

正方形プランの定義

- ・ 2辺の長さ、アスペクト比1:1
- ・ アスペクト比1:1ではないが作品タイトル等から正方形志向が読み取れるプランを含む(例「スクエア」)

直線ではない辺の場合

- ・ 半分以上を占める辺を採用する。

平面的欠損がある場合

- ・ 辺の中間部の場合は内部的空間と捉える
- ・ 壁等に囲まれている場合は内部空間と捉える
- ・ 角部が欠損し頂点がない場合
- ・ 特定した辺の延長を頂点とする。

正方形外形について

- ・ 中庭、張り、欠けを除いた正方形外形とする。

方位の根拠

- ・ 平面図中の方位記号表記
- ・ 配置図中の方位記号表記
- ・ 立面図による方位の特定
- ・ 平面図室名からの方位類推(「南側テラス」など)
- ・ 設計主旨文中の方位言及

縮尺率の根拠

- ・ スケールバー
- ・ グリッド表記
- ・ 設計主旨文中の数値明記
- ・ 縮尺率(掲載誌によって変倍され根拠にならない場合有り)

縮尺率の類推

- ・ ベッド長さ(W=2100)
- ・ タタミの大きさ(W=1800)
- ・ グランドピアノの大きさ(W=1500)
- ・ 便器長さ(W=750)
- ・ 人物立位、座位寸法
- ・ 周囲建物の大きさ
- ・ 自動車の長さ(W=5000)

除外する対象について

デザイン分析における正方形類型

- ・ 個別の正方形面積比較のため複数型を除外する。
- ・ 戸建住宅を分析対象とし、集合住宅を除外する。
- ・ 都市の街区全体を提案する大規模施設を除外する。

一室型の定義

- ・ 平屋であり設備等が一室集約され間仕切り壁を持たない。
- ・ 複数階正方形の一つが倉庫等の一室である場合を除く。

複数階が正方形である場合

- ・ 主室のある階を分析対象とする。
- ・ 最下階において正方形外形と定義されても主室のある階が矩形等である場合は分析対象外とする。

図2 正方形プラン分析シート

1) 紙上建築における正方形プランのデザイン分析

第三章第四節により紙上建築における平面表現の年次の減少が確認されているが、1970年代までの平面図中にはスケールバーによる縮尺率の記載が多く見られる。以降平面図が掲載される場合においても縮尺率が明記されず規模が不明の提案が出現し、特に2000～2003年に多数見られる。また縮尺率が数値で明記されながらも変倍され新建築に掲載されるケースも見られる。変倍に伴い縮尺率の表記を適正に修正する場合も見られるが縮尺率不明も多く見られ、提案における平面表現の機能的変化と主催者側における平面図に対する意識の変化も伺える。

次に紙上建築における正方形プランの面積規模における分析を行う(表4)。平面規模の確認が可能な入選案を面積で分類すると多種の類型が幅広い面積規模で提案されており、10種の面積帯に出現が確認されるが地上建築に比して正方形の面積が大きくなっていることがわかる(表4～6)。面積規模の小さな類型として「間取り型」があげられ、全13案中10案が100㎡以下の提案となっており1980年代までに集中的に出現している。一方非間取り系の類型は22案見られ100㎡超の提案が18案と多数を占めており、この100㎡という面積が間取り系と非間取り系の分水嶺となっている。

非間取り系の「入れ子型(中庭)」と「入れ子型(空間独立)」において面積規模の大きい提案が見られるが、特に「入れ子型(中庭)」では500㎡を超える提案が2案確認される。また2009年の「一室型」(2009-2)は戸建住宅でありながら1000㎡を超える面積規模となっている。

表4 新建築コンペ入選案における規模等比較表

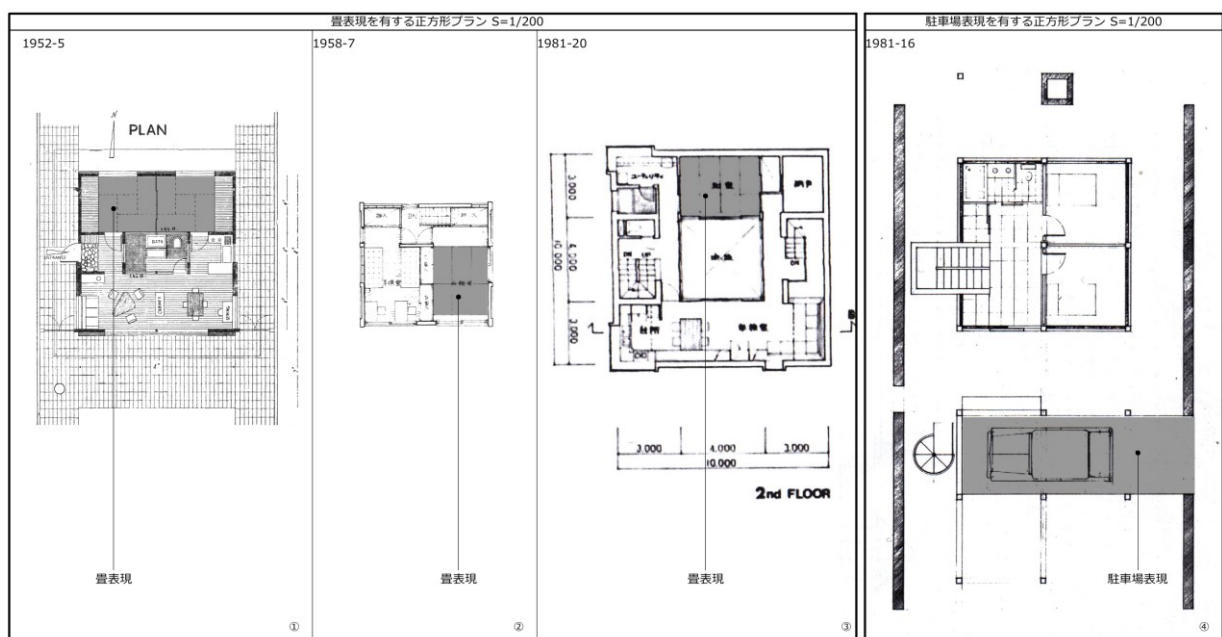
| 開催年 | 期数 | 期数順 | 層数 | 平面表現 | 方位 | 駐車場 | 分析対象外 | 0㎡～ | 25㎡～ | 50㎡～ | 100㎡～ | 150㎡～ | 200㎡～ | 300㎡～ | 400㎡～ | 500㎡～ | 1000㎡～ | |
|------|-----|-----|----|------|----|-----|-------|-----|------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|--|
| 1952 | -5 | 1 | 1 | ○ | ▲ | x | | | | | | | | | | | | |
| 1958 | -4 | 1 | 1 | x | ▲ | x | | | | | | | | | | | | |
| | -7 | 2 | 2 | ○ | ▲ | x | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | -4 | 3 | 3 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | -1 | 1 | 1 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -8 | 5 | 5 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | -4 | 2 | 2 | x | ▲ | x | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | -1 | 1 | 1 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -22 | 3 | 3 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | -7 | 1 | 1 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -10 | 2 | 2 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | -13 | 1 | 1 | x | ▲ | x | | | | | | | | | | | | |
| | -16 | 2 | 2 | x | ▲ | x | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | -4 | 3 | 3 | x | ▲ | ○ | | | | | | | | | | | | |
| | -16 | 3 | 3 | x | ▲ | x | | | | | | | | | | | | |
| | -18 | 3 | 3 | x | ▲ | x | | | | | | | | | | | | |
| | -20 | 3 | 3 | ○ | ▲ | x | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | -2 | 1 | 1 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -13 | 2 | 2 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | -1 | 1 | 1 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -2 | 2 | 2 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -4 | 3 | 3 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -7 | 4 | 4 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -8 | 5 | 5 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -10 | 6 | 6 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -11 | 7 | 7 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -13 | 8 | 8 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -14 | 9 | 9 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | -13 | 2 | 2 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -18 | 4 | 4 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | -5 | 1 | 1 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | -17 | 5 | 5 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -20 | 5 | 5 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | -9 | 1 | 1 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -10 | 2 | 2 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -14 | 3 | 3 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | -9 | L | 1 | x | ▲ | x | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | -3 | 1 | 1 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -4 | 2 | 2 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -7 | 3 | 3 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | -1 | 1 | 1 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -2 | 2 | 2 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -5 | L | 1 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -3 | 2 | 2 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -5 | 4 | 4 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | -6 | 1 | 1 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -12 | 4 | 4 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -13 | 4 | 4 | x | ▲ | x | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | -2 | 1 | 1 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -4 | 2 | 2 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -13 | 3 | 3 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | -7 | 1 | 1 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -9 | 2 | 2 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -15 | 3 | 3 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -21 | 4 | 4 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -22 | 5 | 5 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | -2 | 1 | 1 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | -3 | 1 | 1 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -5 | L | 1 | x | ▲ | x | | | | | | | | | | | | |
| | -5 | L | 1 | x | ▲ | x | | | | | | | | | | | | |
| | -6 | 2 | 2 | x | ▲ | x | | | | | | | | | | | | |
| | -7 | 3 | 3 | x | ▲ | x | | | | | | | | | | | | |
| | -12 | 4 | 4 | x | ▲ | x | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | -2 | 1 | 1 | x | ▲ | x | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | -6 | 1 | 1 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -3 | 2 | 2 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | -2 | 1 | 1 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -8 | 2 | 2 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | -1 | 1 | 1 | x | ▲ | x | | | | | | | | | | | | |
| | -4 | 2 | 2 | x | ▲ | x | | | | | | | | | | | | |
| | -6 | 3 | 3 | x | ▲ | x | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | -2 | 1 | 1 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -8 | 2 | 2 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| | -7 | 3 | 3 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | -8 | L | 1 | x | x | x | | | | | | | | | | | | |

また縮尺率と同様に方位表記が確認できない提案も多く見られる。紙上建築において公室の南面配置が重要視されず方位を重視しない提案も多数見られるが、図面表現が図式的であり室名も表記されないなど公室自体が判然としない提案も多い。

正方形内部の床仕上げとして1952年と1958年の新建築懸賞入選案、新建築競技1981入選案において畳表現が確認されるが(図3左)、以降床仕上げの畳表現が見られなくなる。これは新建築コンペ入選者の属性として海外からの応募者が多いことが要因と推察されるが、国内入選者の提案においても床仕上げとしての畳表現が減少しており、日本国内の生活様式として畳によらない椅子座の洋式生活が定着したこと、あるいは応募者の提案要旨、および審査員の評価点として和洋生活の別が埒外となっているとも言える。

次に住宅の外部空間におけるデザイン分析として駐車スペースを分析の対象とする(図3右)。駐車場には外構の一部として駐車スペースを配置する提案と住宅の内部空間に取り込む提案との2種があげられるが、平面図中に駐車場が表記される作品は78案中1案のみである。また駐車場の設置が設計条件となっているアイデア・コンペとして新建築競技1968「2世帯のための住居」と新建築競技1978「向こう三軒両隣の町屋」^{注5)}があげられ、前者は各戸につき1台、後者では各戸につき2台、計12台の駐車スペースが求められている。他の競技において要項中に駐車場の要求は見られないが、課題文中における問題提起として交通ネットワークの変化やモータリゼーションに関する言及が多く見られる。一般財団法人自動車検査登録情報協会の自動車保有台数推移表^{注6)}によると国内における乗用車の保有台数は1966年には2,289,665台であるが2010年には57,902,835台と約25倍に増加している。このような状況にありながらアイデア・コンペの提案者と評価者にとって、駐車場が住宅における建築デザインの要素として扱われなかったことが伺える。

図3 紙上建築における畳表現および駐車場表現を有する正方形プラン



2) 地上建築における正方形プランのデザイン分析

次に地上建築として新建築と住宅特集掲載作品における正方形プランのデザイン分析を行う。

① 新建築掲載作品について

最初に地上建築として新建築に掲載される正方形プランの面積規模における分析を行う(表5)。デザイン分析対象の全76作品中47作品という多数が50~100㎡という面積帯に集中しており、更にこれら47作品中の44作品が「間取り型」となっている。このように新建築掲載作品における正方形プランの半数以上が50~100㎡の「間取り型」となっていることが解る。また1960年代から150㎡を超える類型が見られるようになる一方で2000年代の実作において25㎡に満たない狭小住宅作品も見られるようになるが、紙上建築に比して面積帯の分散傾向が少ない。

また類型と面積規模の関連性として200㎡超の面積規模において「入れ子型(中庭)」が優位であり、1976年の新建築に掲載される住宅作品(1976SK-9-146)は正方形外形の面積として約740㎡であり新建築掲載作品中の最大値を示している。これは紙上建築と地上建築の「入れ子型(中庭)」全数における最大の正方形プランとなっている。

その他の類型として「回廊型」は2案確認され(1959SK-1-70, 1991SK-3-320)、それぞれ25~50㎡、50~100㎡と小規模な類型となっている。「入れ子型(空間接続)」は2案存在するが(2005SK-11-144, 2010SK-12-141)、両者とも2000年代の出現でありその面積規模は50~100㎡、150~200㎡である。

表5 新建築掲載住宅作品における規模等比較表

| 掲載年 | 月 | 頁 | 階数 | 業表現 | 方位 | 駐車場 | 分析対象外 | 0㎡~ | 25㎡~ | 50㎡~ | 100㎡~ | 150㎡~ | 200㎡~ | 300㎡~ | 400㎡~ | 500㎡~ | 1000㎡~ |
|------|---|---------|----|-----|----|-----|-------|-----|------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|
| 1952 | 7 | 12 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1953 | - | 5-18 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -11-25 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1954 | | -10-44 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -11-51 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1955 | | -11-59 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1957 | | -5-61 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -6-37 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1958 | | -11-72 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1959 | | -1-70 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -6-68 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1960 | | -3-62 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -3-66 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -5-67 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1961 | | -5-105 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1962 | | -5-93 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -6-51 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -7-155 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -10-146 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1963 | | -10-175 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1964 | | -4-154 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1965 | | -5-181 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1966 | | -1-132 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -5-190 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1967 | | -7-117 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | -5-196 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -5-202 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | -8-209 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | -2-224 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | -1-254 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -1-254 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | -5-245 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -8-198 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -8-214 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -8-220 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | -2-208 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | -2-246 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -2-269 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -2-276 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -8-234 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -8-244 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -8-251 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | -2-156 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -2-209 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -4-222 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -6-226 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -8-258 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | -9-146 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | -2-228 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -3-214 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -8-238 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | -2-268 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -8-170 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -10-258 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | -2-226 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | -2-232 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -4-236 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | -2-249 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -4-194 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | -12-208 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | -2-216 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -2-250 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | -3-320 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | -8-121 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | -1-155 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | -7-133 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | -11-144 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | -3-82 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | -9-120 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -10-70 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | -2-138 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -10-131 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | -3-166 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -4-113 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -9-179 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | -12-143 | | | | | | | | | | | | | | | |

② 住宅特集掲載作品について

次に住宅特集掲載作品における正方形プランのデザイン分析を行うが、扱う正方形プランは同誌創刊である1985年以降のデータであり、前述の新建築における正方形プラン（1947～2010）と同一期間ではない（表6）。

最初に面積規模における分析を行うが、前述の新建築掲載作品と同様に100㎡前後に集中しており、デザイン分析可能な全134作品中50～100㎡が61作品となっている。また新建築掲載作品に比して25～50㎡未満の小規模な提案が36作品見られる。これらは住宅特集における都市型狭小住宅の掲載数の多さとの対応が考えられる。一方で新建築掲載作品で3作品確認された25㎡以下の極小な提案が見られず、両誌における差異が見られるが、この3作品は極小空間における実験性が志向されており住宅の特殊解が新建築に掲載された事例であるといえる。また100～150㎡の住宅が25作品見られ、うち21作品が「間取り型」となっている。150㎡を超える作品において「間取り型」が減少し、150㎡超の全12作品中10作品が「入れ子型（中庭）」となっており、この150㎡が分水嶺となっている。このように150㎡を超える平面外形においては新建築掲載作品同様に「入れ子型（中庭）」が優位であるが、両者において平屋建てが多くなっている。特に1994年の「入れ子型（中庭）」（1994JT-12-145）は住宅特集掲載作品中において約450㎡と最大値を示している。また新建築掲載作品に比して多くの類型が見られるが、特に「入れ子型（空間接続）」は4作品存在し、その規模は25～50㎡（2006年）、50～100㎡（2005, 2007年）、100～150㎡（2007年）に確認される。（表6）

また新建築と新建築住宅特集という二誌に掲載される地上建築の多くに方位記号が確認され、公室の南面配置が原則となっており採光に配慮した「間取り型」が多数を占めているという共通性が見られる。初期の紙上建築、特に新建築懸賞において同様に南面採光の間取り型が多く見られるが、生活改善を目的としたLDKの一体化と南面配置傾向が強く見られることが北川氏らの既往研究^{注7)}によって明らかになっている。よって地上建築と初期の紙上建築には公室の南面配置傾向という同一性が認められる。

面積規模に関しては紙上建築において様々な規模の提案が見られるのに対し、住宅特集掲載作品では25～100㎡において多数を占めるという不同性が認められる。

以上本節により紙上建築と地上建築における種類の出現時期と規模等における同一性が確認された。また紙上建築において畳表現および公室の南面配置が重視されず、かつ駐車場を計画しないという意匠面における差異が確認されるなど、紙上建築と地上建築における同一性と不同性の存在が明らかとなった。

表6 住宅特集掲載作品における規模等比較表

| 掲載年 | 月 | 頁 | 掲載数 | 業表現 | 方位 | 駐車場 | 分析対象外 | 0㎡~ | 25㎡~ | 50㎡~ | 100㎡~ | 150㎡~ | 200㎡~ | 300㎡~ | 400㎡~ | 500㎡~ | 1000㎡~ |
|------|---|---|-----|-----|----|-----|--------|-----|------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|
| 1985 | | | | | | | | | | 回廊型 | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | 中庭型 | | | | | |
| 1987 | | | | | | | 主層非正方形 | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | 主層非正方形 | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | 回廊型 | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | | | 中庭型 | | 中庭型 | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | 独立型 | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | 空間独立 | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | 主層非正方形 | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | 主層非正方形 | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | | | | | | |

第四節 正方形プランの各類型におけるデザイン比較

次に紙上建築と地上建築における正方形プランのそれぞれの類型におけるデザイン分析を行うが、紙上建築と地上建築のいずれが先行して出現したか、並行同時出現したかという出現時期による分類の後、分析を行う。ただしここでいう並行同時とは設計期間や提案作成、着想の同時性ではなく、あくまで新建築二誌という限定されたメディアにおける同時期の作品発表年を指すものとする。

1) 間取り系正方形プランの比較分析

間取り系正方形プランの分析として内部空間を分割する間仕切り壁に着目し、図面表現として方位記号表記の有無、空間の分割パターンとしてリビング等公室位置と方位との関係性、そして面積規模を分析する。

「間取り型」

間取り型において公室が日照条件の良い位置に配置される南面優位の型式は全体の 60%を占めている(表 7)。紙上建築においても日射等に配慮した南面優位の型式として公室一面型(南面)が 2 案、公室一面型(東面)が 2 案、南面優位に関係しない型として公室貫通型(東西)が 1 案、一体型が 2 案確認されるが、前章で明らかになったように紙上建築において年次的に方位や採光の重要度が減じており、その応答として図面中に方位記号が明記されなくなる傾向が見られる。この傾向は「間取り型」においても同様であり、方位記号がなく縮尺率の表記も見られない提案が間取り型 14 案中 6 案確認される。これらは本節のデザイン分析対象から除外しているが、この点においてもアイデア・コンペ入選案における日照等の評価基準が減じているという変化が裏付けられている。

一方地上建築においては、住宅の方位等配置計画の重要性が維持されており(表 7)、南面優位の型式として公室一面型(南面)が 1950~2000 年代まで継続的に見られる。また公室を正方形隅部に配する型式として隅部型(南東)も同様に 1950~2000 年代まで継続的に見られる。このように地上建築の「間取り型」においてリビングダイニングなど公室を配置する南東面優位の顕著な傾向が見られるが、これらは紙上建築と地上建築における「間取り型」の意味的差異と捉えることができる。さらに前述のとおり、地上建築において「間取り型」が全数の約 8 割を占めており、対して紙上建築では 2 割に満たないことから両者における差異が類推されるが「間取り型」が採用された場合の面積規模として紙上建築の「間取り型」は最大値が 300 m²、地上建築の「間取り型」は最大値が 200 m²であり大きな差が見られない。このことから「間取り型」は紙上建築において現実に即した実現性の高い提案であると言える。

また「間取り型」の型式として多層の住宅において、一つの階層にリビング、ダイニング、キッチンが連続的に配される「一体型」が 1990 年代末から 2000 年代に多く出現しているが、この型式も住宅における方位の重要性の減少を表したものと考えられる。尚これらの作品は間仕切り壁が存在しない場合であっても、他の階層の諸室により機能を充足するという意味から正方形プランの類型としての「一室型」と別種の類型と定義している。

表7 間取り型におけるデザイン比較

| 型式 | 平面タイプ | 紙上建築 | 地上建築 | 出現分布 | |
|----------------------|-----------------------|-----------------------------|--|---|---|
| 一面型 36.6% (64) | 南面優位 23.4% (41) | 一面型(南面) 1952-5 1958-4 | 1952SK-7-12 1974SK-2-246 1953SK-11-25 1974SK-2-276 1953SK-6-68 1974SK-8-244 1962SK-5-93 1975SK-2-209 1962SK-7-155 1975SK-6-226 1962SK-10-146 1975SK-3-214 1965SK-2-252 1975SK-2-268 1972SK-8-214 1981SK-4-236 1972SK-2-258 1983SK-12-209 | 1983JT-8-191 1994JT-4-150 2004JT-4-119 1987JT-1-72 1990JT-11-73 2005JT-1-127 1987JT-4-138 1991JT-1-99 2008JT-11-92 1987JT-4-81 1990JT-8-55 2009JT-9-30 1987JT-10-113 1990JT-9-88 2010JT-2-126 1989JT-12-89 1998JT-11-123 1990JT-3-122 1999JT-2-149 1993JT-3-93 2000JT-5-99 | 1950 1951 1952 1953 1954 1955 1956 1957 1958 1959 1960 1961 1962 1963 1964 1965 1966 1967 1968 1969 1970 1971 1972 1973 1974 1975 1976 1977 1978 1979 1980 1981 1982 1983 1984 1985 1986 1987 1988 1989 1990 1991 1992 1993 1994 1995 1996 1997 1998 1999 2000 2001 2002 2003 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 |
| | 7.5% (13) | 一面型(東面) 1958-7 2003-5 | 1972SK-8-220 1979SK-10-258 | 1989JT-3-129 1993JT-8-54 1993JT-11-108 1993JT-4-123 1997JT-12-143 2001JT-11-91 2007JT-7-66 | 1950 1951 1952 1953 1954 1955 1956 1957 1958 1959 1960 1961 1962 1963 1964 1965 1966 1967 1968 1969 1970 1971 1972 1973 1974 1975 1976 1977 1978 1979 1980 1981 1982 1983 1984 1985 1986 1987 1988 1989 1990 1991 1992 1993 1994 1995 1996 1997 1998 1999 2000 2001 2002 2003 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 |
| | 1.1% (2) | 一面型(北面) | | 1989JT-11-63 1993JT-10-105 | 1950 1951 1952 1953 1954 1955 1956 1957 1958 1959 1960 1961 1962 1963 1964 1965 1966 1967 1968 1969 1970 1971 1972 1973 1974 1975 1976 1977 1978 1979 1980 1981 1982 1983 1984 1985 1986 1987 1988 1989 1990 1991 1992 1993 1994 1995 1996 1997 1998 1999 2000 2001 2002 2003 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 |
| 二面型 9% (15) | 北面優位 4.6% (8) | 一面型(西面) | 1953SK-6-18 1965SK-5-181 1971SK-1-254 1982SK-4-194 | 2004JT-6-55 2008JT-5-85 2008JT-11-107 | 1950 1951 1952 1953 1954 1955 1956 1957 1958 1959 1960 1961 1962 1963 1964 1965 1966 1967 1968 1969 1970 1971 1972 1973 1974 1975 1976 1977 1978 1979 1980 1981 1982 1983 1984 1985 1986 1987 1988 1989 1990 1991 1992 1993 1994 1995 1996 1997 1998 1999 2000 2001 2002 2003 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 |
| | 2.9% (5) | 一面型(南西) | 1954SK-10-44 1975SK-2-156 | 1991JT-7-137 2005JT-11-117 2006JT-11-113 | 1950 1951 1952 1953 1954 1955 1956 1957 1958 1959 1960 1961 1962 1963 1964 1965 1966 1967 1968 1969 1970 1971 1972 1973 1974 1975 1976 1977 1978 1979 1980 1981 1982 1983 1984 1985 1986 1987 1988 1989 1990 1991 1992 1993 1994 1995 1996 1997 1998 1999 2000 2001 2002 2003 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 |
| | 2.9% (5) | 一面型(北東) | 1977SK-6-238 | 1989JT-11-130 2005JT-6-57 2007JT-10-113 2010JT-6-76 | 1950 1951 1952 1953 1954 1955 1956 1957 1958 1959 1960 1961 1962 1963 1964 1965 1966 1967 1968 1969 1970 1971 1972 1973 1974 1975 1976 1977 1978 1979 1980 1981 1982 1983 1984 1985 1986 1987 1988 1989 1990 1991 1992 1993 1994 1995 1996 1997 1998 1999 2000 2001 2002 2003 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 |
| 隅部型 19.4% (34) | 南面優位 9.1% (16) | 隅部型(南東) | 1957SK-5-61 1960SK-3-66 1963SK-10-175 1971SK-1-254 1976SK-8-170 1981SK-2-232 1986SK-2-250 | 1986JT-6-103 2007JT-1-153 1993JT-10-134 1995JT-4-153 1997JT-1-45 1997JT-10-150 1999JT-3-46 2003JT-2-129 2005JT-9-63 | 1950 1951 1952 1953 1954 1955 1956 1957 1958 1959 1960 1961 1962 1963 1964 1965 1966 1967 1968 1969 1970 1971 1972 1973 1974 1975 1976 1977 1978 1979 1980 1981 1982 1983 1984 1985 1986 1987 1988 1989 1990 1991 1992 1993 1994 1995 1996 1997 1998 1999 2000 2001 2002 2003 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 |
| | 6.3% (11) | 隅部型(南西) | 1955SK-11-59 1957SK-3-37 1966SK-3-62 1966SK-1-132 1972SK-8-198 | 1987JT-6-131 1988JT-10-46 1989JT-1-169 1997JT-6-121 1997JT-11-148 2004JT-2-75 | 1950 1951 1952 1953 1954 1955 1956 1957 1958 1959 1960 1961 1962 1963 1964 1965 1966 1967 1968 1969 1970 1971 1972 1973 1974 1975 1976 1977 1978 1979 1980 1981 1982 1983 1984 1985 1986 1987 1988 1989 1990 1991 1992 1993 1994 1995 1996 1997 1998 1999 2000 2001 2002 2003 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 |
| | 1.1% (2) | 隅部型(北西) | 2008SK-10-70 | 2005JT-3-153 | 1950 1951 1952 1953 1954 1955 1956 1957 1958 1959 1960 1961 1962 1963 1964 1965 1966 1967 1968 1969 1970 1971 1972 1973 1974 1975 1976 1977 1978 1979 1980 1981 1982 1983 1984 1985 1986 1987 1988 1989 1990 1991 1992 1993 1994 1995 1996 1997 1998 1999 2000 2001 2002 2003 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 |
| 挿入型 8.6% (15) | 北面優位 2.9% (5) | 隅部型(北東) | 1964SK-4-154 1975SK-4-222 2007SK-3-82 | 1987JT-7-69 2001JT-1-80 | 1950 1951 1952 1953 1954 1955 1956 1957 1958 1959 1960 1961 1962 1963 1964 1965 1966 1967 1968 1969 1970 1971 1972 1973 1974 1975 1976 1977 1978 1979 1980 1981 1982 1983 1984 1985 1986 1987 1988 1989 1990 1991 1992 1993 1994 1995 1996 1997 1998 1999 2000 2001 2002 2003 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 |
| | 3.4% (6) | 普通型(南北) | 2005-2 1960SK-6-67 1974SK-8-234 | 1987JT-5-173 1991JT-9-53 2007JT-2-120 | 1950 1951 1952 1953 1954 1955 1956 1957 1958 1959 1960 1961 1962 1963 1964 1965 1966 1967 1968 1969 1970 1971 1972 1973 1974 1975 1976 1977 1978 1979 1980 1981 1982 1983 1984 1985 1986 1987 1988 1989 1990 1991 1992 1993 1994 1995 1996 1997 1998 1999 2000 2001 2002 2003 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 |
| | 1.3% (4) | 挿入型(南北) | 1980SK-2-226 2001SK-1-155 | 1992JT-1-73 2006JT-3-40 | 1950 1951 1952 1953 1954 1955 1956 1957 1958 1959 1960 1961 1962 1963 1964 1965 1966 1967 1968 1969 1970 1971 1972 1973 1974 1975 1976 1977 1978 1979 1980 1981 1982 1983 1984 1985 1986 1987 1988 1989 1990 1991 1992 1993 1994 1995 1996 1997 1998 1999 2000 2001 2002 2003 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 |
| 一体型 23.4% (41) | 南面優位 9.1% (16) | 連続型 | 1976-1 1970SK-2-224 1982SK-2-269 2000SK-8-121 2009SK-10-113 | 1990JT-10-92 2004JT-10-125 1992JT-9-46 2003JT-2-77 1995JT-10-155 2005JT-11-70 1998JT-5-103 2007JT-12-44 2002JT-7-85 2002JT-12-110 2004-2-137 | 1950 1951 1952 1953 1954 1955 1956 1957 1958 1959 1960 1961 1962 1963 1964 1965 1966 1967 1968 1969 1970 1971 1972 1973 1974 1975 1976 1977 1978 1979 1980 1981 1982 1983 1984 1985 1986 1987 1988 1989 1990 1991 1992 1993 1994 1995 1996 1997 1998 1999 2000 2001 2002 2003 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 |
| | 1.2% (2) | 全周型 | 1981-16 1974SK-2-269 2010SK-4-113 | 1997JT-7-53-2 | 1950 1951 1952 1953 1954 1955 1956 1957 1958 1959 1960 1961 1962 1963 1964 1965 1966 1967 1968 1969 1970 1971 1972 1973 1974 1975 1976 1977 1978 1979 1980 1981 1982 1983 1984 1985 1986 1987 1988 1989 1990 1991 1992 1993 1994 1995 1996 1997 1998 1999 2000 2001 2002 2003 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 |
| | 1.7% (3) | 挿入型(東西) | 1966SK-9-190 | 2003JT-2-92 2004JT-12-49 | 1950 1951 1952 1953 1954 1955 1956 1957 1958 1959 1960 1961 1962 1963 1964 1965 1966 1967 1968 1969 1970 1971 1972 1973 1974 1975 1976 1977 1978 1979 1980 1981 1982 1983 1984 1985 1986 1987 1988 1989 1990 1991 1992 1993 1994 1995 1996 1997 1998 1999 2000 2001 2002 2003 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 |
| 分散型 1.1% (2) | 0.5% (1) | 中央型 | 1991JT-8-134 | | 1950 1951 1952 1953 1954 1955 1956 1957 1958 1959 1960 1961 1962 1963 1964 1965 1966 1967 1968 1969 1970 1971 1972 1973 1974 1975 1976 1977 1978 1979 1980 1981 1982 1983 1984 1985 1986 1987 1988 1989 1990 1991 1992 1993 1994 1995 1996 1997 1998 1999 2000 2001 2002 2003 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 |
| | 0.5% (1) | 分離型 | | 2007JT-6-100 | 1950 1951 1952 1953 1954 1955 1956 1957 1958 1959 1960 1961 1962 1963 1964 1965 1966 1967 1968 1969 1970 1971 1972 1973 1974 1975 1976 1977 1978 1979 1980 1981 1982 1983 1984 1985 1986 1987 1988 1989 1990 1991 1992 1993 1994 1995 1996 1997 1998 1999 2000 2001 2002 2003 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 |
| 175 | 分析対象外 | | 1988JT-12-73 | 凡例 | 1950 1951 1952 1953 1954 1955 1956 1957 1958 1959 1960 1961 1962 1963 1964 1965 1966 1967 1968 1969 1970 1971 1972 1973 1974 1975 1976 1977 1978 1979 1980 1981 1982 1983 1984 1985 1986 1987 1988 1989 1990 1991 1992 1993 1994 1995 1996 1997 1998 1999 2000 2001 2002 2003 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 |

※番号は掲載誌を示す
掲載年,掲載誌-掲載年-掲載頁

2) 非間取り系正方形プランの比較分析

① 地上建築と紙上建築の並行同時性を有する類型

「独立壁型」

地上建築と紙上建築において同時期に掲載される類型として、1995年に出現する「独立壁型」があげられる。紙上建築における「独立壁型」は正方形の一室空間に少数の壁が自立、あるいは多数の壁が集合している。居住可能性が低く具体的な住宅設備を伴わない場合もあり、迷路状の平面となるケースも見られる。また紙上建築において2階建ても1案(2007-2)見られる。一方地上建築における「独立壁型」は壁によって生まれる閉鎖空間に住宅設備を配しており住宅としての機能が充足されている(表8)。

② 地上建築において限定出現する類型

紙上建築において出現が確認されず、地上建築のみに見られる「回廊型」についてのデザイン分析を行う。

「回廊型」

回廊型は1959, 1985, 1991年の新建築誌において計4作品確認される。面積規模はそれぞれ100㎡未満が3作品、50㎡未満が1作品であり小規模の正方形外形となっている。いずれも周囲に幅900~1200mm程度の廊下若しくは斜路が設けられており、中央部は公室を主とした空間となっている(表9)。

表8 独立壁型におけるデザイン比較

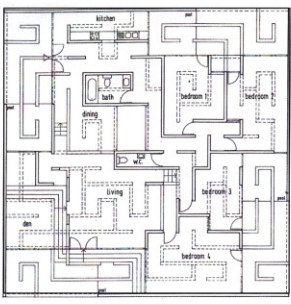
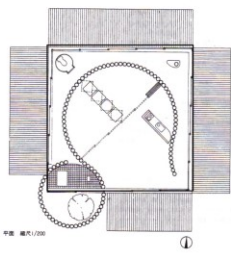


| 紙上建築 S=1/300 | 地上建築 S=1/300 |
|---|--|
| 1995-7  | 1995JT-12-67  |
| 2007-2  | |
| 2010-8 NO SCALE  | |

表9 回廊型

| 地上建築 S=1/200 | | | |
|--|--|--|---|
| 1959SK-1-70  | 1985JT-秋-62  | 1991SK-3-320  | 1991JT-12-86  |

③ 地上建築において先行出現する類型

地上建築の出現初年が、紙上建築に先行する非間取り系正方形プランとして「格子型」「入れ子型(空間独立)」「入れ子型(中庭)」についてのデザイン分析を行う。

「格子型」

格子型は地上建築において 1968 年(1968SK-5-196)に初出し、紙上建築では 1986 年(1986-01, 1986-07)に出現が確認される。地上建築において全 6 案の格子型のうち 2×2 の格子が 4 案、3×3 の格子が 2 案見られる。紙上建築における格子型は新建築競技 1986 に見られる 300 フィートの立方体を例外として、戸建住宅において 2×2 の格子が見られ、4 つの空間にそれぞれ独立した機能が与えられている(表 10)。また図面表現が見られず空間表現のみで立体的なフレームによる格子が表現される提案も見られる。

「入れ子型(空間独立)」

「入れ子型(空間独立)」は地上建築において 1954 年(1954-11-51)に初出し、紙上建築では新建築競技 1972 入選案(1972-8)に出現が確認される。この類型における入れ子内部の機能を分析すると、地上建築では便所、浴室、キッチンなどの水回りを設備機能のコアとして扱う作品が多く見られ、居室を有する入れ子は存在しない(表 11)。一方紙上建築では入れ子内部を寝室などの居室とする傾向が見られ、住居全体を入れ子とする提案(1997-02)も見られる。

また入れ子空間の平面形状として矩形が多数見られるが、紙上建築では矩形以外の入れ子空間も見られ「円形」「コの字」など自由度が高い。入れ子の個数について紙上建築では複数の入れ子空間を有する提案が多く見られ、新建築競技 1972 入選案(1972-8)では 5 つの入れ子空間が確認される。一方地上建築では単数の入れ子空間が主となっている。

なお住宅設備等を集約したコア状の空間が存在しながらも、それらが間仕切壁により接続するなど入れ子空間の独立性が低い正方形プランをこの類型から除外し「間取り型」と定義している。

「入れ子型(中庭)」

この類型における中庭の定義として、正方形外形の内側に存在する外部空間全般を中庭と称しており、正方形外形に対して内側に入れ子状の中庭が配置される「抜き取り型」と正方形外形と接続し、外周の空間と連続した庭を形成する「切り欠き型」という二種の類型が見られる。

「入れ子型(中庭)」は地上建築において 1969 年(1969SK-8-209)に初出し計 17 案が確認される。一方紙上建築では 1976 年(1976-22)に初出し 8 案が確認される。また地上建築の 17 案中 10 案、紙上建築の 8 案中 2 案が平屋であり地上建築において平屋が優位である。正方形の面積規模として地上建築の約 68～770 m²、紙上建築の約 60～870 m²と両者とも幅広い面積規模となっている。中庭の型式として地上建築では「切り欠き型」が 17 案中 9 案と過半を占め、紙上建築では「抜き取り型」が 8 案中 6 案見られ「切り欠き型」が少数である。中庭の形状として正方形の中庭を持つ型式が紙上建築において 5 案、地上建築において 3 案見られ、円形の中庭は紙上建築において 2 案のみ見られる。複数の中庭空間を持つ提案も見られ紙上建築では 2004 年の入選案において 5 つの中庭が見られる(表 12)。

表 10 格子型におけるデザイン比較

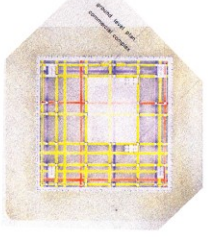
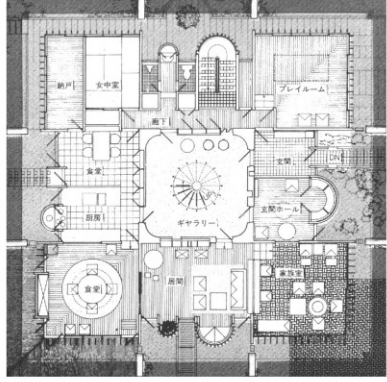
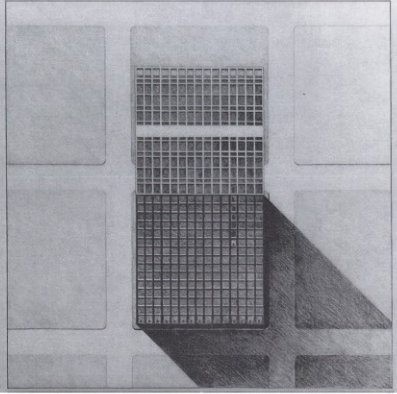
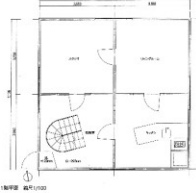
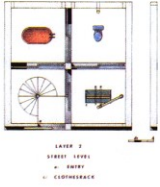

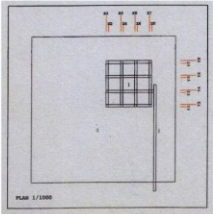
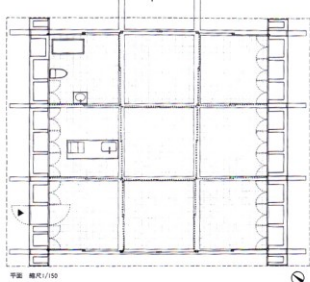


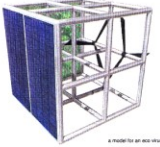
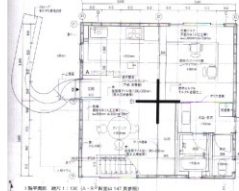
| 紙上建築 平面表現 | 地上建築 S=1/200 平面表現 |
|--|---|
| <p>作品番号 1986-01 S=1/3000</p>  | <p>作品番号 1968SK-5-196</p>  |
| <p>1986-07 S=1/3000</p>  | <p>2010SK-3-166</p>  |
| <p>1991-17 S=1/200</p>  | <p>1994JT-4-150</p>  |
| <p>1995-4 NO SCALE</p>  | <p>1998JT-5-89</p>  |
| <p>2000-02 NO SCALE</p>  | <p>2005JT-4-57</p>  |
| <p>2003-03 NO SCALE</p>  | <p>2009JT-7-145</p>  |

表 11 入れ子型（空間独立）におけるデザイン比較

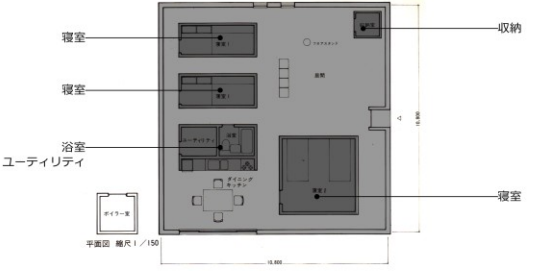
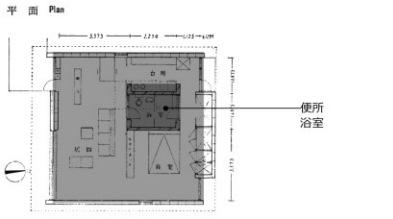
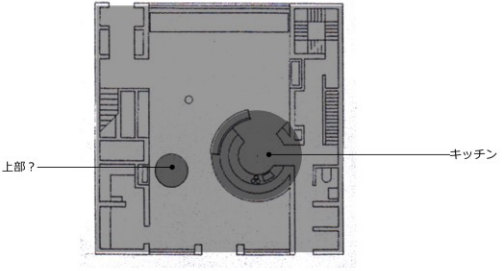
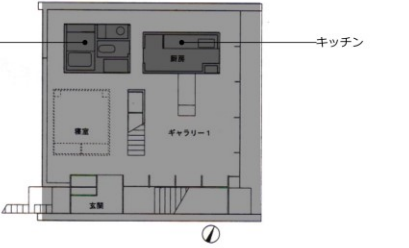
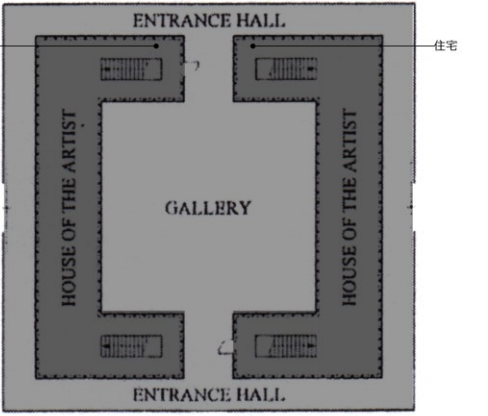
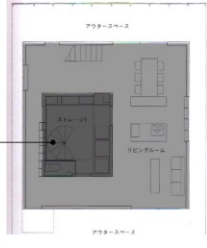
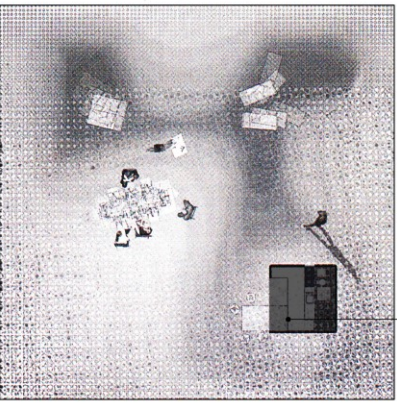

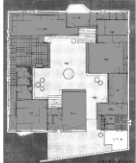
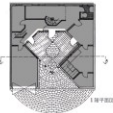



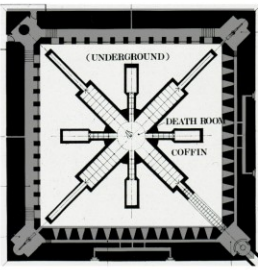






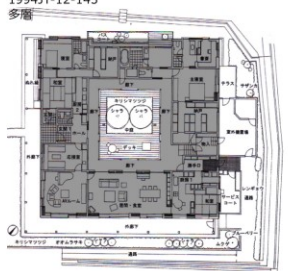
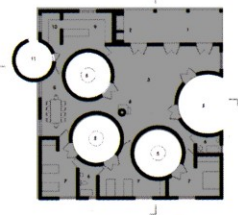




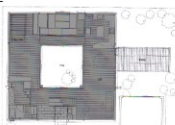
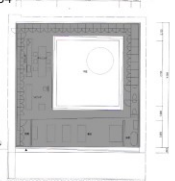


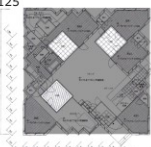
| 紙上建築 S=1/200 平面表現 | 地上建築 S=1/200 平面表現 |
|---|--|
| <p>作品番号 1972-8</p>  <p>①</p> | <p>作品番号 1954SK-11-51</p>  <p>⑤</p> |
| <p>1987-18</p>  <p>②</p> | <p>1996JT-8-107</p>  <p>⑥</p> |
| <p>1997-02</p>  <p>③</p> | <p>2004JT-5-77</p>  <p>⑦</p> |
| <p>2006-05</p>  <p>④</p> | |

表 12 入れ子型（中庭）におけるデザイン比較

| 紙上建築 S=1/500 平面表現 | | 地上建築 S=1/500 平面表現 | |
|----------------------|---|----------------------|---|
| 1976-22 平屋 |  | 1969SK-8-209 平屋 |  |
| 1977-07 多層 |  | 1976SK-9-146 多層 |  |
| 1980-16 平屋 |  | 2002SK-7-133 平屋 |  |
| 1981-2 多層 |  | 1986JT-5-76 多層 |  |
| 1981-20 多層 |  | 1987JT-8-34 平屋 |  |
| 1998-13 多層 |  | 1994JT-8-30 平屋 |  |
| 2004-06 多層 |  | 1994JT-12-145 多層 |  |
| 2004-12 平屋 |  | 1998JT-11-148 多層 |  |
| | | 1998JT-12-59 多層 |  |
| | | 2000JT-1-99 平屋 |  |
| | | 2005JT-11-87 平屋 |  |
| | | 2006JT-10-32 平屋 |  |
| | | 2007JT-9-54 平屋 |  |
| | | 2009JT-9-116 多層 |  |
| | | 2009JT-12-95 多層 |  |
| | | 2010JT-7-125 平屋 |  |

④ 紙上建築において限定出現する類型

地上建築において出現が確認されず、紙上建築のみで見られる非間取り系として「外周諸室型」「一室型」「複数選択型」があげられる。ここでは正方形外形が単数である「外周諸室型」と「一室型」についてのデザイン分析を行う。「複数選択型」についてはデザイン分析対象外であるが参考の考察のみ記述する。

「外周諸室型」

新建築競技1986「300/300/300」において外周諸室型の正方形プランが多数確認される。この競技では要項文中で300フィートの立方体空間をデザインすることが求められるなど設計条件としての面積規模が大きく、建築内部に都市的様相を求める特殊な課題であり、その回答として立方体ヴォリューム内部にアトリウムが設けられる提案が多数見られる。一方実作、住宅建築として成立させる場合には、周囲に室配置しながら中央部に吹き抜けを設けるなど小規模な住宅において展開が困難な型式となっており地上建築では見られない類型である(表13)。

「一室型」

住宅設備としてのキッチン、浴室、便所等が表記されているが壁によって閉鎖した室空間を有していない。このようにプライバシーの確保など住宅としての居住可能性が確保されず、一般的な住宅の機能を目的としていない提案が一室型において多数見られる。このような提案には平面図中に縮尺率が表現されず採光方法のみが提示されるなど内部空間における限定的な現象のみを表現しており、住宅を志向していない提案も見られる。また新建築競技2009における「一室型」の入選案は本研究の対象期間における全ての正方形プランの中で最大床面積であり1000㎡を超えている。このような正方形プランは戸建住宅でありながら面積過大といえ住宅設備を有しながらも間仕切壁等が排除された実現困難、居住困難な提案となっている(表14)。なお多層の正方形プランにおいて一つの階層が一室空間であっても、他の階層に住宅機能が分散配置されている類型を一室型から除外し間取り型に算入している。

参考(デザイン分析対象外)

「複数選択型」

正方形という同一外形を保持しながら、内部空間において住宅設備など図面記号の配置配列により多種多様なプランが提示され、居住者がその組み合わせの中から任意に選択するというソフト提案が見られる。微細な差異をもつダイアグラムのような平面図が複数提示され、立断面が見られないという傾向を持つ。このように複数選択型は提案を固定化させず、かつ建築の形状が提示されないなど地上建築では成立困難な類型となっている。

以上、紙上建築において限定出現する上記3種「外周諸室型」「一室型」「複数選択型」の類型は地上建築に求められる住環境との意味的差異が大きく、紙上建築でのみ表現、提案可能な形式といえる。

表 13 外周諸室型

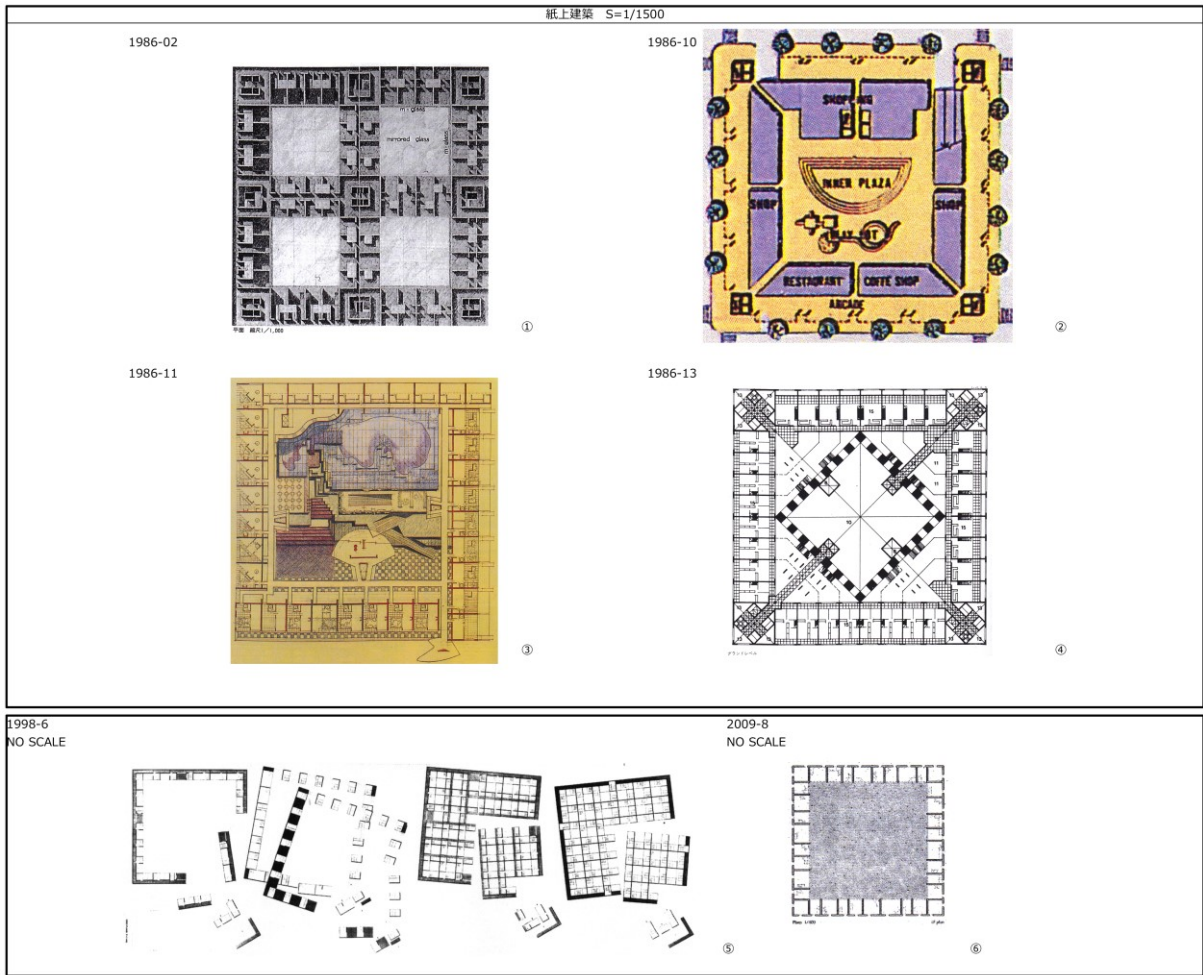
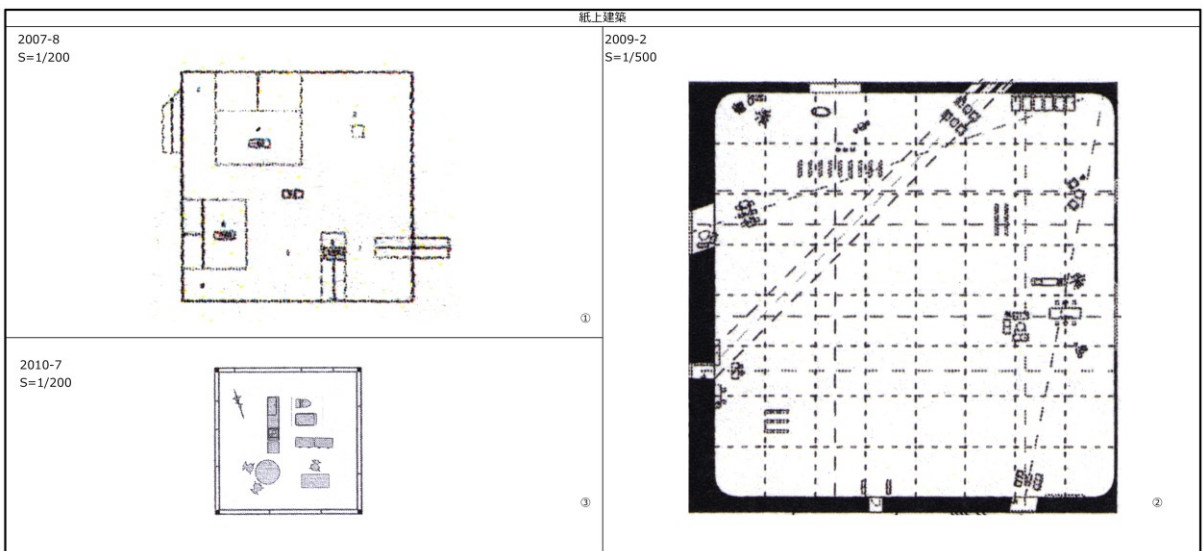


表 14 一室型



⑤ 紙上建築において先行出現する類型

紙上建築が地上建築に先行して出現するなどの先進性を示す正方形プランとして「複数配置型」と「入れ子型(空間接続)」があげられる。ここでは正方形外形が単数である「入れ子型(空間接続)」についてのデザイン分析を行う。「複数配置型」についてはデザイン分析対象外であるが参考の考察のみ記述する。

「入れ子型(空間接続)」

「入れ子型(空間接続)」は紙上建築において1991年に初出し、その後1994, 1997, 2004年にも確認される。地上建築においても2000年代に半ば以降に多くの出現が確認され、紙上建築が10年以上先行して出現する類型である。また紙上建築における4作品中の全て、地上建築における6作品中5作品が多層で構成される立体的な提案となっており、紙上建築の全てにおいて立方体ヴォリュームとなっている。特に紙上建築における3案

(1994-9, 1997-3, 2004-5)では立方体ヴォリュームに立方体の入れ子空間が包含されている。デザイン分析対象外ではあるが、縮尺率を持つ平面図、公室の有無も確認できず、立体表現として断面図のみを中心に提案が構成されるケースが複数確認される。このように紙上建築の「入れ子型(空間接続)」において平面表現より立体表現が重視されている傾向が見られ、立体空間への操作が志向されていることが伺える。連続する空間の形状として、初期には外周壁から外周壁へと連続する空間により接続する貫通型が多数みられるが、以降コア空間が現れ、次いで自由曲線による空間の接続が見られるようになる(図15)。なお、ここで示している「空間」とは前章第四節3)③入れ子型(空間接続)で述べているように内部外部空間の別ではなく、あくまで正方形外形の内側に位置する入れ子状の領域と捉えている。

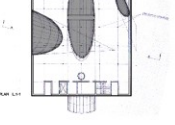
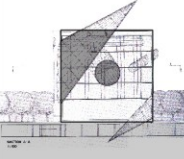


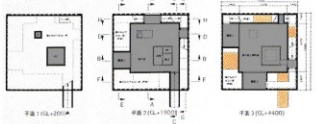



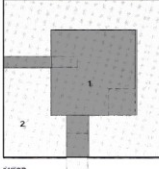
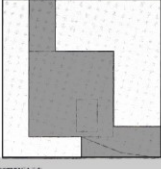


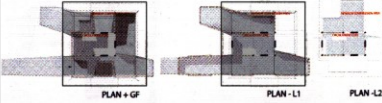
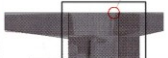





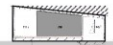

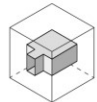
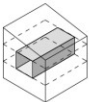

参考(デザイン分析対象外)

「複数配置型」

複数配置型に関しては、配置された各々のプランタイプの分析ではなく正方形外形の配列方式に着目し分析するものとする。同形状の正方形外形を整列配置する提案や渡り廊下等で軽微に接続する形式が見られるが、2000年代に入り各正方形外形が傾斜角度を持ちながら配置される作品が多く見られる。また正方形同士が点で接しながら複数配置される作品、さらに正方形以外の矩形を伴いながら複数の正方形外形が配置される形式も見られる。

本節のまとめとして、紙上建築と地上建築における正方形プランのデザイン分析から、同一の類型において意味内容の差異が見られる。さらに「入れ子型(空間接続)」のように紙上建築において先進、実験性を有するプランタイプの存在が明らかになり、紙上建築が実現可能性と実現不可能性を含みながらも実験的プランタイプを志向するという両義性が伺える。

表 15 入れ子型（空間接続）におけるデザイン比較

| 紙上建築 S=1/500 | | 地上建築 S=1/500 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|--|---|---------------|---|--|-----|---|-----|---|------|-----|---|-----|---|------|---|----|----|---|----|---|----|---|--------|---|---|--|--|--|
| 作品番号 | 平面表現 | 立体表現 | 作品番号 | 平面表現 | 立体表現 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1991-20 |  | 貫通型立方体  | 2005JT-9-56 |  | コア型勾配屋根  | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1994-9 |  | コア型立方体  | 2005SK-11-144 |  | 貫通型直方体  | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 1997-3 |  | コア型立方体  | 2006JT-2-75 |  | 貫通型直方体  | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2004-5 |  | コア型立方体  | 2007JT-1-111 |  | コア型直方体  | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 参考 2000-13 NO SCALE |  | コア型直方体  | 2007JT-2-115 |  | コア型勾配屋根  | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 入れ子型（空間接続）における紙上建築と地上建築の比較 | | 2010SK-12-143 | | 貫通型直方体  | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|  | <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>紙上建築</th> <th>地上建築</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">入れ子の形状</td> <td>貫通型</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>コア型</td> <td>3</td> </tr> <tr> <td rowspan="3">全体形状</td> <td>立方体</td> <td>4</td> </tr> <tr> <td>直方体</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>勾配屋根</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td rowspan="4">階層</td> <td>1階</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>2階</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>3階</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>複数レベル床</td> <td>4</td> </tr> </tbody> </table> | | 紙上建築 | 地上建築 | 入れ子の形状 | 貫通型 | 1 | コア型 | 3 | 全体形状 | 立方体 | 4 | 直方体 | 0 | 勾配屋根 | 0 | 階層 | 1階 | 0 | 2階 | 0 | 3階 | 0 | 複数レベル床 | 4 |  |  | | |
| | 紙上建築 | 地上建築 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 入れ子の形状 | 貫通型 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | コア型 | 3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 全体形状 | 立方体 | 4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 直方体 | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 勾配屋根 | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 階層 | 1階 | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 2階 | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 3階 | 0 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 複数レベル床 | 4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

第五節 要約

本章では新建築誌における紙上建築と地上建築における正方形プランの出現動向、類型変遷等双方の対応関係、紙上建築の先進性の有無とアイデア・コンペの意義の一端が確認された。

尚当該期間である戦後日本における建築デザイン全体を論ずるものではなく「新建築」という限定された情報源に掲載される紙上建築と地上建築において、同一形状のプランの比較によりデザイン潮流の一端を考察するものである。以下に本研究で得られた知見を以下にまとめる。

知見の一つは「紙上建築と地上建築に見られる正方形プラン転換期、展開期における同一性」である。紙上建築と地上建築における出現動向として1952年という正方形プランの出現初年、1970年代と2000年代という正方形プラン占有率のピークなどの同時性が見られる。さらに地上建築において2000年代に入り「間取り型」以外の多様な形式の正方形プランが高い占有率で掲載されており、この期間2000～2010年を「地上建築における正方形プラン展開期」と定義することができる。

二つ目の知見は「紙上建築と地上建築に見られる類型出現時期、意匠面における不同性」である。地上建築において50㎡前後の提案が多く見られる一方、紙上建築では25～1000㎡という広範囲の面積規模が見られ、かつ類型も多様に展開している。また方位記号、畳表現、駐車場表現が地上建築に比して見られず、双方の差異が確認された。また紙上建築において「間取り型」は78作品中15案に留まるが、地上建築において83作品中71作品を占め、地上建築における間取り型の優位性が確認される。前述のとおり2000年代という地上建築の展開期において多様な類型が見られるようになるが、紙上建築の先進性を表出するプランタイプとして「入れ子型(空間接続)」「複数配置型」の2種が確認される。また「外周諸室型」「複数選択型」「一室型」の3種については地上建築においてその実作例が見られず紙上建築の実験性を表出するプランタイプと言える。

以上により紙上建築と地上建築に見られる同一性と不同性、「空間接続型」に見られる先進・実験性が明らかになった。紙上建築と地上建築において転換・展開期等の同一性が見られる一方、類型の出現時期、意匠面等の差異などの不同性が認められ、特に紙上建築の先進・実験性が見られる類型として「空間接続型」が確認される。

注

- 注1) 本論文序論に既出のとおり「地上建築」とは筆者による造語である。
- 注2) 「から傘の家」(1962), 「土間の家」(1964), 「白の家」(1967), 「未完の家」(1971), 「篠さんの家」(1971)
- 注3) 「新建築1970年8月号」新建築社, 1970, pp111
- 注4) 「新建築1952年7月号」新建築社, 1952, pp12 「最小限住宅の試作」
- 注5) 「新建築1978年1月号」新建築社, 1978, pp130において「これは10年前の吉村順三氏による新建築住宅設計競技の基盤でもあった」と述べられ、応募規程において各家族が1~2台の車を便利に駐車できるものとするのが明記されている。
- 注6) 自動車検査登録情報協会ホームページより引用
- 注7) 北川圭子、大垣直明「わが国における戦後住様式成立過程に関する研究-戦後復興期の新建築誌コンペ入選作の平面タイプについて」日本建築学会計画系論文集、2004. 6, pp153-159

图版出典

- 図 1-① 『新建築 1962 年 10 月号』新建築社、1962. 10、pp. 146
- 図 1-② 『新建築 1964 年 4 月号』新建築社、1964. 4、pp. 154
- 図 1-③ 『新建築 1967 年 7 月号』新建築社、1967. 7、pp. 117
- 図 1-④ 『新建築 1971 年 1 月号』新建築社、1971. 1、pp. 254
- 図 1-⑤ 『新建築 1971 年 1 月号』新建築社、1971. 1、pp. 254
- 図 2 『新建築 1967 年 7 月号』新建築社、1967. 7、pp. 117
- 図 3-① 『新建築 1952 年 11 月号』新建築社、1952. 11、pp. 514
- 図 3-② 『新建築 1958 年 11 月号』新建築社、1958. 11、pp. 48
- 図 3-③ 『新建築 1981 年 12 月号』新建築社、1981. 12、pp. 170
- 図 3-④ 『新建築 1981 年 12 月号』新建築社、1981. 12、pp. 163
- 表 8-図① 『JA 1995-4 ANNUAL』新建築社、1995. 4、pp. 215
- 表 8-図② 『新建築 2007 年 12 月号』新建築社、2007. 12、pp. 71
- 表 8-図③ 『住宅特集 1995 年 12 月号』新建築社、1995. 12、pp. 67
- 表 8-図④ 『新建築 2011 年 3 月号』新建築社、2011. 3、pp. 48
- 表 9-図① 『新建築 1959 年 1 月号』新建築社、1959. 1、pp. 70
- 表 9-図② 『住宅特集 1985 年秋号』新建築社、1985. 10、pp. 62
- 表 9-図③ 『新建築 1991 年 3 月号』新建築社、1991. 3、pp. 320
- 表 9-図④ 『住宅特集 1991 年 12 月号』新建築社、1991. 12、pp. 86
- 表 10-図① 『JA 1992-1 ANNUAL』新建築社、1992. 1、pp. 58
- 表 10-図② 『新建築 1987 年 1 月号』新建築社、1987. 1、pp. 274
- 表 10-図③ 『新建築 1987 年 1 月号』新建築社、1987. 1、pp. 263
- 表 10-図④ 『JA 1995-4 ANNUAL』新建築社、1995. 4、pp. 208
- 表 10-図⑤ 『新建築 2000 年 12 月号』新建築社、2000. 12、pp. 66
- 表 10-図⑥ 『新建築 2003 年 12 月号』新建築社、2003. 12、pp. 59
- 表 10-図⑦ 『新建築 1968 年 5 月号』新建築社、1968. 5、pp. 196
- 表 10-図⑧ 『新建築 2010 年 3 月号』新建築社、2010. 3、pp. 166
- 表 10-図⑨ 『住宅特集 1994 年 4 月号』新建築社、1994. 4、pp. 150
- 表 10-図⑩ 『住宅特集 1998 年 5 月号』新建築社、1998. 5、pp. 89
- 表 10-図⑪ 『住宅特集 2005 年 4 月号』新建築社、2005. 4、pp. 57
- 表 10-図⑫ 『住宅特集 2009 年 7 月号』新建築社、2009. 7、pp. 145
- 表 11-図① 『新建築 1972 年 7 月号』新建築社、1972. 7、pp. 166
- 表 11-図② 『住宅特集 1988 年 1 月号』新建築社、1988. 1、pp. 40
- 表 11-図③ 『JA YEARBOOK 1997』新建築社、1997、pp. 170
- 表 11-図④ 『新建築 2006 年 12 月号』新建築社、2006. 12、pp. 61

- 表 11-図⑤ 『新建築 1954 年 11 月号』新建築社、1954. 11、pp. 51
- 表 11-図⑥ 『住宅特集 1996 年 8 月号』新建築社、1996. 8、pp. 107
- 表 11-図⑦ 『住宅特集 2004 年 5 月号』新建築社、2004. 5、pp. 77
- 表 12-図① 『新建築 1976 年 11 月号』新建築社、1976. 11、pp. 183
- 表 12-図② 『新建築 1977 年 12 月号』新建築社、1977. 12、pp. 149
- 表 12-図③ 『新建築 1980 年 12 月号』新建築社、1980. 12、pp. 176
- 表 12-図④ 『新建築 1981 年 12 月号』新建築社、1981. 12、pp. 135
- 表 12-図⑤ 『新建築 1981 年 12 月号』新建築社、1981. 12、pp. 170
- 表 12-図⑥ 『JA YEARBOOK 1998』新建築社、1998、pp. 178
- 表 12-図⑦ 『新建築 2004 年 12 月号』新建築社、2004. 12、pp. 63
- 表 12-図⑧ 『新建築 2004 年 12 月号』新建築社、2004. 12、pp. 66
- 表 12-図⑨ 『新建築 1969 年 8 月号』新建築社、1969. 8、pp. 209
- 表 12-図⑩ 『新建築 1976 年 9 月号』新建築社、1976. 9、pp. 146
- 表 12-図⑪ 『新建築 2002 年 7 月号』新建築社、2002. 7、pp. 133
- 表 12-図⑫ 『住宅特集 1986 年 5 月号』新建築社、1986. 5、pp. 76
- 表 12-図⑬ 『住宅特集 1987 年 8 月号』新建築社、1987. 8、pp. 34
- 表 12-図⑭ 『住宅特集 1994 年 8 月号』新建築社、1994. 8、pp. 30
- 表 12-図⑮ 『住宅特集 1994 年 12 月号』新建築社、1994. 12、pp. 145
- 表 12-図⑯ 『住宅特集 1998 年 11 月号』新建築社、1998. 11、pp. 45
- 表 12-図⑰ 『住宅特集 1998 年 11 月号』新建築社、1998. 11、pp. 148
- 表 12-図⑱ 『住宅特集 1998 年 12 月号』新建築社、1998. 12、pp. 59
- 表 12-図⑲ 『住宅特集 2000 年 1 月号』新建築社、2000. 1、pp. 99
- 表 12-図⑳ 『住宅特集 2005 年 11 月号』新建築社、2005. 11、pp. 87
- 表 12-図 21 『住宅特集 2006 年 10 月号』新建築社、2006. 10、pp. 32
- 表 12-図 22 『住宅特集 2007 年 9 月号』新建築社、2007. 9、pp. 54
- 表 12-図 23 『住宅特集 2009 年 9 月号』新建築社、2009. 9、pp. 116
- 表 12-図 24 『住宅特集 2009 年 12 月号』新建築社、2009. 12、pp. 95
- 表 12-図 25 『住宅特集 2010 年 7 月号』新建築社、2010. 7、pp. 125
- 表 13-図① 『新建築 1987 年 1 月号』新建築社、1987. 1、pp. 264
- 表 13-図② 『新建築 1987 年 1 月号』新建築社、1987. 1、pp. 280
- 表 13-図③ 『新建築 1987 年 1 月号』新建築社、1987. 1、pp. 282
- 表 13-図④ 『新建築 1987 年 1 月号』新建築社、1987. 1、pp. 266
- 表 13-図⑤ 『JA YEARBOOK 1998』新建築社、1998、pp. 171
- 表 13-図⑥ 『新建築 2009 年 12 月号』新建築社、2009. 12、pp. 58

- 表 14-図① 『新建築 2007 年 12 月号』 新建築社、2007. 12、pp. 76
- 表 14-図② 『新建築 2009 年 12 月号』 新建築社、2009. 12、pp. 53
- 表 14-図③ 『新建築 2011 年 3 月号』 新建築社、2011. 3、pp. 48
- 表 15-図① 『JA 1992-1 ANNUAL』 新建築社、1992、pp. 64
- 表 15-図② 『JA 1995-1 ANNUAL』 新建築社、1995、pp. 226
- 表 15-図③ 『JA YEARBOOK 1997』 新建築社、1997、pp. 173
- 表 15-図④ 『新建築 2004 年 12 月号』 新建築社、2004. 12、pp. 62
- 表 15-図⑤ 『新建築 2000 年 12 月号』 新建築社、2000. 12、pp. 78
- 表 15-図⑥ 『住宅特集 2005 年 9 月号』 新建築社、2005. 9、pp. 56
- 表 15-図⑦ 『新建築 2005 年 11 月号』 新建築社、2005. 11、pp. 144
- 表 15-図⑧ 『住宅特集 2006 年 2 月号』 新建築社、2006. 2、pp. 75
- 表 15-図⑨ 『住宅特集 2007 年 1 月号』 新建築社、2007. 1、pp. 111
- 表 15-図⑩ 『住宅特集 2007 年 2 月号』 新建築社、2007. 2、pp. 115
- 表 15-図⑪ 『新建築 2010 年 12 月号』 新建築社、2010. 12、pp. 143

結論

結論

序論および第一章において、戦前の小住宅懸賞や建築展覧会懸賞競技として始まったアイデア・コンペは暗号の禁止など要項における変化を経ながら継続され、戦後の復興提案を目的とした新建築懸賞、そして新しい時代の住宅建築を模索する新建築競技へと発展していくが、特に1980年代後半に多くの競技が行われていたことが明らかになった。またアイデア・コンペは戦前戦後の建築機会の減少による代替行為として多くの建築家により取組まれており、その後活躍する建築家の登竜門、建築論の実践機会として機能していたことが明らかになった。

第一章において、二つの知見が得られた。知見の一つは「1965年というアイデア・コンペの起点」の定義である。戦前、戦中、戦後復興期に行われた社会背景に即したアイデア・コンペとは異なり、新たな建築像を探る意味合いを持ち、ワンマン・コンペという特異な型式として新建築競技1965が開始される。以降長期に渡り継続開催される競技が複数見られ、1965年をアイデア・コンペにおける起点と捉えることができる。二つ目の知見は「1980年代後半というアイデア・コンペ開催数ピーク」の存在である。戦後混乱期の住宅坪数制限下における最小限住宅提案募集として新建築懸賞から始まったアイデア・コンペは戦後復興後、高度経済成長そして東京五輪や万国博覧会などの開催を社会的背景として次第に開催が活発になる。その後の好景気に合わせアイデア・コンペの開催数も増加し、1990年前後の好景気、バブル経済期に合わせ企業主体の競技が多くなりアイデア・コンペの開催数が増加する。また海外からの審査員を迎えるなどアイデア・コンペの国際性が高まり、応募属性も国外者が増加する。以上第一章により、戦前-戦中-戦後におけるアイデア・コンペはそれぞれの社会的背景により開催され、戦前の住様式の啓蒙的役割、戦中の国威発揚、戦後の最小限住宅提案へと、その目的、機能を変化させていくが、高度経済成長期の1965年に単数の審査員による特異な型式として行われた新建築競技が起点となり、継続的かつ多様にアイデア・コンペが行われバブル経済期に多くのアイデア・コンペが開催されたことが明らかになった。

第二章ではアイデア・コンペの“要項-提案-講評”に着目し、要項における課題文章の変化(第二節)、提案内容の変遷(第三節)、講評における指摘点等(第四節)を分析し三つの知見を得た。知見の一つは1970~1973年に見られる「所要図面の変化と主題の変様」である。要項の所要図面に“平面図が要求されない”という大きな変化が1970年に見られる。その後1973年には所要図面が提案者の自由設定となり現在に至る。このような所要図面における自由度の高まりとともに、次第に建築的テーマが中心であった課題内容が変化し、1970年代半ばに都市的テーマが見られ始め、1980年代に増加する。その後1990年代に入り環境的テーマ、社会的テーマ、概念的テーマが増えるなど、テーマが多様化していく。二つ目の知見は1975年に見られる「非建築的回答の出現と提案の多様化」である。要項における所要図面の自由設定と主題の変様は、提案内容と作品のレイアウトに自由度を与える契機になったと考えられる。これらの変化に即応した新建築競技1975の最上位案は図面によらないポスター的なイメージ表現でありアイデア・コンペの提案における大きな変化といえる。以降、具体的な建築物によらない非建築的回答が増加し、2000年代には建築物以外の装置、道具、器具等を用いるプロダクティブ

提案が見られるなど提案内容が複雑多様化していく。提案表現の自由度が高まる一方で審査員により図面表現の重要性が問われている。三つ目の知見は1975～1979年に見られる「問題解決型から問題拡張型への課題形式の変化」である。設計条件が設定され具体的な所与の問題を解く問題解決型の課題形式は、審査員による建築教育批判とともに1970年代半ばから課題の意味的内容を具体的課題ではなく抽象的課題へと変化させていく。以降1980年代に入り、課題文章においても設計条件やビルディングタイプを設定しない抽象的回答を求める傾向が強まり、敷地条件、状況等を各自が設定し、提案者が問題を作成、拡張、再構築する問題拡張型へと移行していく。これらの要項における変化、提案における変化、課題形式の変化は独存する事象ではなく相互に関連しながら起こる変化であり、それぞれ1970年代に起こった変化という同時性が確認される。上記の知見をもとに1970年代をアイデア・コンペの転換期と定義する。初動期のアイデア・コンペは所与の問題を解く問題解決型の課題が主であったが、1970、73年に起こった要項の変化は提案表現の自由度を拡大した。この変化に即応した新建築競技1975の最上位案は図面表現によらないイメージ表現であり、以降の非建築的提案の増加を誘導していく。その後、設計条件やビルディングタイプ等を各自設定し、提案者が問題を作成、拡張する問題拡張型へと変化していく。以上のように1965年から2010年までのアイデア・コンペの流れを俯瞰すると初期段階である1970年代がアイデア・コンペの意味的内容が大きく変化する転換期となっていると推察される。

第三章において、特定のアイデア・コンペとして、住宅に主題を限定し長期間継続的に開催された「新建築コンペ」の要項と提案に着目し、作品体裁と提案表現の変化に伴うレイアウトの変様（第二節）、入選案における平面外形の変化（第三節）、特徴的プランである正方形プランのデザイン変遷（第四節）を論じ、以下二つの基礎的知見を得た。知見の一つは「作品体裁の変化に伴う図面表現の意味的变化」である。作品体裁において、縮尺率を定めた平面図を所要図面とする形式が変化し、新建築競技1970におけるアイソメの要求により表現方法が多様化していく。更に新建築競技1973以降、文章・空間・図面表現を適宜選択できる任意設定へと作品体裁が大きく変化する。これらの変化を受け、図面表現において方位の優位性が減少する。また、レイアウト面においても所要図面を提案用紙に個別配置する従来の形式が変化し、文章・空間・図面表現を総合的に扱うポスター的なレイアウトへと変様する傾向が見られる。二つ目の知見は「正方形外形の出現と正方形プランの定着および多様化」である。方位の優位性の減少という図面表現の意味的变化とレイアウトの変様を受けて、新建築競技1972において「正方形プラン」が見られ、以降増加していく。1990年代には正方形プランが立体的に展開する「立方体ヴォリューム」が増加するなど立体的表現が優位性を持つ新しい正方形プランも出現する。2000年代には正方形プランの入選率が高まり、以降継続して多数の入選案が見られるようになり正方形プランが定着、それらの類型も多様に展開していく。以上によりアイデア・コンペの転換期、作品体裁と図面表現の変化に対応し出現する特徴的プラン、正方形プランの存在が明らかになった。1970年代における作品体裁の大きな変化は提案表現の任意設定という自由度を付与し、レイアウトにおける図面表現の意味的变化をもたらすと同時に単純形態である正方形外形の提案が増加していく。住宅における方位の優位性が減じていく中、空間の新規性を正方形外形に投影する実験的回答モデルとして「正方形プラン」が多数見られる様になり定着、多様に展開していく。またこれらの現象の端緒は1970年代に見られ、筆者前研究による「アイデア・コンペの転換期」と同時性を持つことも確認された。

第四章では新建築誌における紙上建築と地上建築における正方形プランの出現動向、類型変遷等双方の対応関係、紙上建築の先進性の有無とアイデア・コンペの意義の一端が確認された。以下に本研究で得られた知見を以下にまとめる。知見の一つは「紙上建築と地上建築に見られる正方形プラン転換期、展開期における同一性」である。紙上建築と地上建築における出現動向として1952年という正方形プランの出現初年、1970年代と2000年代という正方形プラン占有率のピークなどの同時性が見られる。さらに地上建築において2000年代に入り「間取り型」以外の多様な形式の正方形プランが高い占有率で掲載されており、この期間2000～2010年を「地上建築における正方形プラン展開期」と定義することができる。二つ目の知見は「紙上建築と地上建築に見られる類型出現時期、意匠面における不同性」である。地上建築において50㎡前後の提案が多く見られる一方、紙上建築では25～1000㎡という広範囲の面積規模が見られ、かつ類型も多様に展開している。また方位記号、畳表現、駐車場表現が地上建築に比して見られず、双方の差異が確認された。また紙上建築において「間取り型」は78作品中15案に留まるが、地上建築において83作品中71作品を占め、地上建築における間取り型の優位性が確認される。前述のとおり2000年代という地上建築の展開期において多様な類型が見られるようになるが、紙上建築の先進性を表出するプランタイプとして「入れ子型(空間接続)」「複数配置型」の2種が確認される。また「外周諸室型」「複数選択型」「一室型」の3種については地上建築においてその実作例が見られず紙上建築の実験性を表出するプランタイプと言える。以上により紙上建築と地上建築に見られる同一性と不同性、「空間接続型」に見られる先進・実験性が明らかになった。紙上建築と地上建築において転換・展開期等の同一性が見られる一方、類型の出現時期、意匠面等の差異などの不同性が認められ、特に紙上建築の先進・実験性が見られる類型として「空間接続型」が確認される。

以上、各章の考察結果の要約をもって本論文の結論とする。

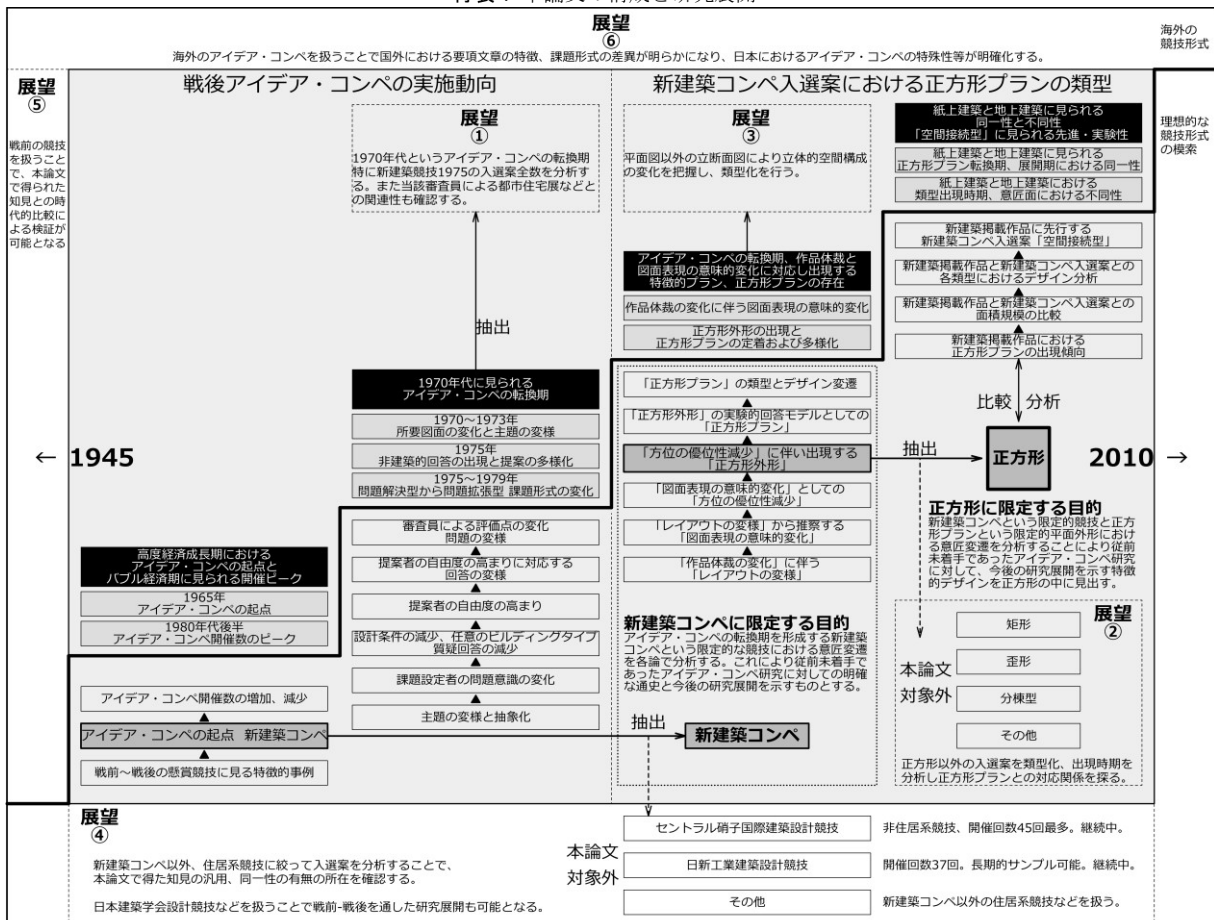
戦前戦中の建築機会減少の代替行為として懸賞競技が行われるが戦後復興以降、高度経済成長期に開催された新建築競技を起点とし1970年代にアイデア・コンペは課題、提案ともに転換期を迎える。主題が多様化し要項における設計条件、作品体裁の自由度が高まるなか問題解決型から問題拡張型へと課題形式が変化、提案も多様化し実験的回答モデルとして正方形プランが多く出現していく。これらの入選案における正方形プランと実作との比較分析から紙上建築の先行例を示すプランタイプが認められ、実施動向と転換展開期の同一性、入選案における意匠変遷と紙上建築の先進・実験性などが確認され、アイデア・コンペの意義の一端を評価することができる。

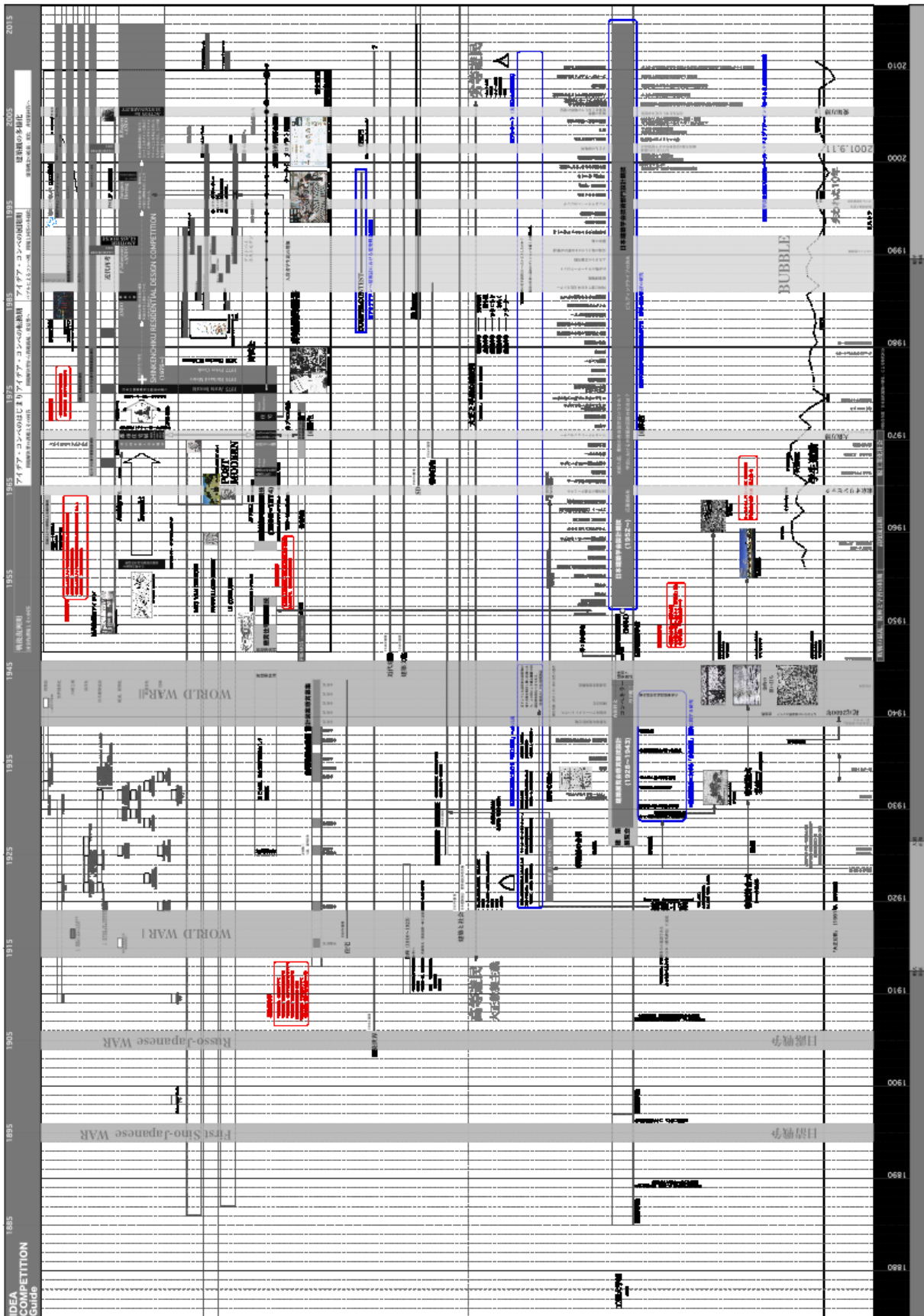
展望

本論文では「研究の目的」において既述のとおり、新建築コンペを含む戦後アイデア・コンペに関する論考を重ね、総論としてアイデア・コンペの通史を把握するという成果を得た。また新建築コンペという特徴的競技における入選案のデザインを各論として分析したが、正方形プランという限定的類型を対象とすることで、入選案における明確な特徴的現象とデザイン変遷の一端を明らかにした。これにより従前未着手であったアイデア・コンペ研究に対して意匠論的研究展開という新たな研究領域とその余地を示すものとなった（付表1, 2）。

今後の研究として、本論文においてアイデア・コンペの通史を展開したが、今後は1970年代などのアイデア・コンペにおける転換期を局所として掘り下げ、特徴的入選案を見出すことも期待される（付表1-展望①）。また、より詳細なデザイン分析を進めるために正方形以外の平面外形として単一図形である「矩形」「歪形」、集合図形、さらに「分棟型」などを扱うことで、正方形プランに見られる10種の類型との対応関係を明らかにすることができる（付表1-展望②）。さらに平面図以外の図面表現として分析対象を立断面図へと敷衍することによって、立体的空間構成の年次的変化を分析することも可能である（付表1-展望③）。これら研究展開の進展により、新建築コンペ以外の競技（付表1-展望④）、戦前の競技（付表1-展望⑤）、さらには海外のアイデア・コンペ（付表1-展望⑥）等を扱うことで紙上建築と地上建築の対応関係をより俯瞰的に把握し、アイデア・コンペの意義を提示することが可能である。

付表1 本論文の構成と研究展開





参考文献一覧

- ・小石川正男, 『戦後におけるアイデア提案型建築設計競技の実施動向と評価』, 大会論文, 1998. 09
- ・本間賢二, 『建築設計競技における図面表現 ー日新工業コンペティションから見た分析ー』, 大会論文, 2006. 09
- ・谷川大輔, 『戦後「新建築」誌での商業建築の設計論における外形表現からみた都市認識』, 日本建築学会計画系論文集, 2006. 02
- ・奥山信一 『戦後「新建築」誌における建築家の創作論 建築家の住宅観・都市観・創作の主題・空間モデル』
日本建築学会計画系論文集1995. 11
- ・北川圭子
『わが国における戦後の住様式成立過程に関する研究ー戦後復興期の『新建築』誌コンペ入選案の平面タイプの分析ー』日本
建築学会計画系論文集2004. 06
- ・内田青蔵 『住宅設計競技入選案から見た「住宅改良会」の住宅像について』日本建築学会計画系論文集1985. 12
- ・弓場 誠
『「新建築」掲載作品における内外装材の利用傾向-内外装材の部位別使用傾向の変遷に関する調査研究(1975年~1990年)-』
大会論文2003. 09
- ・松本正富
『インターネットによる住宅設計コンペに見る構成空間の接続ー現代日本の都市型住宅の構成形式に関する研究(その3)ー』
日本建築学会計画系論文集2003. 02
- ・川瀬純
『建築家の思想が建築形態として具現化する過程に関する研究その1 1981~1996年の建築設計競技の提出作品の統計的分析』
大会論文2004. 08
- ・馬場璋造 『設計者の選び方からみたコンペのあり方』建築雑誌1993. 10
- ・宮脇檀 『コンペ審査員のこころ』建築雑誌1989. 12
- ・近江榮 『コンペの審査会でデモクラシー[票決]の意味をまなぶ』建築雑誌1991. 07

- ・松村貞次郎『コンペはよい建築を生むか』建築雑誌1986.02

- ・丹下健三『コンペの時代』建築雑誌1985.01

- ・近江榮『設計者選定方法（コンペ）一試行錯誤と今後の課題』建築雑誌1992.03

- ・座談会『開かれたコンペをめざして』建築雑誌1992.03

- ・座談会『表現の場としてのコンペ』建築雑誌1992.03

- ・大川三雄『コンペ方式のタイポロジー』建築雑誌1992.03

- ・竹山実『プロポーザル方式の問題点一選ばれるのは設計案か設計者かー』建築雑誌1992.03

- ・北代禮一郎『設計行為・建築家の職能からみたコンペ』建築雑誌1992.03

- ・卯月盛夫『まちづくり戦略としてのコンペ』建築雑誌1992.03

- ・鈴木光雄『エスキス（計画・構想）コンペー埼玉県の実践から』建築雑誌1992.03

- ・東孝光『公開と評価の原則確立を』建築雑誌1992.03

- ・長谷川逸子『コンペの審査について』建築雑誌1992.03

- ・穂積信夫『主催者の心構え』建築雑誌1992.03

- ・細田雅春『コンペという名の物語ーゲームを演出することの意味』建築雑誌1992.03

- ・村瀬卯市『三つの体験に思う』建築雑誌1992.03

- ・叶篤彦『コンペに求めるものー御茶ノ水駅公開コンペを主催して』建築雑誌1992.03

- ・西脇敏夫『公共事業の側面からみたコンペ』建築雑誌1992.03

- ・三輪泰司『フェア！プロフェッショナル・アドバイザーから見たコンペ運営』建築雑誌1992.03

- ・ 守屋秀夫『コンペにおける専門委員の役割と立場』建築雑誌1992. 03

- ・ 淵上正幸『コンペへの応募姿勢』建築雑誌1992. 03

- ・ 林昌二『透明な審査方式の提案』建築雑誌1992. 03

- ・ 松永安光『国立京都国際会館設計競技管見』建築雑誌1992. 03

- ・ 長島孝一『最高裁判所1968年』建築雑誌1992. 03

- ・ 末吉栄三『名護市庁舎』建築雑誌1992. 03

- ・ 深尾精一『駒ヶ根文化センター』建築雑誌1992. 03

- ・ 吉田研介『コンペの狙いー日本火災海上保険軽井沢山荘の場合』建築雑誌1992. 03

- ・ 難波和彦『藤沢市湘南台文化センター ヴィジョンとプロセス』建築雑誌1992. 03

- ・ 藤野雅統『旅立った「龍馬」』建築雑誌1992. 03

- ・ 杉本洋文『グリーンドーム前橋 ープログラムの不在』建築雑誌1992. 03

- ・ 仙田満『ラ・ヴィレット公園』建築雑誌1992. 03

- ・ 若松久男『パリ・バステューオペラハウス国際コンペ』建築雑誌1992. 03

- ・ 清水裕之『コンペのガイドライン策定に向けて』建築雑誌1992. 03

- ・ 伊藤大介
『サーリネンの初期活動における設計競技の役割 フィンランドの建築家エリエル・サーリネンの作品に関する研究 その1』
日本建築学会計画系論文集1996. 02

- ・ ヨム チョルホ
『アイデアコンペ応募作品にみる分譲集合住宅の団地再生手法兵庫県「明舞団地マンション再生アイデアコンペ」を対象として』大会論文2005. 09

- ・ 井上誠
『プログラミングのプロセスと募集要項の構成 教育施設の競技設計提案におけるプログラミングと設計の実情 その1』
大会論文2001.09

- ・ 嶋村仁志
『提案募集時の募集要項による質疑内容および設計図書の分析 教育施設の競技設計提案におけるプログラミングと設計の実情 その2』大会論文2001.09

- ・ 秋田美穂『建築系大学教員の設計教育におけるスケール感の認識と設計課題に関する研究』日本建築学会計画系論文集2005.10

- ・ 西村伸也『空間認識からみた設計の思考プロセスの考察 —『視点』による学生課題設計の分析—』
日本建築学会計画系論文集1994.01

- ・ 服部岑生『建築家はコンペの中で何を求めるか —最高裁判所コンペを通してみる—』新建築1969.02

- ・ 小能林宏城『建築明治100年 第3章 建築設計競技の歴史』新建築1966.09

- ・ 近江榮. (1986). 建築設計競技 コンペティションの系譜と展望. 鹿島出版会

- ・ 山本理顕 (他) . (2006). コンペに勝つ!. 新建築社

- ・ 橋爪紳也. (2005). あったかもしれない日本 幻の都市建築史. 紀伊國屋書店

- ・ 宮内康. (1976). 風景を撃て. 相模書房

- ・ 富永一郎. (1997). 1970年大百科(さよなら20世紀シリーズ). 宝島社

- ・ 平倉直子(他). (1998). 特集[コンペ]必勝ガイドブック『建築知識』No. 493. 建築知識

- ・ 石堂威. (1991). 新建築創刊65周年記念号 建築20世紀PART2. 新建築社

- ・ 若松久男 (他) . (1988). 新世紀末感覚101. 鹿島出版会

- ・ 五十嵐太郎編. (2005). 卒業設計で考えたこと。そしていま. 彰国社

- ・岸和郎他. (2003). 建築の終わり. TOTO出版

- ・NHK放送文化研究所編. (2004). 現代日本人の意識構造[第六版]. 日本放送出版協会

- ・村松貞次郎. (1977). 日本近代建築の歴史. 日本放送出版協会

- ・五十嵐太郎. (2006). 現代建築に関する16章. 講談社現代新書

- ・新建築社編. (-). セントラル硝子国際建築設計競技30年史. セントラル硝子株式会社

- ・新建築社編. (-). セントラル硝子国際建築設計競技20年記念ドローイング集. セントラル硝子株式会社

- ・ミサワホーム総合研究所. (-). プレハブ住宅国際設計競技. 工業調査会

- ・植田実編. (1970). 都市住宅7005, 6905, 6910. 鹿島研究所出版会

- ・COMPE&CONTEST編. (1988-1998). コンペ・アンド・コンテスト. 鹿島研究所出版会

- ・内田青蔵「住宅改良会の設立について 計画系論文集第345号

- ・内田青蔵「住宅改良会の沿革と事業内容について」計画系論文集第351号

- ・内田青蔵「住宅設計競技入選案から見た住宅改良会の住宅蔵について」計画系論文集第358号

謝辞

本博士論文は、筆者が早稲田大学理工学術院 創造理工研究科建築学専攻 博士後期課程において、入江研究室で行った研究をまとめたものである。本研究に関して終始にわたる御指導御鞭撻を頂きました入江正之教授に心より謝意を申し上げます。また本論文を御精読頂きました古谷誠章先生、藤井由理先生に深く感謝申し上げます。

本研究の調査にあたっては空間史研究室の安原盛彦氏からも多大なる示唆を頂きました。付記して謝意を表します。

Special Thanks

I would like to express my sincere gratitude to my supervisor professor Masayuki Irie for providing me this precious study opportunity as a Ph.D student in his laboratory.

And I would like to express my sincere gratitude to professor Nobuaki Furuya and Yuri Fujii.

I especially would like to express my deepest appreciation to Dr.Morihiko Yasuhara.

著者経歴

石垣 充 Takashi ISHIGAKI

1969年8月 北海道小樽市

学歴

1988年3月 北海道立小樽潮陵高等学校 卒業

1993年3月 室蘭工業大学建築工学科 卒業

2008年3月 秋田県立大学 修士課程 修了

2014年3月 早稲田大学創造理工学術院 博士課程後期 単位取得退学

職歴

1993年4月 石本建築事務所

2000年1月 マイダス建築研究所

2003年4月 秋田公立美術工芸短期大学 産業デザイン学科 講師

2012年4月 西日本工業大学 デザイン学部建築学科 特任准教授

2014年4月 西日本工業大学 デザイン学部建築学科 准教授

現在に至る

作品

2000年 甲州ケアホーム（特別擁護老人ホーム、山梨県）

2001年 小野寺邸（住宅、神奈川県）

2009年 トレンチハウス（住宅、秋田県）

設計競技

1995年 新建築住宅設計競技 1995 入選

1995年 千葉市女性会館設計競技 2位

2009年 SD Review 入選

2013年 長浜アーバングラスコンペティション 2位

早稲田大学 博士（工学） 学位申請 研究業績書

氏名 石垣 充 印

(2016年1月20日 現在)

| 種 類 別 | 題名、 発表・発行掲載誌名、 発表・発行年月、 連名者（申請者含む） |
|-------------|---|
| 論文 (※採用) | ■ 博士論文に直接関係の「ある」研究業績 ○「提案型設計競技の要項-提案-講評-に関する研究」 日本建築学会計画系論文集、第697号 pp.845-854 2014.3、石垣充 入江正之 |
| 論文 (※採用) | ○「新建築コンペにおける作品体裁と入選案のプランタイプ分析」 日本建築学会計画系論文集、第712号 pp.1493-1502 2015.6、石垣充 入江正之 |
| 講演 | 「まだないものをつくること」 夢ナビライブ 2014、2014.10、石垣充 |
| 講演 | 「空想するちから」 西日本工業大学教授会教育研究事例研修講演、2012.7、石垣充 |
| 講演 | 「デザインの現在」 平成25年度福岡県高等学校教員免許状更新講習、2013.8、石垣充 |
| 講演 | 「知識のとびら 紙上建築について」 西日本工業大学公開講座、2012.12、石垣充 |
| 講演 | 「ハコ物語」 秋田公立美術工芸短期大学公開講座、2009.7、石垣充 |
| 著書 | 「トレンチハウス」または とれん家 SD Review2009 入選作品、鹿島出版会 pp.044-045 2009.10、石垣充 |
| その他 (紀要) | 「新建築コンペ入選案と新建築誌掲載住宅作品との対応分析」 西日本工業大学紀要第45巻、pp.87-92、2015.3、石垣充 |
| その他 (紀要) | 「新建築住宅設計競技における応募作品の作品体裁と外形タイプの変化」 西日本工業大学紀要第44巻、pp.845-854、2014.3、石垣充 |
| その他 (紀要) | 「新建築コンペにおける正方形プランの分析」 西日本工業大学紀要第43巻、pp.125-132、2013.3、石垣充 |
| その他 (紀要) | 「建築展覧会懸賞競技設計における要項-講評に関する研究」 秋田公立美術工芸短期大学紀要集第15号、pp.67-70、2011.3、石垣充 |
| その他 (報告) | 「提案型設計競技の要項-講評に関する研究」 日本建築学会東北支部研究報告書第71号、pp.311-314、2008.5、石垣充 |
| その他 (梗概) | 「新建築コンペ入選案と新建築誌掲載住宅作品との対応分析」 日本建築学会学術講演梗概集、pp.611-612、2015.9、石垣充 |
| その他 (梗概) | 「新建築コンペ入選案における正方形プランの分析」 日本建築学会学術講演梗概集、pp.207-208、2014.9、石垣充 |
| その他 (梗概) | 「新建築住宅設計競技における作品体裁と提案表現の変化」 日本建築学会学術講演梗概集、pp.135-136、2013.7、石垣充 |
| その他 (梗概) | 「日本建築学会設計競技の研究-計画背景と応募案におけるその回答の変遷」 日本建築学会学術講演梗概集、pp.1075-1076、2012.7、平井 石垣 入江 |
| その他 (梗概) | 「提案型設計競技の要項-講評に関する研究」 日本建築学会学術講演梗概集 F-2、pp.605-606、2008.7、石垣充 |
| その他 (展示) | □ 提案型設計競技入選作品等の展示 「手こたつ」 JR Tower Artwork Competition 審査員特別賞展示、2004.3、石垣充 |
| その他 (展示) | 「さっぽろプチプチ」 Sapporo Style Design Competition 市民賞展示、2005.12、石垣充 |
| その他 (展示) | 「ニコイチ」 建築家のあかりコンペ入選作品展示、2008.10、石垣充 |

早稲田大学 博士（工学） 学位申請 研究業績書

| 種 類 別 | 題名、 発表・発行掲載誌名、 発表・発行年月、 連名者（申請者含む） |
|--------------|--|
| | ■ 博士論文に直接関係の「ない」研究業績 1 |
| 講演 | 「エリアマネジメント実施団体活動報告」 国土交通省依頼講演（国土交通省本庁にて発表）、2008.3、石垣充 |
| 講演 | 「エリアマネジメント推進調査成果報告会」 国土交通省依頼講演（仙台・札幌にて発表）、2008.9、石垣充 |
| 著書 | 「池田家の庭園及び建造物群に関する基礎調査報告書」 秋田県仙北郡仙北町教育委員会、pp.75-78、2003.7、澤田享 石垣充 |
| 著書 | 「能代市庁舎および能代市議会議事堂調査報告書」 秋田県能代市教育委員会、pp.8-16、2005.3、澤田享 石垣充 |
| 著書 | 「秋田県の活性化のための調査研究 秋田の景観資源とまちづくり」 プロジェクト 4A 研究報告書、pp.11-20、2010.10、石垣充 |
| 著書 | 「県産材とガラスを利用した容器のデザイン」 秋田学術振興財団学術研究補助事業報告書、pp.47-49、2006.7、石垣充 |
| 著書 | 「県産材と透過性素材を利用した容器のデザイン」 秋田学術振興財団学術研究補助事業報告書、pp.47-49、2007.7、石垣充 |
| 著作 | 「藤田記念まちづくり企画支援事業報告」 秋田公立美術工芸短期大学紀要第12号、2008.10、石垣充 |
| 著書 | 「作品選集 2011」 講評文、pp.11-12、2011.3、石垣充 |
| 著作 | 「作品選集 2012」 講評文、pp.6-7、2012.3、石垣充 |
| その他 (紀要) | 「地域資源としての歴史的建造物の認知度向上機会の創出」 西日本工業大学紀要第44巻、pp.219-222、2014.7、八木 石垣 白井 梶谷 |
| その他 (展示) | 「トレンチハウス」または とれん家 SD Review2009 入選作品、代官山ヒルサイドテラス、2009.9、石垣充 |
| その他 (展示) | 「トレンチハウス」または とれん家 秋田県立近代美術館、2010.10、石垣充 |
| その他 (展示) | 「光鈴」 庭のあかりコンテスト優秀賞受賞作展示、新丸ビル、2011.6、石垣充 |
| その他 (展示) | 「ゲログ」 住宅基本設計案、秋田市サテライトセンター、2011.7、石垣充 |
| その他 (展示) | 「UIA2008 トリノ」 New Horizon of Japanese Architecture 展参加、2008.6、石垣充 |
| その他 (展示) | 「ニコイチ」 せんだいメディアテーク、2008.10、石垣充 |
| その他 (特許等) | 「芳香成分が練り込まれたプラスチック気泡性シート」 実用新案登録第3110566号、2005.5、宇部フィルム 石垣充 |
| その他 (特許等) | 「プラスチック気泡性シート」 実用新案登録第3111092号、2005.5、宇部フィルム 石垣充 |
| その他 (特許等) | 「プルタブ缶」 実用新案登録第3114478号、2005.5、石垣充 |

早稲田大学 博士（工学） 学位申請 研究業績書

| 種 類 別 | 題名、 発表・発行掲載誌名、 発表・発行年月、 連名者（申請者含む） |
|-------------|--|
| | ■ 博士論文に直接関係の「ない」研究業績 2 |
| | □ 建築設計活動 |
| その他 （設計） | 「フォレストアムール」 秋田県旧鳥海町、1996.3 竣工、石本建築事務所 |
| その他 （設計） | 「寿の家地域交流施設」 山梨県旧石和町、1999.3 竣工、石本建築事務所 |
| その他 （設計） | 「甲州ケアホーム」 山梨県旧石和町、1999.3 竣工、石本建築事務所 |
| その他 （設計） | 「岡谷市童画美術館」 長野県岡谷市、1999.3 竣工、石本建築事務所 |
| その他 （設計） | 「世田谷区北沢特別養護老人ホーム」 東京都世田谷区、2000.3 竣工、石本建築事務所 |
| その他 （設計） | 「柳沢ビル」 東京都北区、2001.11 竣工、マイダス建築研究所 |
| その他 （設計） | 「伊豆高原ダイナム保養研修所」 静岡県伊東市、2001.9 竣工、マイダス建築研究所 |
| その他 （設計） | 「小野寺邸」 神奈川県横須賀市、2002.12 竣工、マイダス建築研究所 |
| その他 （設計） | 「美しが丘の家」 神奈川県横浜市、2003.4 竣工、マイダス建築研究所 |
| その他 （設計） | 「COZY 上野毛」 東京都世田谷区、2004.4 竣工、マイダス建築研究所 |
| その他 （設計） | 「農協直営式コンビニ店舗」 秋田県山本町、2006.10 竣工、石垣充 |
| その他 （設計） | 「秋田市都市景観賞銘板台座」 秋田県秋田市、2008.5 竣工、石垣充 |
| その他 （設計） | 「屋台塀」 藤田記念まちづくり企画支援事業活用による実作、秋田市新屋表町、2008.11 竣工、石垣充 |
| その他 （設計） | 「新屋参画屋」 秋田県秋田市、2009.10 竣工、石垣充 |
| その他 （設計） | 「秋田県スポーツ科学センター改修工事」 秋田県スポーツ科学センター2 階展示室、秋田市八橋、2011.3 竣工、石垣充 |
| その他 （設計） | 「老方の家」 住宅設計、秋田県由利本庄市、2013.12 竣工、渡邊活昭 石垣充 |
| その他 （設計） | 「スバリストの家」 住宅設計、福岡県行橋市、2013.7 基本計画、石垣充 |
| その他 （設計） | 「西日本工業大学学生会館改修計画」 福岡県北九州市、2014.3 基本計画、西日本工業大学建築学科 石垣充 |
| その他 （設計） | 「どうまどの家」 住宅設計、北海道小樽市、2014.7 基本計画、石垣充 |
| その他 （設計） | 「接骨ハウス」 住宅設計、大分県宇佐市、2014.8 基本計画、西日本工業大学石垣研究室 |
| その他 （設計） | 「駐車場の家」 住宅設計、北海道小樽市、2015.7 基本計画、石垣充 |
| その他 （設計） | 「N 邸」 住宅設計、福岡県行橋市、2015.10 基本計画、石垣充 |